



跡 遺 山 中 書

1978

岡山県落合町教育委員会

序

美しい豊かな自然に恵まれた落合町には多くの埋蔵文化財が残されています。最近の著しい地域開発の波は、わが町の山河を急激に変貌させ、これに伴って多くの貴重な文化財も消滅しつつあります。

このような状況のなかで文化財の保存をどのように図っていくかは、当面する最も重要な課題であります。今回落合木材流通センター開発事業をおこなうにあたり、西河内中山遺跡の一部を発掘調査のやむなきにいたりました。落合町教育委員会では、開発事業者の計画発表以来、岡山県教育委員会文化課の指導と協力をいただき、事業主体者、関係団体と当該事業地内の埋蔵文化財の保存協議を重ねてまいりましたが、調査を昭和51年4月から同年11月までの7か月間にわたり実施いたしました。限られた期間ときわめて不十分な体制のもとでの調査は満足できるものではありませんが、現在ではその姿を再び見ることができないこれらの遺跡を、この報告書によって学術の研究や、本町歴史の解明、また文化財保護等に活用していただければ幸いです。

終りになりましたが、本発掘調査にあたり、終始ご理解とご協力をいただきました県教育委員会をはじめ、その他関係機関の方々、又ご指導を賜りました研究者各位に深く感謝するとともに、直接この調査を担当されました調査員のみなさま方に厚くお礼申し上げます。

昭和53年3月

落合木材流通センター文化財調査委員会委員長
落合町教育委員会教育長

大 倉 毅

例 言

- 1 本調査報告書は、落合木材流通センター文化財調査委員会が事業主体者である河本木材株式会社より委託を受け実施した落合木材流通センター建設に伴う真庭郡落合町西河内中山（なかやま）遺跡の発掘調査の概要である。
- 2 発掘調査は昭和51年4月17日より開始し11月10日までの約7か月間をかけて実施した。
- 3 調査の実施に際しては落合町文化財保護委員会、落合町教育委員会事務局、施行業者である浮田建設株式会社、ならびに地元関係者から多大な協力を頂いた。

さらに調査期間中には県内外の研究者諸氏の現地視察を得、有意義なご指導、ご助言をたまわり、また報告書作成にあたっては種々のご教示を頂いた。
- 4 報告書に掲載した落合町遺跡分布図および一覧表は岡山県教育委員会が実施した5か年分布調査の第2年度刊行物に修正、補足を行ったものと、町文化財保護委員長橋本照国氏ならびに岡山大学生桑田俊明氏が実施踏査を行った資料を加えたものである。
- 5 発掘調査の諸記録は調査前半のC・D調査区を奥和之、後半のA・B調査区を奥和之・山磨康平が担当し、橋本惣司氏、久米町文化財調査委員会村上幸雄氏の援助を受けた。

調査後の整理作業は奥が中心となってあたり、二宮遺跡調査事務所高畑知功、二宮治夫両氏の援助を受けた。
- 6 本報告書の執筆は第1章、第3章第1節（A調査区）・第2節（B調査区）、第4章を奥・山磨、第2章を橋本惣司、第3章第3節（C調査区）第4節（D調査区）を奥が、それぞれ分担執筆し、全体の編集を山磨が行った。
- 7 発掘調査ならびに遺物の整理にあたっては、仏教大学生小山繁夫・角井康晃・川口宏海・北田栄造の諸君、津山教育事務所、二宮遺跡調査事務所日笠月子さん・瀬戸文子さん、同遺跡調査参加者宗安頼伸・中島俊郎・立石盛司の諸君、県教委文化課分室の職員諸氏に負うところが大きい。記して感謝の意を表したい。
- 8 本報告書に用いた標高はすべて海拔高であり、方位はすべて磁北である。

目 次

第1章 調査の契機と経過	1
第1節 調査の契機	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的歴史的環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の概要	29
第1節 A調査区	29
第2節 B調査区	111
第3節 C調査区	125
第4節 D調査区	158
第4章 結語	160

図 目 次

第1図 落合町位置図	7
第2図 落合町遺跡分布図	折り込み
第3図 中山遺跡周辺遺跡分布図	28
第4図 中山遺跡遺構配置図 (S = 1/500)	30
第5図 A調査区 遺構配置図 (S = 1/400)	31
第6図 A調査区 第1・2・3・4区画遺構配置図 (S = 1/300)	33
第7図 A調査区 第1・2区画遺構配置図 (S = 1/50)	34
第8図 A調査区 第1区画遺構配置図 (S = 1/100)	折り込み
第9図 A調査区 第1区画No.1・3・4土壙墓 (S = 1/40)	38
第10図 A調査区 第1区画床面計測値	40
第11図 A調査区 第1区画出土土器(1)	41
第12図 A調査区 第1区画出土土器(2)	42
第13図 A調査区 第2区画遺構配置図 (S = 1/60)	44
第14図 A調査区 第2区画No.24土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	45
第15図 A調査区 第2区画出土土器	46

第16図	A調査区	第2区画床面計測値	47
第17図	A調査区	第3・4区画遺構配置図 (S = 1/150)	48
第18図	A調査区	第3・4区画概略図 (S = 1/300)	49
第19図	A調査区	第3区画遺構配置図 (S = 1/80)	50
第20図	A調査区	第4区画遺構配置図 (S = 1/80)	51
第21図	A調査区	第4区画No50土墳墓遺物出土状態 (S = 1/40)	52
第22図	A調査区	第3・4区画床面計測値	54
第23図	A調査区	第3区画出土土器	55
第24図	A調査区	第4区画出土土器	56
第25図	A調査区	第1・2・3・4・5グループ遺構配置図 (S = 1/200)	59
第26図	A調査区	第1グループ遺構配置図 (S = 1/80)	60
第27図	A調査区	第1グループ遺物出土状態 (S = 1/40)	61
第28図	A調査区	No116石蓋土墳墓 (S = 1/80)	62
第29図	A調査区	No100土墳墓遺物出土状態 (S = 1/40)	64
第30図	A調査区	第1グループ床面計測値	64
第31図	A調査区	第1グループ出土土器	65
第32図	A調査区	第2グループ遺構配置図 (S = 1/80)	67
第33図	A調査区	第2グループ床面計測値	68
第34図	A調査区	第3グループ床面計測値	68
第35図	A調査区	第3グループ遺構配置図 (S = 1/80)	70
第36図	A調査区	第4グループ床面計測値	72
第37図	A調査区	第4グループ遺構配置図 (S = 1/80)	73
第38図	A調査区	第4グループNo171礫椁墓 (S = 1/40)	74
第39図	A調査区	第5グループ南側遺構配置図 (S = 1/80)	75
第40図	A調査区	第5グループ北側遺構配置図 (S = 1/80)	76
第41図	A調査区	土墳墓群出土鉄器 (S = 1/2)	77
第42図	A調査区	第5グループ床面計測値	77
第43図	A調査区	第1・2・3・4・5グループ床面計測値	77
第44図	A調査区	B空間周辺出土遺物配置図 (S = 1/150)	79
第45図	A調査区	B空間周辺遺物出土状態1 (S = 1/40)	80
第46図	A調査区	B空間周辺遺物出土状態2 (S = 1/40)	81
第47図	A調査区	B空間周辺遺物出土状態3 (S = 1/40)	82
第48図	A調査区	B空間周辺出土土器(1)	83

第49図	A調査区	B空間周辺出土土器(2)……………	84
第50図	A調査区	B空間周辺出土土器(3)……………	85
第51図	A調査区	B空間周辺出土土器(4)……………	86
第52図	A調査区	B空間周辺出土土器(5)……………	87
第53図	A調査区	B空間周辺出土土器(6)……………	88
第54図	A調査区	特殊器台1 (S = $\frac{1}{5}$) ……………	92
第55図	A調査区	特殊器台1, 第1・3文様帯展開図 (S = $\frac{1}{6}$) ……………	93
第56図	A調査区	特殊器台2 (S = $\frac{1}{5}$) ……………	95
第57図	A調査区	特殊器台3 (S = $\frac{1}{5}$) ……………	96
第58図	A調査区	特殊器台4 (S = $\frac{1}{5}$) ……………	97
第59図	A調査区	特殊器台5 (S = $\frac{1}{5}$) ……………	98
第60図	A調査区	特殊器台6(上)・7(下) (S = $\frac{1}{4}$) ……………	99
第61図	A調査区	特殊器台8 (S = $\frac{1}{4}$) ……………	100
第62図	A調査区	特殊壺1 (S = $\frac{1}{5}$) ……………	101
第63図	A調査区	特殊壺2(上)・3(下) (S = $\frac{1}{5}$) ……………	102
第64図	A調査区	土壇墓床面計測値……………	103
第65図	A調査区	No.198・200箱式石棺, No.199石蓋土壇墓 (S = $\frac{1}{30}$) ……………	105
第66図	A調査区	No.201箱式石棺 (S = $\frac{1}{30}$) ……………	106
第67図	A調査区	1号墳 (S = $\frac{1}{60}$) 主体部 (S = $\frac{1}{15}$) ……………	107
第68図	A調査区	1号墳出土遺物……………	108
第69図	A調査区	出土須恵器 (S = $\frac{1}{3}$) ……………	110
第70図	B調査区	遺構配置図 (S = $\frac{1}{100}$) ……………	112
第71図	B調査区	3・4号住居址 (S = $\frac{1}{100}$) ……………	113
第72図	B調査区	3・4号住居址出土遺物……………	114
第73図	B調査区	2・3号墳 (S = $\frac{1}{100}$) 3号墳主体部 (S = $\frac{1}{40}$) ……………	116
第74図	B調査区	3号墳出土遺物……………	117
第75図	B調査区	4号墳 (S = $\frac{1}{100}$) 主体部 (S = $\frac{1}{40}$) ……………	119
第76図	B調査区	4号墳出土須恵器 (S = $\frac{1}{3}$) ……………	120
第77図	B調査区	4号墳出土鉄器 (S = $\frac{1}{2}$) ……………	121
第78図	B調査区	5号墳 (S = $\frac{1}{100}$) 主体部 (S = $\frac{1}{40}$) ……………	122
第79図	B調査区	6号墳出土遺物 (S = $\frac{1}{3}$) ……………	123
第80図	C調査区	遺構配置図 (S = $\frac{1}{100}$) ……………	126
第81図	C調査区	第1グループ遺構配置図 (S = $\frac{1}{30}$) ……………	127

第82図	C調査区	No.2・3土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	128
第83図	C調査区	No.13・14土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	129
第84図	C調査区	No.13土壙墓出土土器	130
第85図	C調査区	No.4・15・16・17土壙墓出土土器	131
第86図	C調査区	第2グループ遺構配置図 (S = 1/90)	133
第87図	C調査区	No.22土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	134
第88図	C調査区	No.69・70配石墓 (S = 1/30)	135
第89図	C調査区	No.71配石墓 (S = 1/30)	136
第90図	C調査区	No.20・22土壙墓出土土器	137
第91図	C調査区	第3グループ遺構配置図 (S = 1/90)	138
第92図	C調査区	No.24・25土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	139
第93図	C調査区	No.28・29土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	140
第94図	C調査区	No.25・26・30土壙墓出土土器	141
第95図	C調査区	No.24・25土壙墓出土土器	143
第96図	C調査区	No.28・29土壙墓出土土器	144
第97図	C調査区	第4グループ遺構配置図 (S = 1/80)	145
第98図	C調査区	No.51土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	146
第99図	C調査区	No.51土壙墓出土土器	147
第100図	C調査区	No.52・53土壙墓出土土器	148
第101図	C調査区	No.53土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	149
第102図	C調査区	第5グループ遺構配置図 (S = 1/60)	150
第103図	C調査区	No.58・59土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	151
第104図	C調査区	No.73配石墓周辺遺構配置図 (S = 1/40)	152
第105図	C調査区	No.65土壙墓遺物出土状態 (S = 1/40)	153
第106図	C調査区	土壙墓群出土鉄器 (S = 1/2)	153
第107図	C調査区	No.57・60・63・65土壙墓出土土器	154
第108図	C調査区	No.59土壙墓出土土器	155
第109図	D調査区	9号墳出土土器	158
第110図	D調査区	遺構配置図 (S = 1/200)	159
第111図	中山・旦原遺跡住居址・古墳位置図	(S = 1/2000)	161
第112図	中山遺跡須恵器(杯)計測値		167

表 目 次

表 1	中山遺跡調査一覧表	2
表 2	調査日程表	6
表 3	落合町遺跡地名表	13
表 4	A調査区 第1区画土壙墓計測値表	39
表 5	A調査区 第1区画出土土器一覧表	43
表 6	A調査区 第2区画土壙墓計測値表	45
表 7	A調査区 第2区画出土土器一覧表	46
表 8	A調査区 第3区画土壙墓計測値表	53
表 9	A調査区 第4区画土壙墓計測値表	53
表10	A調査区 第3区画出土土器一覧表	55
表11	A調査区 第4区画出土土器一覧表	57
表12	A調査区 第1グループ土壙墓計測値表	63
表13	A調査区 第1グループ内出土土器一覧表	66
表14	A調査区 第2グループ土壙墓計測値表	69
表15	A調査区 第3グループ土壙墓計測値表	72
表16	A調査区 第4グループ土壙墓計測値表	78
表17	A調査区 第5グループ土壙墓計測値表	78
表18	A調査区 B空間周辺出土土器一覧表	89
表19	A調査区 1号墳玉類計測値表	109
表20	C調査区 No13土壙墓出土土器一覧表	132
表21	C調査区 No.4・15・16・17土壙墓出土土器一覧表	132
表22	C調査区 No20・22土壙墓出土土器一覧表	137
表23	C調査区 No25・26・30土壙墓出土土器一覧表	142
表24	C調査区 No24・25土壙墓出土土器一覧表	143
表25	C調査区 No28・29土壙墓出土土器一覧表	144
表26	C調査区 No52・53土壙墓出土土器一覧表	149
表27	C調査区 No57・60・63・65土壙墓出土土器一覧表	156
表28	C調査区 No59土壙墓出土土器一覧表	156
表29	C調査区 土壙墓計測値一覧表	156
表30	須恵器(杯)計測値表	168

図版目次

- 図版 1-1) 中山遺跡遠景 (北西木山寺より)
- 図版 1-2) 中山遺跡全景 (南丘陵より)
- 図版 2-1) A 調査区 全景調査前 (西より)
- 図版 2-2) A 調査区 全景調査後 (西より)
- 図版 3-1) A 調査区 第 1 区画 (北より)
- 図版 3-2) A 調査区 第 1 区画 (西より)
- 図版 4-1) A 調査区 第 1 区画No.1・2・3 土壙墓 (南より)
- 図版 4-2) A 調査区 第 1 区画L字溝北側遺物出土状況 (北より)
- 図版 5-1) A 調査区 第 1 区画L字溝西側 (南より)
- 図版 5-2) A 調査区 第 1 区画西周溝 (西より)
- 図版 6-1) A 調査区 第 1 区画東斜面下土壙墓 (西より)
- 図版 6-2) A 調査区 第 1 区画南周溝 (東より)
- 図版 7-1) A 調査区 第 2 区画 (南より)
- 図版 7-2) A 調査区 第 2 区画南周溝 (西より)
- 図版 8-1) A 調査区 第 3・4 区画 (北より)
- 図版 8-2) A 調査区 第 3・4 区画 (西より)
- 図版 9-1) A 調査区 第 3 区画北周溝 (西より)
- 図版 9-2) A 調査区 第 3 区画中央溝 (西より)
- 図版 10-1) A 調査区 第 3・4 区画 (南より)
- 図版 10-2) A 調査区 第 4 区画 (西より)
- 図版 11-1) A 調査区 第 4 区画No.48 土壙墓 (北より)
- 図版 11-2) A 調査区 第 4 区画No.44 土壙墓 (南より)
- 図版 12-1) A 調査区 第 4 区画No.50 土壙墓上面供献用土器 (南より)
- 図版 12-2) A 調査区 第 4 区画No.50 土壙墓 (南より)
- 図版 13-1) A 調査区 第 4 区画No.52 土壙墓土層断面 (西より)
- 図版 13-2) A 調査区 第 4 区画No.52 土壙墓 (北より)
- 図版 14-1) A 調査区 溝による区画を持たない土壙墓群 (北より)
- 図版 14-2) A 調査区 溝による区画を持たない土壙墓群 (北より)
- 図版 15-1) A 調査区 第 1 グループNo.65 土壙墓 (東より)
- 図版 15-2) A 調査区 第 1 グループNo.67 土壙墓 (東より)

- 図版16-(1) A調査区 第1グループNo66・68土壙墓(東より)
- 図版16-(2) A調査区 第1グループNo92・100土壙墓(西より)
- 図版17-(1) A調査区 第1グループNo116石蓋土壙墓(東より)
- 図版17-(2) A調査区 第1グループNo116石蓋土壙墓蓋石除去後(西より)
- 図版18-(1) A調査区 第2グループNo137・138土壙墓(北より)
- 図版18-(2) A調査区 第5グループNo185・186・187・188土壙墓(南東より)
- 図版19-(1) A調査区 第4地点特殊器台出土状況(北より)
- 図版19-(2) A調査区 第3グループNo146・147・148・149土壙墓(北より)
- 図版20-(1) A調査区 第2地点特殊器台出土状況(東より)
- 図版20-(2) A調査区 第5グループNo184土壙墓(東より)
- 図版21-(1) A調査区 B空間周辺東斜面遺物出土状況(北より)
- 図版21-(2) A調査区 第5グループNo185土壙墓(北より)
- 図版22-(1) A調査区 第4グループ(北より)
- 図版22-(2) A調査区 第4グループNo155土壙墓付近(西より)
- 図版23-(1) A調査区 礫椀墓(No171)検出状況(北より)
- 図版23-(2) A調査区 礫椀墓(No171)蓋石除去後(北より)
- 図版24-(1) A調査区 礫椀墓(No171)蓋石除去後(西より)
- 図版24-(2) A調査区 礫椀墓(No171)掘り方(西より)
- 図版25-(1) A調査区 第1地点特殊器台出土状況(北より)
- 図版25-(2) A調査区 第1地点特殊器台出土状況(北より)
- 図版25-(3) A調査区 第1地点特殊器台出土状況(北より)
- 図版26-(1) A調査区 第1グループ遺物出土状況(北より)
- 図版26-(2) A調査区 B空間周辺遺物出土状況(東より)
- 図版26-(3) A調査区 B空間周辺遺物出土状況(東より)
- 図版27-(1) A調査区 No201箱式石棺(南より)
- 図版27-(2) A調査区 No201箱式石棺(南より)
- 図版28-(1) A調査区 1号墳(北より)
- 図版28-(2) A調査区 1号墳主体部(北より)
- 図版28-(3) A調査区 1号墳玉類出土状況(東より)
- 図版29-(1) B調査区 遠景(西丘陵より)
- 図版29-(2) B調査区 全景(南より)
- 図版30-(1) B調査区 3号墳(東より)
- 図版30-(2) B調査区 3号墳主体部(北より)

- 図版30-(3) B調査区 3号墳遺物出土状況(東より)
- 図版31-(1) B調査区 4号墳(南より)
- 図版31-(2) B調査区 4号墳主体部(南西より)
- 図版31-(3) B調査区 4号墳遺物出土状況(南西より)
- 図版32-(1) B調査区 5号墳(西より)
- 図版32-(2) B調査区 5号墳主体部(南より)
- 図版33-(1) B調査区 2号墳(北より)
- 図版33-(2) B調査区 6号墳(南より)
- 図版34-(1) B調査区 3号住居址(南より)
- 図版34-(2) B調査区 4号住居址(南より)
- 図版35-(1) C調査区 全景(西より)
- 図版35-(2) C調査区 作業風景(西より)
- 図版36-(1) C調査区 No69・70・71配石墓(西より)
- 図版36-(2) C調査区 第1グループ周辺土壙墓群(東より)
- 図版37-(1) C調査区 第4グループ周辺土壙墓群西側(西より)
- 図版37-(2) C調査区 第4グループ周辺土壙墓群東側(西より)
- 図版38-(1) C調査区 第2・3グループ(北東より)
- 図版38-(2) C調査区 No26・27・28・29土壙墓(西より)
- 図版39-(1) C調査区 第5グループ周辺土壙墓群(南より)
- 図版39-(2) C調査区 第5グループ周辺土壙墓群(北より)
- 図版40-(1) C調査区 No22土壙墓遺物出土状況(北より)
- 図版40-(2) C調査区 No22土壙墓(西より)
- 図版41-(1) C調査区 No24土壙墓遺物出土状況(北より)
- 図版41-(2) C調査区 No24土壙墓(東より)
- 図版42-(1) C調査区 No25土壙墓遺物出土状況(西より)
- 図版42-(3) C調査区 No25土壙墓土層断面
- 図版42-(3) C調査区 No25土壙墓(西より)
- 図版43-(1) C調査区 No53土壙墓遺物出土状況(北より)
- 図版43-(2) C調査区 No53土壙墓(南より)
- 図版44-(1) C調査区 No58・59土壙墓遺物出土状況(北より)
- 図版44-(2) C調査区 No58・59土壙墓(西より)
- 図版45-(1) C調査区 No65土壙墓遺物出土状況(北より)
- 図版45-(2) C調査区 第5グループ周辺土壙墓(北東より)

- 図版46-① C調査区 No.51土壙墓遺物出土状況（北より）
図版46-② C調査区 No.51土壙墓遺物出土状況（南より）
図版47-① C調査区 No.13・14土壙墓遺物出土状況（南より）
図版47-② C調査区 No.20土壙墓遺物出土状況（南より）
図版47-③ C調査区 No.3・4土壙墓遺物出土状況（南より）
図版48-① D調査区 全景（北より）
図版48-② D調査区 9号墳全景（南より）
図版49-① D調査区 8号墳全景（南より）
図版49-② D調査区 8号墳南側周溝土層断面（西より）
図版50 A調査区 出土遺物①
図版51 A調査区 出土遺物②
図版52 C調査区 出土遺物
図版53 A・B・D調査区 出土遺物
図版54 B調査区 No.4号墳出土遺物

落合木材流通センター文化財調査委員会規約

(名 称)

第1条 本会は、落合木材流通センター文化財調査委員会（以下「委員会」という。）と称する。

(目 的)

第2条 この規約は、「文化財保護法」「覚書」「覚書にもとづく同意事項」により木材流通センター開発にともなう文化財の保護保存を目的とする。

(構 成)

第3条 委員会は、次の者をもって構成する。

委員長	落合町教育委員会教育長
副委員長	二川中学校教頭
委員	岡山県教育委員会文化課文化財保護主事
委員	久米町教育委員会文化財保護主事
委員	落合町教育委員会教育課長
委員	落合町教育委員会文化財担当主事
監事	河本木材株式会社代表取締役
監事	岡山県教育委員会文化課係長

(職 務)

- 第4条
1. 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。
 2. 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。
 3. 委員は、委員会の庶務に関することを行う。
 4. 監事は、委員会の会計監査を行う。

(会 議)

- 第5条
1. 委員会は、委員長が招集する。
 2. 会議の議長は、委員長がつとめる。
 3. 委員会の議事は、出席委員の半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会 計)

第6条 委員会及び発掘調査に伴う経費は、河本木材株式会社がこれを負担する。

(委 任)

第7条 この規約に定めるもののほか必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

1. この規約は、昭和51年4月1日から施行する。
2. この規約は、事業終了をもって消滅する。

第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

昭和50年6月20日、岡山県土地利用調整会議（担当者会議）において（註1）、真庭郡落合町西河内地区における（株）勝山木材市場、河本木材（株）の木材流通センター開発計画の内容が企業より示された。

この席上、文化財主管課である文化課は、この開発が行われるほぼ南北に延びる丘陵上は前方後円墳を含む多数の古墳（横部古墳群）が認められ、また北に隣接する旦原遺跡（註2）では昭和48年に中国縦貫道建設に伴い全面調査を行い、多数の遺構を検出しており、この開発区域にも遺跡が想定され、十分な協議の必要であることを述べる。

さらにこの調整会議の文化課指示事項として「団地内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、町教育委員会および県教育委員会文化課と協議を行うこと」を企業に指示する。

この指示事項にもとずき、町教委と企業間に文化財の取扱いについての覚書きの締結が昭和50年4月21日付けでなされ、県教委・町教委・企業三者による文化財の取扱いについての協議をこの後数次かさねていった。

この協議の過程で先ず具体的方法として遺構ならびに範囲等の資料の把握のため第一次トレンチ調査が必要であり調査委員会を組織した調査を行うことの指導を企業に対して行っていた。

しかし、第一次トレンチ調査についてはその後企業は津山市在住の某研究者に調査を委託し、トレンチ調査を昭和50年8月1日～9月30日の2か月間にわたり実施した。この結果、開発区域内に弥生時代～古墳時代にわたる多数の墳墓遺構と遺物を検出し丘陵平坦面を中心とした遺構の広がりが想定され、引き続き第二次調査の日程もたてられ全面調査が予定されていた。

一方、岡山県土地利用調整会議は第一次トレンチ調査終了後の昭和50年10月8日に幹事会議が行われ、同年10月11日部長会議、同年10月14日の岡山県土地開発審査会により翌10月15日の開発許可となった。

この開発許可は文化財区域以外での工事着工という条件付き開発許可の内容であり、文化財の取扱いについては、第二次調査を10月1日より12月末までを予定していた。

しかし、第二次調査については第一次調査を担当した某研究者と企業間とに契約上のおりあいがかたず、調査は中断したままとなった。この間、現場は第一次トレンチ調査終了時のままの状況であり、遺構の破壊と遺物の散逸が問題となり早急な解決が望まれていた。

この様な状況の中で、企業ならびに町教委より県教委に再度の協議があり、調査の再開についての具体的な方法と解決について要望がおこなわれた。この要望に対し、県教委は第一次トレンチ調査の初頭より、調査委員会を設けた調査方法の指導を行ってきたことでもあり、調査の再開については企業・県教委を含めて町教委内に調査委員会を設けて行うことの指導が行われ、再開の合意がなされた。

表1 中山遺跡調査一覧表

遺跡名	中山遺跡（真庭郡落合町西河内）	合計	備考
発掘期間	昭和51年4月17日～昭和51年11月10日まで。	7か月（実働日数 143日）	C（8月）・B（10月）・D（10月）の調査区の順に工事側に関わす。
発掘作業員	男 484.3人 女 763人 計 1,247人 1日平均 8.7人		落合町西河内・横部・鹿田の農家の人達が主体となる。
調査担当者	奥 和 之（昭和51年4月7日～ 11月10日まで） 山 磨 康 平（昭和51年8月18日～ 11月10日まで）		実測図等は学生諸君の手になるものが多い。
実質発掘面積	A調査区 1600㎡ B調査区 1800㎡ C調査区 1400㎡ D調査区 270㎡	5,070㎡	1.4か月の予定を7か月にて終了した。
遺構	A調査区 土壇墓 198基 箱式石棺 3基 住居址 3軒 古墳 1基 C調査区 土壇墓 73基 古墳 1基 B調査区 住居址 3軒 古墳 5基 土壇墓 1基 箱式石棺 3基 D調査区 古墳 3基	土壇墓 272基 箱式石棺 7基 住居址 5軒 古墳 10基 計 294遺構	
遺物		50箱	土壇墓群からの出土が大半である。落合町公民館にて保管。

第2節 調査の経過

発掘調査は、1975年8月から9月まで行った第一次調査（トレンチ調査）の終了後、1976年4月17日から同年11月10日までの約7か月間にわたり第2次調査（本調査）を実施した。

当初、遺跡の予定発掘面積は、第1次調査が不完全な内容であったことと、同一丘陵の西に隣接し中国縦貫道建設に伴い事前調査を行った且原遺跡の遺構密度が低かったため、A・C両調査区を中心とした約2500㎡を約3か月間で調査を行う予定であった。しかし、C調査区の調査に入った時点において多数の土壇墓が存在したことで、またB・D両調査区の遺構の再確認の結果、遺構が両調査区にも存在すること等が明らかになった。このため調査員1名では対応しきれない状況となり8月18日より調査員を1名増員して調査を進めた。

新たに追加したB調査区のほとんどは、予算及び調査期間などのためやむなくブルドーザーによって排土作業を行った。

この様に、第1次調査の不備等のため調査面積は当初予定の約倍にあたる約5100㎡にのぼり、約4か月近く遅れて調査を終了した。整理作業は、落合町公民館で土器洗浄までを行い、1976年12月から1978年3月まで津山市二宮遺跡事務所において報告書作成にあたった。報告書の作成は、ほとんど調査員1名で行い、他に二宮遺跡（註3）その他にかかわっておられた方々の有形無形の援助を受けた。また報告書作成にあっていた調査員は、1977年4月より津山市へ調査補助員として勤務したため、

雨天と夜間のみを報告書作成にあてていた。しかしこの程度の期間では遅々として進まないため、1977年8月、1978年1月から3月の約4か月間は、報告書作成のみに専従し刊行に努めた。

なお調査員は図面、整理等で手いっぱいのため、遺物の整理復元が不可能の状態であった。そのため岡山県教育庁文化課、津山教育事務所、二宮遺跡事務所などの好意により、特殊器台、壺などの供献用土器の復元および報告書の編集等に種々の援助をいただいた。

なお中山遺跡の出土遺物は、落合町公民館において保管している。

調査参加者（敬称略）

前田清子、池田米代、木下天留子、竹田谷藏、横木武志、池田耕作、松岡いよ子、長尾昭子、先原久栄、山村つね子、先原弘子、山村武夫、山本照子、山本富美子、藤本武、桑田俊明(岡山大学生)、橋本照国(町文化財保護委員長)、小山繁夫(仏教大学生)、角井康晃(仏教大学生)、川口宏海(仏教大学生)、北田栄造(仏教大学生)、田中清美(奈良大学生)、西尾登美子、赤田頼美、藤井克己

調査日誌抄

1976年

4月

8日 第1回の調査委員会ならびに現地視察。

17日 発掘調査の開始、機材の搬入。

18～26日 C調査区 表土はぎ、及び精査。

27～30日 C調査区 遺構検出作業。

5月

1～5日 C調査区 遺構検出作業。

6日 7号墳周溝掘下げ。

7日 7号墳周溝実測。

8～10日 C調査区 No.5・60・65土壇墓供献用土器実測及び取上げ。

11～16日 C調査区 表土はぎ及び遺構検出作業。

17日 D調査区 表土はぎ。

18日 D調査区 7号墳及び周溝の掘下げ。

19日 C調査区 No.58土壇墓供献用土器実測。

20～31日 C調査区 遺構検出作業及び供献用土器実測。

6月

1～5日 C調査区 遺構検出作業及び供献用土器実測。

- 6日 C調査区 遺構上面，地形測量。
- 7～8日 B調査区 遺構確認のため表土はぎ及び遺構検出作業，箱式石棺及び古墳2基を確認。
- 9日 D調査区 9・10号墳実測。
- 10～20日 C調査区 土壙墓供献用土器実測。
- 21～25日 A調査区 表土はぎ開始，C調査区 土壙墓掘下げ。
- 26日 調査委員会。
- 27～30日 C調査区 土壙墓実測。
- 7月
- 1～15日 C調査区 土壙墓実測。
- 16～18日 C調査区 頂部付近土壙墓掘下げ。
- 16～27日 C調査区 頂部付近土壙墓実測。
- 27～31日 C調査区 第1グループ付近土壙墓実測。
- 31日 A調査区 B空間付近供献用土器実測。
- 8月
- 1～9日 A調査区 B空間付近供献用土器写真撮影及び実測。
- 10～15日 A調査区 溝によって区画されない一群検出作業。
- 16日 D調査区 8号墳実測。
- 17日 C調査区 地形測量補足。
- 18日 B調査区 ブルドーザーによる排土作業。
- 18～20日 C調査区 土壙墓実測。
- 21～24日 A調査区 B空間周辺・第1グループ付近供献用土器実測。
- 25～31日 C調査区 土壙墓実測。
- 31日 C調査区 終了，明渡し。
- 9月
- 1～3日 A調査区 第1グループ付近供献用土器実測，補足。
- 4～6日 A調査区 B空間周辺供献用土器実測補足。
- 8～21日 A調査区 溝によって区画しない一群土壙墓検出作業及び掘下げ。
- 22日 A調査区 溝によって区画しない一群掘下げ終了。
- 23日 A調査区 溝によって区画しない一群写真撮影。
- 24～25日 A調査区 第3・4区画盛土掘下げ。
- 26～29日 A調査区 第3・4区画土壙墓検出作業。
- 30日 A調査区 第3・4区画写真撮影。
- 10月
- 1日 A調査区 第2区画表土はぎ，B調査区 遺構検出作業。
- 2～4日 B調査区 4・5・6号墳周溝及び主体部掘下げ。

- 5～6日 B調査区 4・5・6号墳実測。
 7日 B調査区 3・4号住居址検出掘下げ。
 8～9日 B調査区 3・4号住居址実測。
 9日 B調査区 終了。
 11～12日 A調査区 第1区画盛土除去。
 13日 A調査区 第2区画盛土除去，第1区画土層断面実測。
 15～17日 A調査区 第1区画掘下げ。
 17～21日 A調査区 第1・2区画実測，溝によって区画しない一群実測。
 21～22日 A調査区 No.201箱式石棺実測。
 22～27日 A調査区 第3・4区画土壌墓掘下げ。
 26日 A調査区 2・3号墳検出作業。
 27日 A調査区 No.171礫塚墓実測開始。
 27～28日 A調査区 No.116石蓋土壌墓実測。
 29～30日 A調査区 第1区画実測。
 30日 A調査区 2・3号墳実測。
 31日 A調査区 第3・4区画実測。

11月

- 1～2日 A調査区 第3・4区画実測。
 2日 A調査区 2・3号墳実測。
 3～9日 A調査区 No.198・199・200・201箱式石棺実測。
 6日 A調査区 第1区画実測。
 9日 A調査区 礫塚墓終了。
 10日 器材搬出，本日をもって発掘調査終了。
 17日 調査委員会。

註1 岡山県県土保全条例に基き県内の大規模開発行為に対し，事前の審査会として，岡山県土地利用調整会議が昭和48年より行われている。

岡山県県土保全条例

(目的)

第一条 この条例は安全で良好な地域環境を確保することが，地域における現在及び将来の住民の生命、健康及び財産を保護するため，ひいては県土の秩序ある発展を図るため，欠くことのできない条件であることにかんがみ，開発行為の許可基準その他開発の適正化に関し必要な事項を定め，県土の無秩序な開発を防止し，もって県民の福祉に寄与することを目的とする。

註2 山磨康平・高畑知功「巨原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(14)』岡山県教育委員会 1977

註3 一般国道179号線改良工事に伴い岡山県教育委員会が発掘調査を行った。報告書近刊の予定。

落合木材流通センター文化財調査委員会

役 名	氏 名	所 属
委 員 長	大 倉 毅	落合町教育委員会教育長
副 委 員 長	船 津 昭 雄	湯原町二川中学校教頭
委 員	山 磨 康 平	岡山県教育委員会文化課文化財保護主事
〃	橋 本 惣 司	久米町教育委員会文化財保護主事
〃	奥 和 之	
〃	大 槇 正 美	落合町教育委員会教育課長
〃	近 藤 幹 晴	落合町教育委員会文化財担当主事
監 事	河 本 政 挙	河本木材株式会社代表取締役
〃	光 吉 勝 彦	岡山県教育委員会文化課文化財二係長

表2 調査日程表

年月 調査区	51・4	5	6	7	8	9	10	11
A			—	—	—	—	—	10
B					—		—	
C	17	—	—	—	—			
D		—	—	—	—			

第2章 遺跡の地理的歴史的環境

第1節 地理的環境

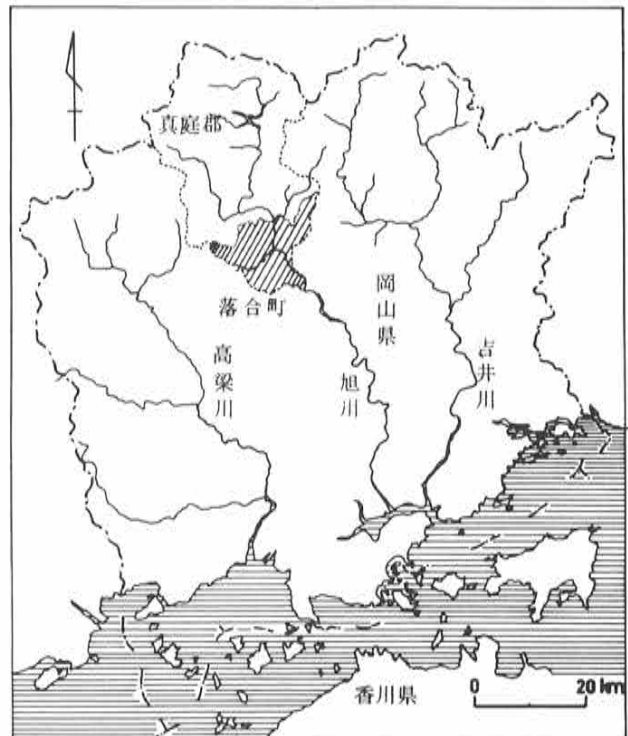
中山遺跡が位置する岡山県真庭郡落合町は岡山県中北部の面積約148km²、人口約18,000人の農業中心の町である。標高1,000mの中国山地に発源し瀬戸内海に注ぐ旭川の中流域は、沖積低地が最も広く耕地面積は1,740haにおよんでいる。

落合町はその名が示すように川の合流地に発達した町で、旭川に支流備中川、河内川が合流する。落合町の地形は中国山地の南辺に広がる標高400~600mの定高性をもつ吉備準平原の遺物である中位侵食面が比高300~400mの山地を形成し、それを刻む旭川、備中川、河内川の低地に大別できる。

中位侵食面は田原山上、日野上、関北部に顕著にみられる。山頂部は平坦で老年期的な地形を示し、小集落が形成されている。

旭川、備中川、河内川の低地は新第三紀中新統（第3紀層）と第四紀沖積層が分布している。中新統は新第三紀中期中新世の頃、津山盆地、三次盆地などを含む中国地方の大半は海底に没しており、その状況下で形成された堆積物であり、泥岩、砂岩の中に化石を含み、その後の地殻変動によって隆起上昇したものである。第三紀層は低地の縁辺部に比高20~30mの丘陵を形成している。備中川流域では関、一色、栗原、鹿田、下方、西河内に、旭川流域では日名、古見、下市瀬に、河内川流域では上河内、中河内、下河内、赤野、西原に分布がみられ、畑地として利用されている。中山遺跡は西河内の第三紀丘陵上に立地している。

第四紀洪積世の堆積物は西原付近などに断片的にみられ、第三紀層の上にいる比高5m前後の河岸段丘をなしている。第四紀沖積世の堆積物は主に河川の氾濫原にみられ、ルーズな砂利で構成されている。沖積層にも現氾濫原より1~2mの比高をもつ沖積段丘がある。この沖積段丘は備中川流域に多く、一色、栗原、鹿田、下方、垂水に分布する。一色にお



第1図 落合町位置図

いては昭和49年、宮の前遺跡の発掘調査で、縄文時代晩期の遺構が検出されており、安定した生活面であったことがわかった。堆積物は円礫を含む未固結である。本遺跡の南の備中川左岸にも見られ、条里制地割が遺存している。段丘上は集落、水田になっている。氾濫原はその利用が最も多く、栗原、鹿田、垂水、福田、古見などの集落密集地が立地している。旭川流域では野川、田原、中組などは中州上の集落である。

落合町の地質はそのほとんどが三郡変成岩であり、上房郡との境をなす三根山付近に石灰岩が分布するほか、塩滝には蛇紋岩を礫とした礫層が中生代の産物として知られている。また日名から杉山にかけて花崗岩の分布がみられる。

第2節 歴史的環境

落合町内の遺跡は美作西部では比較的濃い分布を示す。その分布は低地と丘陵に限られ、中位侵食面上——日野上、田原山上など——には全く確認されていない。最近、久米町大坪和で弥生後期の遺物が発見されており、この地域の精査が必要であろう。昭和44年以後、中国縦貫自動車道の歴史に伴い発掘調査が実施され、落合町の歴史が一気に縄文時代早期まで遡った。

縄文時代

赤野遺跡は河内川が旭川に合流する約1km上流の左岸にある舌状の丘陵上にあり、縄文時代早期の山形の押型文土器片、後期・晩期の土器片、サヌカイト製石鏃、黒曜石等が出土している。(註1) 西原遺跡は旭川の左岸の段丘上にあり、早期の押型文、中・後期～晩期の土器片、サヌカイト製石鏃等が出土している。(註2) 須の内遺跡は備中川左岸の沖積段丘にあり後期のヘラ描き沈線文・条痕文土器片、晩期の土器片、黒曜石が出土した。(註3) 宮の前遺跡は備中川左岸の沖積段丘上の大規模な遺跡で縄文時代中期・後期の土器片が出土した。さらに晩期と考えられる40個の貯蔵穴を検出し、その中にドングリ、クルミ、木の葉が出土し、すでに晩期には定住していたことが確認された。(註4) これら4遺跡は発掘調査が実施されたもので、他の地域では縄文時代の遺物は発見されていない。しかし、今後発見される可能性は十分にあり、縄文時代後、晩期には高燥地に集落が形成されていたと考えられる。

弥生時代

前期の遺物は宮の前遺跡で出土している(甕・前期末)。美作一般の傾向であるが、中期末～後期にわたる時期には遺跡が急激に増加する。宮の前遺跡、須の内遺跡、西河内且原遺跡、西原遺跡では住居址やピットが検出されている。遺物も石斧、石鏃、石包丁、扁平片刃石斧などのほか、西原遺跡では鉈が出土している。古見藤原遺跡、高屋遺跡などは丘陵上の大規模な集落地が考えられる。後期末の遺跡には下市瀬遺跡がある。旭川の氾濫原をのぞむ段丘上に位置し、小型銅鐸が祭祀井戸に伴って出土した。(註5) 且原遺跡は本報告の中山遺跡と同一丘陵上にあり、むしろ同一遺跡と考えるべき遺跡で、弥生時代終末期の住居址、袋状ピットが検出された。(註6) 弥生時代は農業生産がすすみ、耕地の拡大と人口増加とともに社会構造に変革がみられたに違いない。中山遺跡はこうした時期に営まれた土壙墓群をもつ遺跡であり、供献された土器群とともに出土した特殊器台、特殊壺は、この地域

における古墳出現への黎明であろう。

古墳時代

赤野遺跡から隅丸方形の竪穴式住居址が検出され、古式土師器が出土した。一辺6.2mで4本柱を結ぶ三辺でベッド状遺構を付設していた。(註7)宮の前遺跡では円形、方形周溝墓が7基検出された。円形のもは中心主体に石棺をもち、方形のもは周溝内に石蓋土壇、箱式石棺、土壇をもち、出土遺物は古式土師器と考えられ、岡山県北部における最初の発見であった。(註8)しかし、宮の前遺跡の周辺においては、これらの墳墓につながる古墳はなく、首長墓としての古い前方後円墳は井手井倉古墳(長さ約25m)、横部古墳群1号墳(全長31m)、垂水古墳(全長26m)、楨の前古墳(約25m)、天王塚(25m)、川東車塚(65m)がある。天王塚は盗堀孔に礫床がのぞいており、板石が散乱していることから竪穴式石室に礫床があったと思われる。いずれも低地をのぞむ丘陵上に立地する。川東車塚を除く5基の前方後円墳は30m前後の小型であるが、小集団の首長墓と考えられ、川東車塚は旭川の狭隘部の山頂にあつて、その眺望はよく前方部がやや広がりをもつ後出的な形態を示しており、さらに大きな集団の首長墓ということができよう。

中山遺跡に最も近い横部古墳群について素描を加えよう。当該古墳群は30基で構成され、1号墳以外はすべて円墳で木棺直葬か箱式石棺を主体とするものと思われる。旦原遺跡、中山遺跡で調査した12基の古墳は、6世紀初め～後半にまで及んでいる。1号墳の時期は不詳であるが、この古墳群は南から北へ築造されたようである。ただ、6世紀中頃には美作(津山周辺)では横穴式石室が採用されているにもかかわらず、調査した古墳は木棺直葬が多い。横穴式石室墳はこの地においては6世紀後半に採用されたと思われる。昭和46年調査された西原穴塚古墳は石室の全長12mの左片袖式で玄室の長さ3.8m、幅2m、高さ2.7m・羨道の長さ8.2m、幅1.5mの巨石墳である。(註9)一色八幡神社古墳は、無袖式の全長9m以上、幅1.5mの巨石墳である。これら大型の石室をもつ古墳は栗原、余河内、鹿田、西河内、上市瀬、古見、田原、久保谷などに、単独又は数基で存在している。

しかし、落合町内で、最も密な古墳の分布を示す日名古墳群は、37基で構成され、そのうち34基は横穴式石室をもつことが明らかになった。日名谷は長さ2km、幅1kmの谷で南向き斜面を日名、北向き斜面を影という地名があるが、両斜面にほぼ同数の古墳が分布し谷の奥まった丘陵上に神ノ毛1号墳と、むすび山古墳のいずれも20m前後の小型前方後円墳がある。昭和44年に調査され、後円部に横穴式石室をもち、6世紀中葉に築造され7世紀前半まで追葬が行われたと考えられている。日名古墳群は、そのあり方がきわめて特徴的であること、高屋という地名などから美作国のうちの真鳴郡郡衙の比定地とする説がある。

奈良・平安時代

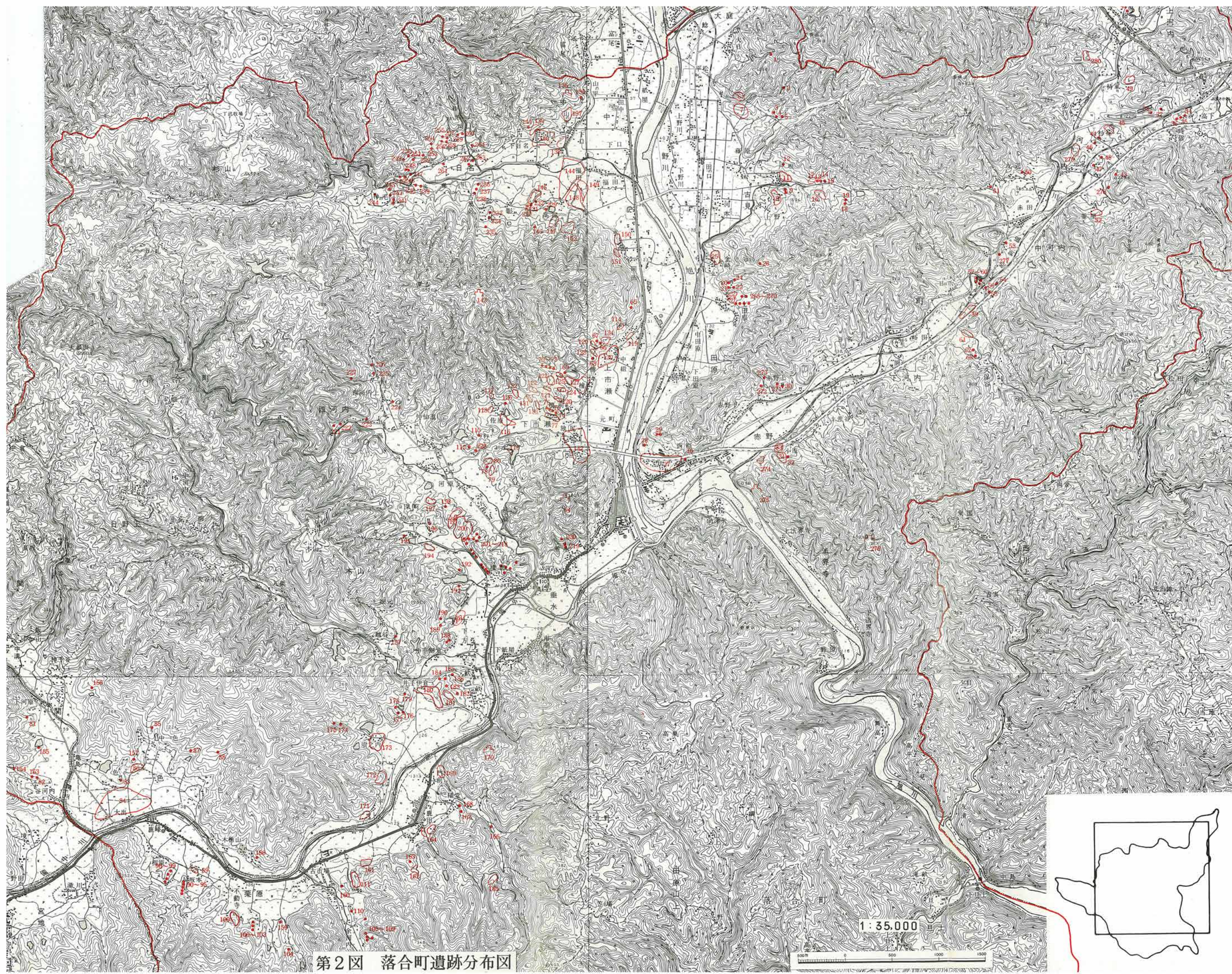
落合町に関わる文献はこの時代は少なく、和名抄によると旭川を境に左岸が大庭郡、右岸が真鳴郡となっており、田原、河内、垂水、大庭などはその郷名が現在の大字名として残っている。

この時代の発掘例に下市瀬遺跡がある。B調査区では5間×3間の礎石建物が検出され須恵器、土師器、瓦類が出土した。平安時代初めと考えられ、多首壺・蓮弁付高杯・転用碗・墨書土器・瓦の出土は寺院址の一部とも考えられる。D調査区では井戸が検出され、基礎梓板が完存しており、皇朝12

錢の隆平永宝（796～800）と帯金具が出土した。（註10）須内遺跡でも須恵器が出土している。郡遺跡では、この時期の須恵器とともに円面硯片が採集されている。平古窯址・西河内古窯址・戸坂古窯址などはこの時代まで須恵器が焼かれたと考えられる。その他、中王寺遺跡、西原遺跡、下河内遺跡、高屋遺跡などから須恵器が出土している。条里制地割が旭川、備中川の沖積段丘上によく遺在している。旭川流域では中、古見の低地、備中川流域では九反ヶ坪の地名を残す宮の前遺跡周辺、郡遺跡周辺、下方、垂水にそれがある。いずれも磁北にその方向を示している。下一色古墳から土師質陶棺が出土したが陶棺の身、脚に連華文の瓦当が付され8世紀の所産と考えられている。（註11）且原遺跡では、須恵器の蔵骨器が出土している。

遺跡分布図については、橋本照国氏・桑田俊明氏のご協力を得た記して謝意を表したい。

- 註1 橋本惣司・山磨康平・岡田博ほか、「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)』岡山県教育委員会 1974
- 註2 橋本惣司・栗野克己ほか、「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6)』岡山県教育委員会 1974
- 註3 橋本惣司・松本和男・浅倉秀昭「須内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(11)』岡山県教育委員会 1976
- 註4 橋本惣司・二宮治夫・浅倉秀昭「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)』岡山県教育委員会 1976
- 註5 田仲満雄・新東晃一「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)』岡山県教育委員会 1974
- 註6 山磨康平・高畑知功「且原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(14)』岡山県教育委員会 1977
- 註7 註1に同じ
- 註8 註4に同じ
- 註9 中力昭・伊藤晃「穴塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(8)』岡山県教育委員会 1975年
- 註10 註5に同じ
- 註11 今井亮・河本清「岡山県落合町下一色2号墳出土の瓦当文陶棺」『考古学研究第18巻第1号』1971



第2図 落合町遺跡分布図

1:35,000

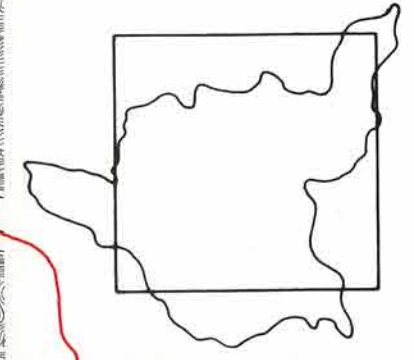
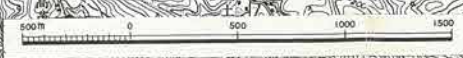


表6 落合町遺跡地名表

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
1	古墳	篠向古墳1号	古墳	大庭	山林	斜面		箱式石棺(長2.45m幅0.5m)
2	〃	〃 2号	〃	〃	〃	〃	(長2.50m幅0.8m)	
3	〃	大京古墳	〃	古見・大京	〃		横穴式石室・墳丘推定8m・開口南向(?)	
4	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃		3基のうち2基残存、1基は羨道玄室残存	
5	散布地		〃	〃・〃	〃		大京古墳の1号と2号の間に林道を造成しておりその断面に包含層あり	土師器
6	集落	藤原遺跡	弥生	古見	畑	斜面	黒褐色土流入のピットあり	
7	〃	〃	古墳～歴史	〃		段丘	№6より一段平地に下ったところ	須恵器
8	散布地	古見遺跡	歴史	古見・上野	畑宅地	〃		〃
9	古墳	天王塚古墳	古墳	古見	山林	丘陵	葺石・前方後円墳(全長25m)	
10	〃	穴塚古墳	〃	西原	墓地	斜面	中国自動車道に伴い調査・消滅	
11	散布地	戸坂遺跡	古墳～歴史		山林・畑	平坦地	戸坂川の北岸	須恵器
12	古墳	戸坂古墳1号	古墳	古見	山林	尾根	(径10m)・横穴式石室(長5m)・南西に開口	須恵器片・鉄片
13	〃	〃 2号	〃	〃	〃			
14	〃	〃 3号	〃	〃	〃			
15	〃	〃 4号	〃	〃	〃			
16	集落	戸坂奥遺跡		〃	畑			
17	〃	〃		〃	山林			

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
18	窯址			古見・戸坂奥				
19	〃			〃・〃				
20	古墳	両毛段古墳1号	古墳	田原・両毛段		頂部	径6mの封土をもつ、経塚の可能性あり	
21	〃	〃2号	〃	〃・〃	墓地	丘陵先端	側壁と思われる石が残存	
22	〃	〃3号	〃	〃・〃	〃	丘陵西端	天井石らしきものの散乱	
23	散布地	奥河内遺跡		〃・奥河内	〃	斜面	須恵器・土師器の散布	
24	古墳	桃山古墳	古墳	〃・桃山		丘陵先端	(径13m高2m)北東に開口	
25	散布地	金崎遺跡	古墳～歴史	金崎	畑	台地	須恵器の散布地	須恵器採集
26	古墳	渡辺塚古墳	古墳	古見	山林	頂部	(径約10m)・横穴式古墳(長7m幅1.55m)	
27	集落	西原遺跡	弥生～古墳	西原	畑		中国自動車道に伴い調査	
28	古墳	天神山古墳	古墳	西原・天神山	山林	独立丘陵	裾部に河石の竪穴式石室あり	
29	〃	川東車塚	〃	西原		尾根	前方後円墳全長61m	
30	〃	八幡古墳	〃	赤野	山林		人工的な盛土で径5.5m、古墳の可能性あり	
31	集落	小原遺跡	弥生	〃	〃	丘陵	道路切通しの為住居址(長5.2m深0.5m)の断面あり。	
32	古墳	杉迫古墳	古墳	赤野・杉迫		〃	封土あり・径10m横穴式石室あり。	
33	散布地	赤野遺跡	弥生～室町	〃・〃		〃	中国自動車道に伴い調査	
34	古墳	丸山古墳群1号墳	古墳	上河内・コモガシタ	山林	尾根	円墳(径19.7m高20m)	
35	〃	〃2号墳	〃	〃・〃	〃	〃	円墳(径11.7m高0.6m～1m)	

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
36	古墳	丸山古墳群 3号墳	古墳	上河内・ コモガシタ	山林	尾根	円墳(径11.2m高1.3 m-0.3m)葺石列(1 列)がめぐる	
37	〃	榎谷古墳 1号墳	〃	〃・〃	〃		円墳・箱式石棺(床1枚 石天井石2枚)	人骨
38	〃	榎谷古墳 2号墳	〃	〃・〃	山林	尾根	円墳(径10m高1.2m) ・ふき石列あり	
39	散布地	下河内遺跡	弥生～平 安	下河内	畑地	段丘	中国自動車道に伴い調 査	
40	〃	尾の上古墳	古墳	上河内・東 谷・尾の上	山林	山麓	円墳(径8m高1.2m) ・墳頂五輪石(経塚 か?)	
41	〃	地藏坊遺跡	弥生	〃・地藏坊	畑	鞍部		陶器片・須恵器
42	古墳	地藏坊古墳	古墳	〃・宿	山林	尾根	前方後円墳(全長19.6 m後円部高1m径10m 前方部高0.6m、 10m×7m)	
43	古墳	釜屋古墳1 号	〃	〃・釜屋	山林	斜面		
44	古・墳	安行古墳	〃	〃・〃	山林	〃	円墳?	
45	散布地	杉谷遺跡		〃・杉谷	畑	山麓	屋敷跡・寺跡と考えら れる	須恵器・中近世 陶器
46	古墳	杉谷古墳1 号	古墳	〃・〃	山林	独立 丘陵	箱式石棺	
47	〃	元定古墳	〃	〃・元定	〃	丘陵	円墳(径7.3m高0.7m)	
48	〃	杉谷古墳2 号	〃	〃・杉谷	〃	尾根	円墳(径6.7m高0.5- 0.7m)	
49	集落	持家遺跡	弥生	上河内	水田	斜面	弥生式土器を包含する 土層がみられる	弥生式土器
50	古墳	大ノ釜古墳	古墳	中河内・友 近	山林	〃	横穴式石室	陶棺片
51	〃	権現塚古墳	古墳後期	〃・友近西	畑	〃	横穴式石室・南に開口	
52	散布地	釜屋遺跡	弥生後期	〃・釜屋	〃	〃		弥生式土器

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
53	古墳	布札古墳	古墳	中河内・布札	山林	丘陵	円墳(径16.5m高2m) ・木棺直葬と思われる	須恵器片
54	〃	野田塚古墳	〃	〃・野田場	〃			
55	〃	藤こそ古墳 1号	〃	中河内	〃	丘陵	(径10.5m高2.5m) 横穴式石室	
56	〃	〃 2号	〃	〃	荒地		横穴式石室・一号墳と 同規模	
57	〃	八幡古墳群 1号	〃	中河内・八幡	山林	丘陵	円墳(径9m高0.5m)	
58	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃	〃	〃 (径7m高0.5m)	
59	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃	〃	〃 (径7m高0.7m)	
60	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃	〃	〃 (径8.5m高0.5m)	
61	集落	近実遺跡	弥生末～ 古墳	下河内・近実	畑	斜面	包含層・ピットあり	土師器高杯片
62	古墳	久保谷古墳 群 2号	古墳	〃・久保谷	〃	低丘陵	円墳(径13m高2m) 横穴式石室(玄室巾1.7 m),西に開口	
63	〃	〃 1号	〃	下河内	山林	斜面	円墳(径11m高1.5m)	
64	城址	しめ山城址	中世	垂水	〃	山頂		
65	古墳	保木古墳	古墳	上市瀬	〃	丘陵	径7m高1m前後の古 墳の可能性あり	
66	〃	市瀬中組 1号	〃	上市瀬・中組	〃	〃	円墳(径14m)・天井石 らしきもの一枚残存	
67	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃	〃	円墳(径15m高1.7m)	
68	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃		(径約7m)墳頂部に小 河原石が散在,古墳か 経塚か	
69	〃	風呂古墳	〃	〃・風呂	〃		(径約11.5m)横穴式石 室・南西に開口。	
70	〃	塚の本古墳 1号	〃	〃・塚の本	〃		横穴式石室・鏡石一枚 残存	
71	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃		径約10m	

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
72	古墳	塚の本古墳 3号	古墳	上市瀬・塚 の本	山林		鏡石1枚残存	
73	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃		下部石材わずかに残存	
74	〃	槇の前古墳 1号	〃	〃・槇の前	〃	丘陵	円墳(径7m)	
75	〃	〃 2号	〃	下市瀬・〃	〃		径11m高1.2m	
76	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃		前方後円墳(全長32m 前方部13m)	
77	集落	槇の前遺跡	弥生～古墳	〃・〃	宅地	斜面	須恵器・土師器・弥生 式土器の散布、焼土・ 炭・窯跡か	石包丁・須恵器 片
78	古墳	且の原古墳	古墳	西河内	山林	丘陵	円墳(径約12m)・お わずかに封土あり	
79	散布地	且の原東遺 跡 A地点	弥生～古墳	〃	〃	斜面		須恵器片
80	〃	〃 B地点	弥生	〃	〃		No.79の西斜面に位置す る	〃
81	古墳	影古墳	古墳後期	関	墓地		横穴式石室(長4m幅2 m)・封土流失	
82	〃	谷河内古墳 1号	古墳	関・谷河内	山林	丘陵	(墳丘径85m高15m)	
83	〃	一色八幡古墳	〃	一色	宅地		横穴式石室(長9m幅 1.5m)・羨道部消滅	
84		一色宮の前 遺跡	縄文・弥生・古墳	〃	水田		中国自動車道に伴い調 査	弥生式土器・石 器・須恵器・土 師器
85	古墳	一色古墳	古墳	〃	山林	丘陵	径9m高1m	
86	集落	角瀬遺跡		一色・角瀬	畑		弥生時代中期～古墳時 代の集落	弥生式土器・石 器・須恵器・土 師器
87	古墳	永明寺古墳	古墳	一色	山林	傾斜面	円墳(径14m高2m)・ 横穴式石室(玄室長 5.3m幅1.9m)・南東 に開口	

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
88	古墳	下一色古墳	古墳	一色			横穴式石室	瓦当文陶棺
89	包含層	和田八幡遺跡	弥生後期	栗原・和田	山林	東斜面	道路によってカットされたガケ面・住居址の可能性大	弥生式土器土師器(壺・高杯)
90	古墳	坂本古墳群1号	古墳	栗原・坂本	〃	尾根	円墳(径12.5m高1~2m)	
91	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃		〃(径14m高1~2m)	
92	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃	尾根	〃(径7.7m高0.7m~1.3m)	
93	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃	〃	〃(径16.5m高2.5m)・周溝(幅2m)あり	
94	〃	〃 5号	〃	〃・〃	〃	〃	横穴式石室・溪道部の天井石なし・南に関口	
95	〃	〃 6号	〃	〃・〃	〃	〃	円墳(径9.3m高1.5m)石材(50cm×50cm×30cm)数個あり	
96	〃	相原古墳群1号	〃	〃・相原	〃	〃	円墳(径8.4m高0.4~1m)	
97	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃	〃	〃(径7.8m高0.5~0.7m)	
98	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃	〃	〃(径23m高2m~1.5m)	
99	〃	〃 4号	〃	〃・〃	墓地	〃	径11m高1m	弥生式土器片、屋根の一段低いところから鉄刀・須恵器等出土したという
100	遺跡	おおじ権現遺跡	弥生	〃・不動寺和田山	山林	〃	小さなほこらあり・かつて古墳あり	須恵器・土師器採集
101	古墳	西谷古墳群1号	古墳	〃・西谷	〃	〃	円墳(径9.5m高20cm~2m)	
102	〃	〃 2号	〃	栗原	〃	〃	かつての古墳の一部を削平・箱式石棺の石材(?)数個あり	

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
103	古墳	西谷古墳群 3号	古墳	栗原	山林	尾根		
104	〃	瑞祥寺古墳	〃	〃	〃		円墳(径8m高1.5m～ 0.5m)・横穴式石室(長 4m幅1.3m)・南東に 開口	付近から須恵器 出土
105	〃	横嶺古墳 1号	〃	栗原・余河 内	〃	尾根	円墳(径11m)・横穴式 石室(長4m高0.1m～ 2.0m)・西に開口	
106	〃	〃 2号	〃	〃・〃	竹林		横穴式石室(長5m)・ 封土なし	
107	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃		横穴式石室(石室幅 1.4m)	
108	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃	尾根	横穴式石室(長5.2m幅 1m)	
109	〃	〃 5号	〃	栗原	山林	斜面	円墳・横穴式石室・南 に開口	
110	〃	薬師堂古墳	〃	栗原・余河 内薬師堂	〃	尾根	円墳(径8m)・天井石 らしきもの二枚	
111	散布地	栗原大山遺跡	弥生	〃・大山	畑			須恵器・弥生式 土器・土師器
112	古墳	西河内古墳	古墳	西河内	山林	尾根	円墳(径12m・高さ1 m)	
113	〃	佐原古墳	〃	下市瀬・佐 原	〃	谷	円墳(径7m)	
114	散布地	保木散布地 A地点	弥生～奈 良	上市瀬・保 木	畑 水田	丘陵 斜面		須恵器・土師器
115	窯址		古墳	下市瀬	山林	〃	30×20mの範囲	
116	散布地	佐原前遺跡	奈良～平 安	〃	畑 水田	扇状地	約250m×150mの範囲	須恵器・土師器
117	〃	佐原裏遺跡	飛鳥・奈 良	〃	畑 宅地	丘陵 斜面		須恵器
118	〃	佐原宮前遺跡	平安・鎌 倉	下市瀬・佐 原	畑	〃		

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
119	散布地	保木散布地 B地点	古墳～奈良	上市瀬・保木	畑			須恵器・土師器
120	〃	冬内谷A地点	奈良～鎌倉	上市瀬・冬谷	山林・畑	山麓	東西約150m南北20m	須恵器・土師器 弥生式土器中期
121	〃	〃 B地点	弥生・奈良・平安	〃・〃	畑	丘陵面		須恵器・瓦質土器
122	〃	〃 C地点	〃	〃・〃	〃	〃		須恵器・鉄滓
123	〃	平林遺跡 A地点	弥生・古墳	〃・平林	山林・畑	〃	畑から土器片を採集されるだけだが根上全体	土師器又は弥生式土器
124	〃	〃 B地点	〃	〃・〃	〃・〃	〃		土師器・ 弥生式土器
125	〃	桧散布地	古墳～平安	上市瀬	畑	山麓	10m×20m	須恵器
126	古墳		古墳	下市瀬	〃	丘陵	巨石、一個が露出している	〃
127	散布地	桧 B地点	奈良・平安	上市瀬	畑 水田 墓	丘陵面	東西約300m×南北約150m	〃
128	〃	中組A地点	弥生	上市瀬・中組	畑	〃	東西約30m×南北約50m	土器片
129	〃	中組B地点	奈良・平安	〃・〃	〃	〃	約50m×50m	須恵器
130	〃	中組C地点	〃	上市瀬	畑 水田 墓	台地	南北200m×東西200	〃
131	包含層		古墳	下市瀬・塚の松	山林	丘陵面		
132	散布地	塚の松遺跡	古墳～奈良	下市瀬	山林・畑	〃		前に骨壺を採集 高校にある
133	〃	槇の前遺跡	〃	〃	畑	〃		須恵器
134	〃	青木遺跡	〃	上市瀬	〃	〃		〃
135	古墳	山の平古墳	古墳	山の平	山林	尾根	10m×10m	

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
136	城址	月沢城址	中世	中	山林	尾根		
137	散布地	中散布地	古墳～奈良	〃	畑	丘陵		
138	〃	善福寺散布地	〃	日名	〃	丘陵斜面		須恵器・土師器
139	〃	旦散布地 A地点	〃	〃・旦	〃	〃		〃
140	〃	〃 B地点	〃	日名	畑宅地	〃		〃
141	古墳	旦古墳	古墳	〃・旦	山林	〃	10m×10m 横穴式の 石材が散布している	
142	複合遺跡	下市瀬遺跡	弥生～平安	下市瀬・池尻	畑水田	丘陵部	250m×300m 中国自動車道に伴い調査	
143	城址	宮山城址	中世	上市瀬	山林	山頂		
144	散布地	高屋散布地 B地点	飛鳥・奈良	高屋	畑水田	台地		須恵器
145	古墳	影古墳群	古墳	影	山林	丘陵上		
146	〃	高屋古墳	〃	高屋	〃	尾根	円墳(径約16m高さ約 2.5m) 横穴式古墳	
147	散布地	高屋散布地 A地点	弥生～飛鳥	高屋	畑水田	丘陵斜面	50×50m	弥生式土器・須恵器
148	〃	福田散布地 A地点	弥生・古墳	福田	〃	台地		弥生式土器・須恵器・土師器
149	〃	〃 B地点	〃	〃	〃	〃		〃
150	〃	開田遺跡 B地点	弥生～奈良	開田	〃	丘陵斜面	30m×50m	弥生式土器・土師器
151	〃	〃 A地点	飛鳥・奈良	〃	山林・畑	〃		土師器
152	〃	大段散布地	弥生・古墳	高屋・大段	〃	〃	300m×500m	弥生式土器・須恵器
153	古墳	谷河内古墳 2号	古墳	関・谷河内		尾根		

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
154	古墳	谷河内古墳 3号	古墳	関・谷河内		尾根		
155	〃	〃 4号	〃	〃・〃		〃		
156	〃	谷古墳	〃	〃・谷		丘陵面		
157	〃	上一色古墳	〃	一色・上一色		尾根		
158	〃	木樵山古墳	〃	栗原・木樵山	宅地		横穴式石室	
159	〃	瑞祥寺古墳 2号	〃	〃	山林		消滅	須恵器多数
160	〃	余河内古墳	〃	〃	〃	丘陵面		
161	散布地	大山下散布地	弥生	〃	畑			
162	〃	段高下遺跡	〃	鹿田				
163	古墳		古墳	〃				
164	散布地	寺坂遺跡	奈良	〃・上町	畑			
165	集落址	追坂遺跡	弥生	〃・追坂	山林		道路断面に住居址	弥生式土器
166	古墳	塚神古墳	古墳	〃			横穴式石室	
167	〃	陽堂古墳 1号	〃	〃・陽堂	畑		〃	
168	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃		〃	
169	散布地	中王子遺跡	奈良	〃・中王子	〃			須恵器
170	城址	石ヶ城址	中世	鹿田	山林	山頂		
171	窯址	平古窯址	奈良	〃・平	宅地			須恵器
172	集落・ 墓地	須ノ内遺跡 大平寺地区	弥生～中世	〃・須ノ内		丘陵面	中国自動車道で調査	
173	集落	須ノ内遺跡	〃	〃・〃	水田	扇状地	〃	
174	古墳	須ノ内古墳 1号	古墳	〃・〃	山林		横穴式石室	

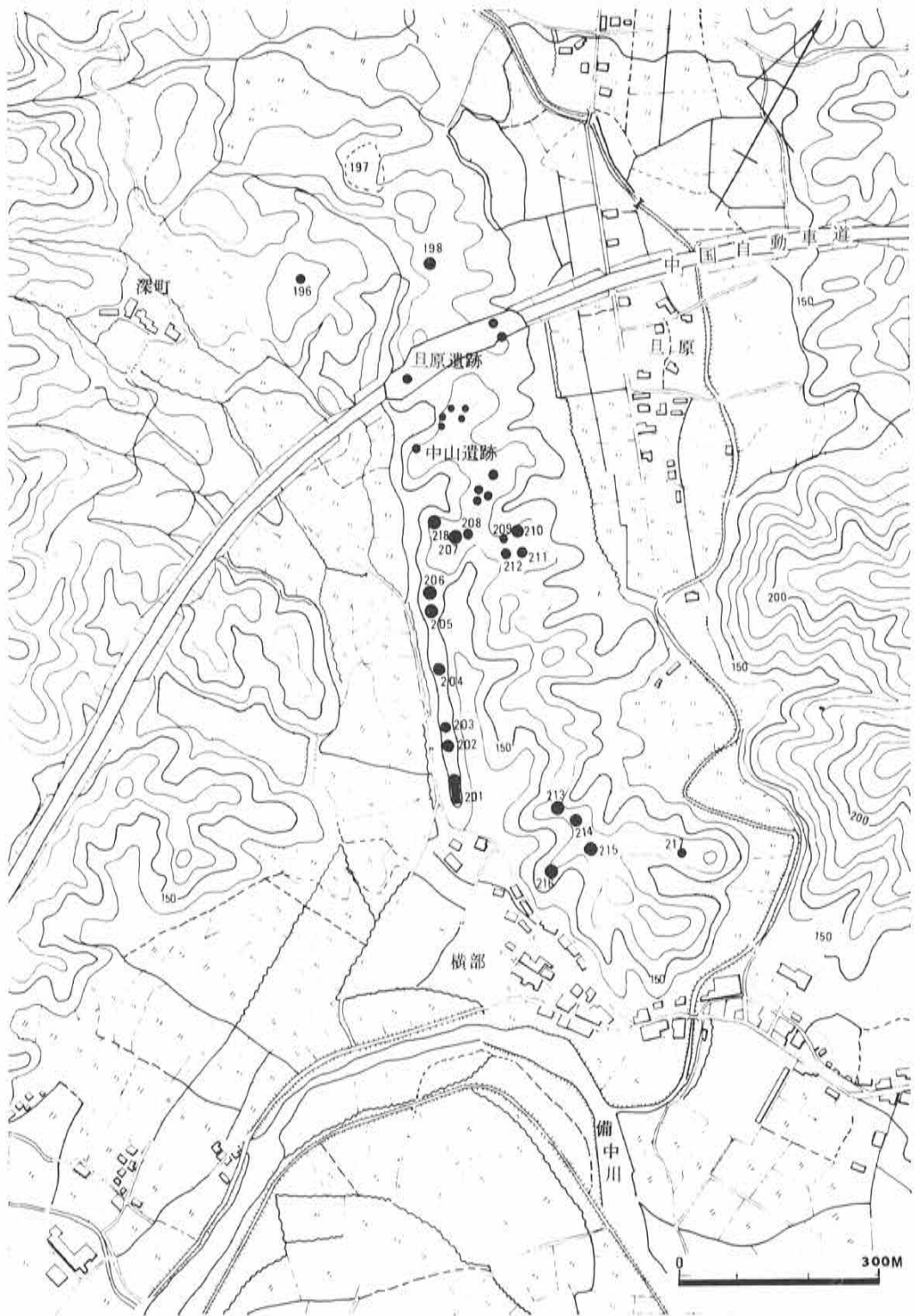
番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
175	古墳	須ノ内古墳 2号	古墳	鹿田・須ノ 内	山林		横穴式石室	
176	〃	郡古墳1号	〃	〃・郡	〃		円墳	
177	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃		〃	
178	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃		〃	
179	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃		〃	
180	散布地	郡遺跡	奈良	〃・〃	畑		条里制	須恵器・円面硯
181	〃	仁後山遺跡		〃・〃				
182	古墳	仁後山古墳 1号	古墳	〃・〃	山林		円墳	
183	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃		〃	
184	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃		〃	
185	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃		〃	
186	〃	〃 5号	〃	〃・〃	〃		〃	
187	〃	越谷古墳	〃	越谷			横穴式石室	
188	〃	井手伊倉古墳	〃	下方井手伊 倉	山林		前方後円墳(25m)	
189	〃	古墳群1号	〃	〃	〃		円墳	
190	〃	〃 2号	〃	〃	〃		〃	
191	〃	〃 3号	〃	〃	〃		〃	
192	〃	〃	〃	横部	〃	丘陵 尾根		
193	散布地	下方遺跡	奈良～中 世	〃	水田		条里制	陶器
194	〃	深町散布地	古墳～奈 良	深町				
195	古墳	〃 古墳	古墳	〃		尾根		
196	〃	〃	〃	〃	山林			
197	散布地	〃	〃	河原	〃	丘陵 斜面		須恵器

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
198	古墳		古墳	西河内	山林	丘陵	造成により調査	
199	集落墓地	且原遺跡	弥生～奈良	西河内・且原	〃	〃	中国自動車道に伴い調査	
200	〃	中山遺跡	〃	〃・中山	畑・山林	〃	民間開発に伴い調査	
201	古墳	横部古墳群 1号	古墳	〃・〃	山林		前方後円墳全長約31m	
202	〃	〃 2号	〃	〃・〃	〃	丘陵	} 円墳12～15mまでの小円墳 } 6～9.5mの円墳 } 大形円墳20m	
203	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃	〃		
204	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃	〃		
205	〃	〃 5号	〃	〃・〃	〃	〃		
206	〃	〃 6号	〃	〃・〃	〃	〃		
207	〃	〃 7号	〃	〃・〃	〃	〃		
208	〃	〃 8号	〃	〃・〃	〃	〃		
209	〃	〃 9号	〃	〃・〃	〃	〃		
210	〃	〃 10号	〃	〃・〃	〃	〃		
211	〃	〃 11号	〃	〃・〃	〃	〃		
212	〃	〃 12号	〃	〃・〃	〃	〃		
213	〃	〃 13号	〃	〃・〃	〃	〃		
214	〃	〃 14号	〃	〃・〃	〃	〃		
215	〃	〃 15号	〃	〃・〃	〃	〃		
216	〃	〃 16号	〃	〃・〃	〃	〃	径13.5m	
217	〃	〃 17号	〃	〃・〃	〃	〃	小円墳	
218	〃	〃 18号	〃	〃・〃	〃	〃	円墳（中山遺跡内）	
219	〃	垂水古墳	〃	垂水	〃	〃	前方後円墳全長26m	
220	〃		〃	〃	〃	〃	円墳約13m	
221	〃	三谷古墳群 1号	〃	西河内・三谷	〃	〃		

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
222	古墳	三谷古墳群 2号	古墳	西河内・三 谷	山林	丘陵		
223	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃	〃		
224	〃	摺谷古墳群 1号	〃	〃	畑	山麓	横穴式石室	
225	〃	〃 2号	〃	〃	〃	〃	〃	
226	〃	〃 3号	〃	〃	〃	〃	〃	
227	窯址	西河内古窯 址	奈良	〃・西河 内上	山林	谷	林道崖面に灰原露出	須恵器, 窯壁
228	古墳	停示岨古墳	古墳	西河内	〃		円墳	
229	〃	日名古墳群 1号	〃	日名・高屋	墓地	丘陵 尾根	〃(径11m) 竖穴式 石室もしくは木棺直葬 墳頂平坦面西半盗掘	
230	〃	〃 2号	〃	〃・影	雑木林	〃	円墳(径9m)横穴式石 室・玄室奥部のみ残存 奥壁は小形石の小口積	
231	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃	〃	円墳(径8m)横穴式石 室・ほぼ完存	
232	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃	〃	円墳(径8m)横穴式石 室・ほぼ完存	
233	〃	〃 5号	〃	〃・〃	竹藪	丘陵	大部分破損, 石室露出 横穴式石室	
234	〃	〃 6号	〃	〃・〃	宅地	丘陵 尾根	横穴式石室 現在下山氏家屋下	
235	〃	〃 7号	〃	〃・〃	田	山麓 斜面	横穴式石室・玄室奥部 残存・石室露出	
236	〃	〃 8号	〃	〃・古風呂	雑木林	丘陵 尾根	円墳(径12m)横穴式石 室・既掘石室遺存良	
237	〃	〃 9号	〃	〃・〃	〃	〃	円墳・横穴式石室・石 室露出	
238	〃	〃 10号	〃	〃・〃	〃	〃	〃・〃・〃	
239	〃	〃 11号	〃	〃・神ノ 毛	畑	平地	横穴式石室・石室露出	

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
240	古墳	日名古墳群 12号	古墳	日名・神ノ 毛	田	平地	横穴式石室・石室露出	
241	〃	〃 13号	〃	〃・〃	植林	丘陵 尾根	前方後円墳・横穴式石 室1969年調査	
242	〃	〃 14号	〃	〃・〃	雑木林	〃	横穴式石室農道貫通に より半壊	
243	〃	〃 15号	〃	〃・〃	〃	丘陵 先端	円墳(径12m)横穴式石 室・既掘石室遺存良	
244	〃	〃 16号	〃	〃・〃	田	平地	横穴式石室・石室露出	
245	〃	〃 17号	〃	〃・〃	宅地	山麓	横穴式石室・今石氏宅 地裏・巨石石室露出	
246	〃	〃 18号	〃	〃・〃	〃	〃	横穴式石室・今石氏宅 地裏・石室露出	
247	〃	〃 19号	〃	〃・〃	畑	平地	〃 〃	
248	〃	〃 20号	〃	〃・〃	植林	山頂	前方後円墳横穴式石室 1969年調査	
249	〃	〃 21号	〃	〃・〃	雑木林	斜面 上	横穴式石室・石室露出	
250	〃	〃 22号	〃	〃・〃	〃	〃	〃 〃	
251	〃	〃 23号	〃	〃・〃	〃	〃	〃 〃	
252	〃	〃 24号	〃	〃・〃	〃	尾根 先端	円墳(径6m)箱式石 棺?墳丘高0.5m	
253	〃	〃 25号	〃	〃・中日名	〃	斜面 上	横穴式石室・石室一部 残存	
254	〃	〃 26号	〃	〃・〃	〃	〃	〃 〃	
255	〃	〃 27号	〃	〃・〃	竹藪	平地	〃 〃	
256	〃	〃 28号	〃	〃・〃	〃	〃	〃 〃	
257	〃	〃 29号	〃	〃・〃	雑木林	〃	円墳・横穴式石室・石 室奥部残存	
258	〃	〃 30号	〃	〃・〃	宅地	〃	消滅	

番号	種類	名称	時代	所在地	地目	立地	遺跡概況	出土品
259	古墳	日名古墳群 31号	古墳	日名・中日名	雑木林	山尾根 先端	円墳・横穴式石室半壊 石室全壊	遺物数点
260	〃	〃 32号	〃	〃・〃	〃	山麓	円墳・横穴式石室半壊 石室一部残存	
261	〃	〃 33号	〃	〃・〃	田	平地	横穴式石室・巨石石室 露出	
262	〃	〃 34号	〃					
263	〃	〃 35号	〃	〃・〃	宅地	平地	横穴式石室・石室露出	
264	〃	〃 36号	〃	〃・〃	田	〃	〃 消滅	
265	〃		〃					
266	〃		〃					
267	〃		〃					
268	〃		〃					
269	〃		〃					
270	〃		〃					
271	〃	八幡古墳 2号	〃	赤野・赤野 上	山林	丘陵 斜面		
272	〃	〃 3号	〃	〃・〃	〃	〃		
273	〃	〃 4号	〃	〃・〃	〃	〃		
274	散布地		弥生・古 墳	〃・小原	〃	〃	土取りで破壊	
275	城址	逆巻城址	中世	〃	〃	尾根		
276	〃	土器尾城址	〃	法界寺	〃	山頂		
277	古墳		古墳	中河内・赤 田				
278	〃	釜屋古墳 2号	〃	上河内・釜 屋	山林			
279	散布地			〃・元定				
280	〃			〃・持家				



第3図 中山遺跡周辺遺跡分布図 (s=1/10000)

第3章 調査の概要

第1節 A調査区

1. A調査区の概要

A調査区は、当遺跡の南西部に位置する南へのびる一支脈上の緩斜面にあり、西側を中国自動車道に伴い調査を行った旦原遺跡と接する。この緩斜面は、標高163.3～167mを測り、東西15m、南北75mにわたっており、東は侵食谷、南は狭い谷を臨む所に立地する。

遺構は支脈上の緩斜面全域に分布しており、約1,600m²の調査から住居址2軒、土壙墓198基、配石墓1基、箱式石棺3基、古墳1基、火葬墓と推定される奈良末～平安初頭の須恵器などを確認した。

2. 土壙墓群の調査

(1) 土壙墓の概要

土壙墓は、A調査区において東西15m、南北75mの範囲に総数198基を検出した。これらの土壙墓の平面形態は、長方形を呈するものと長方形の両端が張り出して糸巻き状を呈するものと二様が認められた。内部施設として木棺をもつもの、小口溝をもつもの、小口面におさえ石をもつもの、枕石をもつものなどが認められる。特筆すべきものとして、大形土壙に礫楸からなる埋葬施設を有するもの、石蓋土壙墓などが存在する。

(2) 土壙墓の群構成

土壙墓の配列状態からみてその形成過程にすでに計画性が存在していたと推定され、これらを把握していくために、土壙墓群を平面的にとらえることがまず必要であると考えられる。ここでは、下記のを基準にして分類作業を進めた。

1. 土壙墓の位置関係

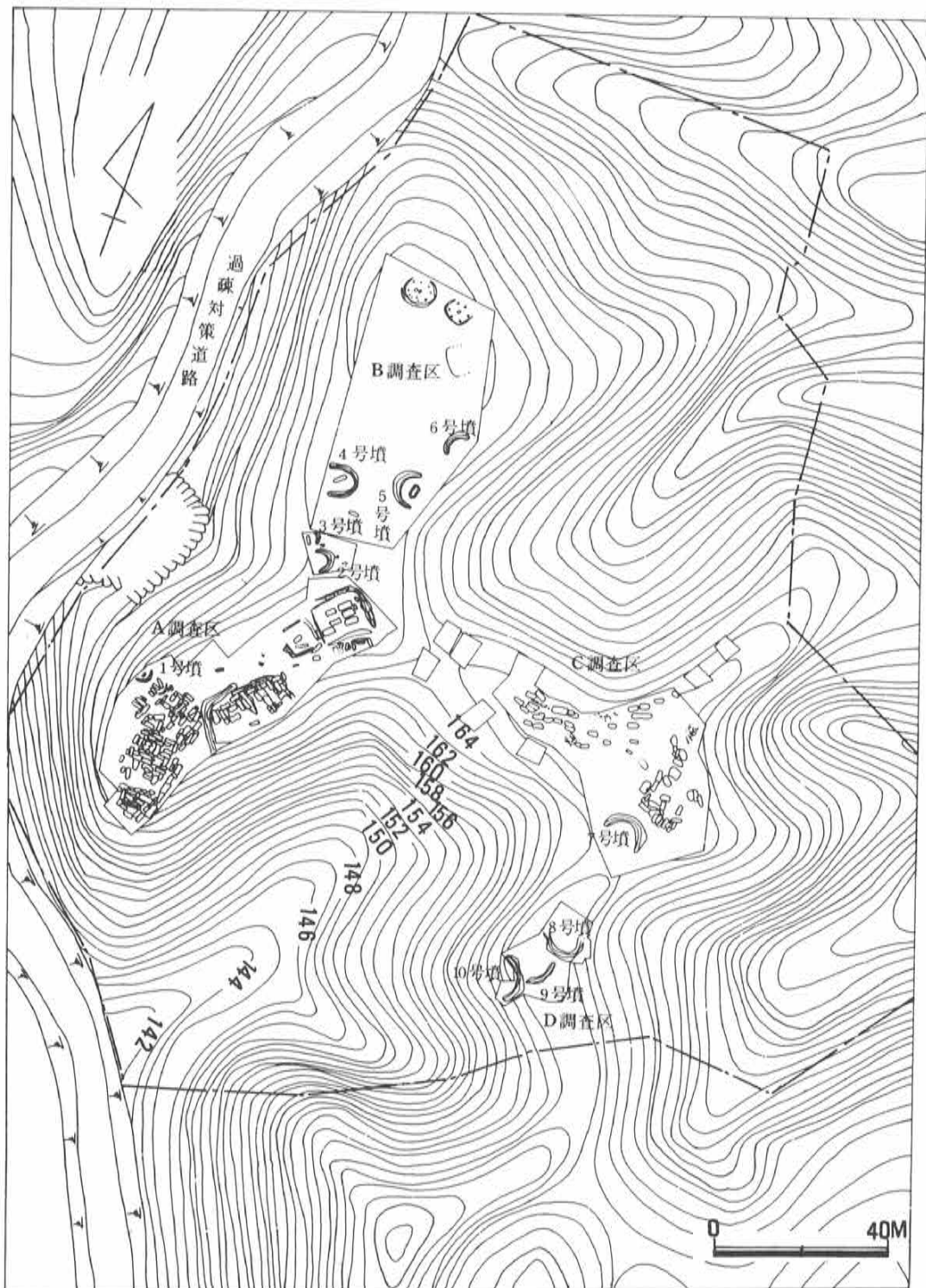
a. 尾根筋にあるもの。(大形土壙を持つ) b. ゆるやかな緩斜面に属するもの。 c. 尾根斜面にあるもの。

2. 主軸方向

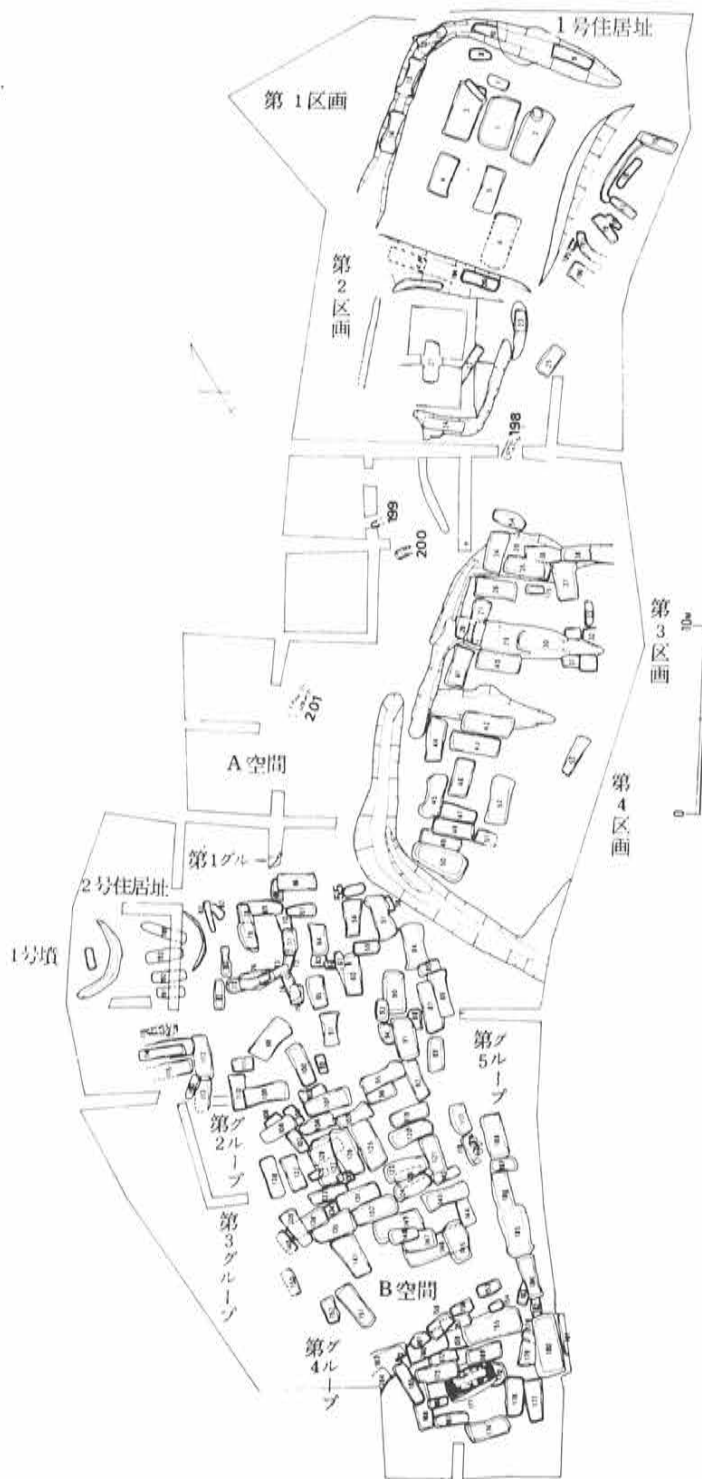
a. 尾根筋に平行するもの。 b. 尾根筋に直交するもの。

3. 外表施設

a. 溝による区画を持つ土壙墓。 b. 溝による区画を持たない土壙墓。 c. 列石と溝により区画を持つ土壙墓。



第4図 中山遺跡遺構配置図 ($s = \frac{1}{1500}$)



第5図 A調査区 遺構配置図 (s=1/400)

(3) 群構成の進め方

A 調査区のほぼ中央にある黒色有機質土の堆積するL字状をなすA溝より北側に(1)溝による区画を持つ土壙墓、総数58基、東西約15m、南北47m、南側に(2)溝による区画を持たない土壙墓、総数139基、東西24m、南北48mに2分される。(1)は土壙墓にスペースがあり(2)は土壙墓間が狭く、存在形態に大きな違いをみせる。

1 溝による区画を持つ土壙墓

A. 方形に区画された一群に属するもの総数29基、東西約15m、南北24m、B. 尾根側に溝を持つ一群に属するもの総数29基、東西約14m、南北約24m、A・B共尾根に平行に築かれた溝により、Aは2区画、Bは3区画に分けることができるが、Bに伴う例石の配置が中央部分で交差しているため、一応2区画として数えた。

文章の構成上、これらの区画を北から(A)を第1・2区画、(B)を第3・4区画と仮称する。

2 溝による区画を持たない一群

これらは、土壙墓の配列により、いくつかの存在形態に分けることができる。(1)散在的でまとまりを欠く一群、総数48基、(2)中心主体と思われる大形土壙墓を尾根筋に持ち、これを囲むように土壙墓が配置されて一定のまとまりをみせる一群、総数74基、(3)東斜面にほとんどのものが平行に築かれる一群、総数15基。(1)(3)は、それぞれひとまとまりをなして構成されるが、(2)は土壙墓の配列により3か所のまとまりをなす。

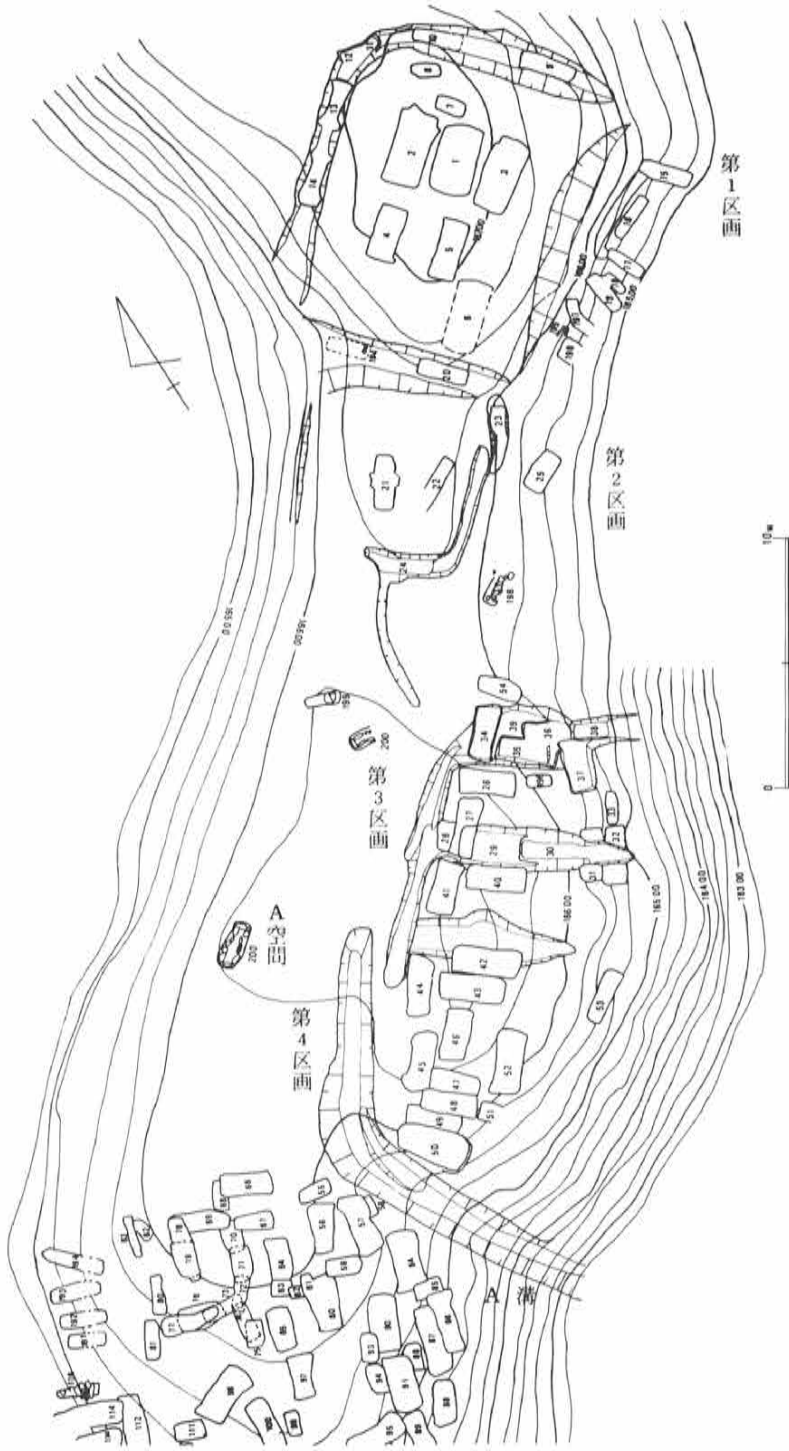
文章の構成上、尾根緩斜面の北に属す(1)を第1グループ、(2)を北から第2・3・4グループ、(3)を第5グループと仮称する。

(4) 空白地帯

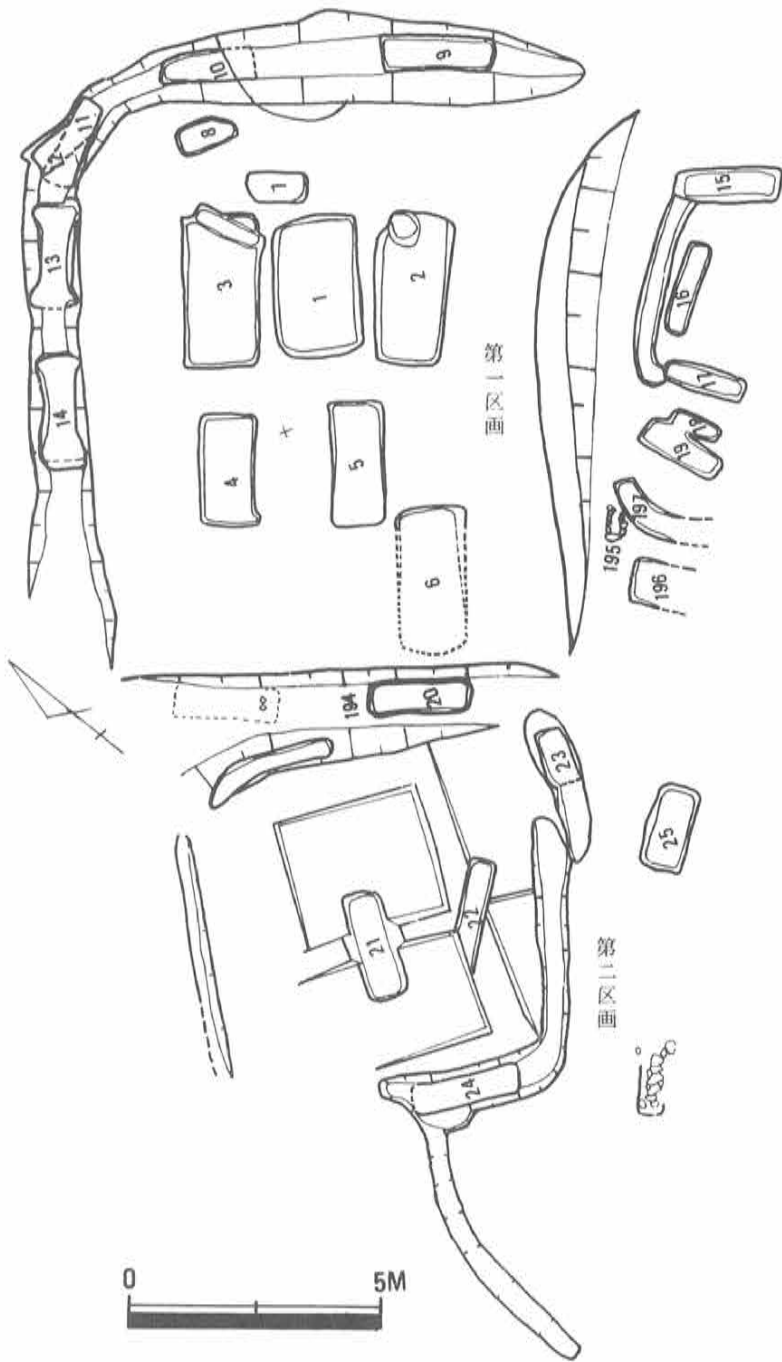
これらの土壙墓群は、地山面がほとんど残存しないほど無数に掘込まれていたが、大形土壙があつてしかるべきと考えられる尾根筋の山側に溝を持つ一群の西、東西約5m、南北約22mの範囲(A)と特殊器台と供献用土器によって取り巻かれた場所、東西約35m、南北約3mの範囲(B)にはその時代の遺構が全く存在しない空白地帯が存在し、そのあり方自体が土壙墓群の存在形態に深くかかわっているものと考えられる。

3. 方形に区画した一群に属するもの(A)

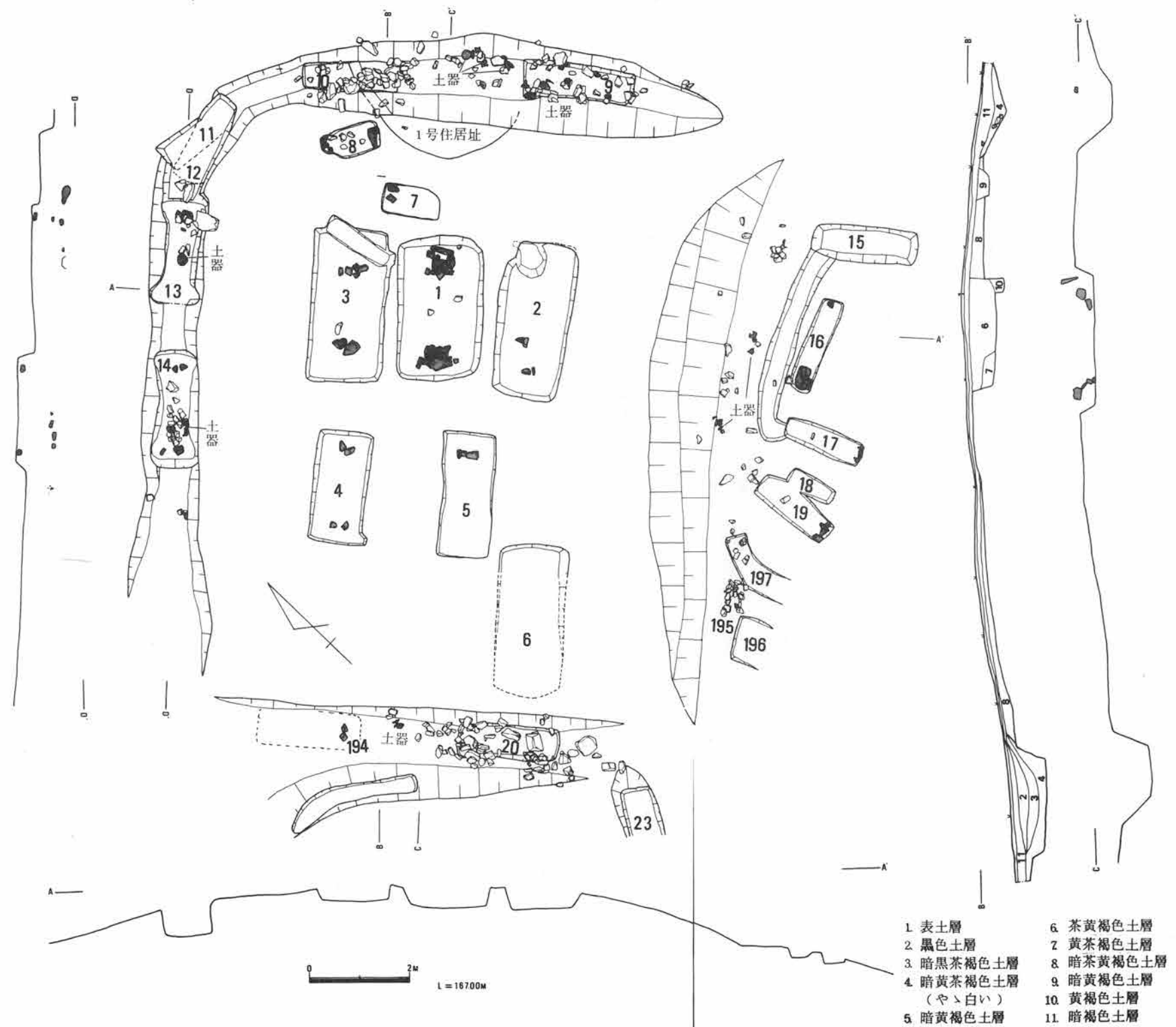
A 調査区の北端に位置し、東西22.5m、南北15mの範囲に総数29基の土壙墓によって構成される。これらの土壙墓は、溝及び斜面によって区画され、存在形態により 1. 方形の区画内にあるもの、総数10基。 2. 溝内に存在するもの、総数10基。 3. それらに属さないもの、総数9基。に分けることができる。さらにこれらの土壙墓は、北端から南へ約3分の2の地点の黒色有機質土を有し尾根に直交する溝により2グループに分けることができる。尾根に直交する溝の北に存在するものを第1区画、南に存在するものを第2区画と仮称した。



第6図 A調査区 第1・2・3・4区画遺構配置図 (S- $\frac{1}{300}$)



第7図 A調査区 第1・2区画遺構配置図($s = \frac{1}{150}$)



- | | |
|---------------------|-----------|
| 1 表土層 | 6 茶黄褐色土層 |
| 2 黒色土層 | 7 黄茶褐色土層 |
| 3 暗黒茶褐色土層 | 8 暗茶黄褐色土層 |
| 4 暗黄茶褐色土層
(やゝ白い) | 9 暗黄褐色土層 |
| 5 暗黄褐色土層 | 10 黄褐色土層 |
| | 11 暗褐色土層 |

第8図 A調査区 第1区画 遺構配置図 (S=1/100)

(1) 第1区画

概要

第1区画は、A調査区の北端に位置し、南を第2区画、北をB調査区とに接して存在する。総数24基の土壙墓が東西約15m、南北約15mの範囲に検出された。これらの土壙墓群の調査前の概観は、頂部付近から尾根にそって南北に長い楕円形を呈し、標高167mを墳丘頂とする低いマウンドを持つ方墳または、円墳かと推定された。

調査は、第1次調査に使用した、南北に長いトレンチ畦を残して、表土及び盛土の除去を行った。調査結果から、第1区画は、西と北とに連なるL字溝、南を第2区画と共有する溝、東を盛土及び地山の削出しによって整形された斜面、さらにこれらによって区画された平坦面等の外表施設によって構成される区画に土壙墓群を有するものであった。

外表施設

L字溝 西部は屈曲部から長さ約11.5m、幅約0.9～1.1m、深さ約60～70cm、北部は、屈曲部から長さ約10.1m、幅約1.2～1.8m、深さ24～43cmを測る。溝の形状は、U字形の断面を呈し、西部は整然と掘られているが、北部は、中央付近で最大幅となり、端部、屈曲部に到るに従い狭くなっている。北部と屈曲部付近は、黒色有機質土を有し土壙墓群が放棄されるまで溝としての役割を果たしているが、北西部は、ある時期に地山の土によって埋められその役割を果たさなくなっている。

東部斜面 地山の削出し及び盛土により、中央部分で約25度の傾斜をなし、高さ約1mを測る。稜部と端部は中央から両端に向かって低くなり、稜部と端部が結ばれ、平面形では、弓状をなしている。

南溝 尾根に直交して掘られ、第2区画と共有する溝である。長さ約8m、幅約1.1～2.5m、深さ約70cmを測り、ほぼ水平な面を保つ。溝の両端は尾根斜面となるため、溝底と等しい高位で終る。

平坦面 方形に区画され、東西8.9m、南北11.5mを測る。ほとんど地山の整形によりなされているが、南東部においては、旧地表面及び盛土によって構成される。区画後、さらに全体に現高約40cmの盛土を行い、盛土上面より土壙墓が掘込まれている。

表面施設の築造過程

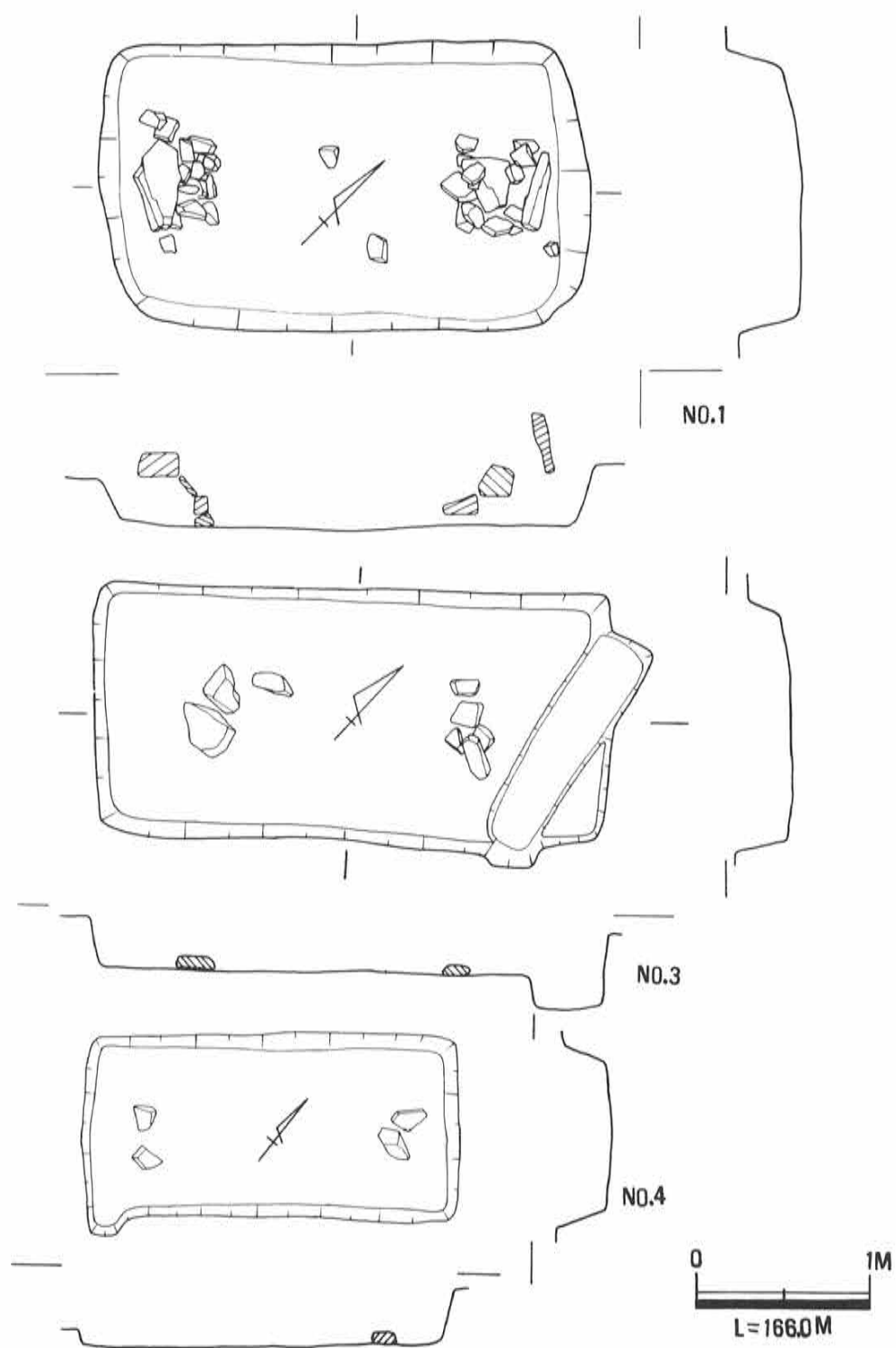
これらの施設は、1. 溝により方形に区画、2. 区画内の高所部分の土を低い南東部に運び平坦面形成、3. 盛土をさらにおこなう、の過程で築造されたと推定される。

また方形に区画された平坦面の東西、及び南の三隅は開いており、意図的なものと想定される。

埋葬施設

第1区画に伴うと推定される総数21基の埋葬施設を確認した。これらの埋葬施設は、配石墓1基を除き、全て土壙墓から成りたち、平面形では、糸巻き形と長方形の二様が認められ、床面施設として、小口のおさえ石を持つもの、枕石をもつものが認められた。

これらは、存在形態により a) 平坦面にあるもの、8基、b) 溝内にあるもの、8基、c) 平坦面東斜面下にあるもの、8基、に分けることができる。



第9図 A調査区 第1区画 No.1・3・4土壙墓 (s- $\frac{1}{40}$)

表4 A調査区第1区画土壌墓計測値表

(単位cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
1	平行	長方形	286	169	254	146	35		小口に礫をおき側石
2	平行	長方形	302	147	290	132	29		両小口におさえ石、北小口に長方形ピット
3	平行	長方形	308	146	299	120	41	枕石2対	北側に円形ピットあり
4	平行	糸巻き形	220	107	208	92	25	枕石2対	
5	平行	長方形	245	99	238	90	22	枕石1対	
6	平行	長方形	300	135	292	118	37		土壌墓か不明瞭
7	直交	長方形	115	60	107	58	4	枕石1対	
8	直交	長方形	119	60	110	52	6		両小口に礫をおき小口取のおさえ石
9	直交	長方形	220	69	209	55	9		
10	直交	長方形	188以上	59	173以上	50	7		
11	平行	長方形	?	?	?	?	40		第1区画西周溝内
12	平行	長方形	?	67	?	52	23		〃
13	平行	糸巻き状	204	65	188	50	19	枕石1対	第1区画西周溝内
14	平行	糸巻き状	231	71	207	53	81	枕石2対	
15	直交	長方形	210	73	177	46	59		
16	平行	長方形	192	47	184	39	21		両小口に礫
17	直交	長方形	162	51	158	41	31		西小口に礫
18	直交	長方形	100	38	86	32	24		
19	直交	長方形	167	60	158	50	65		北小口に礫石あり
20	直交	糸巻き形	210	64	192	54	37		
194	直交	?	?	?	?	?	?	枕石1対	

a) 平坦面にあるもの 東西8.9m、南北11.5mの方形の平坦面に8基の埋葬施設を確認した。このうち2基は小児墓と思われる土壌である。それぞれの埋葬施設は、小形土壌を除き尾根に平行に築かれている。ただ盛土より掘込まれたNo.6土壌は、埋葬施設であるかどうか疑わしい。平面形では長方形7基、糸巻き形1基からなり、床面施設に枕石を持つもの5基、小口におさえ石をもつもの2基であり、1基を除き何らかの床面施設を有している。小形墓を除き6基の平行に築かれた埋葬施設は、墳丘の頂点から南と北に3基ずつに分けることができる。No.1・2・3は、長軸、短軸ともに、他のものより長く、3基が平行に築かれ、そのうちNo.1は、小口部におさえ石を持ち、また平坦面の尾根筋を占地しているため、この区画の中心主体とみてきしつかえないであろう。

b) 周溝内にあるもの 周溝内には8基の埋葬施設が確認され、そのうち6基がL字溝、2基が南の溝に属す。この上面には、当初、列石の一部かと思われるほどの河原石が多数出土したが、これらが存在する下面のほとんどから土壌墓が検出されたので、示石と推察される。

これら溝内に存在する埋葬施設のあり方は、1. 溝幅いっぱいに掘方を持つもの、2基、2. 溝掘方の一部分を使うもの、2基、3. 溝底付近に掘方を持つもの、3基、4. 溝底に埋葬主体を置くもの、1基、のように分けることができる。

c) 平坦面東斜面下にあるもの この斜面下には、8基の埋葬施設を確認し、ほとんどが斜面に平行し

て築かれている。8基のうち1基が配石墓の形態を示し、他の7基は、長方形の平面を示す。床面施設として小口石をもつものを4基確認した。

No.15・16・17は、この中でひとつのまとまりをなす。No.15・17の北端に幅40cm、長さ約3.9m、深さ20cmの溝を尾根に平行に掘り、この溝と「コ」の字形に土壌墓を結び、この中に溝と平行にNo.16の埋葬施設を築いている。形状からいえば、方形周溝墓の形に類似している。

遺物

遺物の出土状態

第1区画に伴うと思われる遺物は土器のみであり、他のものは認められなかった。これらのほとんどが方形に区画された平坦面外の外表施設より出土したものであり、平坦面からの出土は、表土剥ぎの時点においてごく少量で、図化できるものはほとんどなかった。

L字溝の北側では、黒色有機質土内より多量に出土した。完形品で存在していたものはごく少量で、散乱した状態で、ある所においては2重、3重にも重なりあっていた。供献土器の出土状況からみて下面に存在する土壌墓にはほとんど関係ないように考えられ、平坦面より放棄されたか、流れ込んだものと推定される。西側では2ブロックに分かれて、示石と思われる河原石とともに、高杯、甕が出土した。これらは、下面より土壌墓が検出されたため、2基の埋葬施設に伴う供献用土器ではないかと考えられる。

南溝においては、黒色有機質土層内より、一定のまとまりをみせず散乱して出土し、平坦面からの流れ込みの可能性が強い。

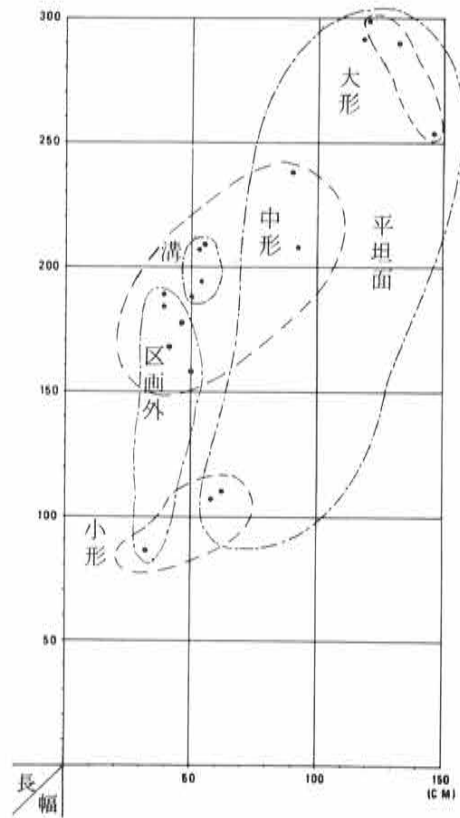
東斜面下には、少量ではあるが、ほとんどが地山上面より10cmばかり浮いた状態で出土し、その状態からみて平坦面からの流れ込みの可能性が強い。

(2) 第2区画

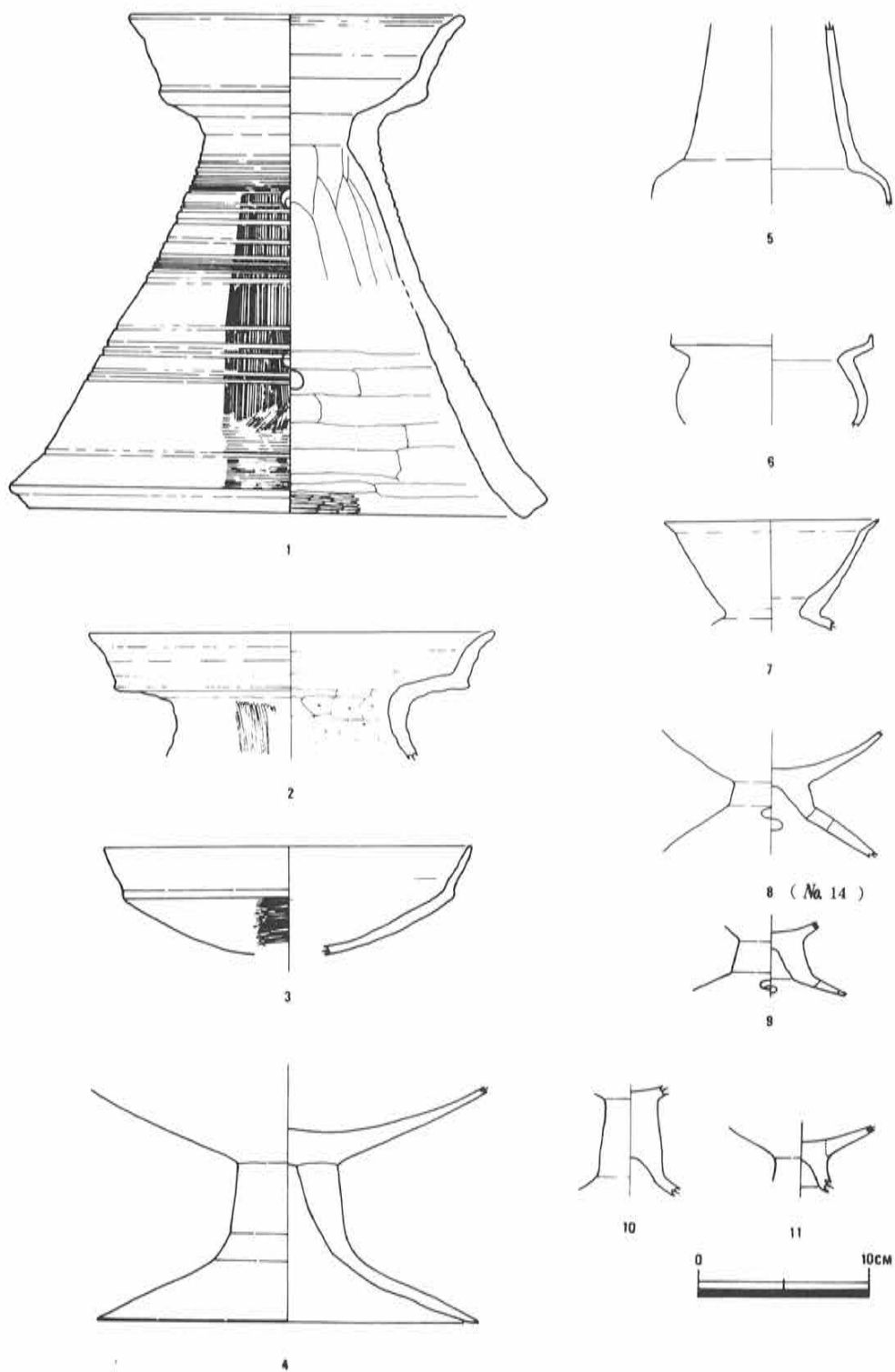
概要

第2区画は、A調査区の北部に位置し、南を第3区画と空白地帯に、北を第1区画と共有する溝によって区画されて築かれている。東西10m、南北7.1mの範囲に総数5基の土壌墓を検出した。

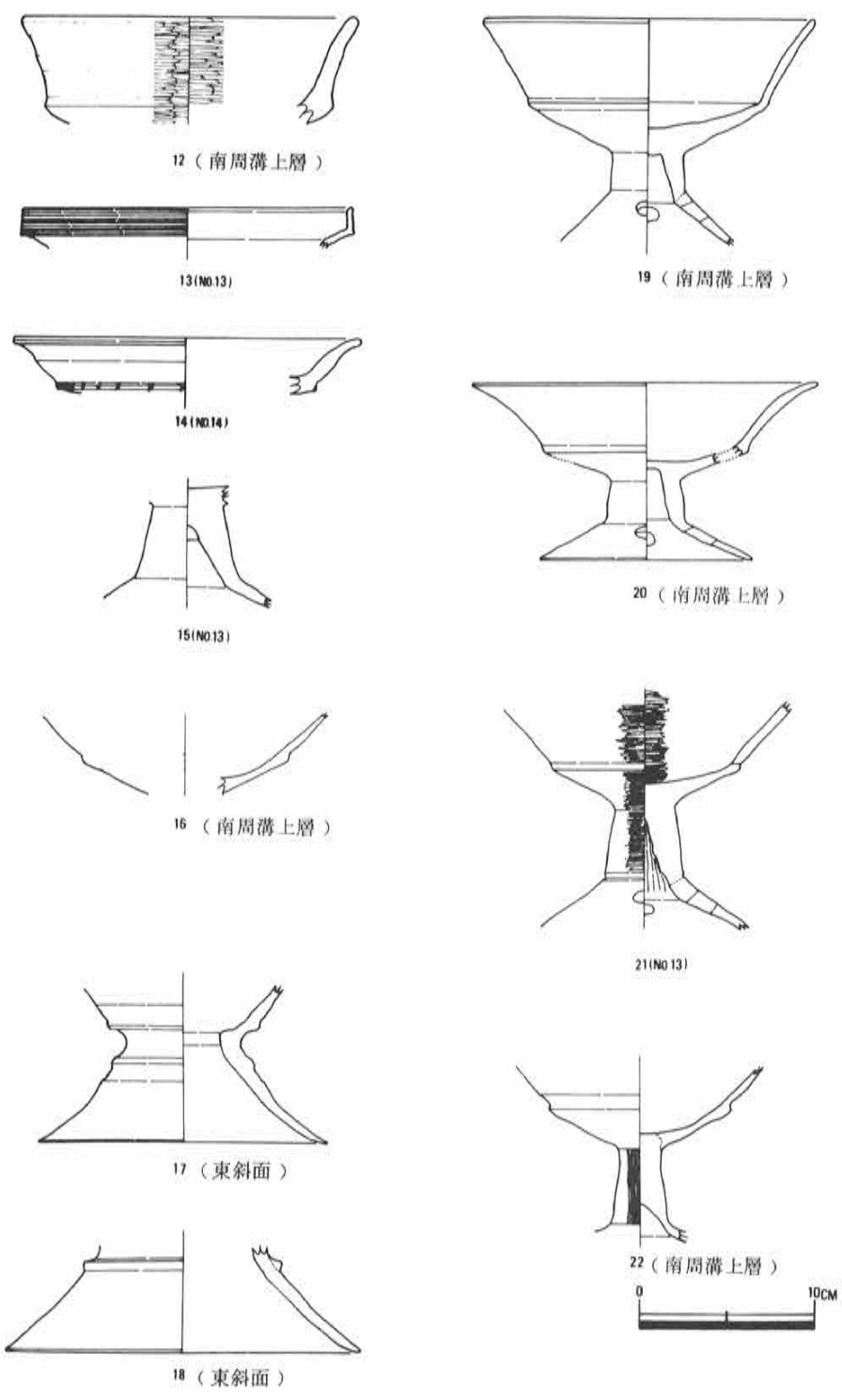
当初この区画が第1区画を頂点として南へ下る丘陵の一部分かと推定され、測量図においても高ま



第10図 A調査区 第1区画床面計測値



第11图 A調査区 第1区画出土土器(1) (8)以外は北周講上層



第12図 A調査区 第1区画出土土器(2)

表5 A調査区第1区画出土土器一覧表

番号	種類	法 量 cm			整 形								色 調	そ の 他					備 考	
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部			脚部		裏面	内面	外面		断面
					内	外	内	外	内	外	外	外		内	外					
1	器台	19.3	28.8(脚径)	28.8	?	?								暗赤褐色	?	○	-	?	-	
2	壺	23.5		7.3*	なで	?								暗赤褐色	-	○	-	右	-	
3	高杯	21.4		6.3*	?	へら								暗黄褐色	-	○	-		-	
4	高杯	-	22.3(脚径)	13.8*						?	?	?	?	暗黄褐色	なし	○	×		-	
5	台付直口壺			10.3*	?	?								暗黄褐色	-	?			-	
6	甕	-	11.1	5.1*	?	?	?	?						暗黄褐色	なし	?			-	
7	器台(?)	12.5		6.4*	?	?						?	?	暗黄褐色	なし	?			-	
8	高杯			7.1	?	?				?	?	?	?	黄赤褐色	?	○	×		-	
9	高杯			4.3*	?	?						?	?	淡黄褐色	-	○	×		-	
10	高杯			6.6*								?	?	淡黄褐色	-	?			-	
11	高杯	?	?	4.1*	?	?						?	?	淡黄褐色	-	?	×		-	
12	壺	18.7		6*	へら	へら								赤褐色	-	○			-	
13	甕	18.6		2.2*	くし	なで								茶褐色	-	×			-	
14	壺	18.5		13.1*	なで									淡赤褐色	○	○			-	
15	高杯			6.4*								?	へら	淡黄褐色	-	○			-	
16	高杯			4.6*	?	?								淡黄褐色	-	?			-	
17	鼓形器台	-	16.4(脚径)	8.8*	?	?						?	?	淡黄褐色	○	?			砂っぽい土器	
18	鼓形器台	-	0.2(脚径)	5.8*								?	?	淡黄褐色	○	?			砂っぽい土器	
19	高杯	18.6		12.7*	へら	へら						なで	へら	淡黄褐色	-	○	×		-	
20	高杯	19.5	12.0(脚径)	9.9	へら	へら						なで	へら	淡黄褐色	-	○	×		-	
21	高杯			13.4*	へら	へら							くし	赤茶褐色	-	○	×		-	
22	高杯			10.1*	?	?						なで	へら	淡黄褐色	-	?	×		-	

りは、表われなかった。しかし表土下に地山面を検出できなかったため、尾根筋のほぼ中央部を頂点として4か所のグリットを設定した。

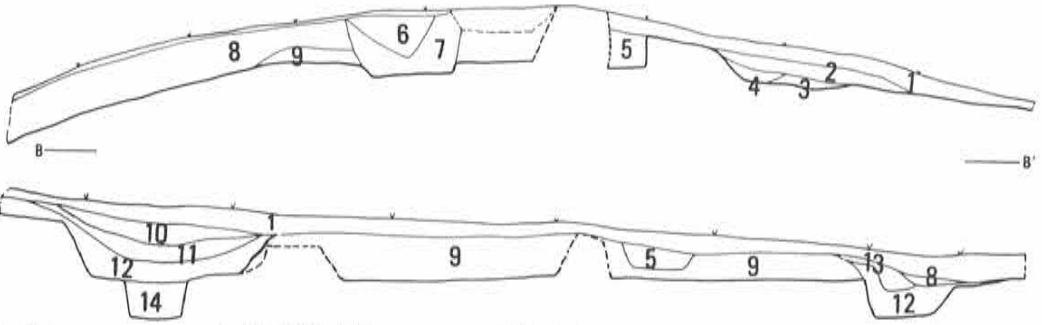
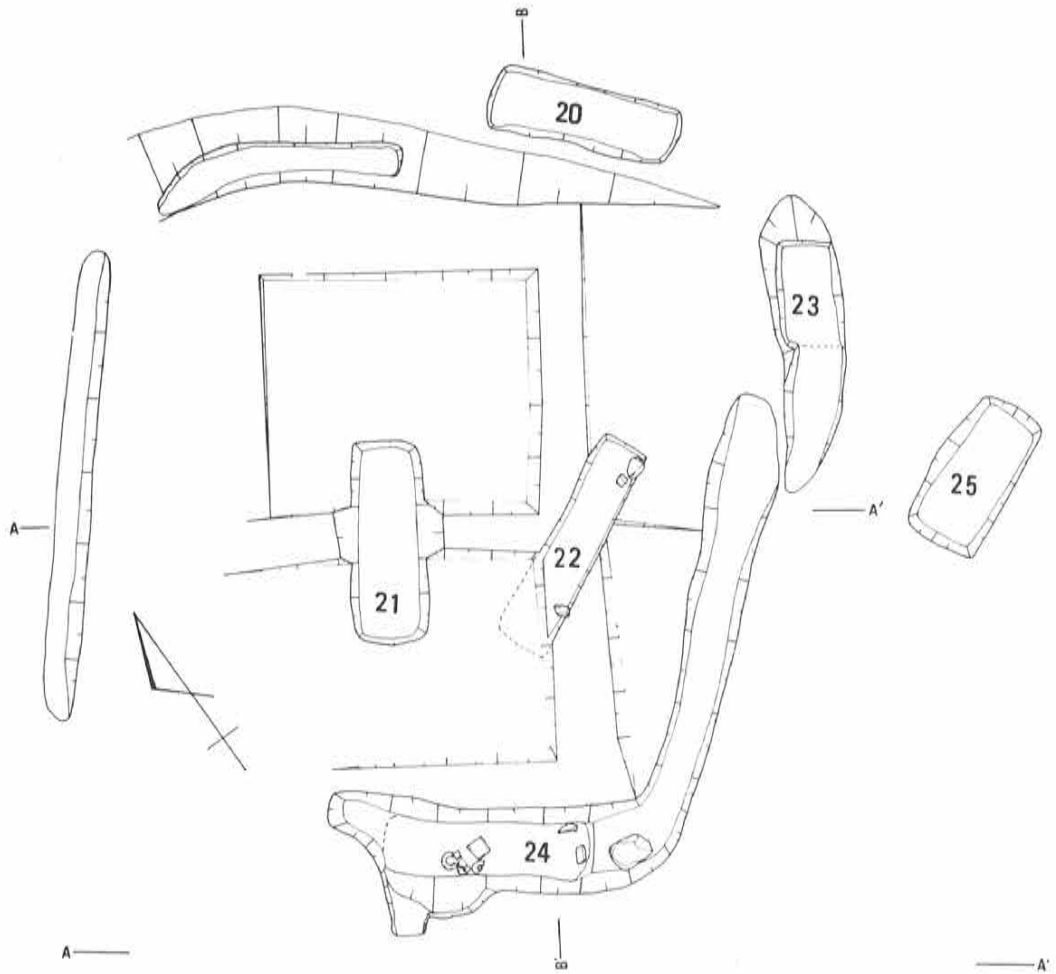
この結果、北を第1区画と共有する溝、南をL字溝、西辺を斜面、によって区画された平坦面などの外表施設から構成される土壌墓群を検出した。

外表施設

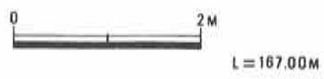
L字溝 南辺部は、屈曲部から長さ約3.8m、幅約0.6~1.0m、深さ約25~60cm、東辺部は屈曲部から長さ約5.4m、幅約50~60cm、深さ約20cmを測る。南辺部は、黒色有機質土を有し、東辺部は浅く、地山と同色の土を有している。このため、溝の役割を果たしていたのは、南部だけであり、東部は区画のみを意識した溝と考えられる。

東溝 L字溝と共に東辺の一面をなし、長さ約2.6m、幅約0.6~0.8m、深さ約0.2mを測り、南端部においてL字溝と同様に区画のみを意識した溝と考えられる。

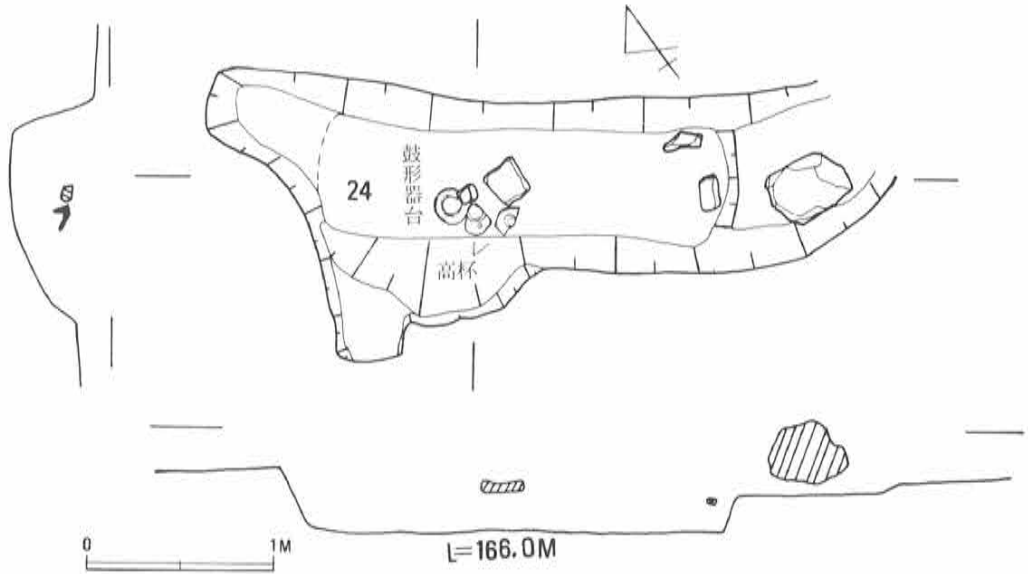
西辺平坦面端部 調査前では、平坦面斜面と丘陵斜面の角度が同じであったため、端部検出は困難であった。ただ全長約5mの南北に伸びる小さな落込みがみられ、これが端部であると考えられる。



- | | | |
|-----------|-------------|------------|
| 1. 表土 | 7 明黄褐色土層 | 13. 暗茶褐色土層 |
| 2. 茶褐色土 | 8 暗茶黄褐色土層 | (やゝ白い) |
| 3. 暗茶褐色土 | 9 赤黄褐色土層 | 14. 暗黄褐色土層 |
| 4. 黑褐色土 | 10. 黒色土層 | |
| 5. 暗褐色土 | 11. 暗黒茶褐色土層 | |
| 6. 淡黄褐色土層 | 12. 暗黄茶褐色土層 | |



第13図 A調査区 第2区画遺構配置図 (S=1/80)



第14図 A調査区 第2区画No.24土壙墓遺物出土状態 (s=1/40)

埋葬施設

第2区画に伴うと推定される埋葬施設5基を確認した。これらはすべて土壙墓で成り立ち、長方形の平面をなすものによって占められている。床面施設としてはなにも持たない。

表6 A調査区第2区画土壙墓計測値表

(単位:cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
21	平行	長方形	217以上	113	203	63	36		
22	斜交	長方形	220以上	53	213以上	45	10	西側の小口板と掘方間に石	
23	平行	長方形	110以上	69	108以上	53	11		
24	直交	長方形	224以上	88	218	55	30		
25	斜交	長方形	170	90	146	67	13		

これらは存在形態によって(a) 平坦面にあるもの、 2基、 (b) 溝内にあるもの2基 (c) 区画外にあるもの 1基に分けることができる。

a) 平坦面にあるもの

平坦面に区画を確認する以前に土層観察用の畦を残し4か所を掘下げたため、埋葬施設2基を検出したのみである。しかし平坦面が東西6.4m,南北6.3mと比較的小規模なため土壙墓数が多く増えることはないと考える。No.21は東西の畦にかかり検出したもので、ほぼ平坦面の中央にあり、尾根筋を

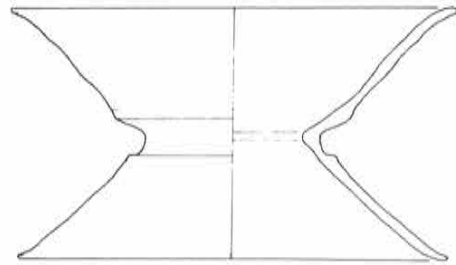
占地しているため、中心主体と推定される。土層観察から木棺を使用しているものと考えられる。No22は南北の土層観察用畦にかかり検出された。南部分は、床面が盛土内にあり、グリッドを地山面まで掘下げたため、検出できなかった。土層観察から木棺を使用していないと考えられる。

b) 溝内にあるもの

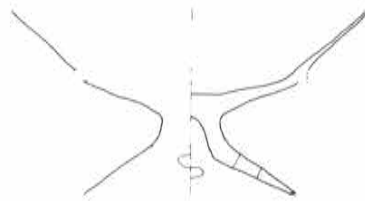
2基の埋葬施設を確認し、1基は南辺のL字溝に存在し、残りの1基は、東溝に築かれている。両基共に溝底付近から掘込まれ、平面形では、長方形をなす。

c) 区画外にあるもの

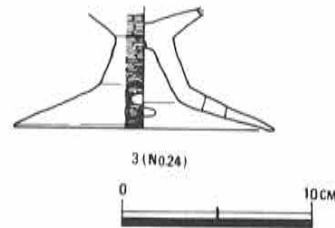
第2区画東端から東に約5mの所に位置する。比較的小規模なもので、今のところこの区画に属するものかどうか不明である。



1 (No. 24)



2 (No. 24)



3 (No. 24)

遺物

遺物の出土状態

1・2・3は南辺周溝内に存在するNo24土壌墓上面より出土し、この土壌墓に伴う供献用土器と思われる。これらは、示石と思われる河原石を伴って、黒色有機質土層内に存在した。この区画に伴うと思われるものはこの3個体のみであった。

第15図 A調査区 第2区画出土土器

表7 A調査区第2区画出土土器一覧表

番号	種類	法 量 cm			整 形						色 調	そ の 他				備 考				
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部			頸部		脚部			黒面 あり	赤面 あり	へら 前	丸底
					内	外	内	外	内	外		内	外	内	外					
1	鼓形器台	23.3	22.4(脚径)	13.3	?	?								淡黄褐色	○	?			砂っぽい胎土	
2	高杯			9.9 ⁺	?	?								淡黄褐色	-	?	×		砂っぽい胎土	
3	高杯	-	13.7(脚径)	6.5 ⁺	?	△ あがり								淡黄褐色	○	○	×			

4. 尾根側に溝をもつ一群に属するもの(B)

(3) 第3・4区画

概要

A調査区中央の東半に位置し、西をB空間、南を土壌墓群、北を第2区画と接する南北20m、東西10mを測る長方形の区画である。

調査前の地形観察からはわずかな高まりと、西端に南北方向の列石が認められたにすぎない。第3・4区画の区分は、この南北にならぶ列石がほぼ中央で約1mのずれを生じており、この部分を境として北半を第3、南半を第4区画と仮称したものである。調査結果から、第3・4区画は3方に溝、並びに列石を有し、一方を地山の削出しを行った区画内に盛土を行い、この区画に検出総数30基の土壌墓を持つ1区画の埋葬施設であることが判明した。

なおこの区画は土壌墓の増加に伴い順次区画の拡張を行い、最終的に溝、列石を有し、長方形のマウンドを持つ整備された形状に至ったものと推察される。

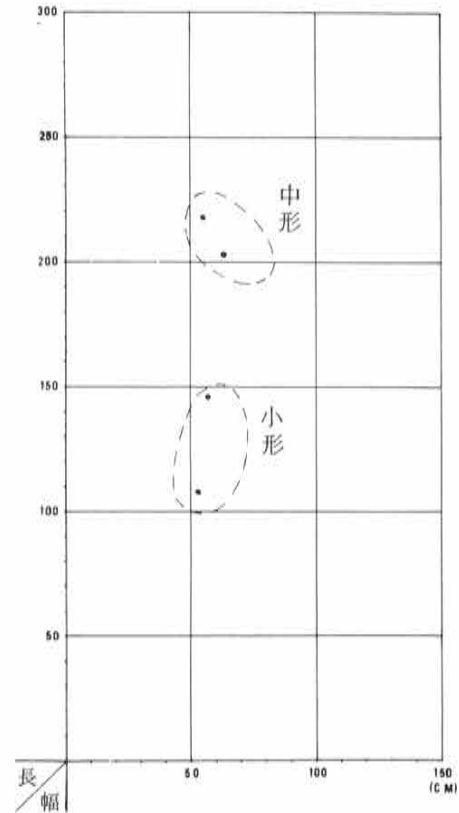
外表施設

A溝 第3・4区画のほぼ中間地点より認められ、南西隅で東に曲折し、東方向に走るL字状溝である。西端は発掘区外に延びており未検出である。検出全長19m、幅2m前後、深さ15~30cmを測り、凸レンズ状の断面を呈している。レベルは北端を最高とし、西端の検出端部まで2.4mの高低差があり、地形にみあった溝を呈している。溝内は有機質土が堆積しており、この中より礫、供献用土器片が出土している。

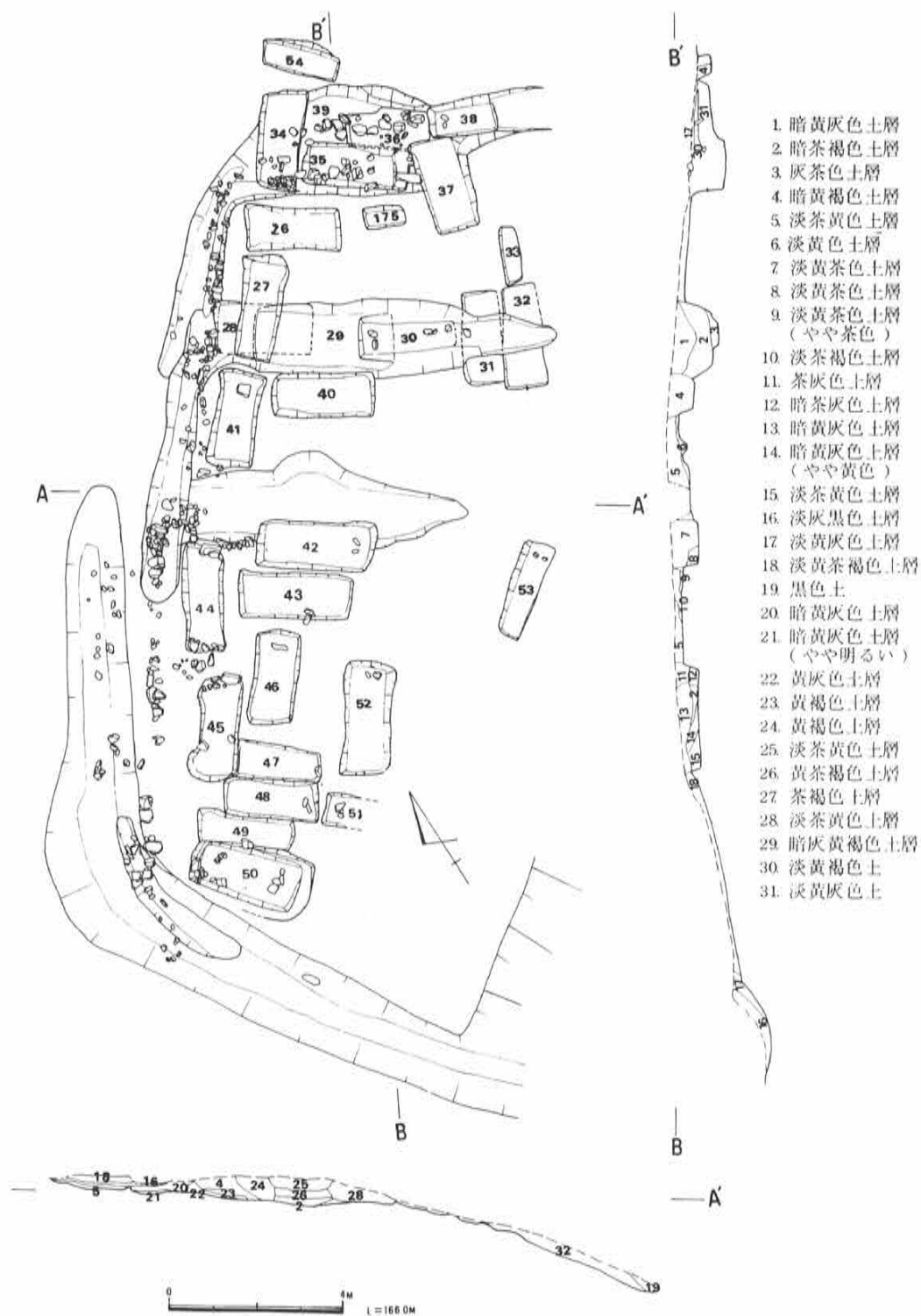
この溝は第3・4区画を画する溝であるとともに、A調査区南半の土壌墓群と北半の第1~第4区画のちょうど境にもあたり、後々まで溝状を呈し、その機能を果たしていたものと推察される。

溝イ 第4区画、南西隅のA溝底面下より検出した弓状の溝である。この溝は調査途中では把握できず、調査最終時の列石等除去後に確認した。検出長4.2m、幅40~80cm、深さ10cm前後を測り、凸レンズ状の断面を呈す。堆積土に有機質土は認められず、A溝以前の第3、4区画北西隅を画する溝の一部と推察される。

溝口 第3・4区画のほぼ中央を東西に走る溝である。溝西端は後述する溝ハと連なり、東端は漸



第16図 A調査区 第2区画床面計測値



第17图 A調査区 第3・4区画遺構配置図 (S=1/150)

次細くなり消滅する。検出長6.5m,平均幅1.5m,深さ10cm前後を測り,浅い凸レンズ状の断面を呈す。レベルは西端を最高とし,東端で-50cmを測る。この溝は一時期土壙墓を区画する溝であったと推察されるが,本区画拡張時には完全に埋没し,その機能を持たなくなっている溝である。

溝ハ 第3区画南半に検出したL字状の溝である。第3・4区画中間地点より発生し,第3区画中央部分で西に曲折し,東方向に走り,東端で漸次細くなり消滅する。検出長14m,幅1~1.5m,南北方向の深さ10cm,東西方向の深さ50~70cmを測り,南北方向で凸レンズ状,東西方向で逆台形の断面を呈す。レベルは南端を最高とし,東端で-1.5mを測る。溝上面には列石を伴う。

この溝は溝口と同様に均一な埋土が堆積しており,一時期土壙墓を区画する溝であったものがその機能を失ったものとみられる。

なお東西方向の溝内には3基の土壙墓が設置されている。

溝ニ 溝ハの北西角より北に延びて第3区画北西角を東に

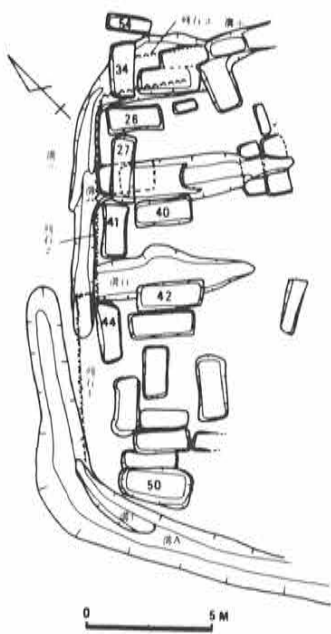
曲折し,東方向に走るL字状の溝である。東西方向はNo.34・35・37土壙墓と重複しており,十分に検出できなかった。検出長7m,幅30~50cm,深さ5~10cmを測り,凸レンズ状の断面を呈す。レベルは南端を最高とし,北西端で40cm低下している。溝内堆積土は均一な埋土で有機質土を含んでなく,溝上面には列石を伴う。供献用土器は南北方向部分より幾分出土している。

溝ホ 第3区画,溝ニの外側に近接して同方向に走るL字溝である。溝北端の東西方向は土壙墓と切合っており,溝の状況が明確でないが,ほぼ溝ニと近接して走るものとみられる。検出長12.5m,幅50~90cm,南北方向の深さ10cm東西方向の深さ30~50cmを測り,南北方向で凸レンズ状,東西方向で逆台形の断面を呈す。レベルは南端を最高とし,東端で-1.5mを測る。東西方向の溝内上面には列石を伴い,溝下面には4基の土壙墓を設置している。

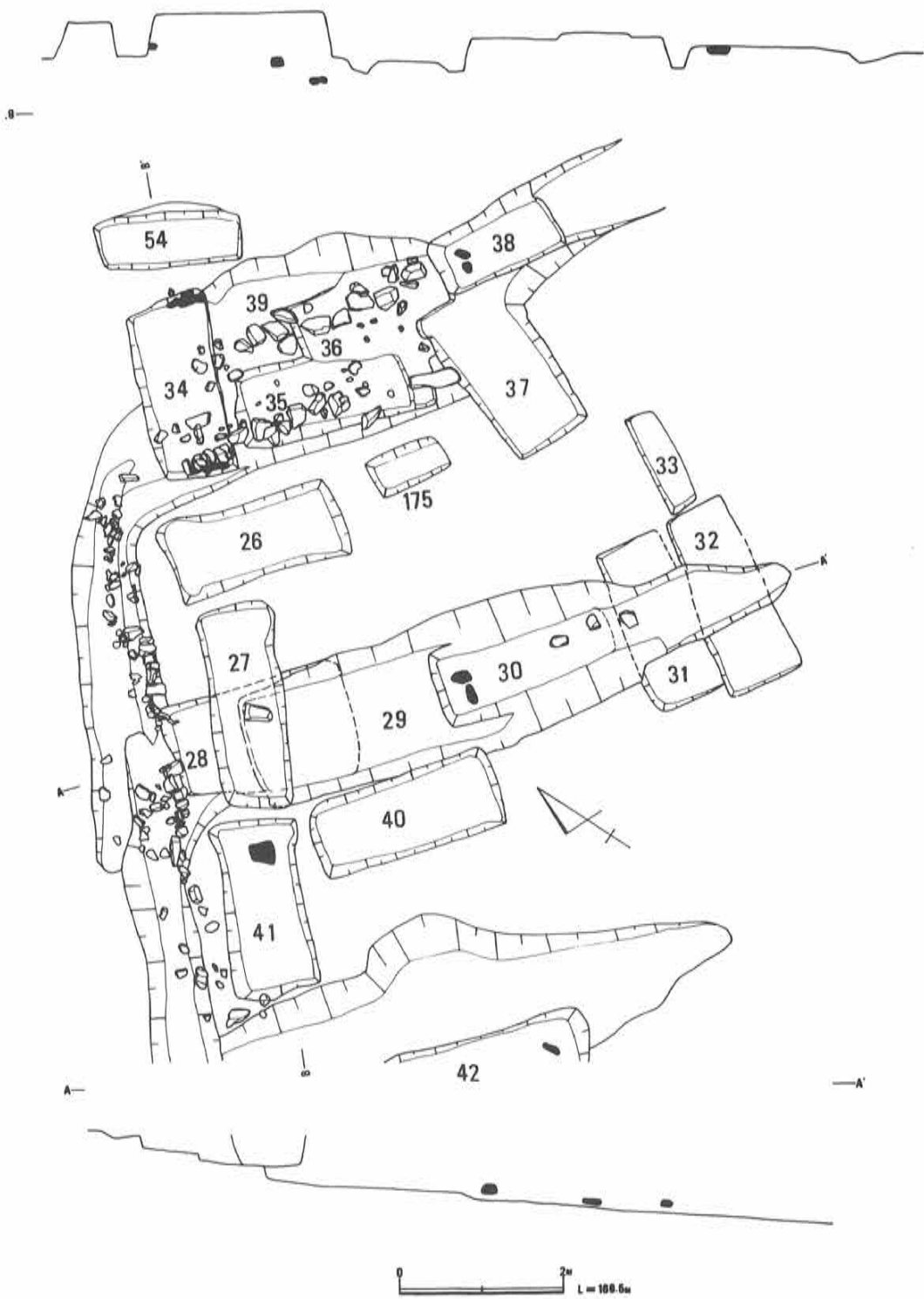
列石

概要

調査前ならびに第1次トレンチ調査の結果から,第3・4区画西辺に点々と続く列石は,墳端を区画する石列であろうことを認識していた。



第18図 A調査区 第3・4区画概略図



第19図 A調査区 第3区画遺構配置図 (s=1/80)



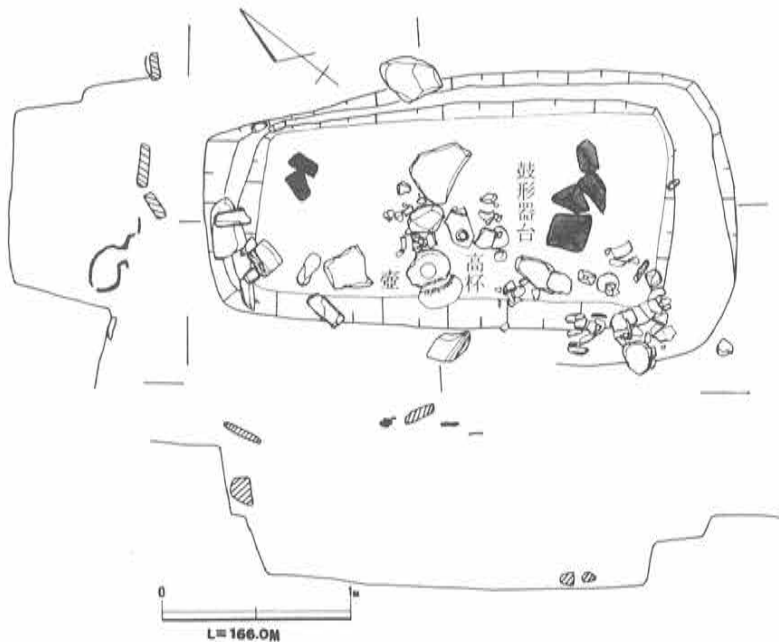
第20図 A調査区 第4区画遺構配置図 (S=1/80)

列石は概括すると第3・4区画の西辺ならびに北（南は不明瞭）に直線的に続き、区画の2方（または3方向）を閉鎖するもので、3列に細分が可能である。また、この列石は同じく区画の周囲を巡る周溝とあい並んでおり、同一の機能を有するものとみられる。

列石1 第4区画西辺に南北に連なり、溝口の西端付近で東に曲折する列石で総延長9mを測る。南端は溝口上面で列が乱れており、東に曲折するかいなか定かでない。北側は溝口・ハの上面付近で東に曲折し、列石2との接点で終る。この北西角付近は扁平な石材を立て、礫を2～3段に積み上げており、残存状況は良好といえる。

列石2 第4区画北西角付近より北に延びて、第3区画北西角で東に曲折し、東方向に向くL字状の列石で、検出長12.5mを測る。列石南端には径20cm、長35cmの石柱を立てており、ここを起点とした感がある。ここより溝ハ・ニにそって北に延び北西隅で曲折し、土壙No37付近で消滅する。途中、溝ハを南北に横断する部分には溝内に数個の石を直列に立て並べて完全に溝ハをふさいでいる。

列石3 第3区画北辺に東西3mに認められたものである。この列石はやや大型の石材を使用して



第21図 A調査区 第4区画No.50土壙墓遺物出土状態 (s=1/40)

表8 A調査区第3区画土壌墓計測値表

(単位:cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
26	直交	糸巻き状	212	81	197	78	10		
27	平行	糸巻き状(北のみ)	250	90	230	70	36		
28	直交	長方形	225以上	117	215以上	110	38		
29	直交	長方形	322以上	163	320以上	120	59		
30	直交	長方形	221以上	102	212以上	75	10		
31	平行	長方形	209	83以上	200	75	11		
32	平行	長方形	230	78以上	225	74	19		
33	平行	長方形	140	45以上	130	38	17		
34	平行	長方形	220	47	205	33	36		第3区画北周溝内、両小口に小口板押え石
35	直交	長方形	242	98	234	75	40	東小口溝	第3区画北側周溝内
36	直交	長方形	192	75以上	181	75以上	51		
37	平行	長方形	213	61	205	39	54	北小口溝	
38	直交	長方形	154	81	134	58	45	西枕石1対	
39			?	?	?	?	39		
40	直交	長方形(南側のみ)	235	96	213	78	5		
41	平行	糸巻き状	222	95	200	85	20	北枕石	
54	直交	長方形	175	68	165	52	41		

表9 A調査区第4区画土壌墓計測値表

(単位:cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
42	直交	長方形(糸巻き)	265	106	239	89	18	枕石1対	
43	直交	長方形	254	106	235	89	21		
44	平行	長方形	238	96	215	70	22		両小口に積み石
45	平行	糸巻き状	240	88	206	72	18		北側小口に積石、土壌上面に石
46	平行	長方形(糸巻き状)	210	99	195	79	13	枕石1個	
47	直交	長方形	190以上	80	180以上	70	9		東側小口部上面に礫
48	直交	長方形(糸巻き状)	217	88	205	74	5	東側に枕石1対	
49	直交	長方形(糸巻き状)	220	60以上	108	55以上	17		両小口付近に礫
50	直交	長方形	287	150以上	223	94	77	枕石2対	2段掘り・木棺と掘方間におさま石
51	直交	長方形	90以上	77	85以上	61	15	枕石1対	
52	平行	長方形	258	103	235	79	32	枕石1対	
53	斜交	長方形	220	65	216	45	23		

おり、他のものとやや異なり、あるいは溝内の土壌墓に伴う配石的なものの可能性も考えられる。

平坦面 東西9m、南北18mの長方形区画は平均20~30cm程度の盛土が認められ、土壌墓もこの上面より掘込まれている。区画の西側は自然地形を若干整形したのみで、区画端部はそのまま急傾斜面となって谷へ落ちている。平坦面中央部分は最も幅が広く、北に向かって自然地形のまま狭くなっている。

埋葬施設

第3, 4区画に伴う土壙墓は総数30基を確認した。これらの平面形態は長方形を呈すものと、両端もしくは片方が突出した形状を呈すものの二様が認められた。床面には両小口もしくは片方におさえ石を持つもの、床面に枕石を持つもの、床面に何らの施設も検出しえなかったもの三様を確認した。またこれらの土壙墓の方位は周囲を区画する溝、または列石に対して平行、もしくは直交する位置に設置され、お互いに切り合っているものは非常に少ない。

そしてこれらは、その存在形態から (a)平坦面にあるもの、(b)周溝内にあるもの、(c)区画外にあるものに分けることができる。

(a)平坦面にあるもの 第3区画には平坦部並びに溝ハ・ニ埋没後の上面に設けられたものを含めて、総数9基の土壙墓を検出した。このうち、No33・175の2基は小形の土壙墓である。床面施設はNo41の土壙墓に枕石が確実に認められるが、その他の土壙墓については残りが浅く十分に床面施設を確認できなかった。

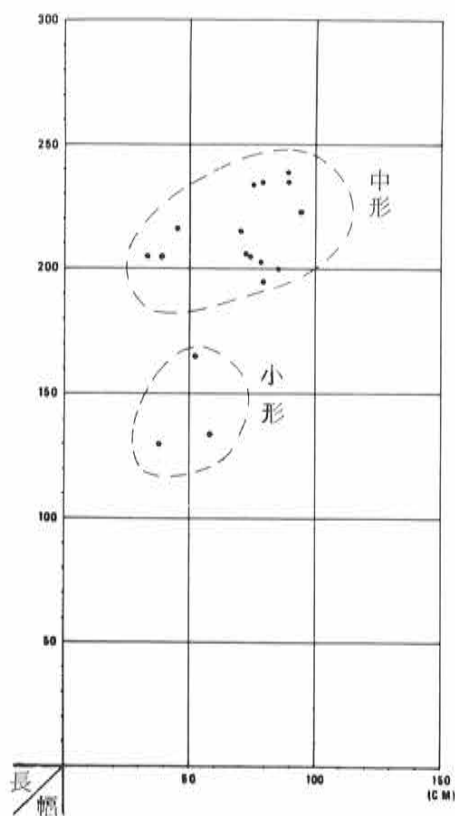
第4区画の土壙墓は全て平坦面からの検出で総数12基を確認した。これらはお互いに切合うことなく整然と配置されている。ただ区画東半の傾斜面にかかる部分は検出遺構が希薄であるため、すでに消失した土壙墓も考えられる。

土壙墓内施設はNo44・45に小口のおさえ石が認められ、No42・46・48・50・51・52・53には確実に枕石が存在している。さらにその他の土壙墓についても枕石に近い形状の石が床面より出土しており、全ての土壙墓に何らかの施設が認められた。

その他、No42・44間に検出した列石は、溝口に直交し、第3区画のNo41との間に設けられた土壙墓の小口のおさえ石の可能性が考えられる。

(b) 周溝内にあるもの 溝内検出総数8基の土壙墓のうち、溝ハ内から3基、溝ニ・ホから5基を確認した。これらの土壙墓はNo34を除き全て溝に平行して設けられている。土壙内施設はNo38に枕石、No34に小口のおさえ石を持っている。

(c) 区画外のもの 第3区画北西隅の外側に、やや細身の土壙墓No54を1基検出した。この土壙墓のみ区画外ではあるが、その存在状況は本区画の土壙墓の配置を非常に意識したものと考えられる。



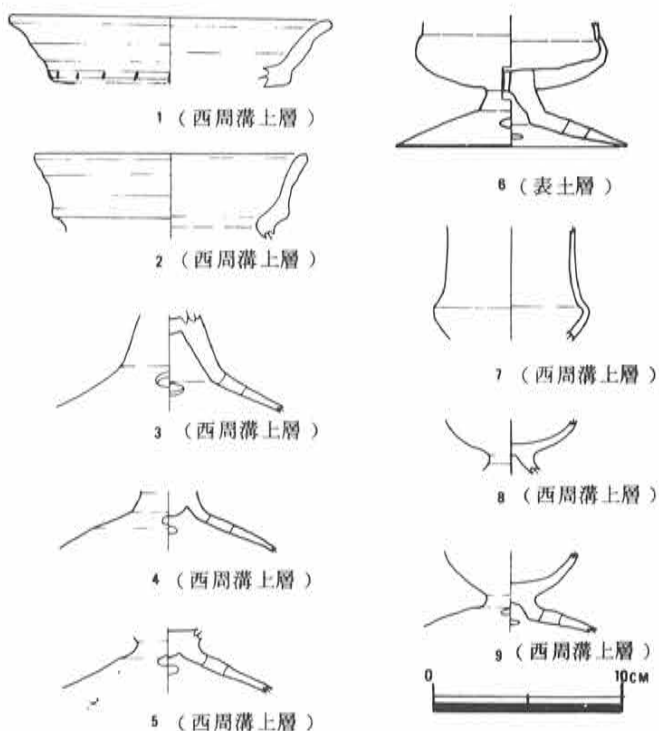
第22図 A調査区 第3・4区画床面計測値

出土遺物

本区画に伴う出土遺物は、溝ニの南北部分（第3区画）と南端の土壙No50上面（第4区画）の2か所からの出土が比較的多く、個々の土壙墓に伴う出土は少なかった。また区画内平坦面からの出土遺物は少量で、細片のため図化可能なものはほとんど認められなかった。

溝ニ内出土遺物は列石下の地山面に近い溝内からの出土が比較的多く、また溝が均一な堆積土により埋まっていること等から、これらの供献用土器は、一定期間内に供献されたものとみられる。

また南端のNo50土壙墓上面からの出土遺物は、本区画中で最も多く、壺、高杯、鼓形器台等の各器種を



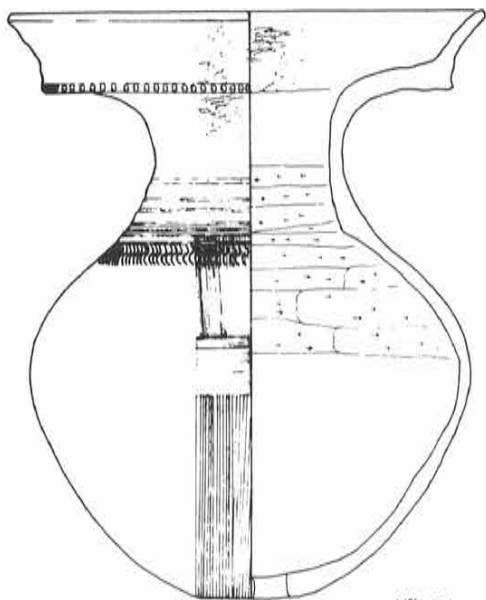
第23図 A調査区 第3区画出土土器

含み、完形に近い器形も認められる。これらの供献用土器は下面より検出の土壙墓に伴うものというよりは、本区画全体へ供献されたものの可能性も考えられる。

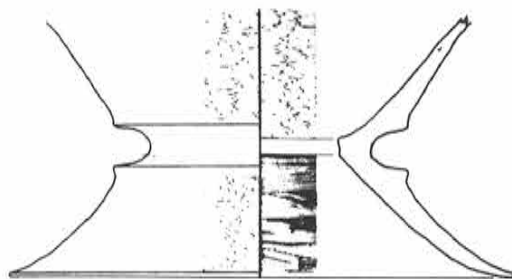
その他、A溝の有機質土層中からも出土が認められているが、これは平坦面からの落込みであろう。

表10 A調査区第3区画出土土器一覧表

番号	種類	法 量 cm			整 形										色 調	そ の 他			備 考	
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部		脚部			器身	穿孔	底		
					内	外	内	外	内	外	内	外	内	外		あり	なし	あり		
1	壺	16.7	—	3.6*	?	?									赤褐色	—	○	—		
2	壺	14.3	—	4.5*	な	な									淡黄褐色	×	—	?		
3	高杯	—	—	5.1*									?	?	淡赤灰色	—	?	—		
4	高杯	—	—	3.1*									?	?	淡黄褐色	—	?	—		
5	高杯	—	—	3.5*											淡黄褐色	—	?	—		
6	台付直口壺	—	10.1 12.1(脚)	6.9*	?	?	な	?	な	?	?	?	?	?	淡黄褐色	—	○	○	—	焼成前穿孔
7	台付直口壺	—	8.2	5.9*	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	淡黄褐色	—	?	—		
8	台付直口壺	—	—	2.9*	—	—	?	?	?	?	?	?	?	?	淡黄褐色	—	?	×	—	



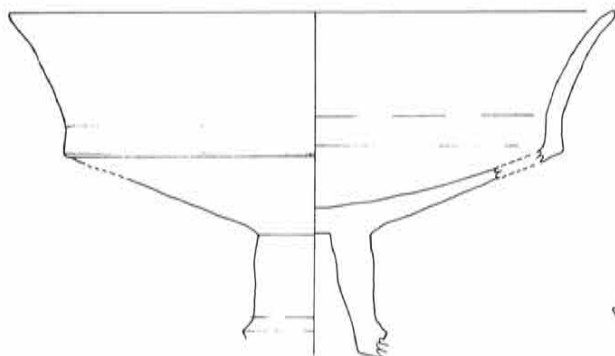
1 (No. 50)



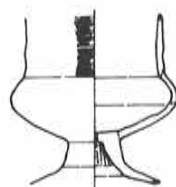
3 (No. 50)



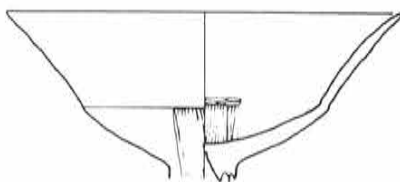
4 (No. 50)



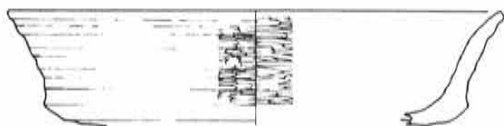
2 (No. 50)



5 (No. 50)



9 (西周溝上層)



6 (西周溝上層)



(西周溝上層)



(西周溝上層)



7 (西周溝上層)

8 (西周溝上層)



第24图 A調査区 第4区画出土土器

表11 A調査区第4区画出土土器一覧表

番号	種類	法 量 cm			整 形						色 調	そ の 他					備 考				
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部			頸部		脚部		埋		打	穿	へ	り
					内	外	内	外	内	外		内	外	内	外						
1	壺	25	23.4	30.9	へみかき	へみかき	へみかき	へみかき	へみかき	へみかき	へみかき	へみかき	淡赤褐色	○	○	○	右	×	焼成後穿孔		
2	高杯	32.1	—	18*	?	?	—	—	—	—	—	?	淡黄褐色	×	×	—	—	—	—		
3	鼓形器台	—	26.7(脚径)	14.2*	へみかき	へみかき	—	—	—	—	は	へみかき	黄褐色	○	○	—	—	—	—		
4	鼓形器台	—	—	6.2*	?	?	—	—	—	—	—	?	淡黄褐色	?	?	—	—	—	砂っぽい胎土		
5	台付直口壺	—	8.8	8.7*	へみかき	へみかき	?	?	?	?	—	し	暗赤褐色	×	○	—	—	—	焼成前穿孔		
6	壺	26.2	—	6.1*	へみかき	へみかき	—	—	—	—	—	—	暗赤褐色	—	○	—	—	—	—		
7	高杯	—	13.6(脚径)	6*	—	—	—	—	—	—	?	?	黄褐色	—	?	—	—	—	—		
8	高杯	—	—	4.4*	—	—	—	—	—	—	?	?	黄褐色	—	?	×	—	—	—		
9	高杯	20.9	—	8.8*	へみかき	へみかき	—	—	—	—	へみかき	へみかき	淡黄褐色	—	○	×	—	—	—		
10	高杯	—	—	1.5*	—	—	—	—	—	—	?	?	暗灰色	—	?	○	—	—	—		
11	高杯	—	—	2.8*	—	—	—	—	—	—	?	?	暗灰色	—	?	○	—	—	—		
12	高杯	—	—	1.7*	—	—	—	—	—	—	?	?	暗灰色	—	?	○	—	—	—		
13	高杯	—	—	1.7*	—	—	—	—	—	—	?	?	暗灰色	—	?	○	—	—	—		

築造過程について

A調査区中央の東半を占地する第3・4区画は、その立地や区画を有す土壌墓の、整然とした配置状況等から、かなり計画性の高い遺構と推察された。これは本区画を境として、以北の区画のある土壌墓と以南の区画を持たない土壌墓との明らかな違いや、第1・2区画と第3・4区画が南北20mを測り、ほぼ同規模の区画を有すこと等からもうかがわれた。

このうち、第3・4区画については、土壌墓の増加に伴い、溝・列石の拡張や遺構の重複、切合いが複雑に行われており、区画内での築造過程についても一定の計画性にもとづくものと推察された。

以下、本区画の築造過程を検出状況等から項目別にとらえてみたい。

(1) まず、土壌墓を区画する溝のうち北西部をL状に画する溝が、溝口→溝ハ→溝ニ→溝ホの順に北に向って拡張されたことが考えられる。

このことは溝の切合いでは充分つかみえなかったが、これと相接して連なる列石の配置状況からとらえられた。特に、列石1が溝ハ・ニの接点付近で東に曲折し、列石2との接点で終わっている状況は、区画の拡張に伴い溝口にそって配置されていたと推察される列石の除去を行い、新たに列石2を配置したものとみられる。また、列石2が溝ハの北西隅を横切っているのは、溝ニによる区画の拡張を行った際に、北に延長されたものと推察される。

なお、北端の溝ニ・ホについては溝ニの上面に列石を残したまま溝ホに区画の拡張を行ったと推察されるが、土層断面からは十分に確認できなかった。

(2) 列石の配置についても溝と同様に、列石1→列石2→列石3の順に拡張されたことがうかがわれる。特に、第4区画から北への列石は約1m東にずらし径20cm、長さ35cmの柱状の石を起点として配置したものと解釈できる。この列石2に平行する溝ハは西辺をやや東にずらしており、これに相接する列石2もこの方向にそわす必要から、列石1と約1mのずれを生じたものと推察される。また前述したように、溝ハの北西コーナーを列石2がふさいでおり、溝トの区画から溝ニの区画への拡張に

についても充分理解できる。

北西隅の列石 2 から列石 3 への拡張は幅 1 m 程度しかなく、また溝ニ上面に列石を残したままで拡張した点など他とやや異なっている。しかし、溝についても列石と同様に拡張（溝ニ→溝ホ）が認められ、この部分でのわずかな拡張も十分に考えられる。

(3) 土壙墓は築造の最も早い第 4 区画内に検出総数 12 基を数え、その方位は東西方向 7 基、南北方向 5 基に整然と配置されている。その後、第 4 区画から溝ハの区画への拡張に伴い、北西隅に L 状に No40・41 の土壙墓が配置され、さらに溝ニに区画が拡張された時点で同じく北西隅に L 状に No26・27 の土壙墓が配置されるという特徴を有す。このことは、最初の区画である第 4 区画の北西隅における No42・44 の土壙墓の L 状の配置から継続して認められ、最終的には溝・列石をはみだし、区画外ではあるが No34・54 土壙墓の L 状配置で終了している。

この L 状配置は、区画の拡張を意識してそれぞれの区画に伴い配置された土壙墓と思われる。また、土壙墓の方向も溝ハ・ニの西辺の方向にそったものであり、北に行くに従い徐々に東に傾いて配置されている。

以上の様に第 3・4 区画の築造過程ならびに土壙墓の配置は、第 1・2 区画と同様に非常に企画性に富むものと認識された。しかし、第 1・2 区画と同様に区画を有しながら、その内容については大きな違いが認められる。その 1 つは第 3・4 区画には中心主体と考えられる土壙墓がなく、さらに土壙墓が 1 基を除き、全て区画内に配置されていることである。ただ北西隅の区画外の 1 基についても L 状配置の最終的なものと推察されることから、北側に溝・列石以外の区画のあった可能性も考えられ、一応区画内もしくは区画を意識した土壙墓と解釈できる。

この様に土壙墓の増加に伴い、区画の拡張を行ってまで区画内に埋葬を行っており、非常に区画を意識した土壙墓の配置と考えられる。

5. 溝による区画を持たない一群

(1) 第 1 グループ

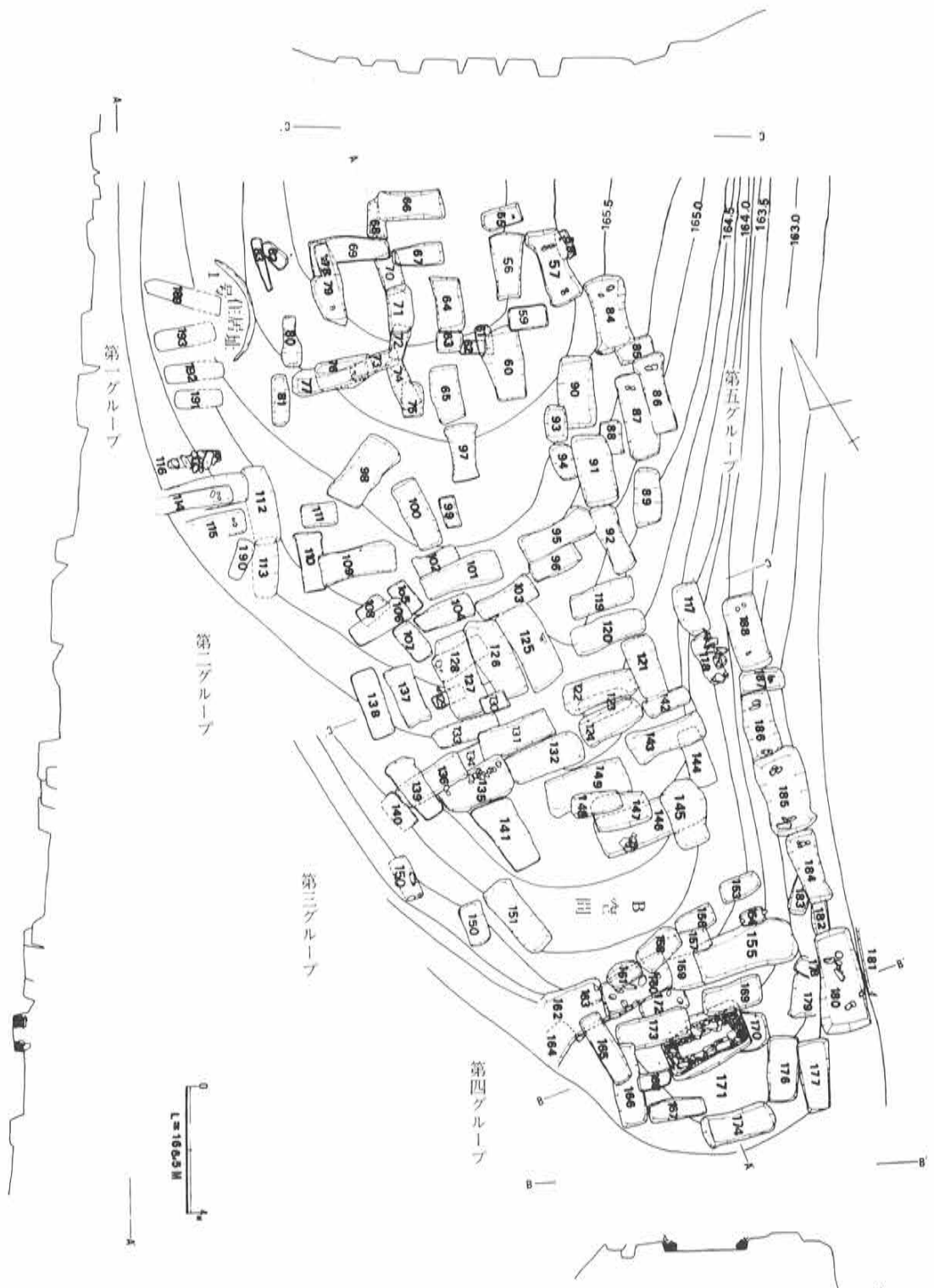
位置 第 1 グループは、溝による区画を有しない一群の北端に位置し、南を第 2 グループ、東を第 5 グループ、北を第 4 区画南端の A 溝とその時代の遺構が全く存在しない B 空間とに挟まれて存在する。

形態 総数 48 基の土壙墓は、東西約 14 m、南北約 12 m の範囲にやや幅の狭い長方形と糸巻き形の形態がみられ、そのうち長方形の土壙墓に枕石を持つものがみられる。特筆すべきものとして石蓋土壙墓が存在する。これらの土壙墓は、配列により次のようなまとまりがみられる。

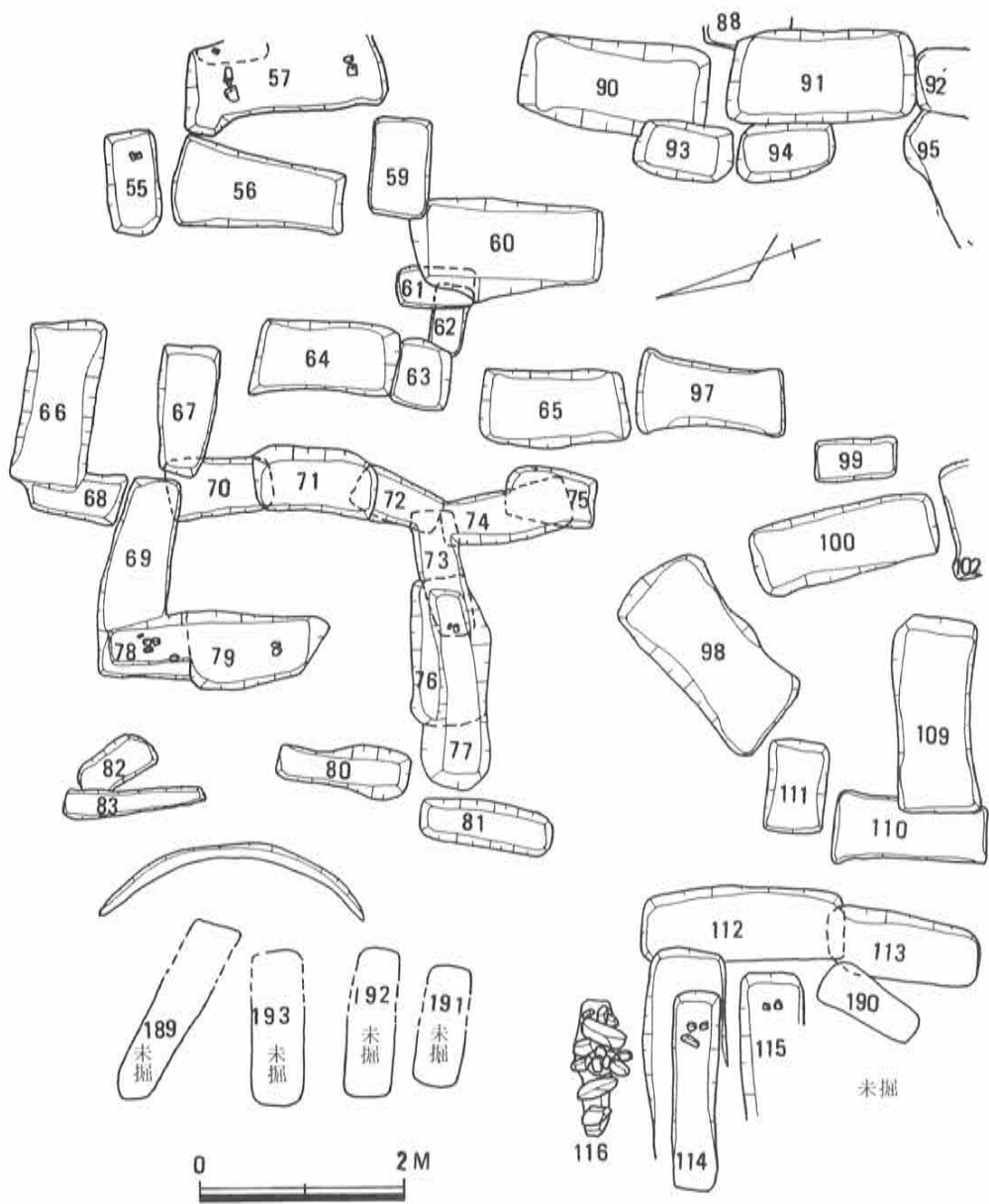
I. 尾根西斜面にあるもの。

II. 全体で「コ」の字形をなし長方形のプランをなすもの。

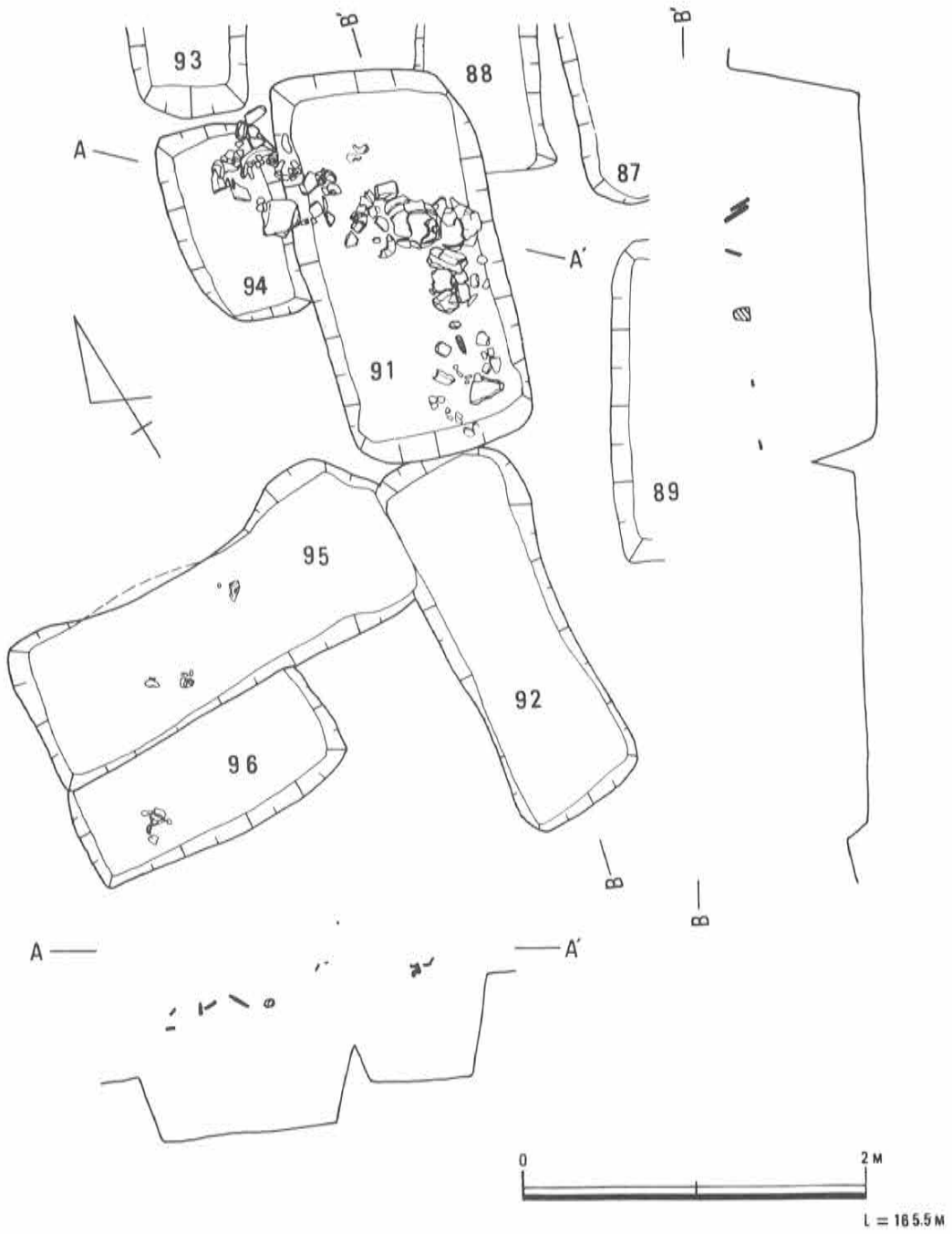
後者は、北東の緩傾斜面の 4 分の 1 を占地し、土壙墓間の切り合いも比較的多く他グループと比較



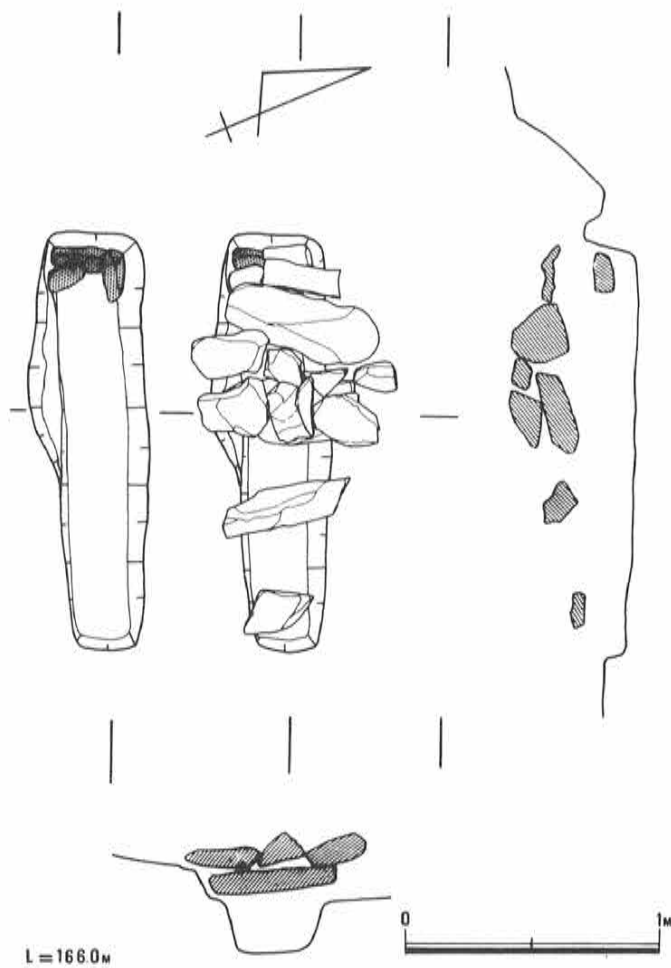
第25図 A調査区 第1・2・3・4・5グループ遺構配置図 (S=1/200)



第26図 A調査区 第1グループ遺構配置図 (S- $\frac{1}{90}$)



第27図 A調査区 第1グループ遺物出土状態 (s=1/40)



第28図 A調査区 No.116石蓋土壙墓 ($s = \frac{1}{30}$)

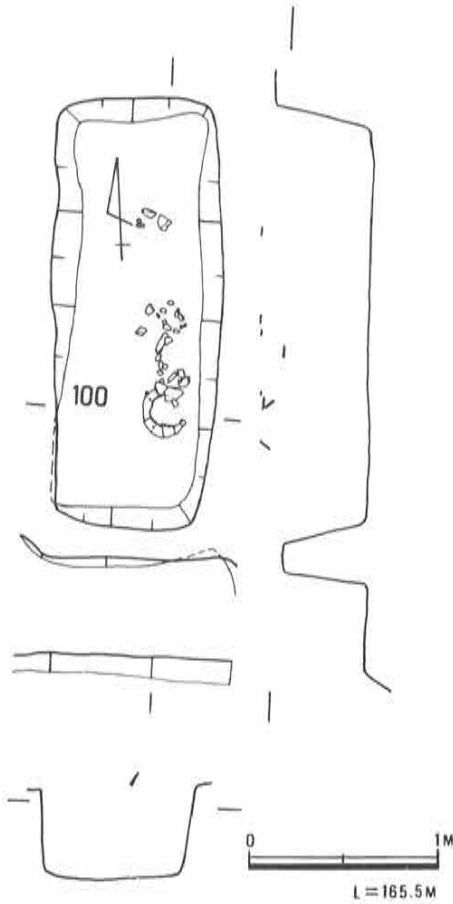
して散在してまとまりを欠くが、そこには何らかの規制が存在していたことをうかがうことができる。また、その他の土壙墓についても何らかの規制が加えられていたのではないかと考えられる。よって下記のような分類の可能性もある。

1. 尾根筋に平行に並んで存在する土壙墓は、このグループのほぼ中央にあり、これらの土壙墓の連結は、約8mを測る。
2. 南北に2分した位置に尾根に直交して並んで存在する土壙墓群。
3. 尾根筋との関連がみられず、斜めに築かれ全体を4等分したうち南西部の東西2.0m、南北2.8mの方形の平坦面の中心にあたり、「コ」の字形をなした一群の角に存在するNo.98土壙墓。

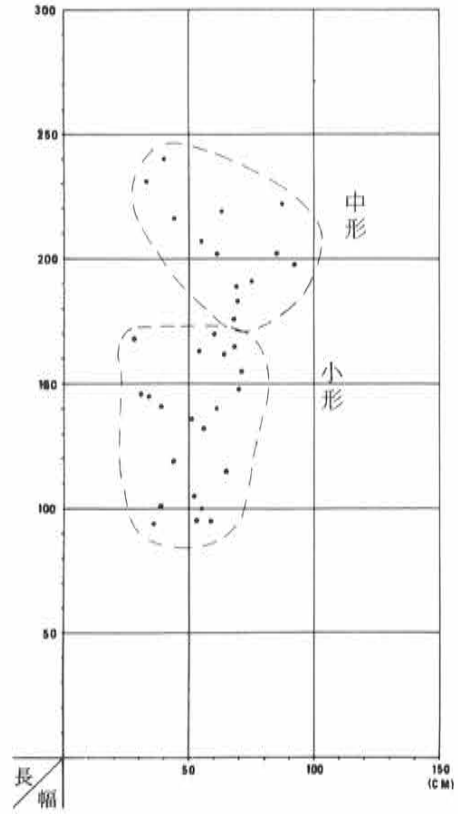
表12 A調査区第1グループ土壌墓計測値表

(単位:cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
55	直交	長方形	128	58	119	44	22		
56	平行	糸巻き形	203	83	189	69	26		
59	直交	長方形	125	71	115	65	14		
60	平行	長方形	231	119	202	85	39		
61	平行	長方形	94 _上	50	91 _上	42	12 _上		
62	直交	長方形	80 _上	41	80 _上	38	6		
63	直交	方形	83	70	72	54	13		
64	平行	糸巻き形	169	84	148	70	22		
65	平行	糸巻き形	178	94	154	66			
66	直交	糸巻き形	208	85	202	61	59		
67	直交	長方形	159	69	140	61	29		
68	平行	長方形	120 _上	60	101	39	21		
69	直交	長方形	190 _上	80	182 _上	72	48		
70	平行	長方形	185 _上	70	110 _上	58	10		
71	平行	長方形	158 _上	81	132	56	33		
72	平行	長方形	105 _上	58	105 _上	40 _上	17		
73	直交	長方形	150 _上	56	150 _上	38	20		
74	平行	長方形	160 _上	62	160 _上	47	9		
75	平行	長方形	107	68	95	59	12		
76	直交	長方形	177	92	165	68	21		
77	直交	長方形	247	80	216	44	29	枕石2対	
78	平行	長方形	272	83	240	40	24	枕石2対	2段掘り
79	平行	長方形	157 _上	82	145 _上	65	16		
80	平行	長方形	159	51	146	31	15		
81	平行	長方形	165	55	145	34			
82	斜交	長方形	97	46	94	36	14		
83	平行	長方形	172	32	168	28	17		
88	平行	長方形	107	71	100	55	31		
90	平行	糸巻き形	230	115	194	75	74		
91	平行	糸巻き形	239	115	198	92	61		
93	平行	長方形	120	62	86	51	50		
94	平行	長方形	118	70	105	52	60		
97	平行	糸巻き状	181	74	170	60	34		
98	斜交	長方形 _{（糸巻き）}	239	111	222	87	28	なし	
99	平行	長方形	99	51	91	39	15		
100	平行	長方形 _{（糸巻き）}	231	91	206	68	48		
109	直交	糸巻き形	188	79	182	69	35		
110	平行	糸巻き形	186	78	176	68	11		
111	直交	長方形 _{（糸巻き）}	113	53	95	53	16		
112	平行	長方形	245 _上	42 _上	237 _上	33	36		
113	平行	?	170 _上	80 _上	170 _上	76 _上	27		
114	直交	長方形	293 _上	89	231	33	41	枕石1対	2段掘り
115	直交	長方形	166 _上	74	150 _上	60	29	枕石1対	
116	直交	長方形	165	43	152	24	18	枕石1対	
189	直交	長方形	240	59					未掘
190	斜交	長方形	78	28					未掘
192	直交	長方形	110	38					未掘
193	直交	長方形	113	39					未掘



第29図 A調査区 No100土壙墓遺物出土状態 (s=1/40)



第30図 A調査区 第1グループ床面計測値

以上のことから第1グループは、さらに5個のグループに細分することの可能性も考えられる。

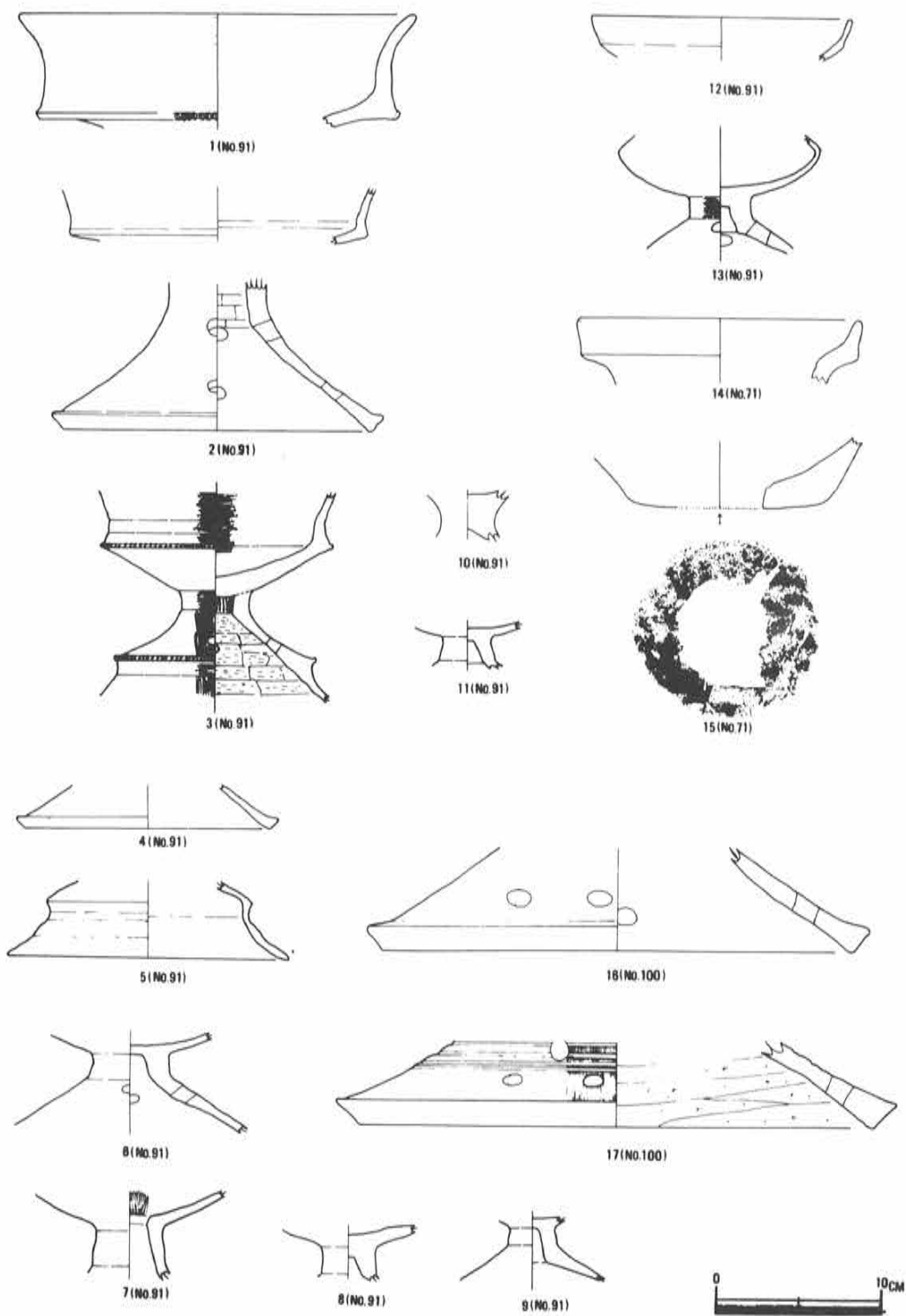
No.116 石蓋土壙墓

土壙墓は、上面で長さ165cm、幅43cm、床面で152cm、幅24cm、深さ18cmを測り、北辺の東半分が石材を配置するため、二段掘りである。蓋石は、東半分に認められ、床面より約20cm上部にほぼ水平に置き、大きな石と石の間には、小石を充填している。石材は河原石を使用し、床面施設として東端に枕石を配置している。

遺物

遺物の出土状態

第1グループに伴うと思われる遺物は、土器のみであり、他のものは認められなかった。これらは、出土状態により2形態の分類が考えられる。



第31図 A調査区 第1グループ出土土器

表13 A調査区第1グループ出土土器一覧表

番号	種類	法 量 cm			整 形								色 調	その他				備 考		
		口径	最大径(中位)	器 高	口 縁	胴部	底部	頸部	脚 部	部	色	丸		平	丸	丸				
					内	外	内	外	内	外	内	外	内	外		丸	平	丸	丸	
1	器 台	23.5		6.8+	みがさ	みがさ									赤褐色	○	○			
2	器 台	—	18.2(脚径)	11.9+	?	?							みがさ	?	赤褐色	—	?	?	—	
3	高 杯	—	—	12.2+	みがさ	みがさ							みがさ	みがさ	赤褐色	—	○	×	左	—
4	高 杯	—	9.6(脚径)	2.6+									?	?	赤褐色	—	?			
5	高 杯	—	16.9(脚径)	4.4+									?	みがさ	淡黄褐色	—	?			
6	高 杯	—	—	6.1+									なで	?	淡黄褐色	—	?	×		
7	高 杯	—	—	5.1+	みがさ	みがさ							なで	みがさ	淡黄褐色	—	○	?		
8	高 杯	—	—	3.2+									?	?	淡黄褐色	—	?	×		
9	高 杯	—	—	3.9+									?	?	淡黄褐色	—	?	×		
10	高 杯	—	—	3.1+									?	?	淡黄褐色	—	?	×		
11	高 杯	—	—	3.0+									?	?	淡黄褐色	—	?	×		
12	高 杯	15.5	—	2.6+	なで	?									赤褐色	—	?			
13	台付直口壺	—	12.1	17+			?	?	?	?			?	みがさ	淡赤褐色	—	○			
14	甕	16.6	—	3.8+	?	?									暗黄褐色	—	?			
15	甕	—	—	4.9+					?	?					暗黄褐色	○	?			焼成後穿孔
16	器 台	—	28(脚径)	6.0+									?	?	暗赤褐色	—	?			
17	器 台	—	36.7(脚径)	5+									みがさ	はげ	暗赤褐色	○	○	左	—	

1. 第1グループ全体を意識していると思われるもの。
2. 1基の土壙墓を意識していると思われるもの。

1は土壙墓No.91, 94にかけて存在する。当地点には器台2個体とともに土器溜を呈する状態で多量な土器が存在していた。その西側には、土壙墓が全く存在しない長さ4m、幅25mの空間が存在することなどから、後述するB空間と同様な祭祀の場としてとらえることができ、また当地点に存在する遺物は、ここより放棄されたものとしてとらえることができよう。

しかしこの土器溜からは、特殊器台、壺などのB空間周辺に認められたいわゆる特殊な土器は存在しない。

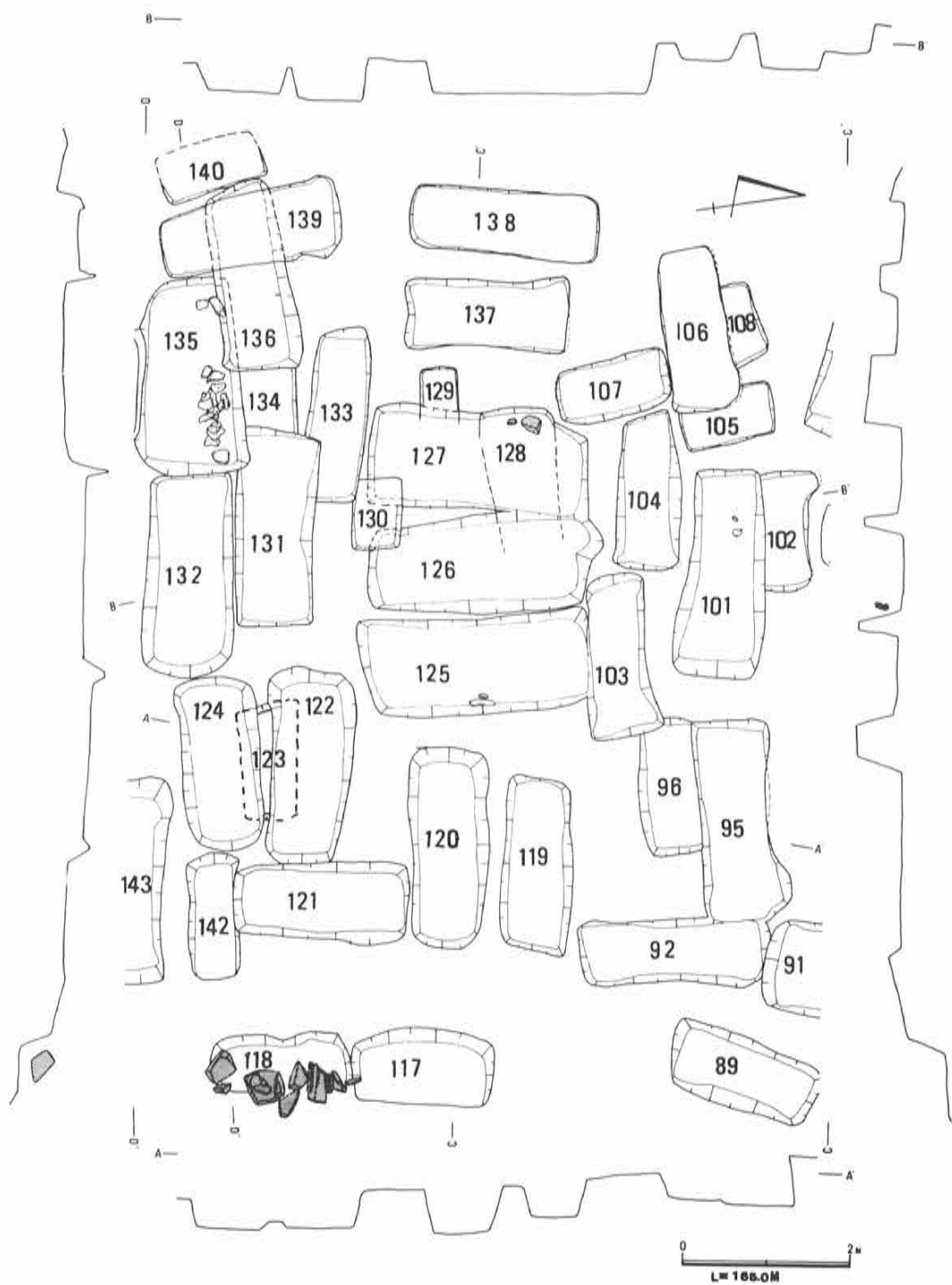
2はNo.100とNo.71土壙墓上面より出土したものである。No.71は、示石と思われる河原石と共に上面より出土しており、No.100ではNo.71と同様に河原石を伴い上面より器台の脚部2個体が並んで出土した。

(2) 第2グループ

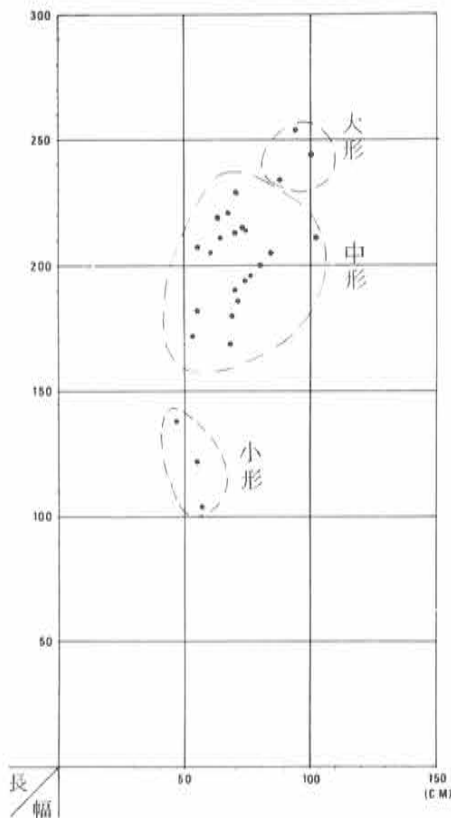
位置 第2グループは、溝による区画を有しない一群のほぼ中央部を占地し、北を第1グループ南を第3グループと接する尾根上の平坦面に存在する。

形態 範囲は、東西約15m、南北約6.4mを測り、総数37基の土壙墓が存在する。このうち糸巻き形を呈す土壙墓は、短辺がわずかに外曲し長方形に近い形状を示すものと、両短辺が大きく横に張り出し、それが掘方上面まで及ぶものが存在し、後者の数は、北に移るに従い多くなり、変化も著しくなる傾向を示す。No.128土壙墓のみが床面施設として枕石を有し、No.127・128の土壙墓を切っており、ここでは特異な形態を示す。

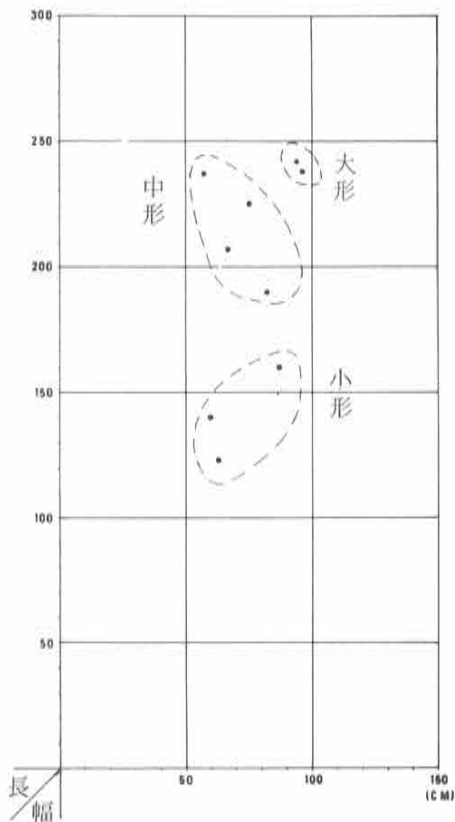
尾根筋には当グループの中心埋葬施設と考えられる大形土壙墓 No.125・126・127の3基が尾根に平行に築かれ、その南と北には、遺構検出を行っている時点で、検出面で溝状を呈した土壙墓が二



第32図 A調査区 第2グループ遺構配置図 (s- $\frac{1}{80}$)



第33図 A調査区 第2グループ床面計測値



第34図 A調査区 第3グループ床面計測値

墓一対の形で存在していた。この土壙墓は南辺では比較的同規模のもので構成されるが、北辺では中形と小形の土壙墓がセットになる場合が多く、この溝状に連結する土壙墓の両端間の長さは約8mを測る。東西の短辺には、東に尾根に直交する二基一対の土壙墓、西に尾根に平行な二基一対の土壙墓が存在し、あたかも大形土壙墓を方形に囲む状態を示す。南辺にあるNo.135土壙墓上面には、溝状に並ぶ土壙墓群と平行に約1.1mにわたって河原石が列石状をなしており、何らかの区画の意味を持たせるものではないかと思われる。また、大形土壙墓の中心にあたるNo.126の土壙墓は、北西端に直径40cmの半円形の突出部を持ち、遺構上面に何らかの施設があったものと考えられる。

(3) 第3グループ

位置 第3グループは、南を特殊器台、壺、供献用土器がとりまくB空間、北を第2グループに接している。

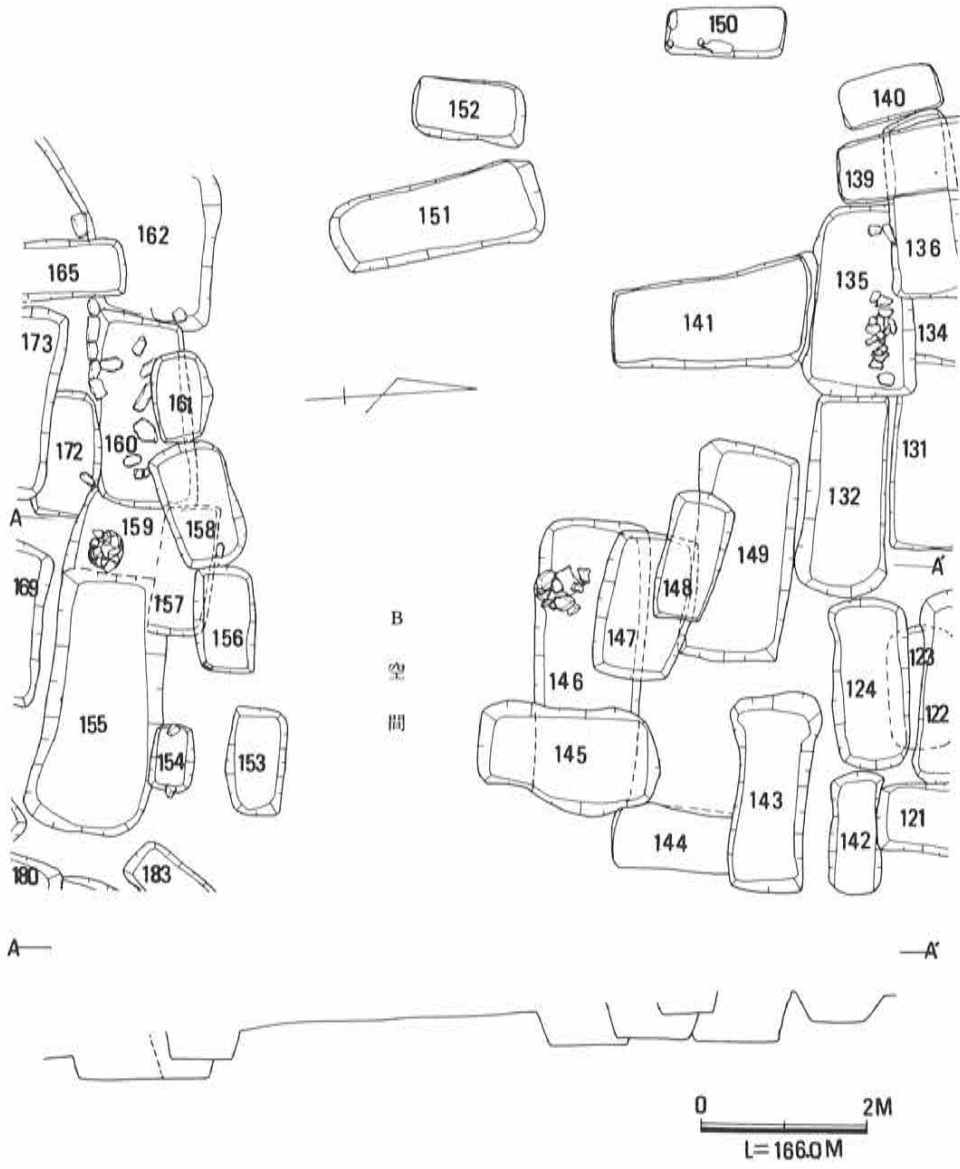
形態 範囲は、東西約14m、南北約6mを測り、総数11基の土壙墓によって構成される。これらの土壙墓は、長方形・糸巻き形の平面を呈し、床面施設としては何も持たない。土壙墓の配置は尾根

表14 A調査区第2グループ土壇墓計測値表

(単位cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
89	平	行	糸巻き形	182	87	160	54	51	
92	平	行	糸巻き形	226	71	207	55	10	
95	直	交	糸巻き形	240	83	229	70	64	
96	直	交	糸巻き形	163	?	143	?	30	
101	直	交	若干糸巻き形	249	41	219	63	46	
102	直	交	糸巻き形	144	?	129	?	37	
103	直	交	糸巻き形	195	68	169	58	51	
104	直	交	糸巻き形	184	66	172	53	25	
105	平	行	糸巻き形	111	64	104	57	12	
106	直	交	糸巻き形	195	75	194	74	23	
107	平	行	糸巻き形	135	68	122	55	14	
108	直	交	糸巻き形	94	40以上	84	36以上	10	
117	平	行	長方形	165	92以上	147	74	44	
118	平	行	長方形	165	16以上	150	54		南側に積石を行って側壁
119	直	交	長方形	206	84	196	76	38	
120	直	交	長方形	240	89	213	70	47	
121	平	行	長方形	204	90	190	70	60	
122	直	交	長方形	235	94	200	80	49	
123	直	交	?	136	16以上	120	16以上	18	
124	直	交	糸巻き形	208	91	186	71	27	
125	平	行	長方形	273	113	254	94	38	
126	平	行	長方形	251	115	234	87	48	北側短辺に張出し
127	平	行	長方形	259	112	244	100	54	
128	直	交	?	?	78	?	70	38	枕石1対
129	直	交	糸巻き形	?	48	?	39	5	
130	直	交	糸巻き形	?	58	?	48	9	
131	直	交	糸巻き形	233	91	221	67	51	
132	直	交	糸巻き形	243	103	214	74	37	
133	直	交	糸巻き形	205	69	205	60	32	
134	直	交	糸巻き形	?	?	?	?	10	
135	直	交	糸巻き形	232	116	211	102	31	上面に列石
136	直	交	糸巻き形	224	87	211	64	59	
137	平	行	糸巻き形	189	80	180	69	20	
138	平	行	糸巻き形	221	78	215	73	10	
139	平	行	糸巻き形	217	94	205	84	21	
140	平	行	糸巻き形	134	?	120	?	4	
142	直	交	糸巻き形	150	48	138	47	19	

筋を占地する大形土壇墓二基が尾根に直交して存在し、北側は東を直交する土壇墓一基のみで、残りの大部分は第2グループの南側に存在する土壇墓と共存する。南側は、境となる直交する土壇墓が存在しないため、B空間との境がはっきりしない。東西は、二基一対の尾根に平行な土壇墓よりなる。これらの土壇墓によって第3グループが形成される。大形土壇墓No.146の南壁面のほぼ中央部には、壁面を10cmほど切って径約50cm、深さ50cmの円筒形のピットが配置され河原石がうらごめに使用され



第35図 A調査区 第3グループ遺構配置図 (s=1/90)

床面まで続いている。これは石の配列状態から土壙墓築造後に何らかの施設が遺構上面に存在していたものと推定される

(4) 第4グループ

位置 第4グループは、A調査区の南端に位置し、北をB空間と接し、尾根の先端を占地する。

形態 範囲は、東西8.4m、南北7.2mを測り、総数26基の長方形の平面をなす土壙墓によって構成される。床面施設はNo.174土壙墓の西側に小口溝を検出したのみで他のものは認められなかった。内部施設はNo.160土壙墓の中央部、床面より約4cm上の面に河原石がたてに6個並んで検出した。この石は木棺の蓋のおさえ石として使用していたものと考えられる。特筆すべきものとして、大形土壙墓に礫槨からなる埋葬施設を有するものが存在する。土壙墓の配置は、尾根筋に中心主体と考えられるNo.171礫槨墓が尾根に直交して中央に築かれ、北側には溝状に連絡して配列された土壙墓、南側には直交して並ぶ2基の土壙墓、西側には尾根に平行して縦に並ぶ2基の土壙墓、東側には尾根に平行する二基一対の土壙墓が位置し方形に区画された状態を示す。このグループの中央部に位置する土壙墓は、No.170を除き、切り合いからNo.171礫槨墓より新しい。北側に溝状に配列された土壙墓からは、次のようなことが判明した。

1. No.155・160に挟まれて存在するNo.159土壙墓は、床面に径50cm、深さ35cmを測る円形の柱穴状の土壙が存在する。この土壙はあたかも柱の周囲に河原石の小石を裏ごめにつめこんだ状況であり、何らかの施設を有していたものと考えられる。
2. No.160・163土壙墓の南壁面には、東西2.3mにわたり6個の河原石がたてに張り付けられ床面付近まで達し、列石状を呈する。またNo.160土壙墓を切って存在するNo.165土壙墓の接点にも存在し、築造時に列石を取り除いたものと考えられる。
3. No.164土壙墓は、他のものと方位が異なり、しかも南辺の側部のみしか検出されなかったことから、土壙墓ではなく区画のために掘込まれた溝状の遺構の可能性も考えられる。
4. 溝状に配列された土壙墓は、それぞれの床面が同様な計測値を示し水平であるが、No.158土壙墓だけが違うこと、また床面のほぼ中央部に土壙が存在することから土壙墓ではない可能性が考えられる。

No.171礫槨墓

礫槨墓は、上面を他の土壙墓によって切られているが、長さ266cm以上、幅約178cmの土壙を掘り、その底面よりさらに深さ13cmの所に長さ約195cm・幅約78cm、床面で長さ約180cm・幅約78cm・深さ32cmの土壙を掘り二段掘りを行っている。この土壙内のほぼ中央に、長さ約178cm・幅38cmの木棺を配置し、そのまわりに小石程度の河原石をつめ込んでいる。木棺上面とほぼ同レベルまでつめ込んだ時点で、礫の上面を何枚かの板石でおおい、次に木棺の上にも板石によって蓋をして埋葬施設を作っていたものと思われる。ここでは礫で木棺をおおっている点から一応礫槨墓とした。

表15 A調査区第3グループ土壙墓計測値表

(単位cm)

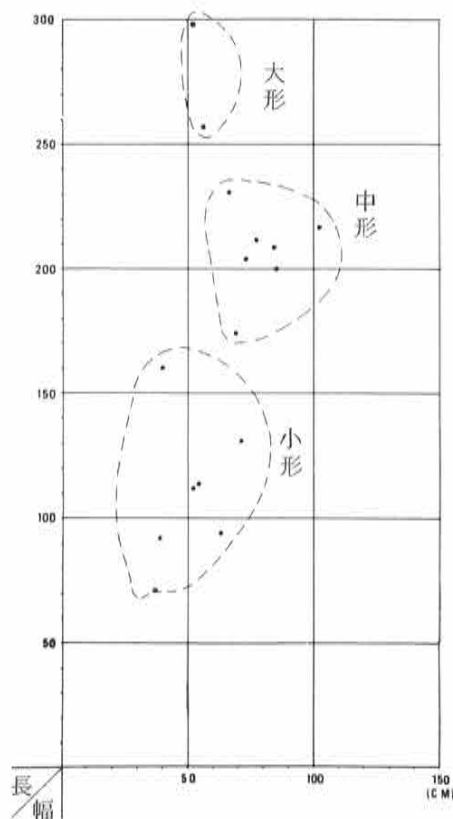
番号	尾根範と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備	考
			長さ	幅	長さ	幅				
141	平行	長方形	238	110	238	96	34			
143	直交	糸巻き形	240	84	207	66	52			
144	平行	長方形	?	75	?	75	35			
145	平行	長方形	220	94	190	82	44			
146	直交	長方形	260	129	237	57	43		側壁に寄せ床面まで積石	
147	直交	長方形	173	106	160	87	44			
148	直交	長方形	157	72	140	60	28			
149	直交	長方形	265	120	242	94	62			
150	平行	長方形	143	?	134	?	22	枕石1対	側板の押え石	
151	平行	糸巻き形	255	90	225	75	54			
152	平行	長方形	136	70	123	63	24			

(5) 第5グループ

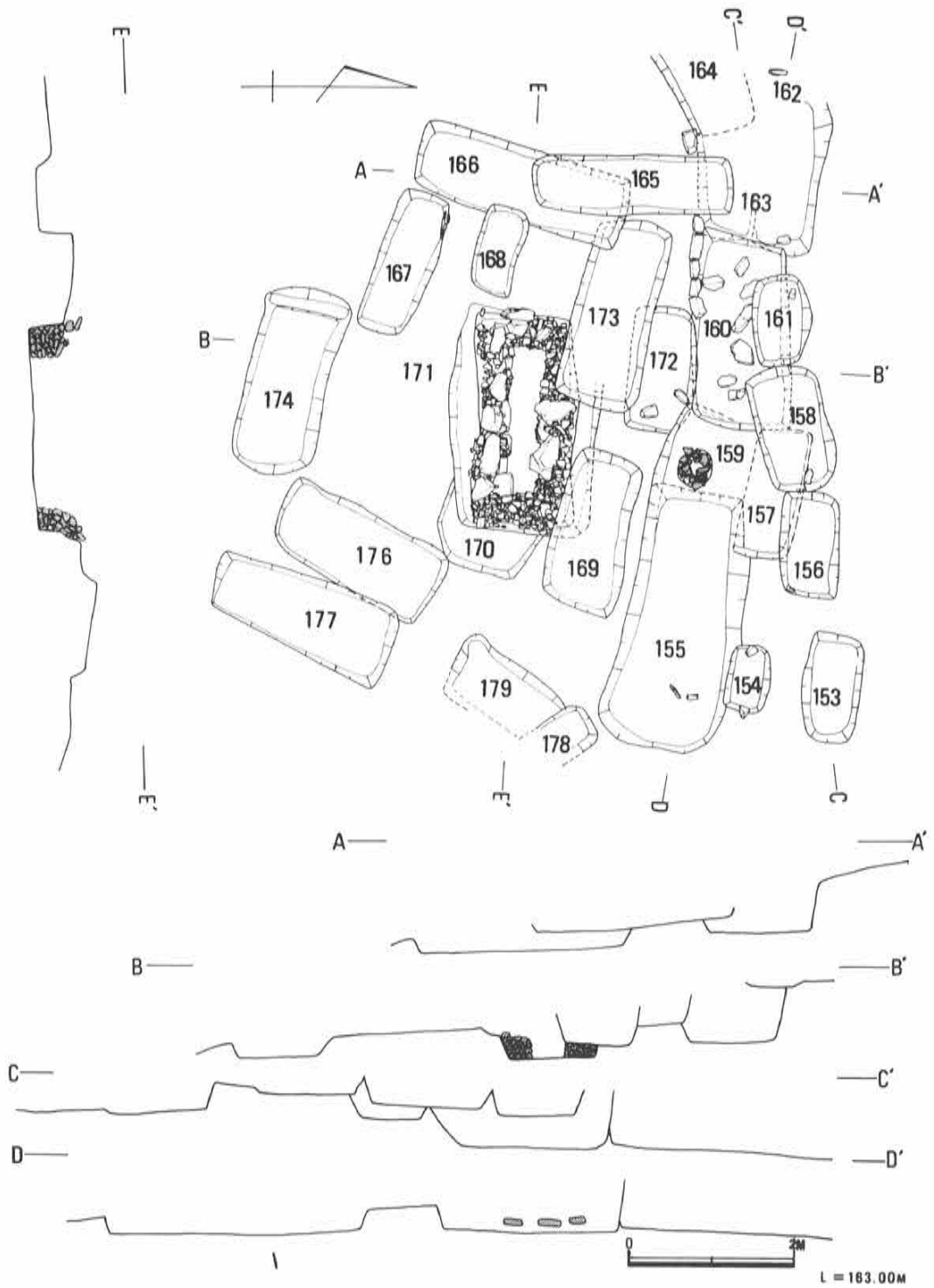
位置 溝によって区画しない一群の東斜面のほぼ全域にわたって存在する。

形態 短辺の一部及び全部を共有して南北に伸び、全長約25mを測り総数15基の土壙墓によって構成される。これらの土壙墓は、平面形では、大半が糸巻き形を呈し、長方形のものはごくわずかである。床面施設として全部の土壙墓に枕石を持つことが特徴である。配列は、大半が尾根筋に平行に築かれ、直交するものは小形の土壙墓のみである。南部分では、遺構検出の際に遺構上面が短辺の一部及び全部を共有していたため溝状をなしていた。本グループ北半は尾根が広がるため土壙墓の位置が第1グループ東の緩傾斜面に変わっている。このため、北半部と南半部の土壙墓のレベル差は約60cmと緩傾斜面上に存するものとかかなりの差を生じている。

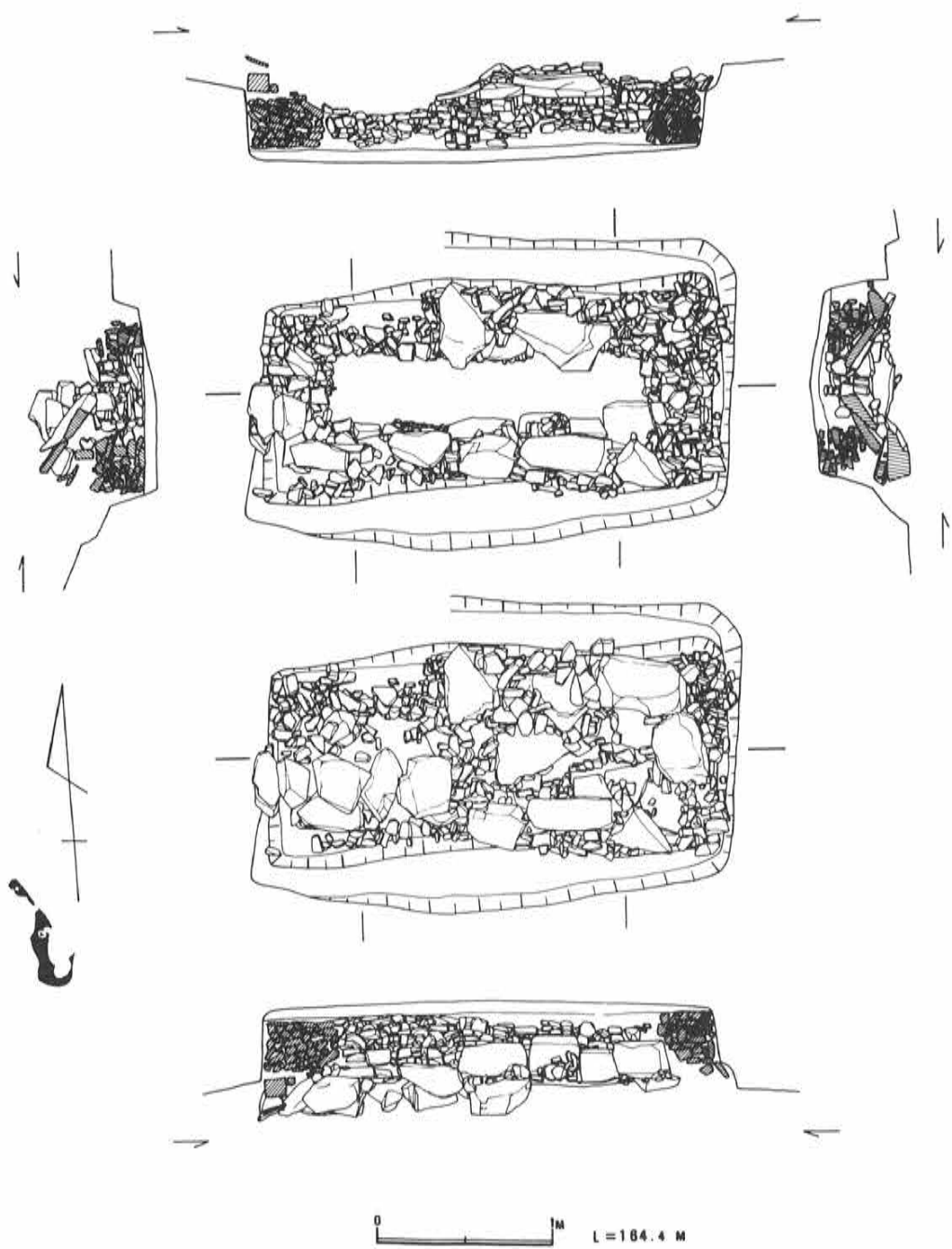
このグループは、尾根上に存在し中心に大形土壙墓を持つ一群の床面計測値と同じ大形土壙墓・中形土壙墓・小形土壙墓とに大きく3グループに分けることができる。



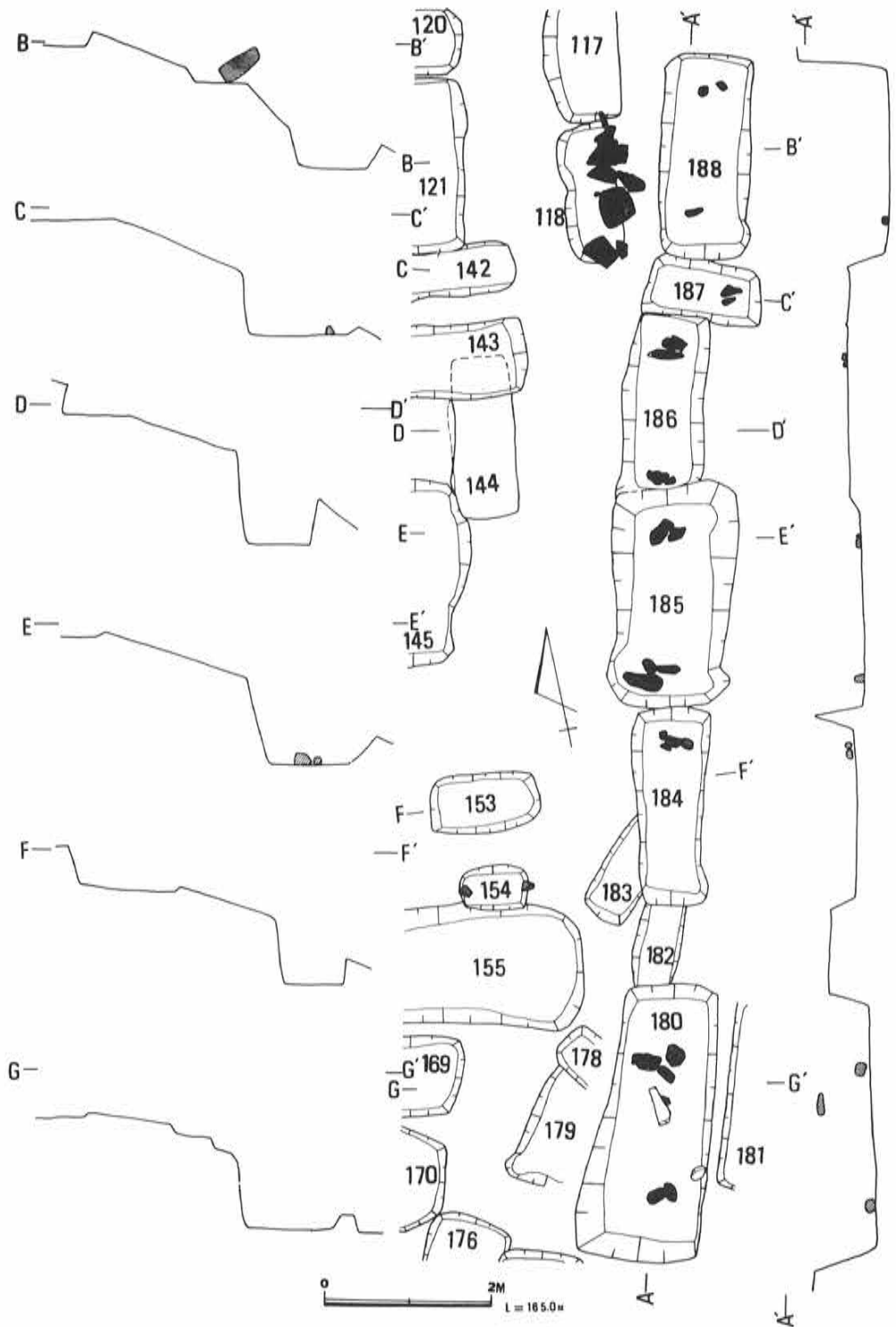
第36図 A調査区 第4グループ床面計測値



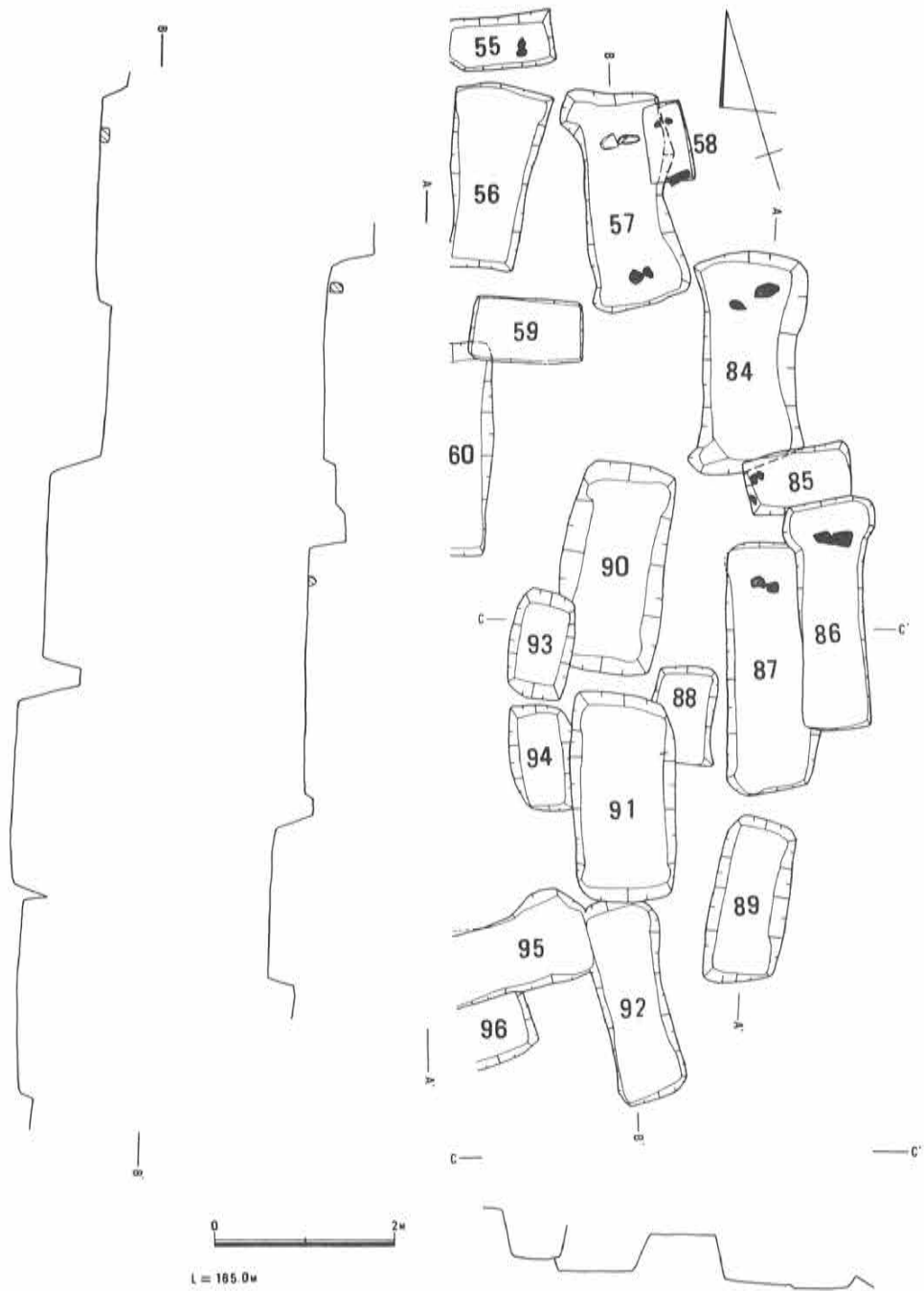
第37図 A調査区 第4グループ 遺構配置図 (S=1/80)



第38図 A調査区 第4グループ No171 礫槨墓 (S- $\frac{1}{40}$)



第39図 A調査区 第5グループ南側遺構配置図 (S=1/80)



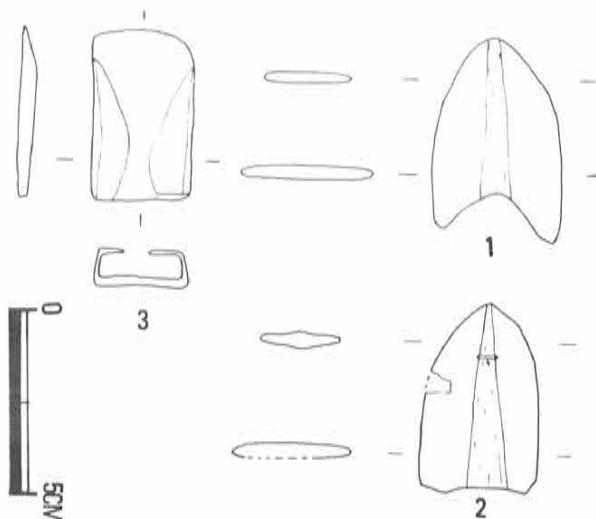
第40図 A調査区 第5グループ北側遺構配置図 (s=1/80)

土壙墓群出土鉄器

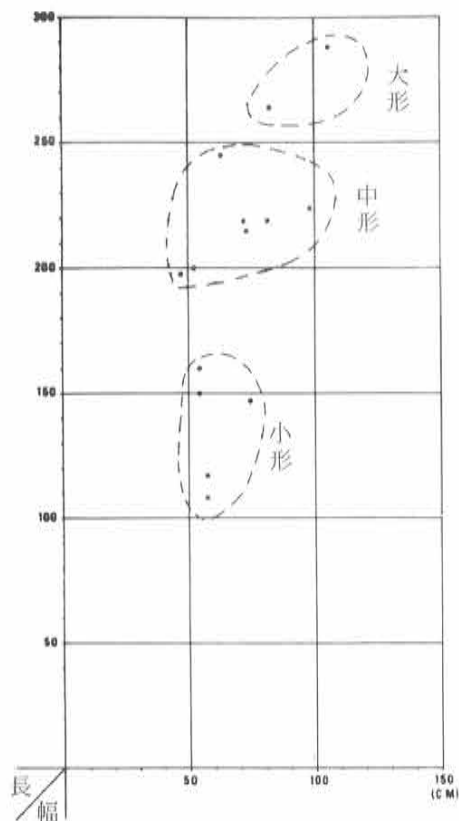
1はNo.188土壙墓内より出土した幅3.8cm、長さ5.6cmの平根式無茎鍬である。平面は長三角形で逆刺がつき、中央部に木片痕が存在する。

2はNo.165土壙墓内より出土した幅3.1cm、長さ5cmの平根式無茎鍬である。平面は長三角形で若干の逆刺がつき、中央部に木片痕跡が存在する。

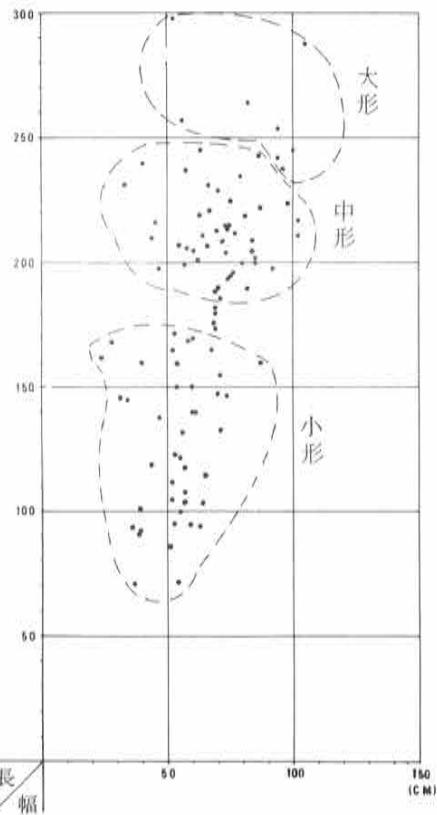
3はNo.180土壙墓上面より出土した袋状鉄斧である。長さ4.5cm、幅2.5cmを測り、両肩部から長さ3.5cm、最大幅1cm、高さ1cmの袋部を作っている。



第41図 A調査区 土壙墓出土鉄器 (s=1/2)



第42図 A調査区 第5グループ床面計測値



第43図 A調査区 第1～第5グループ床面計測値

表16 A調査区第4グループ土壌墓計測値表

(単位cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
153	直交	長方形	133	71	112	52	21		
154	直交	長方形	82	53	71	37	21		両小口に側板の押え石
155	直交	長方形	314	89	298	52	81		
156	直交	長方形	130	79	114	54	22		
157	直交	長方形	160 _{以上}	70 _{以上}	150 _{以上}	53 _{以上}	37		
158	直交	長方形	156	83	133	71	38		
159	?	?	110 _{以上}	?	100 _{以上}	?	35		円形の積石
160	直交	長方形	222	128	217	102	69		押え石、意識した石5個
161	直交	長方形	110	72	94	63	36		
162	直交	?	190 _{以上}	70 _{以上}	170 _{以上}	63 _{以上}	58		
163	直交	?	?	70 _{以上}	?	65 _{以上}	16		
164	斜交	?	?	?	?	?	32		
165	平行	長方形	244	76	231	66	18		
166	平行	長方形	260	91	243	86	18		
167	直交	長方形	180	68	160	40	8		
168	直交	長方形	105	51	92	39	9		
169	直交	長方形	194	89	174	69	33		
170	直交	長方形	57 _{以上}	123 _{以上}	49 _{以上}	110 _{以上}	10		
171	直交	長方形							礫塚墓
172	直交	長方形	152	75	140	60	38		
173	直交	長方形	233	95	209	84	35		
174	直交	長方形	232	95	204	73	43		西小口に小口溝
176	平行	長方形	213	94	200	85	25		
177	平行	長方形	229	90	212	77	23		
178	斜交	糸巻き形	80	56	72	40	32		
179	斜交	長方形	131 _{以上}	70 _{以上}	118 _{以上}	58 _{以上}	18		

表17 A調査区第5グループ土壌墓計測値表

(単位cm)

番号	尾根筋と	平面形	現存掘方上面		床面		深さ	床面施設	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
57	平行	糸巻き形	235	88	219	72	32	枕石2対	
58	平行	長方形	90	?	83	?	5	枕石1対	小口板押え石
84	平行	糸巻き形	237	104	215	74	53	枕石1対	
85	直交	長方形	118	62	108	57	17	小口押え石	
86	平行	糸巻き形	252	70	245	63	15	枕石1対	
87	平行	糸巻き形	272	104	264	82	75	枕石1対	
180	平行	?	329	126	288	105	76	枕石1対	
181	平行	長方形	217 _{以上}	29 _{以上}	213 _{以上}	20 _{以上}	20		
182	平行	長方形	96 _{以上}	55 _{以上}	96 _{以上}	49	12		
183	斜交	糸巻き形	120 _{以上}	60	110 _{以上}	49	17		
184	平行	糸巻き形	234	69	200	52	47	枕石1対	
185	平行	糸巻き形	258	136	224	98	50	枕石2対	
186	平行	糸巻き形	205	75	198	47	44	枕石2対	
187	直交	長方形	140	70	117	57	35	枕石1対	
188	平行	糸巻き形	242	107	219	81	61	枕石1対	

6. B空間周辺に存在する遺物

(1) 遺物の出土状態

これらはB空間周辺から土器溜状を呈して多量に出土した。このうち特筆すべきことは特殊器台、特殊壺を伴っていることである。当初、これらの供献用土器群は、第3・4・5グループに伴う土塚墓上面より出土したため、それぞれの土塚墓に供献されていたものと考えられた。しかし、下記に掲げた土器の存在形態からB空間を意識して放棄されたものとしてとらえるに至った。

1. 供献用土器が、この周辺に集中して存在していること。
2. 個々の土器の重なりが激しいこと。
3. 完成品であるものはほとんどなく、破片で存在することから、放棄されたものと思われること。
4. 供献用土器が一基の土塚墓に対してのものであるとすると、あまりにも集中的に存在すること。
5. 個々の土塚墓に供献したものとすると、土器が各々グループを構成して存在したであろうが、これら土器溜がグループをなしているとは思われないこと。
6. B空間を取巻き囲むように「コ」の字形に土器群が存在すること。

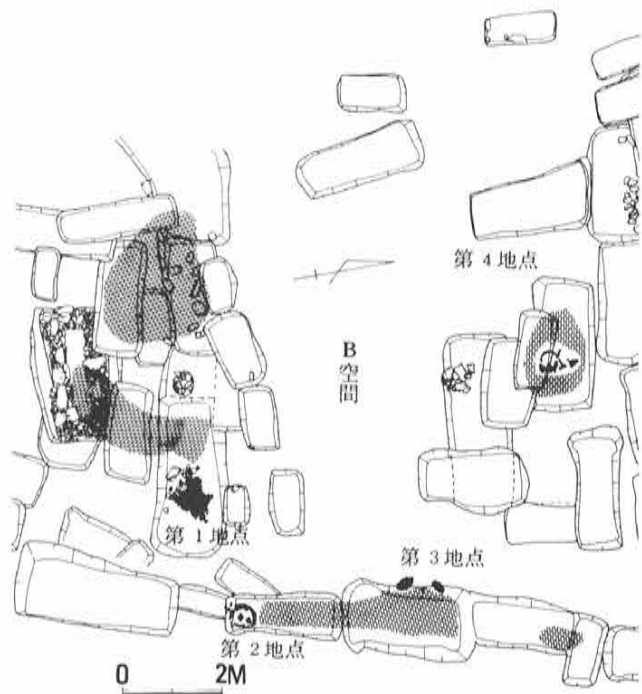
また東斜面の土塚墓面では、木棺が腐食して落ち込み溝状を呈した所に土器が多量に入り込み、重なっている状態で存在していたこと等からである。

(2) 特殊器台・壺の出土状態

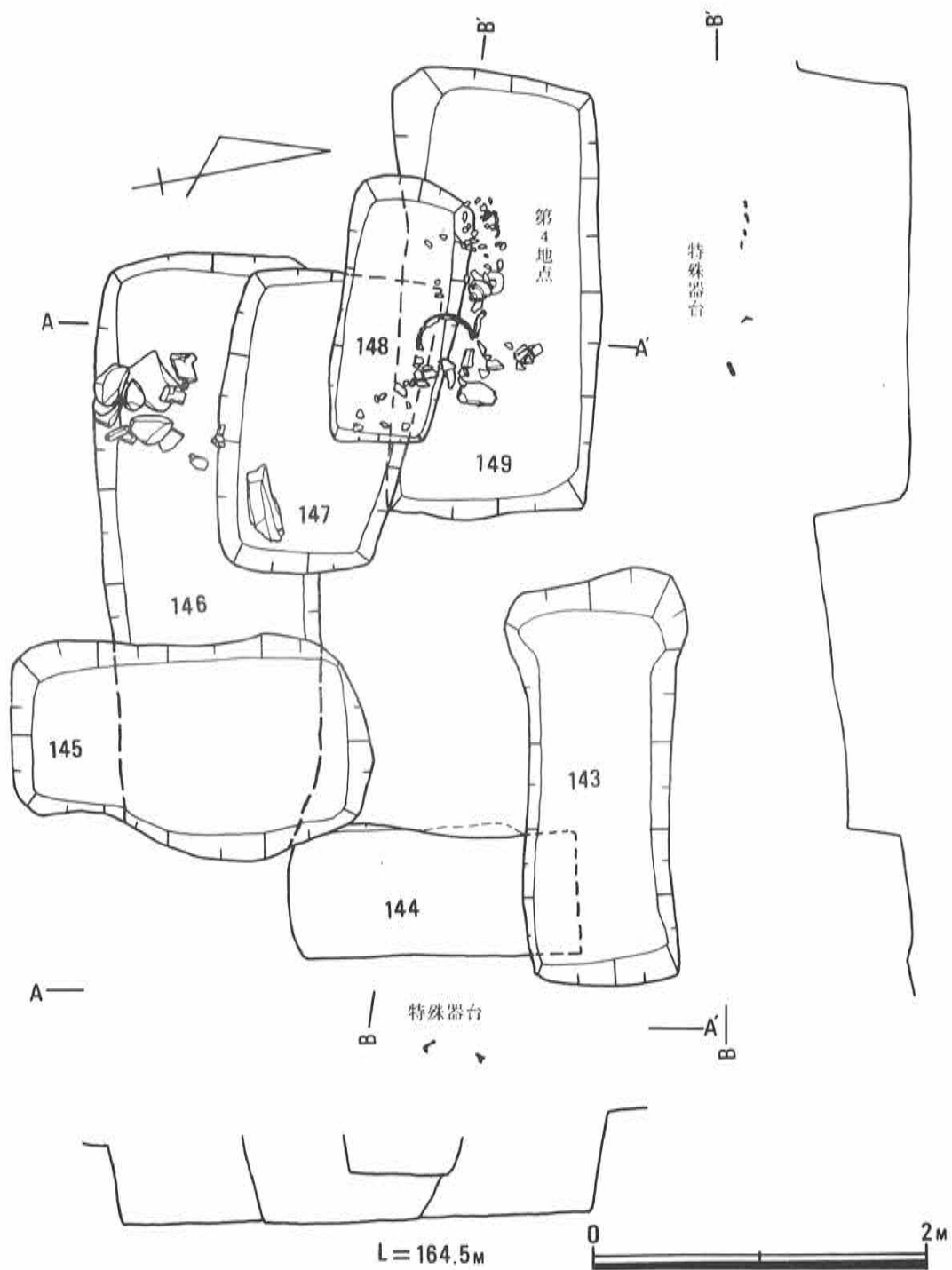
第1地点

3個体の特殊器台がNo.165の土塚墓上面の同一地点で折り重なり、ほとんどが裏返しになって出土した。このため当初は1個体のみかと推定された。しかし、調査時の取り上げ時点において、間帯の調整の違いで2種類のものでそこに存在していたものと思われた。その後、整理作業の段階において、文様構成の違いにより3個体であるということが判明した。

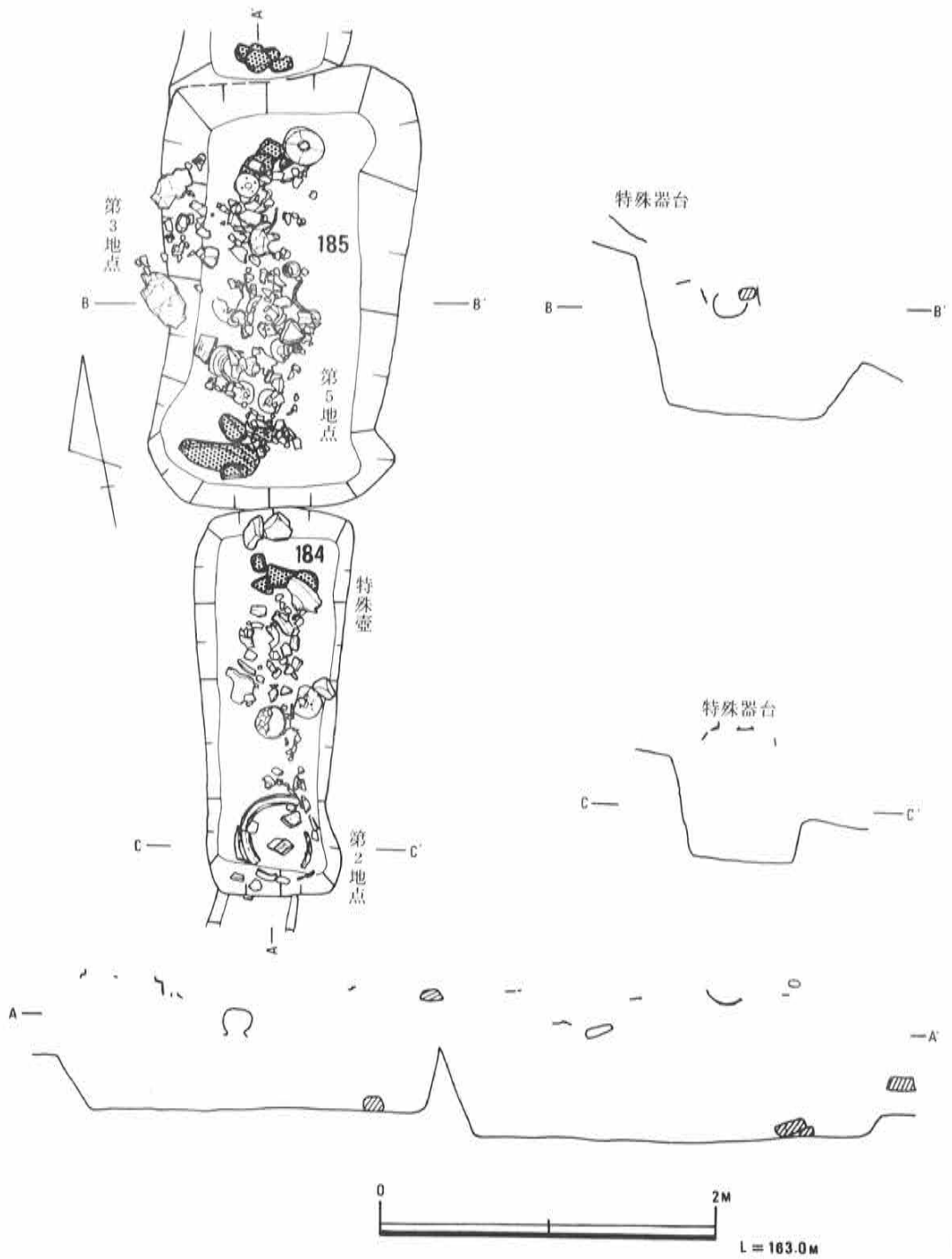
これらの出土状態は、基底部分が現位置を止めず、基底部分近を東側に置き、尾根に直交して西に倒れていた。2個体分と判明した時点において、特殊器台1が特殊器台2・3の器台より下面に存在したことを確認した。このことにより、これらの特殊器台は、同



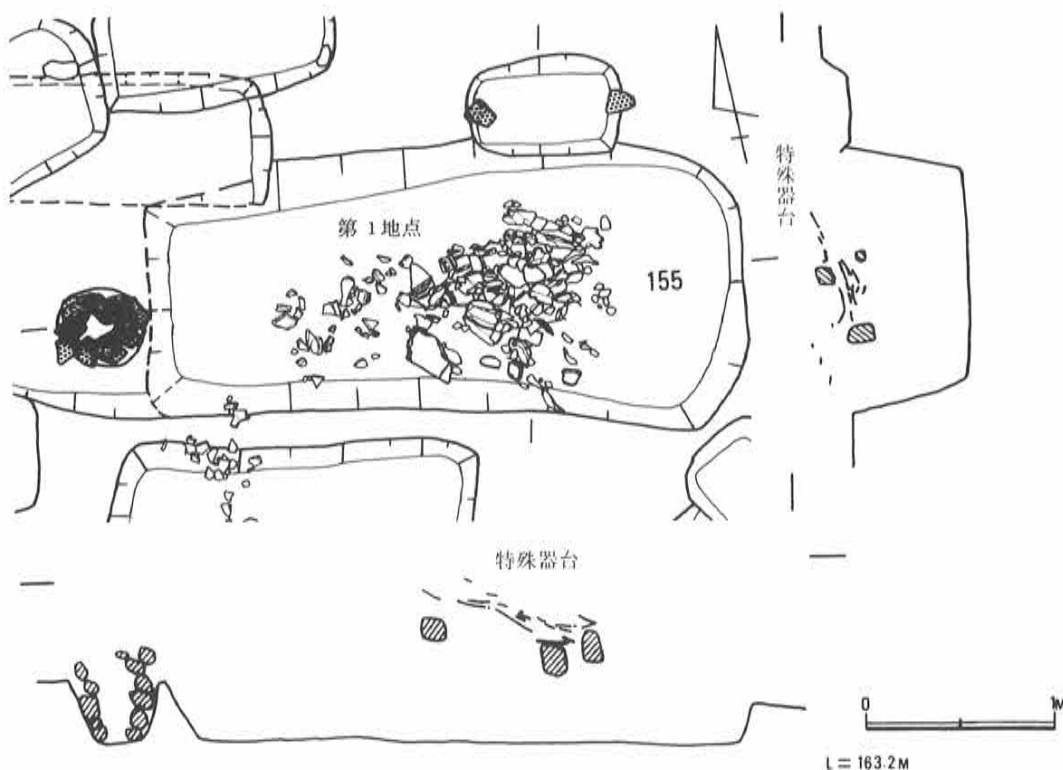
第44図 A調査区 B空間周辺出土遺物配置図 (s=1/150)



第45図 A調査区 B空間周辺遺物出土状態1 (S=1/40)



第46図 A調査区 B空間周辺遺物出土状態 2 (s=1/40)



第47図 A調査区 B空間周辺遺物出土状態3 (s=1/40)

時にそこに存在していたのではなく、時間差、もしくは時期差をもって同一地点に置かれたものではないかと考えられる。

特殊壺は特殊器台の口縁部が存在する所から少し離れた所まで飛散した状態で、1個体分のみ出土した。これがどの器台に伴うものかは不明である。(特殊壺2)

第2地点

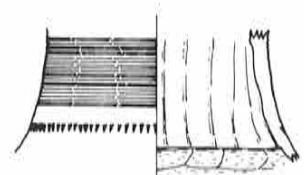
東斜面上に存在するNo.184 土壙墓上面の南において口縁部のみが逆転した状態で出土し、付近に胴部の破片が多数散乱していた。(特殊器台4) 特殊壺は、同一土壙墓の上面北から底部を欠く状態で出土したが、この特殊器台に伴うものかどうかは今のところ不明である。(特殊壺2)

第3地点

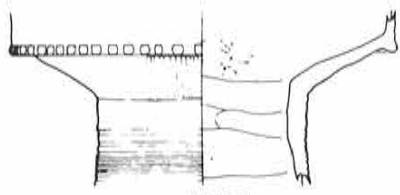
東斜面No.185 土壙墓上面において、胴部の一部の破片が2か所に散乱していた。これらは文様構成、調整その他から同一個体ではないかと考えられる。また口縁部は破片が存在していた所より東に他の土器と混在して出土したため、整理作業の過程で見つかったものである。(特殊器台5)



1 (No.155)



4 (No.155)



2 (No.155)



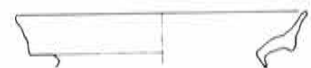
5 (No.155)



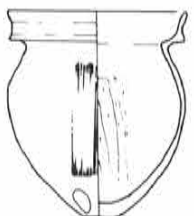
6 (No.155)



3 (No.155)



7 (No.155)



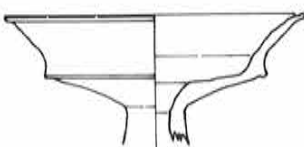
8 (No.171)



9 (No.171)



10 (No.171)



11 (No.171)



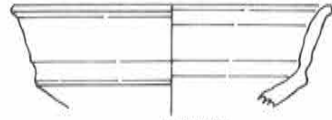
12 (No.171)



第48図 A調査区 B空間周辺出土土器(1)



13 (No.160)



14 (No.160)



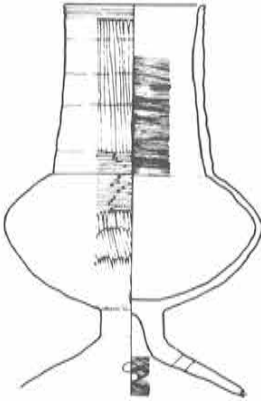
15 (No.160)



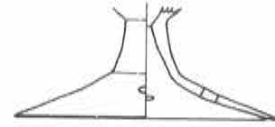
16 (No.160)



19 (No.160)



17 (No.160)



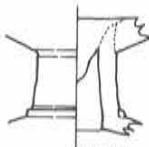
20 (No.160)



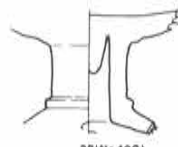
21 (No.160)



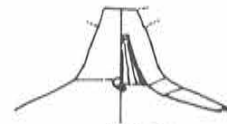
22 (No.160)



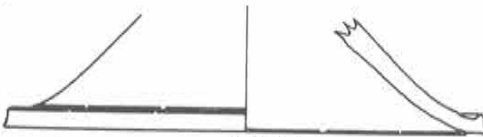
18 (No.160)



23 (No.160)



24 (No.160)



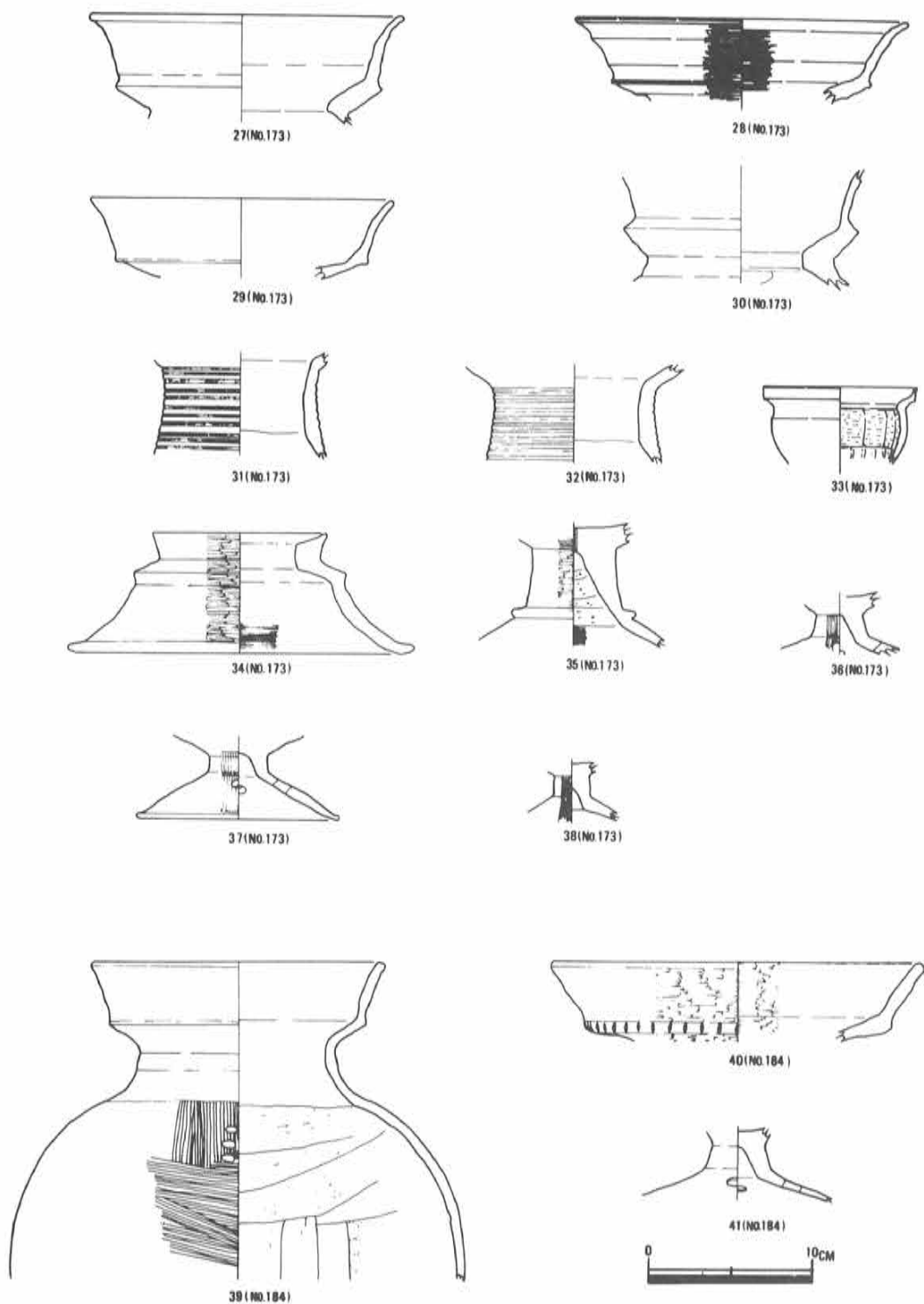
25 (No.173)



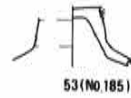
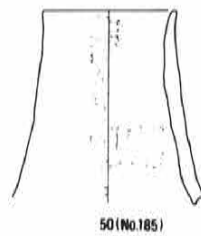
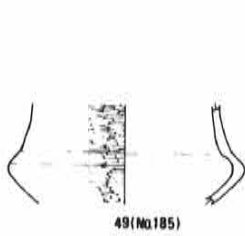
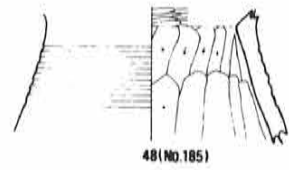
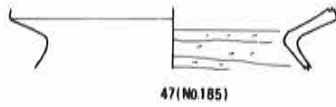
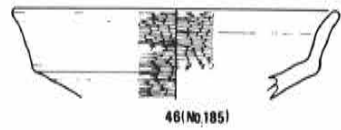
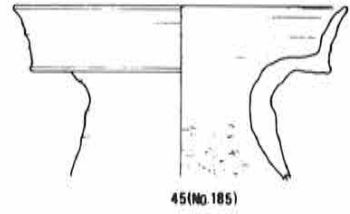
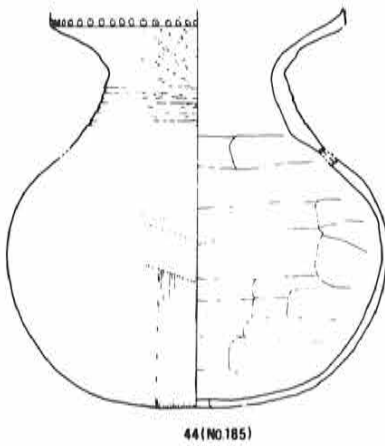
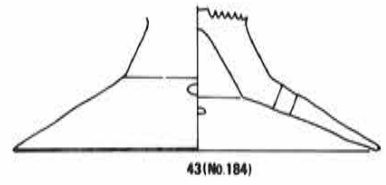
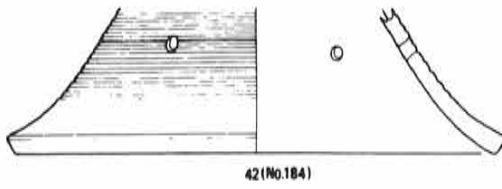
28 (No.173)



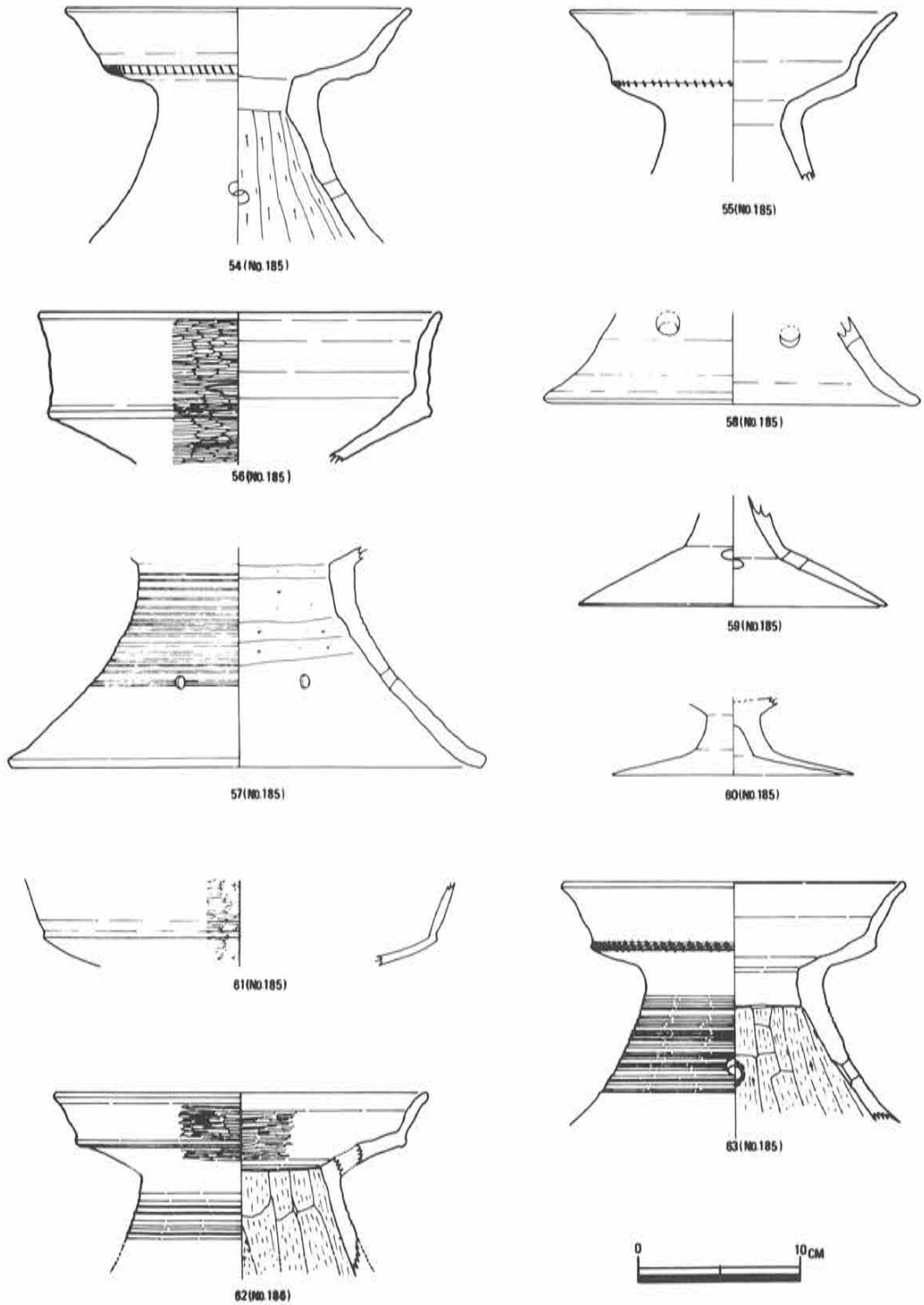
第49図 A調査区 B空間周辺出土土器(2)



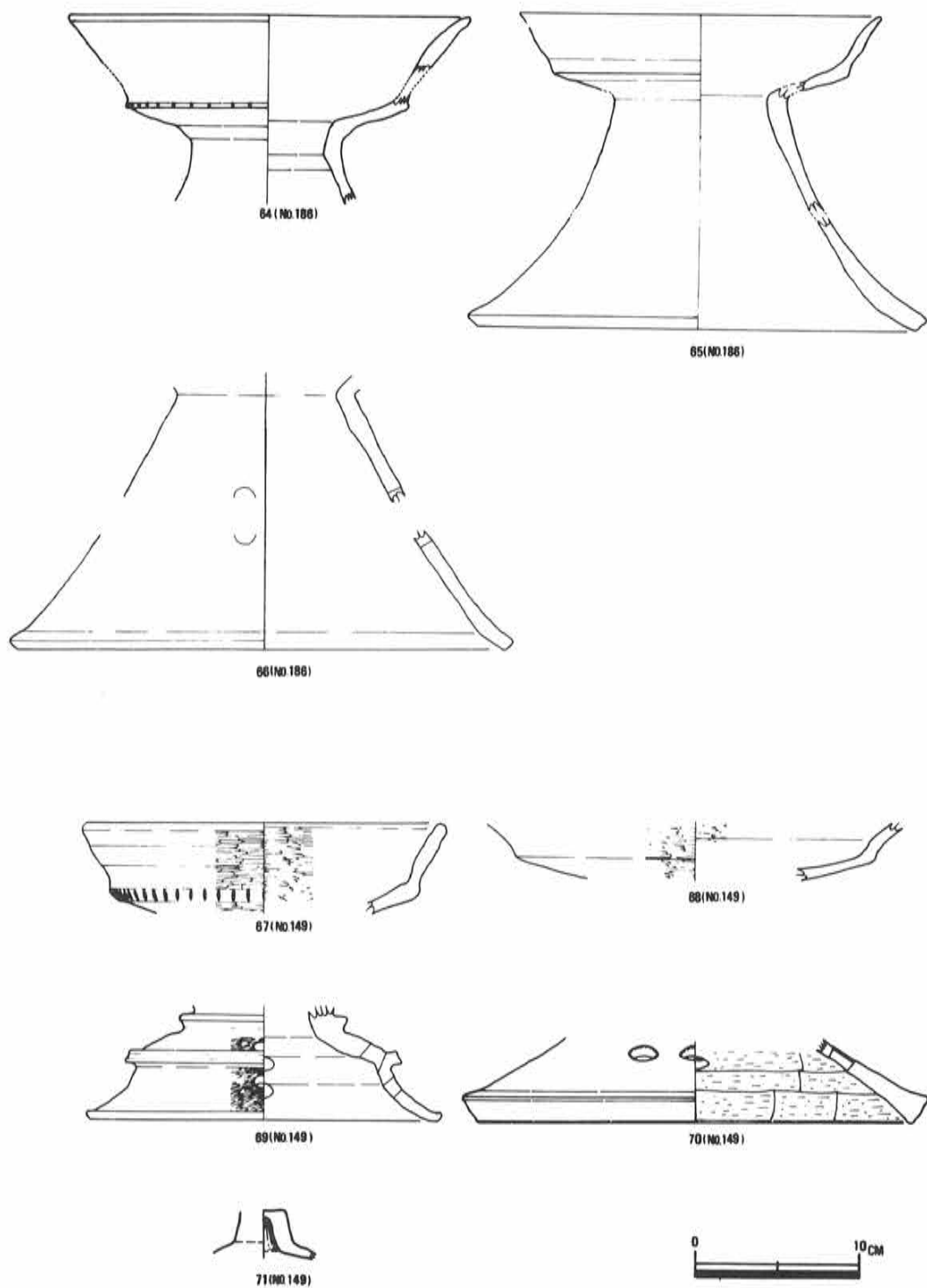
第50図 A調査区 B空間周辺出土土器(3)



第51図 A調査区 B空間周辺出土土器(4)



第52図 A調査区 B空間周辺出土土器(5)



第53図 A調査区 B空間周辺出土土器(6)

表18 A調査区B空間周辺出土土器一覧表

番号	種類	法 量 (cm)			整 形								色 調	そ の 他					備 考	
		口径	最大径(中位)	器高	口内	口外	胴内	胴外	底部内	底部外	頸内	頸外		脚内	脚外	黒	丹	穿		丸
1	壺	24.4	—	7.0+	白 なで	へろ みがさ	—	—	—	—	—	—	—	赤褐色	—	○	—	—	—	
2	壺	—	—	9.1+	へろ みがさ	?	—	—	—	へろ みがさ	?	—	—	赤褐色	—	○	—	?	—	
3	甕	14.4	—	4.6+	なで	なで	へろ みがさ	なで	—	—	—	—	—	茶褐色	—	—	?	—		
4	壺	—	—	7.7+	—	—	へろ みがさ	?	—	—	へろ みがさ	?	—	赤褐色	—	?	—	右	—	
5	甕	—	—	3.7+	なで	なで	へろ みがさ	なで	—	—	—	—	—	淡黄褐色	—	○	—	右	—	
6	甕	15.4	—	2.9+	なで	なで	なで	なで	へろ みがさ	?	—	—	—	—	—	×	—	—	—	
7	甕	17.6	—	3.2+	?	?	?	?	—	—	—	—	—	淡黄赤褐色	—	×	—	—	—	
8	甕	9.6	9.4	10.8	なで	なで	なで みがさ	白	なで	なで	—	—	—	暗黄褐色	○	○	○	—	×	
9	壺	—	—	4.6+	?	?	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	—	?	—	—	—	
10	台付直口壺	7.4	7.6 10.3(脚径)	8.7	?	?	?	?	?	?	?	?	?	淡黄褐色	×	○	○	—	—	焼成後穿孔
11	器台	16.0	—	6.9+	?	?	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	—	?	—	—	—	—
12	甕	—	—	2.1+	—	—	—	?	なで	—	—	—	—	淡黄褐色	○	?	—	—	—	—
13	壺	22.5	—	5.5+	なで	へろ みがさ	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	—	○	—	—	—	—
14	壺	15.8	—	5.4+	なで	なで	—	—	—	—	—	—	—	淡茶褐色	—	×	—	—	—	—
15	壺	19.5	—	4.1+	へろ みがさ	へろ みがさ	—	—	—	—	—	—	—	淡茶褐色	—	○	—	—	—	—
16	壺	17.3	—	5.3+	へろ みがさ	へろ みがさ	—	—	—	—	—	—	—	淡茶褐色	—	○	—	—	—	—
17	台付直口壺	7.4	23.7	20.5+	白	へろ みがさ	なで	へろ みがさ	なで	へろ みがさ	—	へろ みがさ	へろ みがさ	淡茶褐色	—	×	○	—	—	化粧上を外面に使う
18	高杯	—	—	4.3+	—	—	—	—	—	—	—	なで	なで	淡茶褐色	—	×	—	—	—	—
19	器台(?)	—	21.3(脚径)	3.2+	—	—	—	—	—	?	?	—	—	赤褐色	—	○	—	—	—	—
20	高杯	—	14	5.9+	—	—	—	—	—	?	?	—	—	淡黄褐色	—	?	—	—	—	—
21	高杯	—	—	3.6+	—	—	—	—	—	なで	なで	なで	なで	淡黄褐色	—	?	—	—	—	—
22	高杯	—	—	4.3+	—	—	—	—	—	なで	?	—	—	淡赤褐色	—	?	—	—	—	—
23	高杯	—	—	5.3+	—	—	—	—	—	なで	—	—	—	淡茶褐色	—	—	—	—	—	—
24	高杯	—	—	5.6+	—	—	—	—	—	—	へろ みがさ	?	—	淡黄褐色	—	?	—	—	—	—
25	器台	—	25.8(脚径)	6.1+	—	—	—	—	—	?	?	—	—	茶褐色	—	?	—	—	—	—
26	高杯	—	7.8(脚径)	3.7+	—	—	—	—	—	なで	へろ みがさ	—	—	赤褐色	—	○	—	—	—	—
27	甕	18.6	—	6.4+	—	—	—	—	—	?	なで	—	—	淡茶褐色	—	×	—	—	—	—
28	甕	20.0	—	5.0+	へろ みがさ	へろ みがさ	—	—	—	—	—	—	—	淡茶褐色	—	○	—	—	—	—
29	甕	18.1	—	4.7+	?	?	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	—	?	—	—	—	—
30	甕	—	—	7.2+	?	へろ みがさ	—	—	—	—	—	—	—	黄茶褐色	—	—	—	—	—	—
31	壺	—	—	5.9+	—	—	—	—	—	?	?	—	—	淡黄褐色	—	?	—	—	—	—
32	壺	—	—	6.2+	—	—	—	—	—	?	?	—	—	淡黄褐色	—	?	—	—	—	—
33	甕	9.2	8.2	4.6+	なで	なで	へろ みがさ	?	—	—	—	—	—	淡乳茶色	○	×	○	右	—	—
34	器台(?)	10.4	19.5(脚径)	7.2	なで	へろ みがさ	—	—	—	—	—	白	へろ みがさ	赤褐色	×	○	—	—	—	—
35	高杯	—	—	7.3+	—	—	—	—	—	—	—	白	へろ みがさ	淡灰褐色	—	○	○	右	—	焼成前穿孔
36	高杯	—	—	3.7+	—	—	—	—	—	?	へろ みがさ	—	—	赤茶褐色	—	○	×	—	—	—
37	高杯	—	11.9(脚径)	5+	—	—	—	—	—	白	へろ みがさ	—	—	黄褐色	—	○	×	—	—	—
38	高杯	—	—	3.6+	—	—	—	—	—	なで	へろ みがさ	—	—	赤褐色	—	○	×	—	—	—
39	甕	17.2	22.3	18.9+	なで	なで	へろ みがさ	白	へろ みがさ	白	なで	なで	—	暗茶褐色	○	×	—	左	—	—
40	甕	22.1	—	4.8+	へろ みがさ	へろ みがさ	—	—	—	—	—	—	—	赤褐色	—	○	—	—	—	—
41	高杯	—	—	4.4+	—	—	—	—	—	?	?	—	—	淡黄褐色	—	?	×	—	—	—

番号	種類	法 量 (cm)			整 形								色調	そ の 他					備 考			
		口径	最大径(中位)	器高	口内	口外	胴内	胴外	底内	底外	頸内	頸外		脚内	脚外	耳	丹塗	穿孔		へら形	丸底	
42	器台	—	25.4(脚径)	7.6+	—	—	—	—	—	—	—	?	?	—	?	—	—	—	—			
43	高杯	—	19.4(脚径)	7.5+	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	—	—	—	—	—			
44	壺	—	20.1	20.8+	—	—	へら (1749)	よこ はじ	へら (1749)	たて はじ	?	へら みがき	—	—	○	○	○	?	○			
45	壺	17.7	—	8.9+	なで	なで	—	—	—	—	なで	なで	—	—	—	○	—	右	—			
46	壺	—	20.1	20.8	へら みがき	へら みがき	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—			
47	甕	—	—	2.2+	?	?	へら (1749)	?	—	—	—	—	—	—	—	—	×	—	右			
48	壺	—	—	7.1+	—	—	—	—	—	へら (1749)	?	—	—	—	—	○	—	—	—			
49	台付直口壺	—	12.6	5.3	?	へら みがき	?	へら みがき	?	へら みがき	—	—	—	—	—	—	○	—	—			
50	台付直口壺	7.0	—	10.2	—	へら みがき	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—			
51	甕	6.7	7.6	7.9	?	?	はじ (1749)	?	煎 みぎ	?	—	—	—	—	—	○	○	○	左	×	焼成後穿孔	
52	高杯	—	—	2.9+	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	×	—	—	—	
53	高杯	—	—	3.2+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
54	器台	20.7	—	9.1+	?	?	—	—	—	—	—	へら みぎ	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—
55	器台	19.7	—	10.3+	?	?	—	—	—	—	—	—	?	?	—	—	—	—	—	—	—	
56	器台	24.2	—	9.1+	?	へら みがき	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	
57	器台	—	28.4(脚径)	13.1+	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	—	—	—	—	—	—	—	
58	器台	—	21.8(脚径)	5.6+	—	—	—	—	—	—	—	へら (1749)	—	—	—	—	—	—	右	—	—	
59	高杯	—	18.6(脚径)	6.6+	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	—	—	—	—	—	—	—	
60	高杯	—	14.7(脚径)	4.7+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
61	高杯	—	—	5.1+	—	へら みがき	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	
62	器台	20.5	—	14.6+	へら みがき	へら みがき	—	—	—	—	—	へら みぎ	?	—	—	—	○	—	—	—	—	
63	器台	22.6	—	11.3+	?	?	—	—	—	?	?	?	へら みぎ	—	—	—	○	—	—	—	—	
64	器台	24.2	—	11.3+	?	?	—	—	—	—	—	?	?	—	—	—	—	—	—	—	—	
65	器台	21.7	26.4(脚径)	18.7+	?	?	—	—	—	—	—	?	?	—	—	—	—	—	—	—	—	
66	器台	—	29.3(脚径)	16.5+	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	—	—	—	—	?	—	—	
67	壺	21.2	—	5.4+	へら みがき	へら みがき	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	
68	高杯	—	—	3.6+	へら みがき	へら みがき	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	
69	高杯	—	21.0(脚径)	6.8+	—	—	—	—	—	—	—	なで	へら みがき	—	—	○	○	—	—	—	—	—
70	器台	—	26.1(脚径)	4.8+	—	—	—	—	—	—	—	へら (1749)	?	—	—	—	—	—	右	—	—	
71	高杯	—	—	2.9+	—	—	—	—	—	—	へら みぎ	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第4地点

整理作業中に見つかったもので、出土土器番号によって出土地点を確認した。これはNo.185 土壙墓上面に他の土器と混在していたものと思われる。

第5地点

2個体分がNo.185 土壙墓上面より出土した。これらは底部が現位置を動いていないように思われ、並んで出土し、その付近に口縁部が他の供献用土器と共に散乱していた。(特殊器台6・7)特殊壺は、特殊器台が出土した付近に胴部片のみが残存していたが、どちらに伴うものか不明である。

(特殊壺3)

(3) 特殊器台・壺の概要

特殊器台 1

暗茶褐色の特殊器台特有の胎土を持ち、わずかに雲母かと思われる金色の鉱物を含む。口縁径41cm、脚径48cm、高さ92.6cmを測り、径34.4cm、長さ72.5cmの細長い円筒状の胴部から急に屈曲して外方に広がる口縁部と脚部を持つ。

口縁部は、二重口縁でやや内傾して約7cmの立上りをみせ、外面口縁端部をつまみあげ丸味を作っている。立上部外面には、幅2mm深さ0.5～1mm程度の平行沈線文13～14条を巡らし、その上下端から繊細な鋸歯文を刻んでいる。口縁屈折部は、やや丸味を帯びている。内面はヘラ磨き、受部の外面はヘラ磨き、内面は櫛状工具によって横になでている。

胴部は、文様帯4段、間帯5段、突帯10条からなり、間帯は、筒を作った後厚さ約1mm、幅8cm程度の粘土を貼り重ね、さらに上下端にはつまみ上げられた突帯がつく、間帯には、口縁立上部と同様な13条～14条の平行沈線文を施す。それを5段にほぼ均等に割り付け4段の文様帯を作る。

文様帯2、4段は、いわゆる立坂(a)の文様を示し、7、8条の平行沈線による連続「S」字状文と、それに従って上下に潰れた類巴形、扇形の透し孔からなる。類巴形、扇形4個の透し孔を1単位とすると、文様帯4段は半単位ずれて存在する。

第1、3段文様帯は、円周112cmの間を長方形の透し孔4か所をほぼ均等にあげ、透し孔と透し孔の間を一単位(約27cm)として文様を構成している。これらを便宜上ほぼ中央で割り、中央から左に向って一単位ごとの説明を行う。

第1段文様帯

第1単位

右から約2cmの幅で3本の稜杉文、2本ずつの直線で仕切られた約5cmの区画内に斜格子文、約2cmの幅で4本の稜杉文を施す。

第2単位

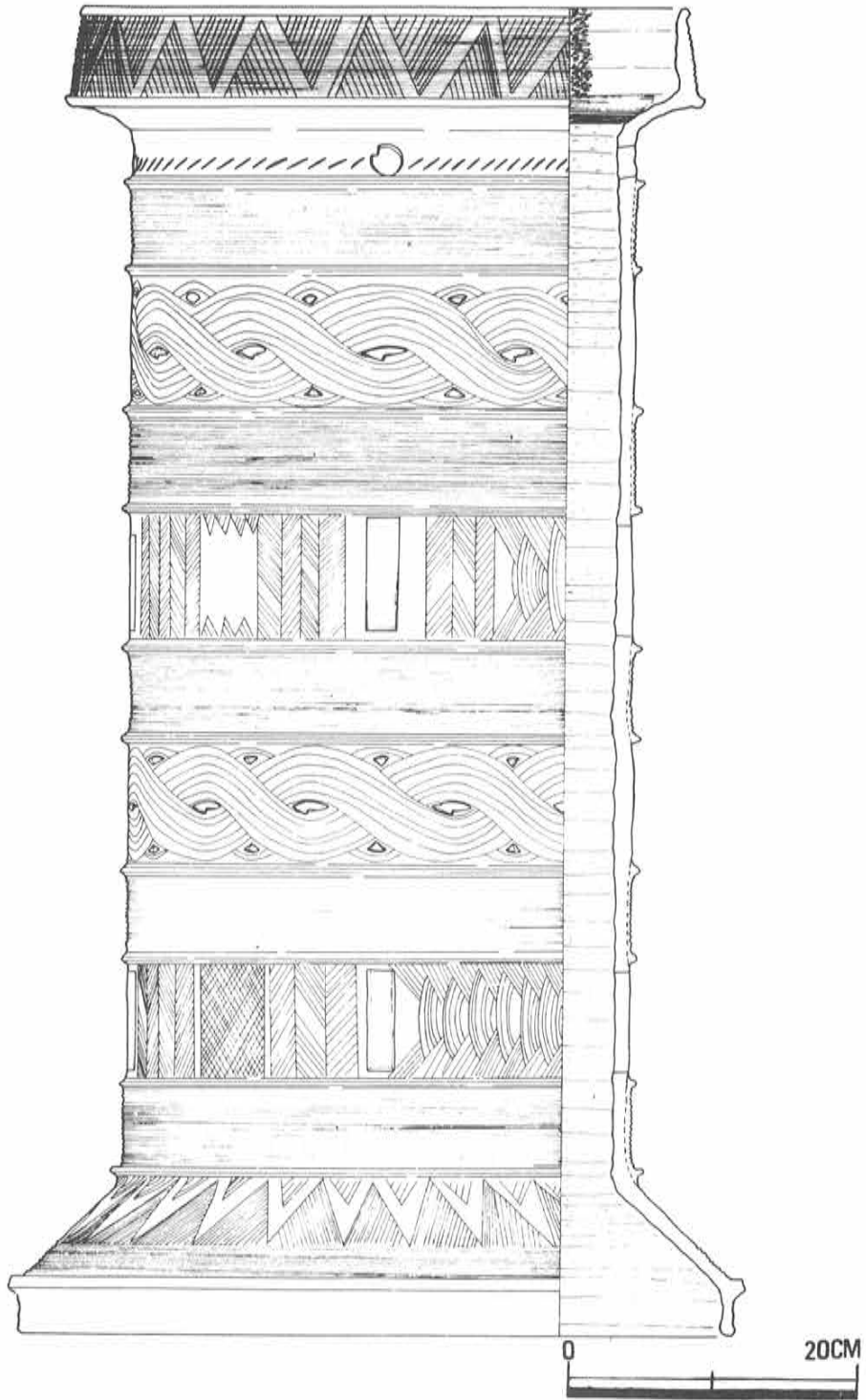
16.5cmの間に、第1、3段に存在する文様を90°回転した形いわゆる立坂(b)を施し、類巴型の透しを右から約10cmの所に置き、弧を右に5個、左に3個置き、上下を9個の鋸歯文状のものによって占める。左端は約2cmの幅で4本の稜杉文を施す。

第3単位

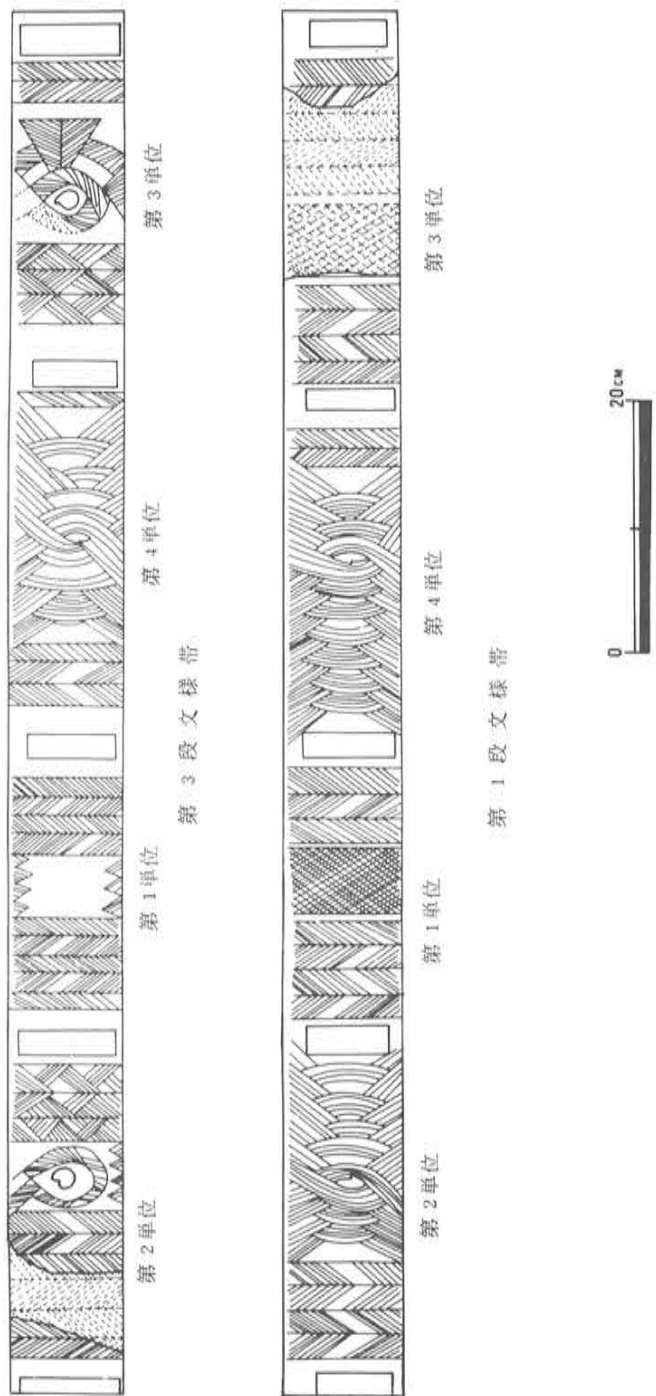
ほぼ1単位の約3分の1が欠損しているため詳細は不明である。右から約2cm幅で2本の稜杉文、第4単位より左の約7.5cm間を4本の稜杉文より構成されている。欠損している所には、第1文様帯の文様構成の上から斜格子文より構成されるものと思われる。

第4単位

約1.5cm幅で2本の稜杉文、21cm間を立坂(b)の文様を施す。類巴型透しを約7cmの所に置き弧を右に3個、左7個置き、上下に11個の鋸歯文状のものによって占める。



第54図 A調査区 特殊器台1 (s=1/5)



第55図 A調査区 特殊器台1 第1・3文様帯展開図 (s- $\frac{1}{6}$)

第3段文様帯

第1単位

右から6cmの幅で4本の稜杉文、幅約5cmに区画された間に高さ約1.5cmの鋸歯文を上4個、下に3個を重ね、上下の鋸歯文の間は無文である。左端幅約7cmの間は5本の稜杉文からなる。

第2単位

右から約2cmの幅で3本の変形稜杉文、幅5.5cmの間のほぼ中央に巴形の透し孔をあけ、まわりに2本の沈線文と、上部分に別の線3本を左へ延長し施している。沈線文内は、多数の斜線によって刻まれる。下面には高さ約1.5cmの4個の鋸歯文が連続し、左には3本以上の稜杉文からなる。

第3単位

右から幅約11cmの間、第1・3文様帯に存在する立坂(b)を変形(もしくは原形)とした文様を施している。第2単位の文様は、これを簡略化したものと思われる。左端6.5cm間は3本の変形稜杉文からなる。

第4単位

右から幅約1cmの稜杉文1本、幅19cmの間に立坂(b)の文様を施し、類巴型の透し孔を約10.5cmの所に置き弧を右に4個、左に3個配置し、上下に8個の鋸歯文状のものによって占める。左端は幅5cm間に3本の稜杉文からなる。

口縁受部から下と、第5段間帯より上は、ほぼ均等に割られた4個の透し孔が存在し、透し孔と透し孔の間には爪形文を施している。これらの胴部内面は右方向のヘラ削りを行っている。

脚裾部外面には、はけ目調整を行い、第1段突帯から下に順に小さな鋸歯文、大きな鋸歯文を上下に連続させ重ねたもの、最下段に平行沈線文を施し、断方形の突帯をもつ屈折部に連なり、脚直立部に至る。調整は直立部内外面ともになで、裾部内面は右方向のヘラ削りを行っている。

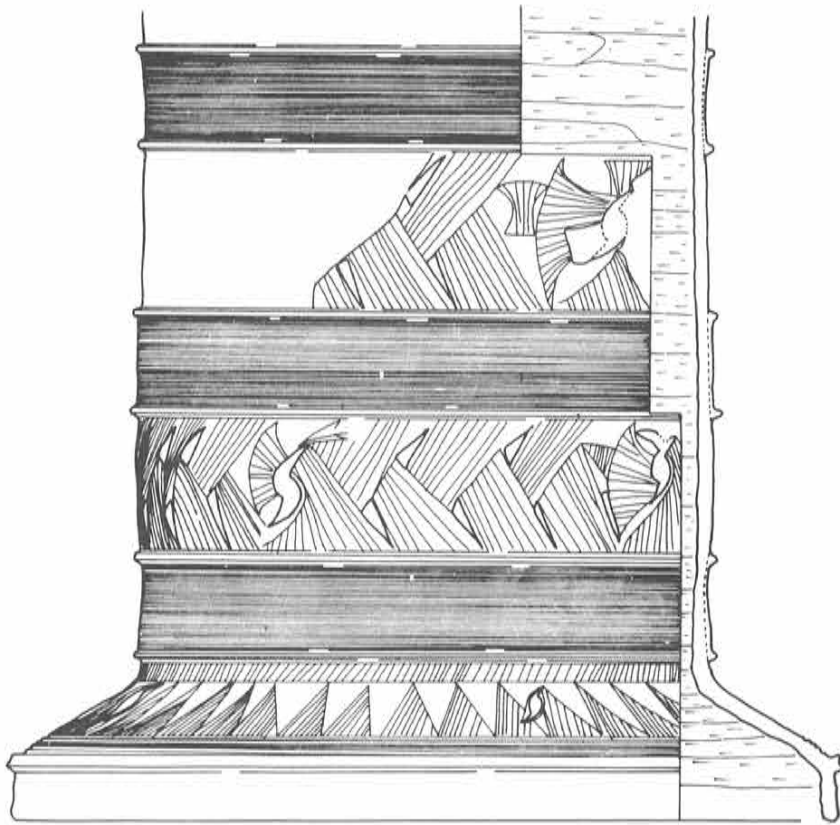
特殊器台2

暗茶褐色の特殊器台特有の胎土を持ち、わずかに雲母かと思われる金色の鉱物を含む。脚部から第3段間帯までが残存している。

脚部径55cm・残存高54cmをなし、径38cm、現長45cmの胴部を持つ。胴部は文様帯2段、間帯3段が残存している。

胴部は筒を作った後厚さ1cm程度の粘土を貼り重ね、さらに上下端には、つまみ上げられた突帯がつく。この間帯には、くし状工具によってキメの細かい細い平行沈線を巡らす。間帯の剝離した面から観察すると、間帯に施されたと同様の縦ナデがくわえられている。

文様帯は、ほぼ幅9cmからなり、立坂(b)の形を90度回転したものを発展させたものと思われる、一単位ごとに切れて連続し文様を構成する。一単位の左端に巴の頭部分を重複したものを置き、右に弧の中に横に線刻し、右端から三角形の透し下に4個、上に2個均等に配布し、この間に斜めに7~8本の線が入り、上下に配している。単位ごとの切れ目の間に「ぼち」形の文様が込るものもある。巴の透しの中には、上部分に左右に透しがあるものもある。内面は、右方向のヘラ削りを行っている。



第56図 A調査区 特殊器台2 ($s = \frac{1}{5}$)

胴部と脚の届曲部には幅1cmの間に斜行沈線が施されている。

脚裾部は、はけ目調整の後上から連続鋸歯文、平行沈線文を外装面に施し、断方形の突帯をもつ屈折部に連なり、脚直立部に至る。内面は、裾部に右方向のヘラ削り、直立部に横ナデを行っている。

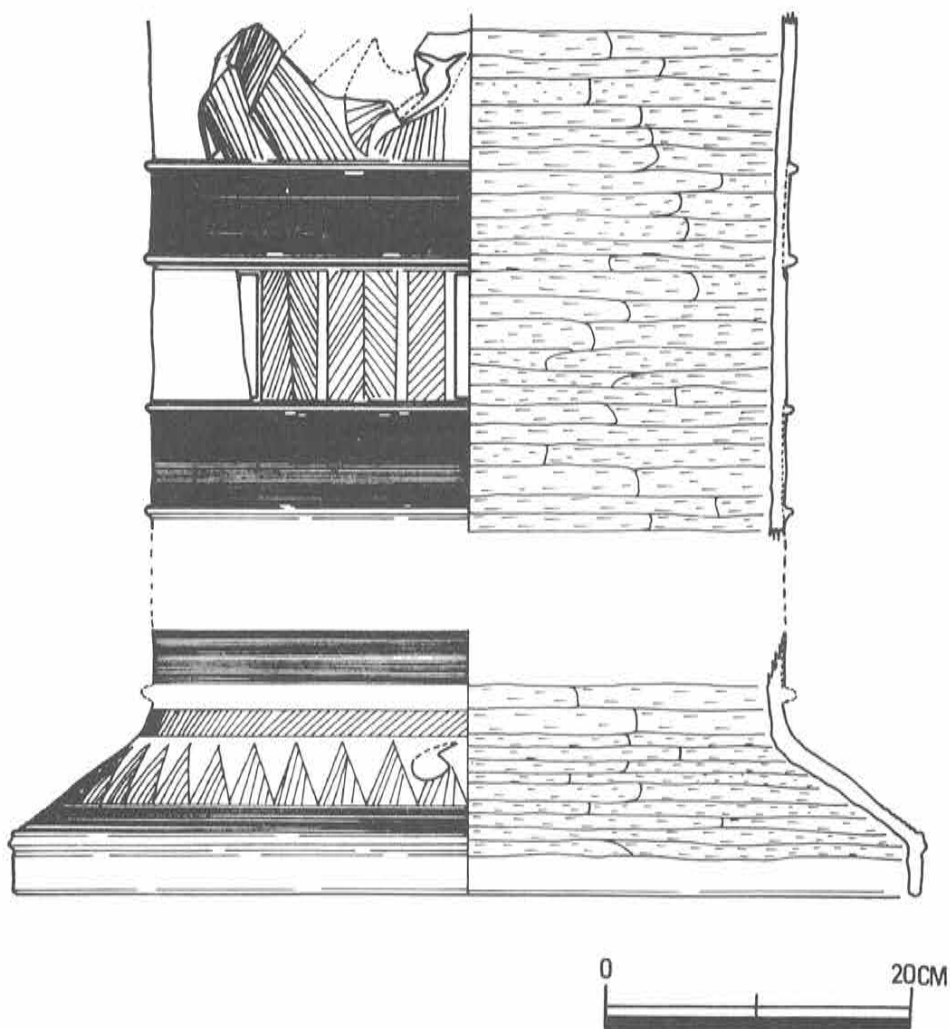
脚裾部は、たて方向のハケ目調整の後、上から連結鋸歯文、平行沈線文を外表面に施し、断方形の突帯をもつ屈折部に連なり、脚直立部に至る。内面は、裾部に右方向のヘラ削り、直立部に横ナデを行っている。脚裾部には均等に割られた巴の部分を重ねた透しがつく。

特殊器台 3

胴と脚の一部が残存し、脚径約59.6cm、胴部径約42cmを測る。当初は、2の特殊器台と同種のものかと思われたが、文様構成の違いにおいて異種のものだと判断した。

胴部は、文様帯2段、間帯2段が残存し、間帯の整形は、2の特殊器台と同じである。文様帯は、上部分が2と同じ文様形態を示し、下段は約15cm間に5本の稜杉文を配置している。しかし、この文様帯の配置が、5の特殊器台には、同一文様帯に共存している例もみられるため、この文様構成で全体を構成するとも思われない。

胴と脚部の屈折部には、幅約1cm程度にほぼ平行に引かれた2本の線に右下りの斜行沈線が施され



第57図 A調査区 特殊器台3 (s=1/5)

ている。脚裾部は、たて方向のハケ目調整の後、上を連続鋸歯文、下に平行沈線文を施し、ほぼ均等に4か所に巴形の透しをあけていると思われる。そして断方形の突帯をもつ屈折部に連なり、脚直立部に至る。内面は裾部に右方向のヘラ削り、直立部に横ナデを施している。

特殊器台4

口縁部と胴部の一部が残存していたのみである。

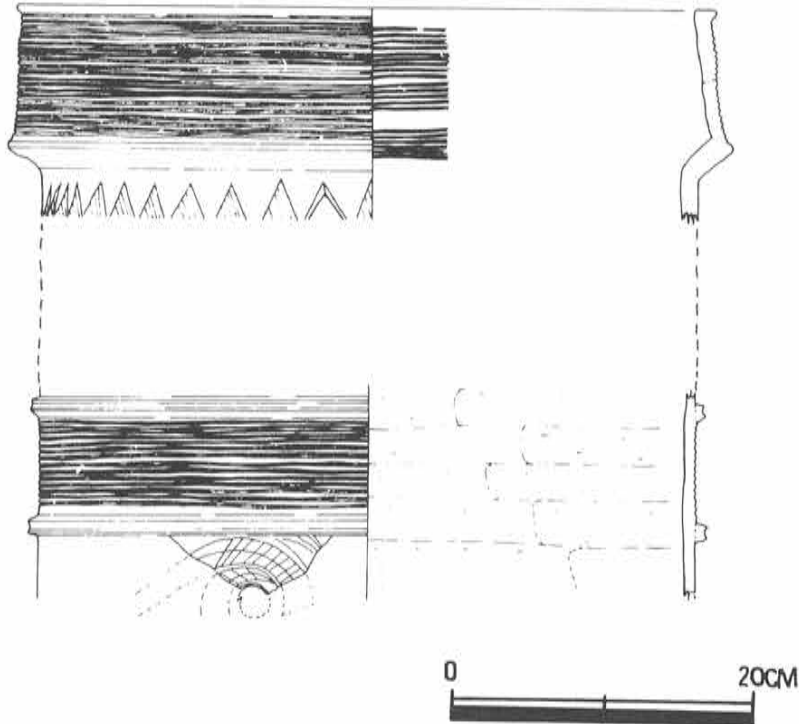
口縁径約46cmを測り、やや内傾して高さ約10cmと長く立上る二重口縁を持ち、その立上り部は、粘土ひもを二段に貼り付けている。外面には、荒い板状工具を使用した平行沈線文を施し、内面には同じ手法で荒い調整を行っている。受部から下には、連続鋸歯文を施し何か所かに三角形の透しをあけている。

間帯には、同様な手法によって平行沈線文を施し、突帯をベルト状に上下に貼り付けている。文様帯には、向木見遺跡、便木山遺跡、西江遺跡等にみられた文様帯の間隔を広くとった数条の平行沈線の上に斜交するやや乱雑で短かな文様の一部が残存している。胴部の内面は、右方向のヘラ削りによって調整されている。

特殊器台5

この種の特殊器台では口縁部が完存している唯一のものである。

口縁は、径約41cmを測り、やや内傾した高さ8cmの二重口縁を持ち、楯状工具によってきめの細か

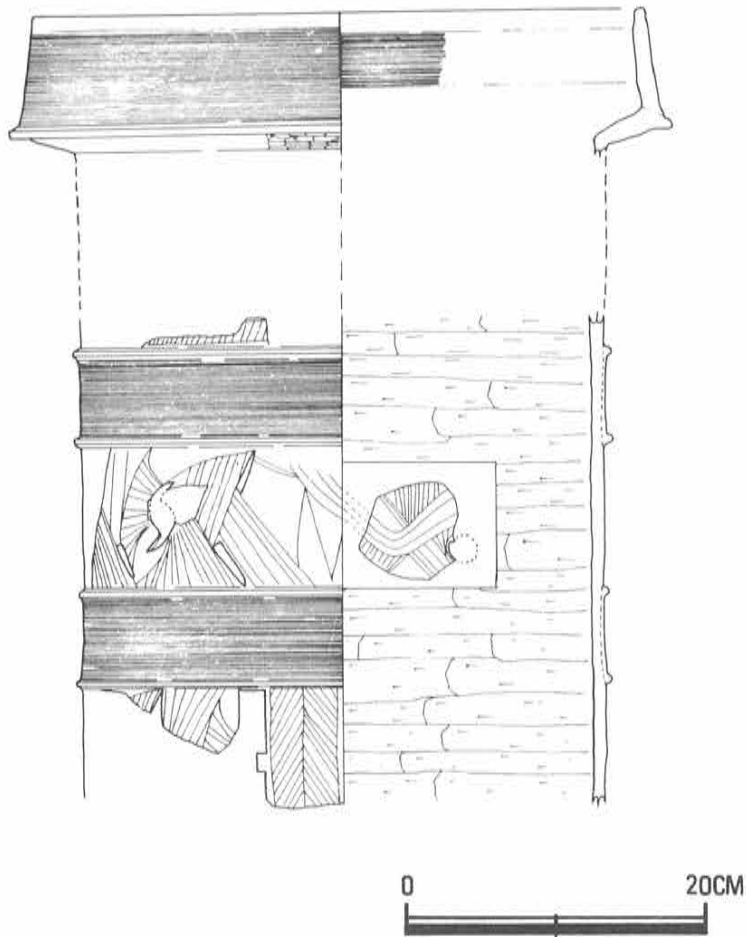


第58図 A調査区 特殊器台4 (s=1/5)

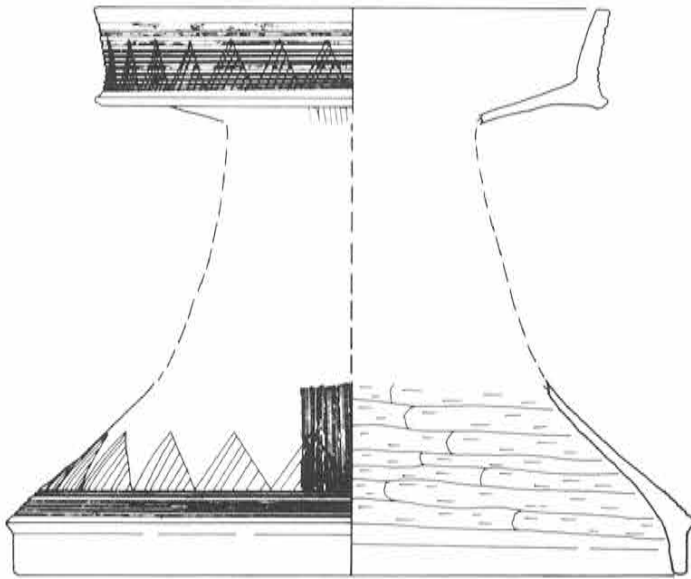
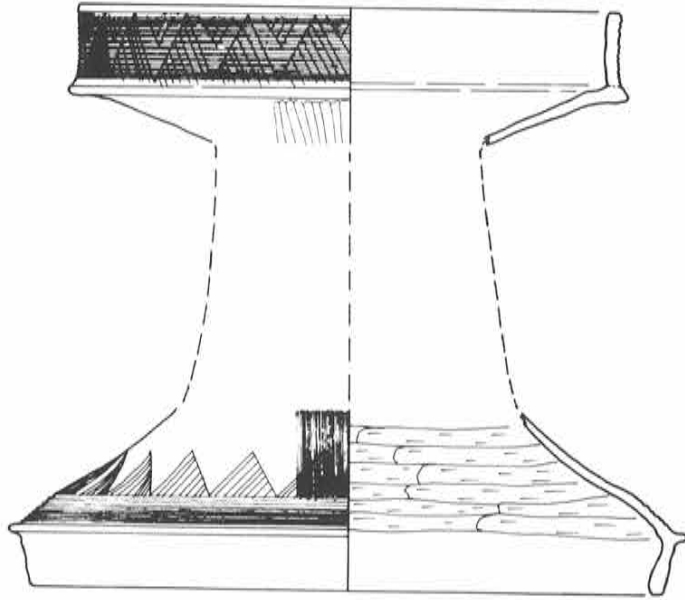
い平行沈線文を巡らせ、立上り部分の内面には、外面と同種の工具による調整によって仕上げられ、受部下外面には横方向のヘラ磨き、内面はナデによって仕上げられている。

特殊器台 6

胴部が欠損し、口縁・脚部の一部分が残存しているのみである口縁径28cm、脚径33cmを測る。口縁は2重口縁をなし、立上りは5.1cmで、外面には幅2～3mm、深さ0.5mm程度の平行沈線文を十数条を施し、その上から幅2.5cm、高さ2.5cm程度の連続鋸歯文によって構成されている。受部下外面には縦のヘラ磨きを行っている。口縁内面は、調整不明である。脚裾部は、縦のはけ目調整を行った後、幅4.3cm、高さ3.3cm程度の連続鋸歯文を施し、下に4～5条からなる平行沈線文を巡らしている。ここから屈折部に連なり、直立部に至る。脚内面は、裾部まで右方向のヘラ削り、直立部は横なでを行っている。



第59図 A調査区 特殊器台 5 (s=1/5)



第60図 A調査区 特殊器台 6(上)・7(上) (s=1/4)

特殊器台7

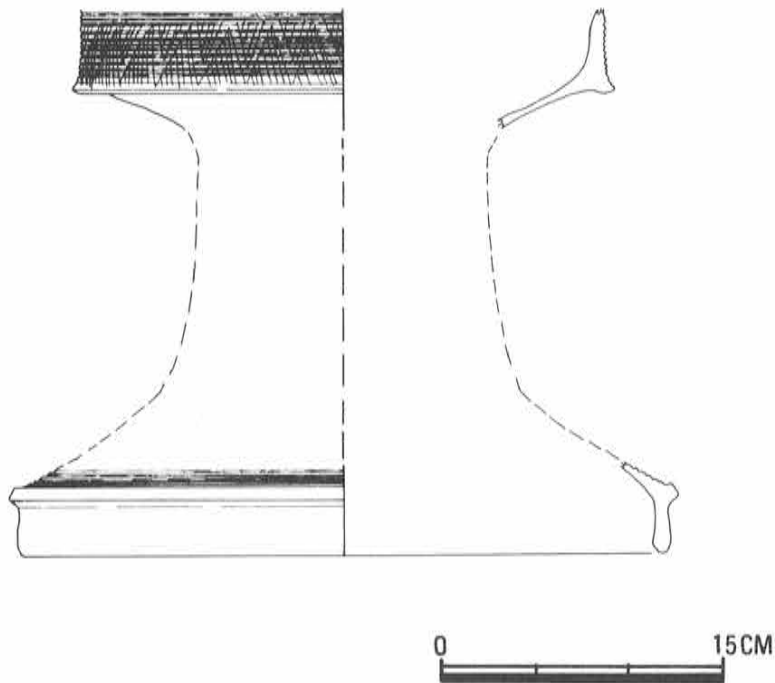
口縁・脚の一部分が残存し、胴部は欠損している。口縁径約28.3cm，脚径約33.3cmを測る。口縁は2重口縁をなし，立上りは約4.8cmを測り，外面には，幅約2～3mm，深さ約0.05m程度の平行沈線文13～14条を巡らし，下は幅約3.8cm，高さ約3.5cm，上は幅約2cm，高さ1.5cm程度の鋸歯文を上下に重ね連続させている。受部外面には縦のヘラ削りを行っている。脚裾部は，全面に縦のハケ目調整を行い，その上から幅約4cm，高さ約2.5cm程度の鋸歯文を連続させ，下に数条の平行沈線文を施している。ここから丸味を帯びた屈折部から直立部に至っている。脚内面の裾部は右方向のヘラ削り，直立部は内外面共になでを施している。

特殊器台8

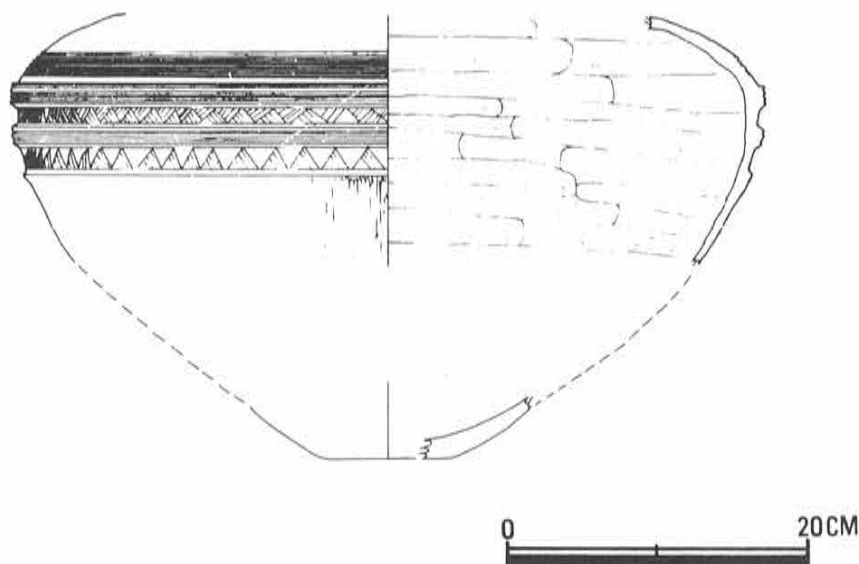
口縁端部，胴部から脚裾部の大部分が欠損している。立上りは約4.3cmが残存し，外面には，幅2～3mm，深さ約0.5mm程度の平行沈線文を10数条巡らし，その上から下は幅約2.3cm，高さ約3cm，上は幅約2cm，高さ2cm程度の鋸歯文を上下に重ね連続させている。脚部は，径約33.6cmを測る。調整は剥落ため不明である。

特殊壺1

胴部と底部の一部が残在しているのみで，口縁部は欠損している。胴部は最大径50cmを測り，断面



第61図 A調査区 特殊器台8($s=\frac{1}{4}$)



第62図 A調査区 特殊壺1 ($s = \frac{1}{5}$)

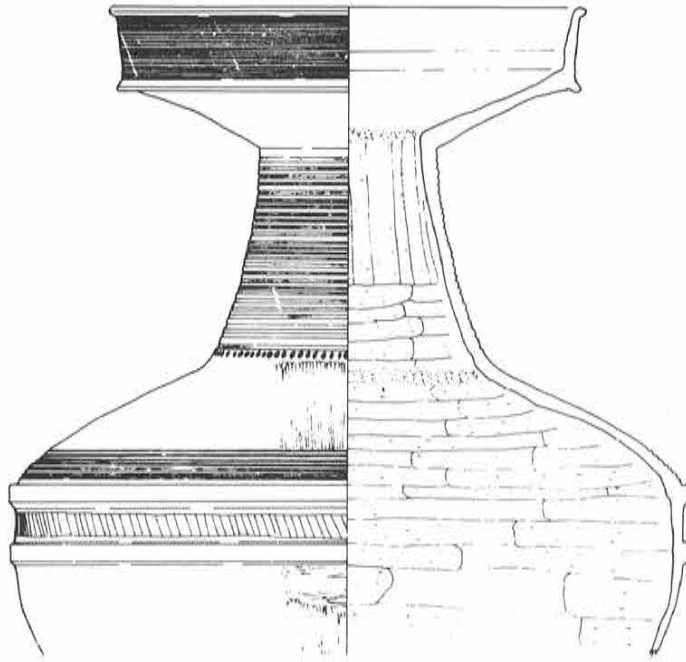
方形の凸帯上面に2~3条の平行沈線文を施した凸帯2本と無文の細い凸帯1本を下方に配している。この凸帯間は上下からの鋸歯文を、下の凸帯間には下方からの鋸歯文をそれぞれ施している。胴部の凸帯下には縦方向のヘラ磨きを行い、外面全面にはベンガラを施している。内面は左方向のヘラ削りを行っている。

特殊壺2

口縁から胴部の3分の2が復元できる。口縁は、径約31cm、高さ5.6cmのやや外反気味の二重口縁を持ち、外面には櫛書き沈線による平行沈線文を施している。口縁内面、受部内外面は剝離のため調整は不明である。頸部外面には平行沈線文を施し、頸部と胴部との境には爪形文を配している。内面は上部に、口縁を接合するために指頭圧痕、頸部の約5分の3には長めの左方向のヘラ削り、その下には胴部をつなぐための指頭圧痕を行っている。胴部は最大径45.2cmを測り、胴部中央には断面方形の凸帯2本を施し、その内には平行沈線内に左下りの沈線を施している。上部凸帯より上には、7本の平行沈線文、肩部には、縦方向のヘラ磨き、下部凸帯より下3cmを横方向のヘラ磨き、その上からベンガラを施している。内面は、左方向のヘラ削りを施している。

特殊壺3

胴部の一部のみが残存し、最大径38cmを測り、胴部中央には断面方形の凸線文を施し、その内には、平行沈線内に左下りの沈線を配している。凸帯上部には、爪形文を施している。内面には左方向のヘラ削りを行っている。



第63図 A調査区 特殊壺2(上)・3(下) ($s = \frac{1}{5}$)

小結

土壙墓群はほぼ中央に存在するL字状溝を境に、溝による区画を持つものと持たないものとに大別することができる。

溝による区画を持たない土壙墓で尾根筋に対し直交するものの中には3～4基が直列してならび溝状の連結となるものが存在する。溝状の連結は5連結存在し、いずれも全長約8mを測り同規模であり、このうち2本には一部に列石が存在している。この連結した溝状の土壙墓群の間に中心主体と考えられる大形土壙墓1～3基が存在し、尾根筋を占地する共通性を持ちあわせている。ただ主軸方向は尾根筋に平行するものと直交する土壙墓の2通りが存在する。

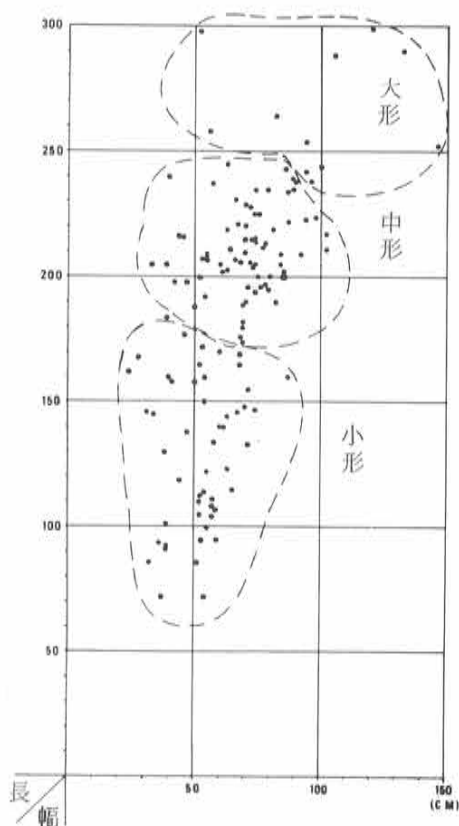
溝による区画を有する土壙墓は、方形の区画を有するものと山側に溝を持つものがみられる。方形の区画に伴うものには、中心主体と思われる大形土壙墓が存在し、山側に溝を持つものには認められない。規模は第1、2区画を含めた長辺と第3、4区画を含めた長辺はいずれも長さ約20mを測り、ほぼ同様な数値によって占められる。また第3、4区画に存在する尾根筋に直交する溝5本は、ほぼ平行関係をなしている。

第1区画は、土壙墓の存在形態が周溝内にあるもの、平坦面にあるもの、区画外に存在するものの3様が認められ、平坦面にあるものは大きく、区画外にあるものは小さいという大きな変化が床面計測値に表われている。

これらのことより土壙墓を作る時点においてあらかじめ丘陵全域の墓域の規格がなされていたと思われ、埋葬される人も規格の中でどの位置に埋葬されるかもすでに決められておりこれにそって土壙墓が順次築造されていったと考えられる。

溝によって区画を行い盛土を行うものと土壙墓のみに区画を行うものとは大きな労働力の差がみられ、また溝による区画を持たないものには空間スペースがほとんどなく、持つものは密集しないという大きな特徴がみられる。

床面施設に枕石を有するグループは、第1・3・4区画、第1・5グループに存在する。これら枕石を有するグループは、大半が糸巻き形、もしくは長方形の平面形を呈し幅が狭いものに限られている。溝による区画を有しない一群中では、東西斜面にこれらの土壙墓が存在する。また第1・2・3・4グループの中で糸巻き形をなすものは枕石を持たない。枕石は1対のものばかりではな



第64図 A調査区 土壙墓計測値

く、2対、3対などのものもあり、特異な埋葬状態を表わしている。

また第2・3・4グループには円形の柱穴状の掘方を持ち、その中心部付近を除き礫が詰められているものがあり、遺構上面に何らかの目印を立てたものと推察される。

A空間は第3・4区画を尾根筋に占地させず全体を東側におしやり、ここに広い場所を取っており、墓前祭祀の上でB空間と共に必要不可欠の場所であったのではなかろうか。B空間では周囲に特殊器台・壺を含めた供献用土器が多量に存在する。このことから、B空間に土器を置き祭祀を行った後、使用済の土器をそのままにせず、周囲にこわして放棄し、次の祭祀までここを開けておく必要性がそこに存在していたものと思われる。出土土器から推定すると、墓が造られなくなるまで当空間に土器が供献されたものと思われる。

また供献用土器が出土している場所は他に第1区画北周溝、第4区画西周溝、第1グループ南東側部分にもみられる。これらは出土状況から推察して各々のグループ、もしくは区画に供献されたものと思われる。一方B空間の多量の供献用土器の出土群と特殊器台、壺は土壙墓全体の被葬者、つまり共同体の意識を強めるためのものという観点からA調査区全体を意識した供献用土器群と推察される。

7. その他の遺構遺物

(1) 住居址

1号住居址

土壙墓群第1区画北周溝付近の尾根筋上に検出した。未掘であるが、上面プランの状態から径4m前後の住居址と推定される。

2号住居址

土壙墓群第1グループ付近の西斜面上に検出した。尾根側のみに周溝が残存し、周溝から径4m前後の住居址と推定される。

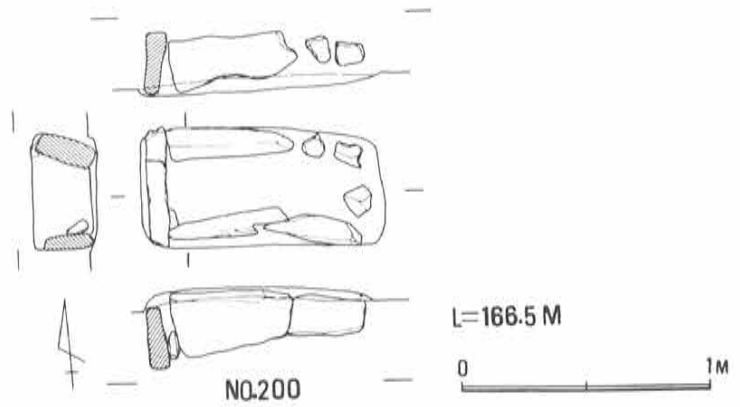
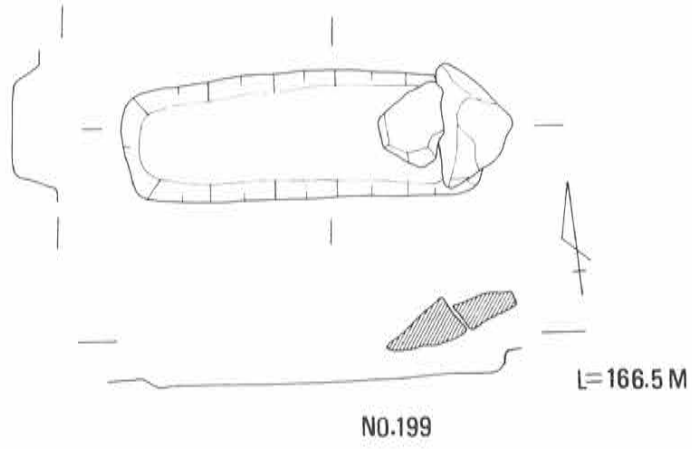
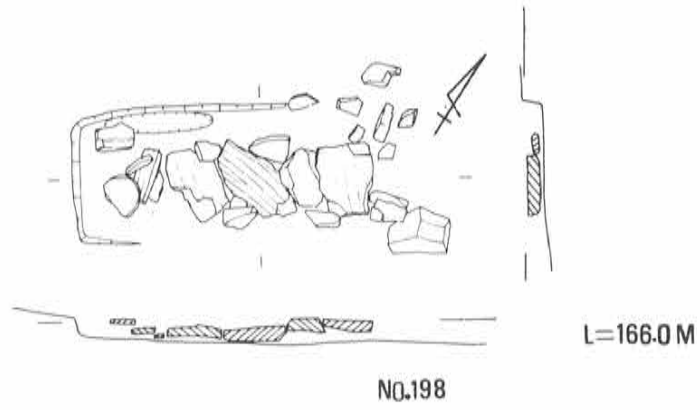
(2) 第2・3区画間の墳墓群

第2・3区画間では密集した土壙墓群は検出されずB空間と呼称している区間である。しかし、この区間にも土壙墓群より時期がやや下ると推察される3基の箱式石棺と1基の石蓋土壙墓を検出している。出土遺物はいずれも皆無である。

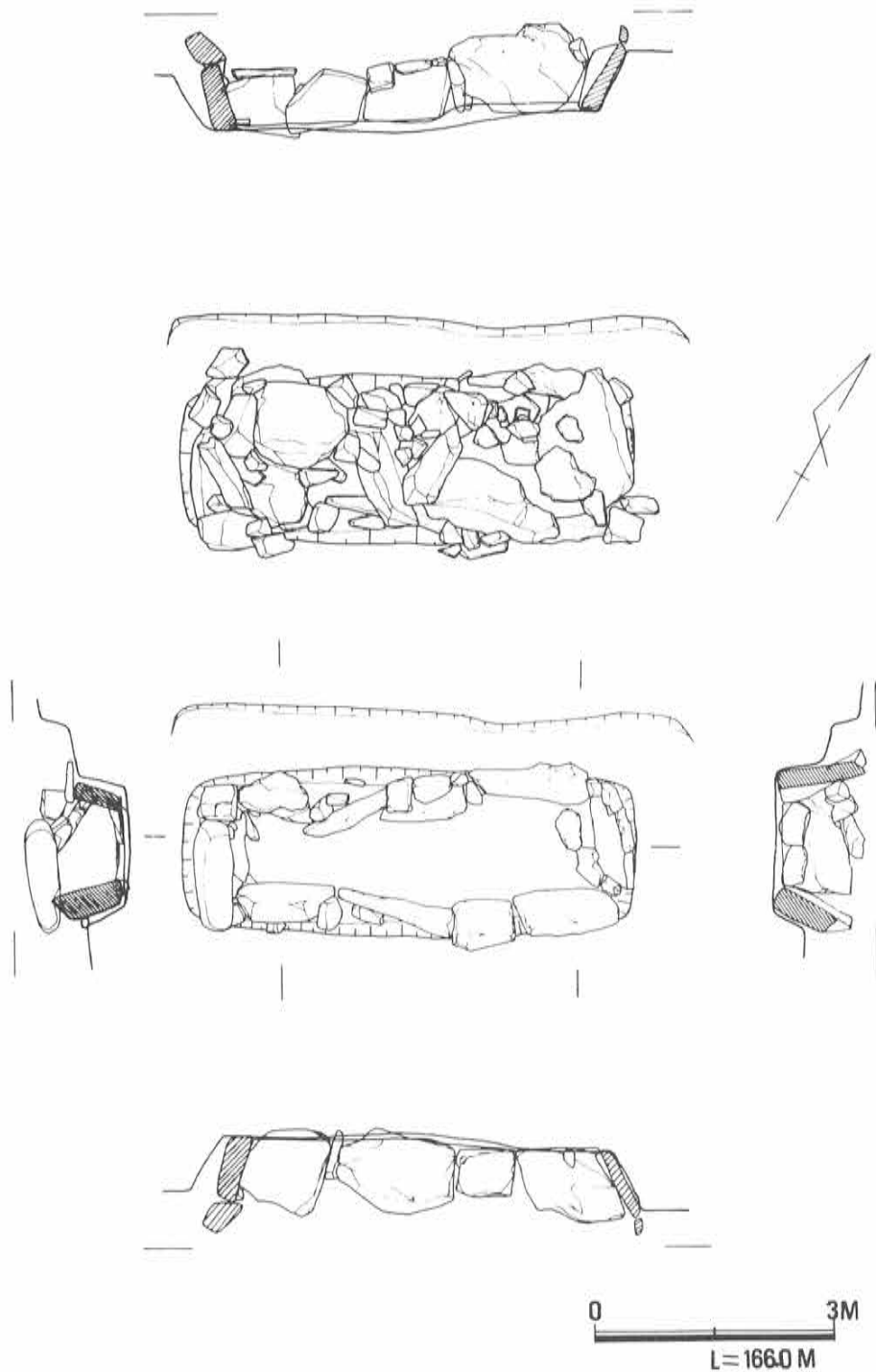
No198は第2・3区画のほぼ中央に検出した箱式石棺の残骸である。小石、側壁とも石材を失っており、わずかに土壙掘方、側壁抜取り痕と床面に扁平な片岩系の敷石が認められるにすぎない。これらの状況から残存長1.5m、幅3.0cm程度の箱式石棺であったと推察される。石棺方位はN55°Eである。

No199はB空間北よりに検出した全長1.3m、幅3.5cm、深さ20cmを測る素掘りの土壙墓である。土壙上面の東端には30~40cm大の石2個を蓋石として使用している。土壙方位はE5°Sである。

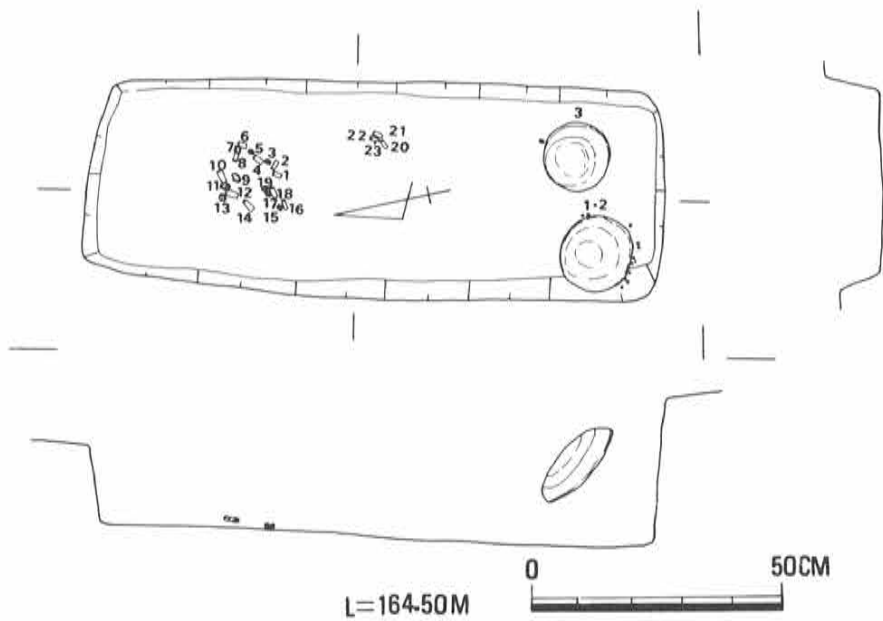
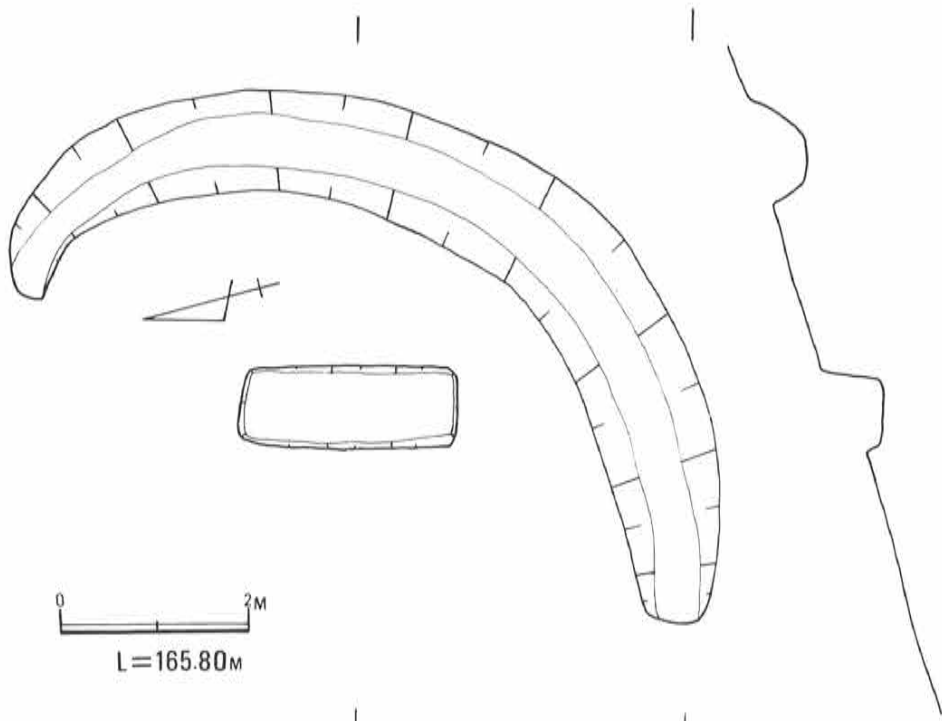
No201はB空間のほぼ中央に検出した箱式石棺である。石室掘方は元来二段掘りであったとみられ、



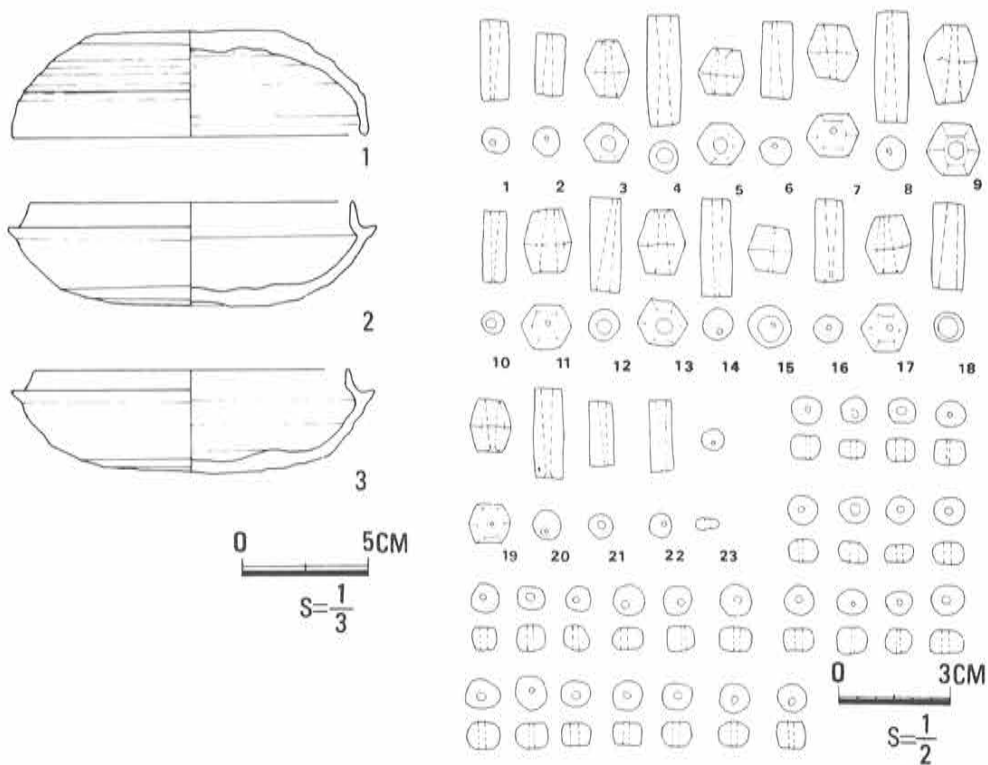
第65図 A調査区 No.198・200箱式石棺 No.199石蓋土壙墓 (s=1/30)



第66図 A調査区 No.201箱式石棺 (s = $\frac{1}{30}$)



第67図 A調査区 1号墳 (s- $\frac{1}{80}$) 主体部 (s- $\frac{1}{15}$)



第68図 A調査区 1号墳出土遺物

上段の尾根側部分がわずかに残存している。下段掘方は内法で全長1.6m，幅50cmを測る。石棺側壁は扁平な石材を立てて使用し，内法で全長1.4m，幅30cmを測る。蓋石は5～6枚の板状の石材を使用し，間に礫を詰めているが，石室内に落込み，また側壁も外側に傾き，石棺自体かなり変形している。石棺内床面は北がやや高く，南に向って低下し，北端に2個の枕石を設置している。石材は丸味のある河原石と片岩系の石を使用している。石棺方位はN60°Eである。

No200はB空間の北よりにNo199と1.5mの間隔を置き検出した箱式石棺である。内法残存長80cm，幅25cmを測る。石材は片岩を使用している。石棺方位はE50°Sである。

(3) 古墳

1号墳

A調査区のほぼ中央で尾根筋から西へ約10mの西斜面上に位置する。墳丘は，封土流出のため残存しなかった。土壌は斜面に平行して掘込まれ，掘方上面では長さ1.3m，幅43cm，床面では長さ1.1m，幅36cmを測り，隅丸長方形の平面をなす。周溝は，土壌を中心にして山側にほぼ半円形に巡り，

表19 A調査区1号墳玉類計測値表

(単位cm, g)

番号	材質	色調	長さ	上幅	下幅	最大径	上口径	下口径	重さ	備考
No.1	碧玉		2.13	0.765	0.78	—	0.26	0.115	2.3	
No.2	〃		1.695	0.825	0.805	—	0.26	0.1	2	
No.3	〃		2.97	0.9	0.88	—	0.345	0.345	4.5	上・下より穿孔
No.6	〃		2.02	0.825	0.805	—	0.32	0.09	2.65	
No.8	〃		2.995	0.915	0.915	—	0.39	0.13	4.8	
No.10	〃		1.935	0.63	0.615	—	0.235	0.085	1.4	
No.12	〃		2.585	0.86	0.87	—	0.32	0.095	3.5	
No.14	〃		2.645	0.825	0.825	—	0.21	0.09	3.3	
No.16	〃		2.175	0.82	0.815	—	0.31	0.095	2.4	
No.18	〃		2.35	0.83	0.835	—	0.385	0.185	2.9	
No.19	〃		2.435	0.79	0.78	—	0.32	0.085	2.75	
No.20	〃		1.78	0.64	0.62	—	0.2	0.075	1.35	
No.22	〃		1.86	0.64	0.645	—	0.245	0.09	1.4	
No.4	水晶		1.43	0.825	0.74	1.115	0.3	0.11	2.25	
No.5	〃		1.245	0.84	0.78	1.21	0.28	0.125	2.25	
No.7	〃		1.45	0.950	0.875	1.425	0.335	0.135	3.45	
No.9	〃		2.05	0.805	0.9	1.425	0.355	0.175	4.9	
No.11	〃		1.715	0.84	0.805	1.325	0.32	0.1	3.7	
No.13	〃		1.66	0.8	0.81	1.28	0.33	0.13	3.1	
No.15	〃		1.265	0.81	0.795	1.19	0.33	0.1	2.3	
No.17	〃		1.57	0.9	0.84	1.23	0.29	0.145	2.9	
No.21	〃		1.425	0.775	0.76	1.075	0.285	0.09	2.1	
No.23	ガラス		0.29	0.56	—	—	0.115	—	0.1	

頂点において幅1.2m、深さ40cmを測りこれを境にして両端に下り、それにもなって溝は消滅する。この周溝から径約6mの円墳と推定される。

遺物の出土状態

須恵器杯身2、杯蓋1、管玉13個、切子玉9個、ねり玉数百個、ガラス製小玉1個が土壌内より出土した。杯蓋のセットと杯身は、南の短辺より5～10cm離れた床面から約10cm上より、杯身の部分を反転させ、枕に使用していたような状態で検出した。ねり玉は西端にある杯セットの底部に密着した状態で1か所に固まって出土した。他の玉類は、ほぼ中央部東端と北側30cmの所で出土した。中央部東端では、管玉3個、小玉1個が固まって出土した。北側では、管玉10個、切子玉9個が約径15cmの円をえがくような状態にあり、交互に糸を通していたものと思われる。

遺物

須恵器

1は青灰色を呈し、口径14.2cm、器高4.2cmを測る杯蓋である。天井部より体部に向う約 $\frac{1}{4}$ の高さまで左回りのヘラ削りを行い、他の内外面とも横ナデを施している。

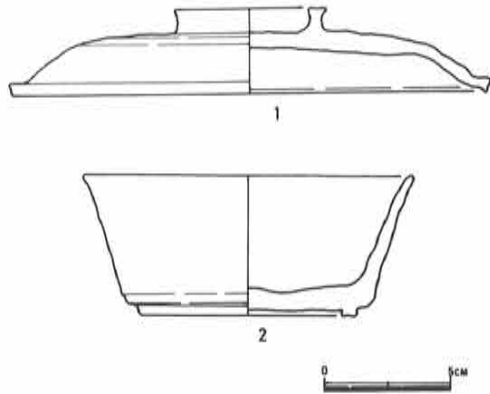
2は1とセットになるもので青灰色を呈し、最大径15.1cm、口径13cm、高さ4.1cmを測る杯身である。底部より体部に向う約 $\frac{1}{4}$ の高さまで左回りのヘラ削りを行っている。

3は青灰色を呈し、最大径15.2cm、口径12.5cm、器高4.4cmを測る杯身であり、底部より体部へ向う $\frac{1}{4}$ 位の高さまで左回りのヘラ削りを行い、他はロクロの回転を利用した横ナデを行っている。

(4) 火葬墓

いずれも遺構に伴わず遊離した状況で表土層内より出土した。これらの須恵器は、同一丘陵上に存在する且原遺跡の出土状態から推察して火葬墓に使用されたものと思われる。

1は杯蓋である。口径18.9cm、高さ3.4cmを測り、高台様のつまみがつく。ヘラ削りは天井部から口縁部にいたる約 $\frac{1}{2}$ を行っている。2は杯身である。口径13cm、高さ5.6cmを測り、高台がつく。底部はヘラ削りを行い、重ね焼きを行っている。



第69図 A調査区 出土須恵器 (s- $\frac{1}{3}$)

第2節 B調査区

1 B調査区の概要

本調査区は開発区域内の北西部にあたり、A調査区より北西に延びる丘陵上に位置している。この丘陵は戦後に開墾が行われており、調査区域内で唯一の大幅な地形変化と削平を受けていた地区である。このため第一次トレンチ調査では丘陵平坦面には遺構が認められず、丘陵頂部周辺部の緩斜面のあまり地形変化を受けていない部分に遺構の広がりが想定された。また第二次調査途中でA調査区との境を画すB調査区南端を一部拡張した時点で箱式石棺、古墳の周溝等を検出したことから、古墳時代後半を中心とした時期の遺構が考えられていた。

この様な状況から推察して、本調査区はA・C両調査区に比較して遺構の密度が低く、遺構の残存状況も悪いとみられ、A・C調査区の調査の終了後に遺構検出地区の調査を行うことを予定していた。しかし、その後A調査区を中心とした予想外の密度を持った墳墓群の広がりが判明したため、調査期間内での終了が困難な状況となり、さらに調査経費の問題がからみ、重機（ブルドーザー）を使用した表土除去作業を行い期間の短縮を計る方法をとった。さらに、A調査区を中心とした墳墓群の調査期間の再延長のみかえりとして、本調査区の早急な調査による引渡しが要請された。このため拡張区全面の十分な検出作業を行わずに遺構の処理を行い、また、一部については検出のみで遺構内の掘下げを行うことなく調査を終了せざるえない状況であった。

表土排除面積は1800m²程を行いこの調査区内から、住居址3軒、古墳5基、古墳時代の土壇墓1基、箱式石棺3基を確認した。

2 B調査区の遺構・遺物

(1) 竪穴住居址

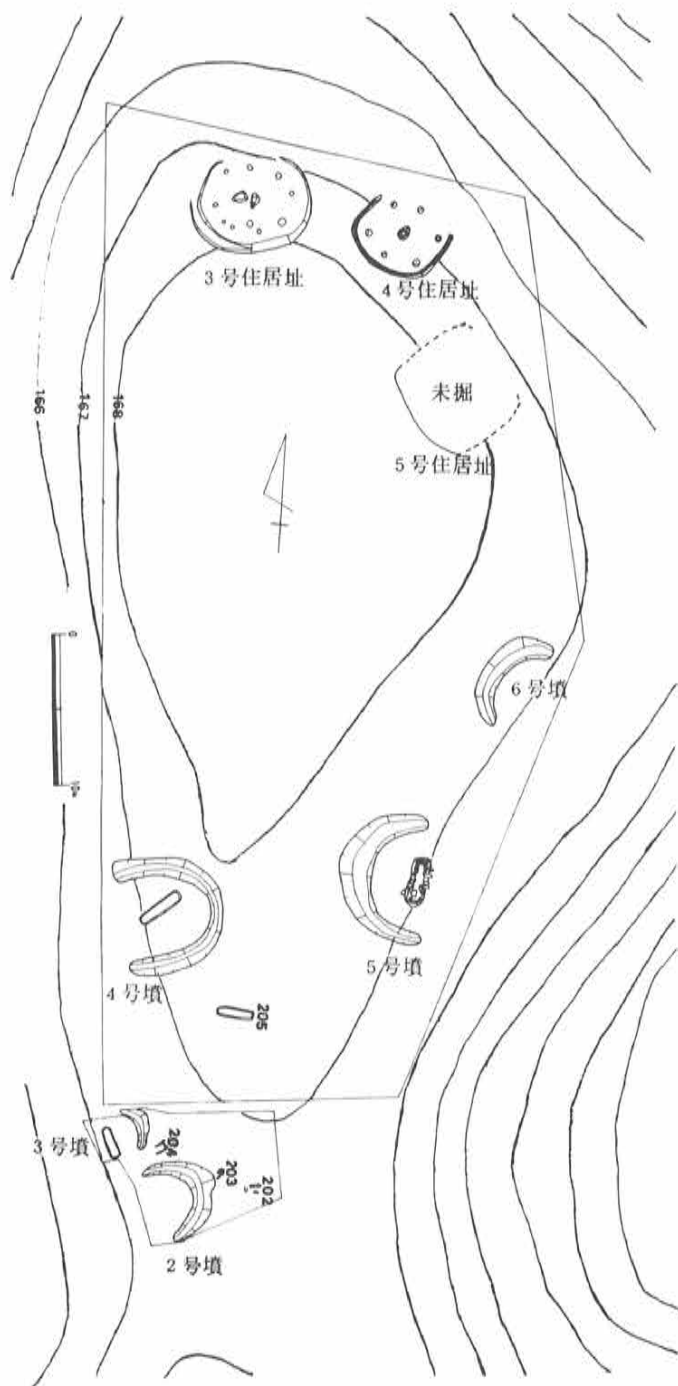
3号住居址

本住居址はB調査区北端の緩斜面上に検出した竪穴住居址である。住居は掘込みの南西部で一部床面が重複していることや、2基の中央ピット等から建替えが行われている。平面形態は一部壁面の削平を受けてはいるが、六角形に近い形状を呈し、最大径7.5mを測る。

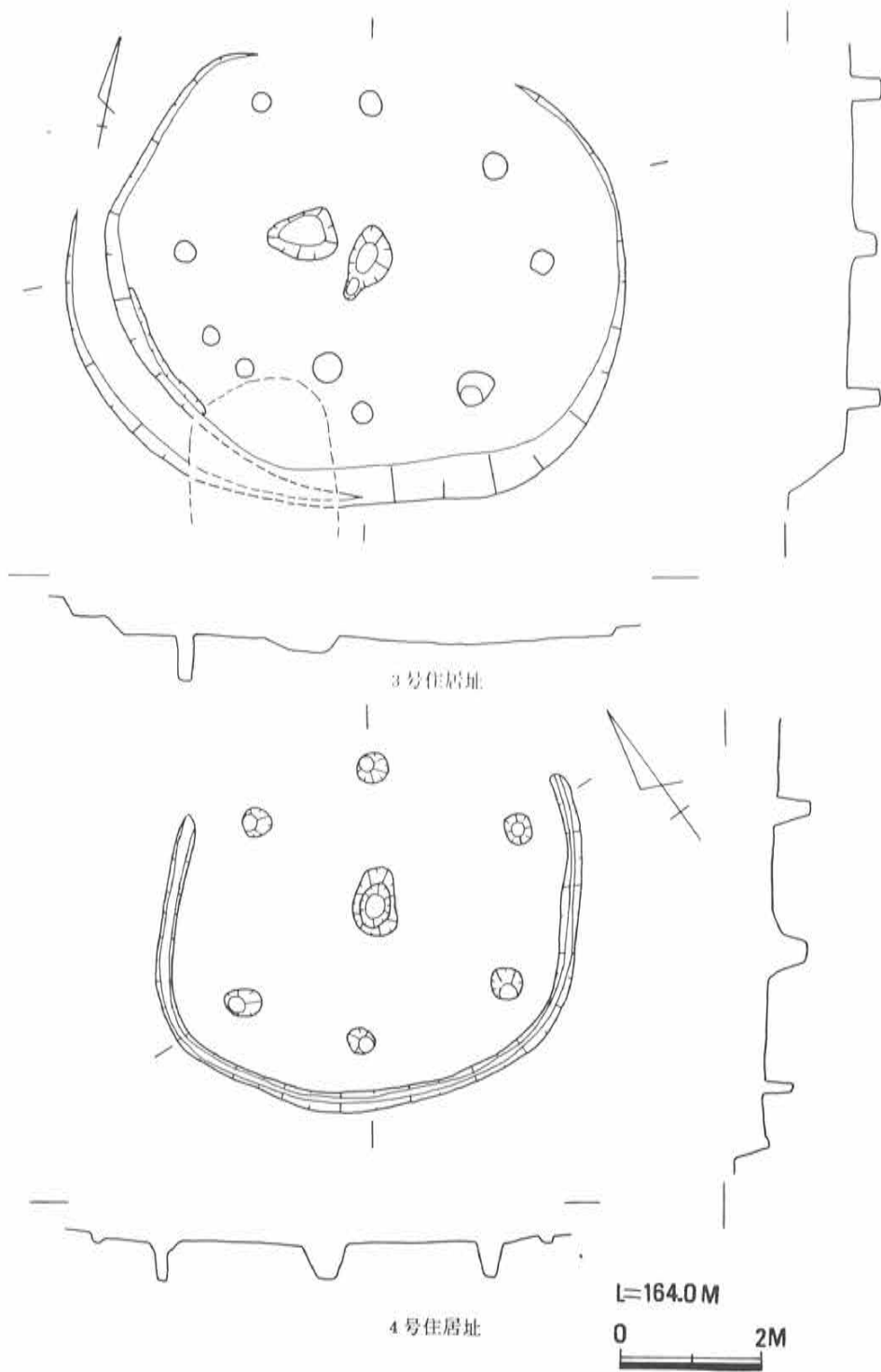
床面に検出した柱穴は10本を数え、そのうち主柱穴と考えられるものはほぼ等間隔に検出した8本で、径25～35cm、深さ40～60cmを測り、ほぼ同形同大のものがこれにあたる。住居址の掘込みは北側の一部で削平を受けているが、南側の最大部分で80cmを測る。壁下の溝は南西部で一部検出したのみで、他は認められなかった。

2基の中央ピットのうち最終面のピットは床面のほぼ中央に位置し、長径1m×短径60cmの不整形の平面を有し、深さ35cmのU字形の断面を呈す。旧ピットは床面のやや東に位置し、新ピットと同様に不整形の形状を呈し、長径1m×短径70cm、深さ25cmを測る。

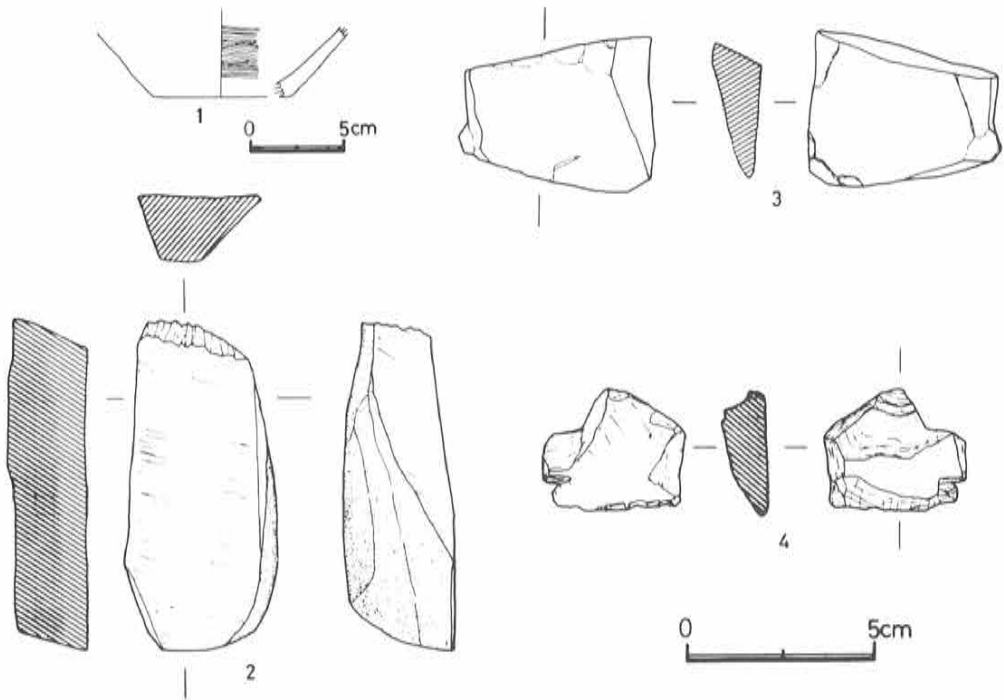
出土遺物は住居址内埋土中より少量の土器片、サヌカイト片が出土したのみで、図化可能なものは認められなかった。時期については出土土器片中に凹線文様を施した壺頸部片が認められることから、弥生時代中期後半の時期と推察される。



第70図 B調査区 遺構配置図 (s- $\frac{1}{500}$)



第71图 B調査区 3・4号住居址($s = \frac{1}{100}$)



第72図 B調査区 3・4号住居址出土遺物

4号住居址

B調査区北端の緩斜面に1号住居址と3m程の間隔を置き検出した竪穴住居址である。平面形態は残存部分より推察して1号住居址と同様に六角形の形態を呈しており、最大径6.5mを測る。

柱穴は壁面より60cm程内側に1.8～2.3mの間隔を置き検出した6本であり、径40cm、深さ40～50cmを測り、ほぼ同形同大の規模である。住居北半は削平により壁面が認められないが、南半で最大深さ50cmを測る。壁下の溝は削平部分を除き巡っており、幅20～25cm、深さ10cm程を測る。

中央ピットは住居址床面のほぼ中央に位置し、長径1m×短径60cmを測る不整形のプランを有し、深さ50cmを測りU字形の断面を呈す。

出土遺物は住居址内埋土中より少量の土器片、サヌカイト、砥石片が出土している。時期については確定しがたいが、1号住居址とほぼ同時期と推察される。

出土遺物

(1)は壺形土器の底部小片である。外面は剝離により調整不明であるが、内面にはハケ目状の整形が認められる。(2)は一部欠損しているが、長さ8.5cm、幅4cm、厚さ2cmを測る砥石である。使用面は2面認められ、材質は砂岩である。(3)は緑色片岩、(4)はサヌカイトの剝片である。(3)は加工痕は認

められないが、隣接する旦原遺跡No11・14住居址内から多量に出土した石器、石器未製品と同種の石材である。

5号住居址

4号住居址と4mの間隔を置き、南西緩斜面に検出した竪穴住居址である。本住居址は完掘を行うことができず、プランの検出とトレンチによる掘込みの残存状況を把握したのみで終了した遺構である。

平面形態は削平が著しく南西部分の一辺6.5mを測る一部を検出したのみで確定しがたい。出土遺物は少量の土器片のみで、時期についても確定しがたいが、おそらく1・2号住居址と同時期と推察される。

(2) 古墳

2号墳

B調査区最南端で検出した遺構である。墳丘の西半は大幅に削平を受け主体部も消失しており、尾根側に三日月形に周溝が残存しているのみである。周溝は最大幅1.4m、深さ50cmを測り、すり鉢状の断面を呈している。墳丘規模は残存周溝より推察して径5m程を測る円墳であったと考えられる。出土遺物は皆無であった。

3号墳

B調査区南端の西斜面で2号墳と周溝をほぼ接する様な状況で検出した遺構である。周溝は尾根側に三日月形に認められ最大幅1m、深さ30cmを測り、V字形に近い断面を呈している。墳丘規模は残存周溝より推察して径4.5mを測る円墳であったと考えられる。

古墳主体部は墳丘のほぼ中央にN20°Wの方位で地山掘込みの土壇を設けている。規模は長方形のプランを呈し、内法で全長2.05m、検出面よりの深さ30cmを測る。土壇幅は南端を最小とし、内法幅40cm、北端を最大とし幅55cmである。土壇内の木棺痕跡等は確認できなかった。

副葬品は土壇内の底面より10cm程上の西側壁に接して、須恵器蓋杯2セット、刀子1本、鉄鏃2本が出土している。

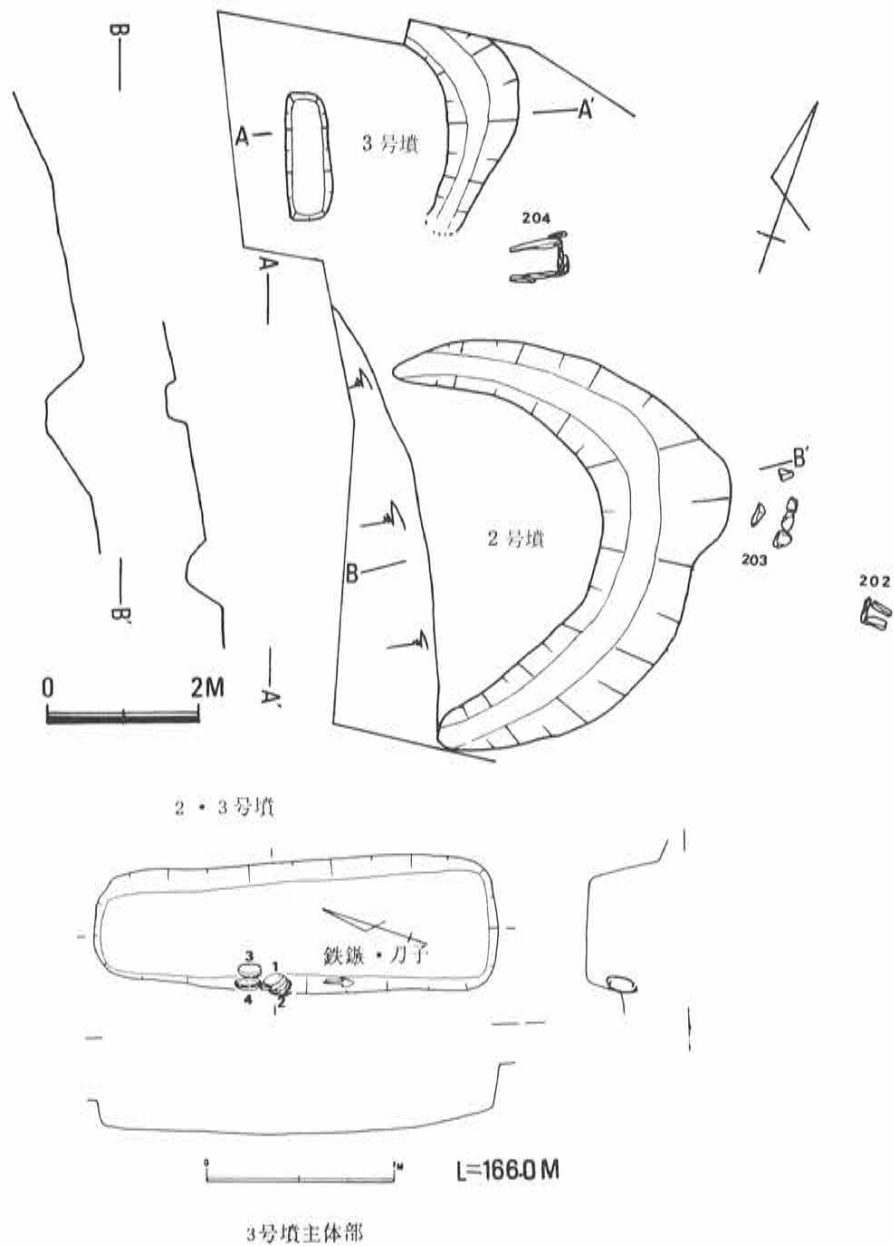
出土遺物

須恵器

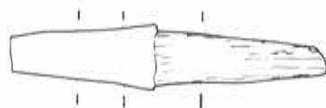
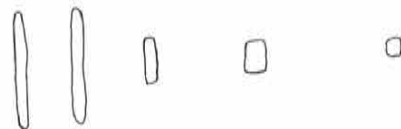
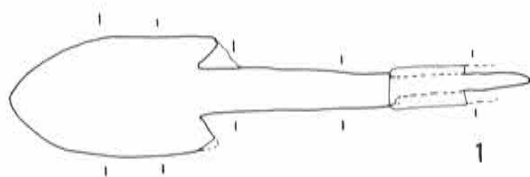
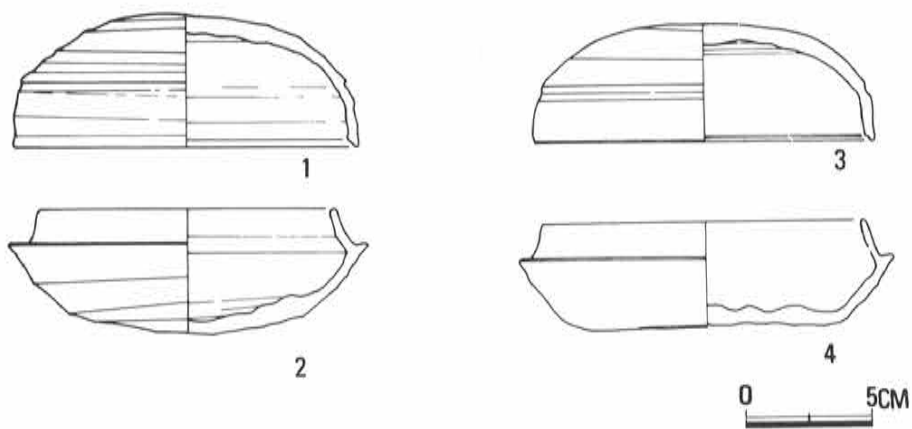
1は口径13.7cm、高さ4.8cmを測る杯蓋である。ヘラ削りは、天井部から体部へ向う約々まで行い、左方向で、色調は青灰色を呈す。2は1とセットになる杯身である。口径13.1cm、最大径15.2cm、器高4.3cmを測る。ヘラ削りは、底部から体部の約々まで行い、左方向である。色調は青灰色を呈す。3は口径13.9cm、器高4.3cmを測る杯蓋である。ヘラ削りは、天井部から体部へ向う約々まで行い右方向である。4は3とセットになる状態で出土したが、蓋と身とは合わず、埋葬時にセットとして使用したものであろう。口径11.9cm、最大径14.5cm、高さ5cmを測り、ヘラ削りは右である。

鉄器

1は鉄鏃で全長13.8cm、頭部の長さ5.1cm、茎部の長さ3.9cm、身部の長さ4.8cmを測る。茎部には竹状の矢の痕跡が残存し、頭部には逆刺がつく。2は鉄鏃で、残存長10.5cm、頭部の長さ3.1cm、身



第73図 B調査区 2・3号墳 (s=1/100) 3号墳主体部 (s=1/40)



第74図 B調査区 3号墳出土遺物

の長さ5.4cm、茎部は2cm残存している。茎部には竹状の矢の痕跡が存在し、頭部には逆刺がつかない。3は刀子で、刃の先端を欠いているため全長は不明である。残存長8.4cmで柄の木質が残存している。

4号墳

B調査区南半の西斜面に検出した遺構である。表土除去時点では他と同様に墳丘は認められず、周溝を確認できたのみである。周溝は、尾根側に馬蹄形に巡っており最大幅1.2m、深さ60cmを測り、V字形の断面を呈している。墳丘規模は残存周溝より推察して径6～7m程の円墳であったと考えられる。

主体部は墳丘のほぼ中央にN52°Eの方位に掘込まれた素掘りの土壇である。土壇は長方形のプランを呈し内法で全長2.7m、最大幅55cm、検出面よりの深さ60cmを測り、ほぼ水平の底面を有す。

副葬品はいずれも床面に接して、土壇内北西端から須恵器蓋杯4セット、鉄鎌1点、やや南に須恵器杯6点が出土し、また南西から鉄鎌10本が一束となって出土している。

出土遺物

須恵器

杯は口径、器高などから2種類に大別が可能である。A類としては、杯蓋1・6、杯身2・8でB類としては、杯蓋の3・7・10、杯身の4・5・9がこれにあたる。1は杯蓋で口径14.9cm、器高4.3cmを測り、ヘラ削りは体部から天井部にかけての約 $\frac{1}{3}$ を行い、左方向である。2は杯身で口径13.0cm、最大径15.4cm、器高4.4cmを測り底部から体部にかけての約 $\frac{1}{3}$ に左方向のヘラ削りを行っている。3は杯蓋で、口径13.7cm、器高4.5cmを測りヘラ削りは、体部から低部にかけての約 $\frac{1}{3}$ を行い、左方向である。4は杯身で3とセットをなすものである。口径12.5cm、最大径14.3cm、器高4.1cmを測り、底部から体部にかけての約 $\frac{1}{3}$ に右方向のヘラ削りを行っている。また内面にベンガラと思われる赤色顔料が認められた。5は杯身で、口径12.2cm、最大径14.3cm、器高4.6cmを測り、底部から体部にかけて約 $\frac{1}{3}$ に左方向のヘラ削りを行っている。6は杯蓋で、口径14.7cm、器高5.2cmを測り、ヘラ削りは天井部から体部にかけての約 $\frac{1}{3}$ に左方向に行っている。7は杯蓋で、口径13.8cm、器高4.5cmを測る。ヘラ削りは天井部から体部にかけての約 $\frac{1}{3}$ に行い、左方向である。8は杯身で、口径13.1cm、最大径15.5cm、器高6.2cmを測り、ヘラ削りは底部から体部にかけての約 $\frac{1}{3}$ を行い、左方向である。9は杯身で、口径12.6cm、最大径14.3cm、器高4.6cmを測り、ヘラ削りは底部から体部にかけての約 $\frac{1}{3}$ を行い、左方向である。10は杯蓋で、口径13.5cm、器高4.3cmを測り、天井部から杯部にかけての約 $\frac{1}{3}$ を行い、左方向である。

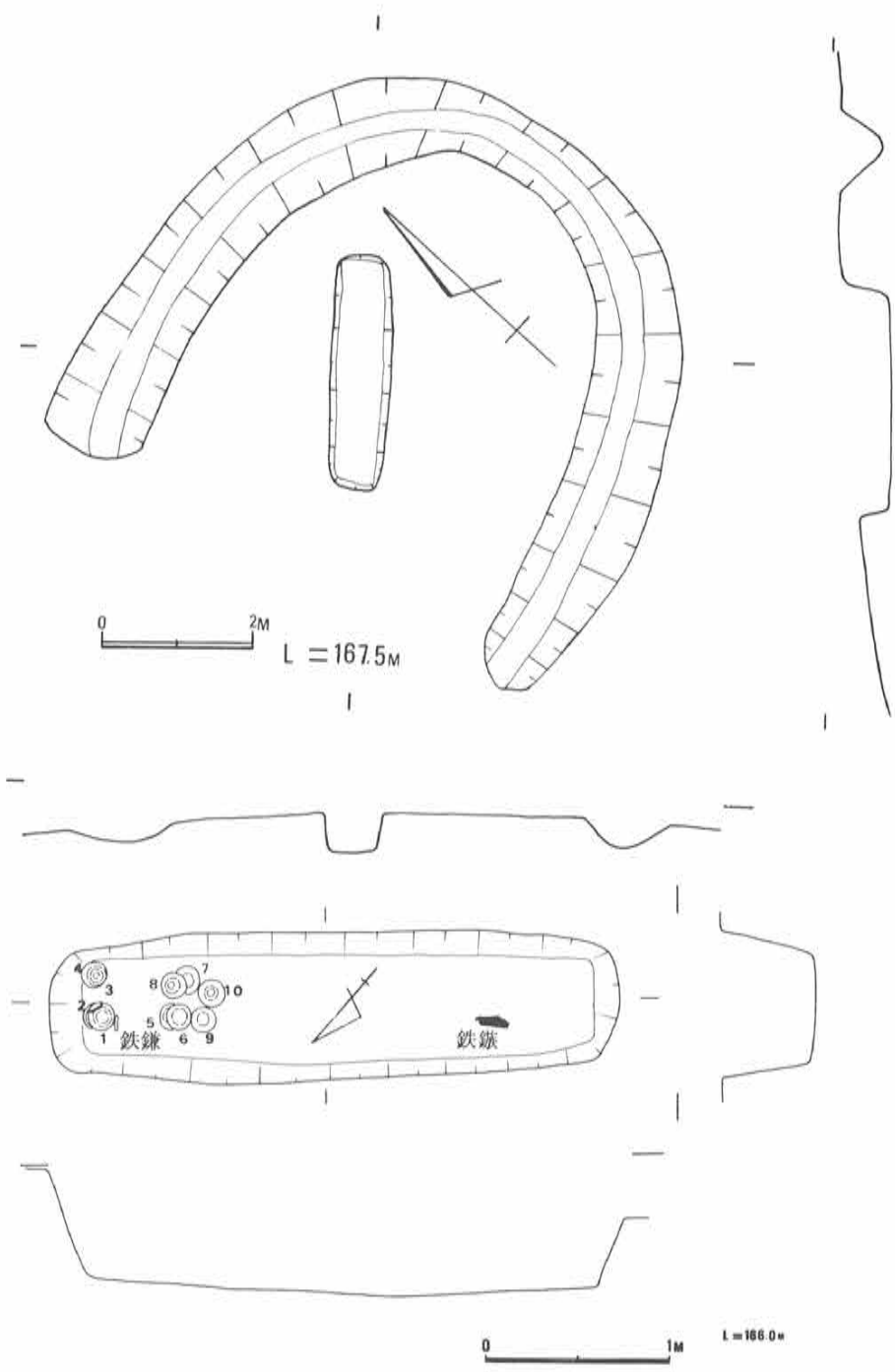
鉄器

鉄鎌

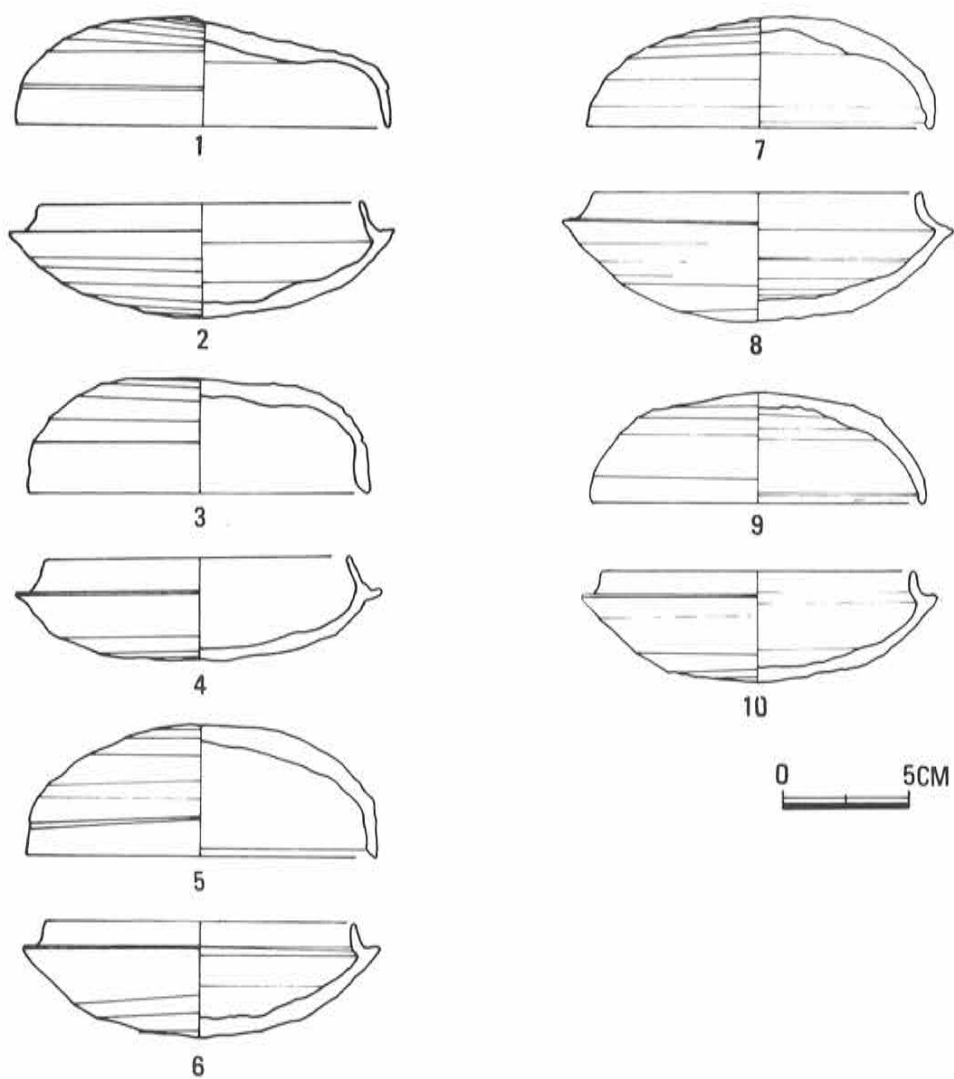
長さ9.8cm、刃長7.8cm、刃幅2.6cmを測る。先端部で刃の側に若干彎曲する。

鉄鎌

鉄鎌は大部分が破片となっているので、本数はつかめないが、頭部から10本と推定される。2は、全長13.3cm、頭部の長さ2cm、茎部の長さ3.8cm、身部の長さ5.5cmを測り、茎部には木の痕跡が残



第75図 B調査区 4号墳 ($s = \frac{1}{100}$) 主体部 ($s = \frac{1}{40}$)

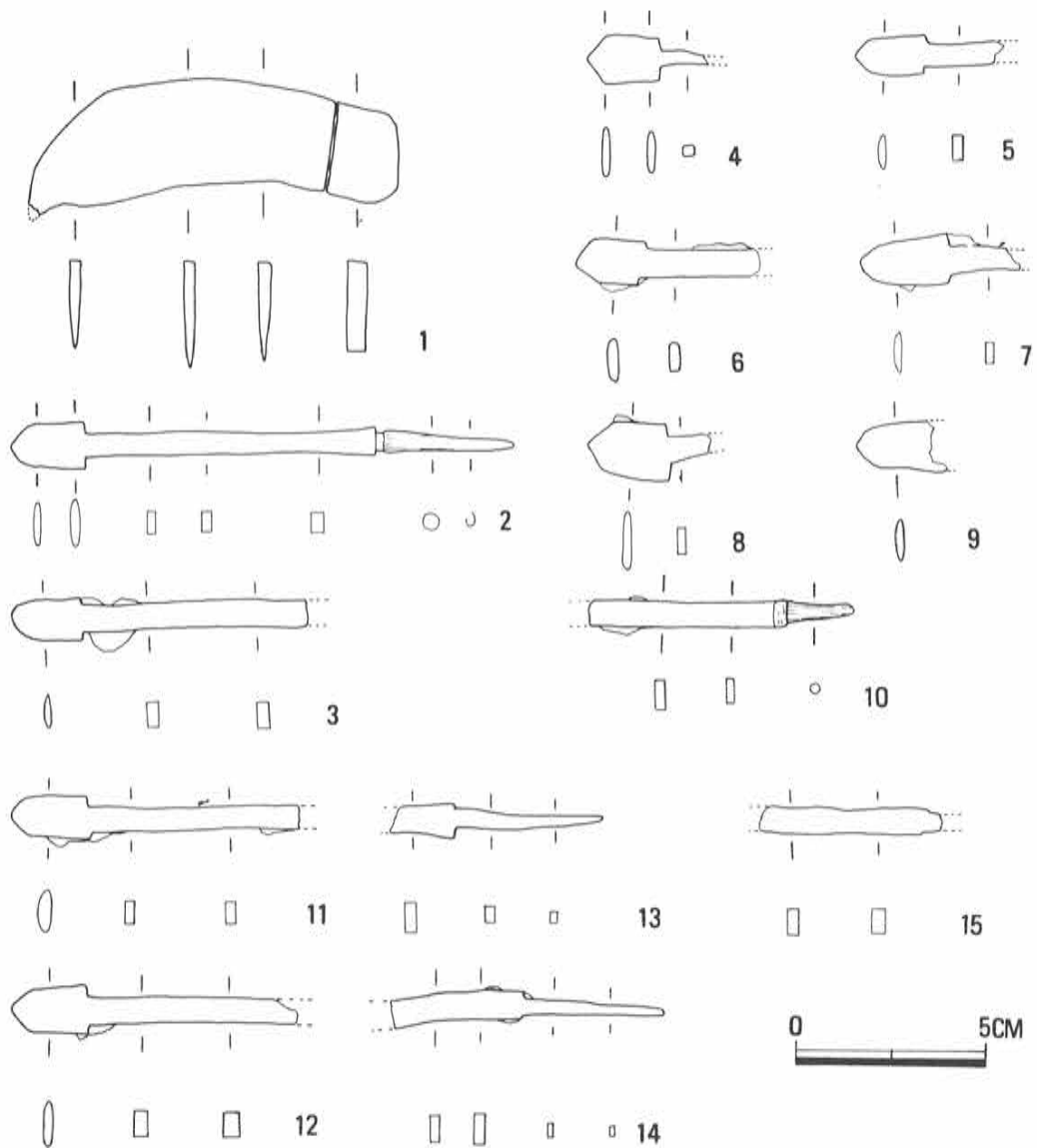


第76図 B調査区 4号墳出土須恵器 ($s = \frac{1}{3}$)

る。

5号墳

丘陵の東斜面に検出した遺構である。地形観察からは他と同様に墳丘等の痕跡は認められず、表土排除後に遺構を確認した。周溝は半円形に尾根側に認められ、最大幅2.2m、深さ30cmを測り、すり鉢状の断面を呈している。墳丘規模は残存周溝より推察して径7m程を測り、6号墳と同規模の円墳

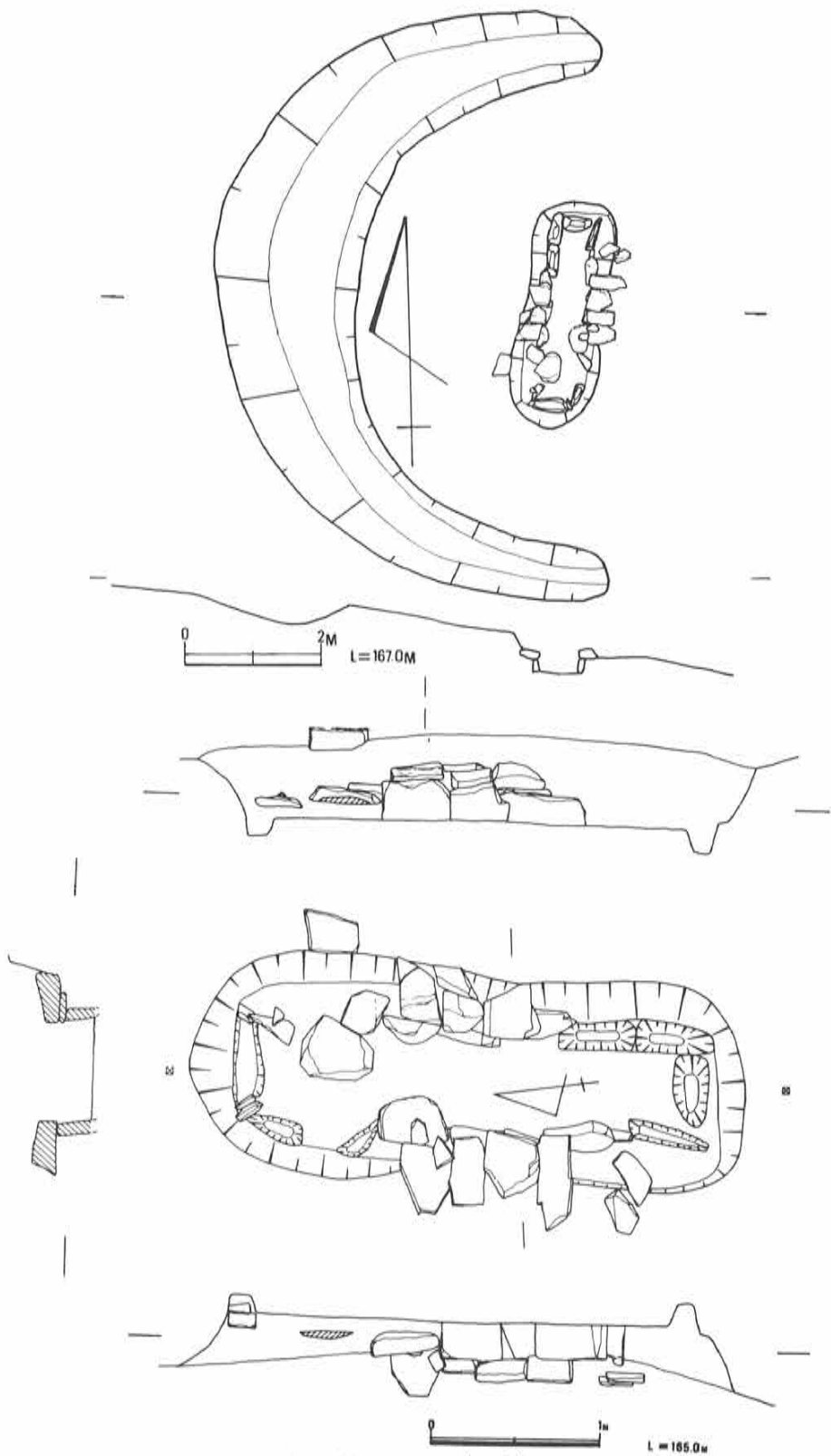


第77図 B調査区 4号墳出土鉄器 (s=1/2)

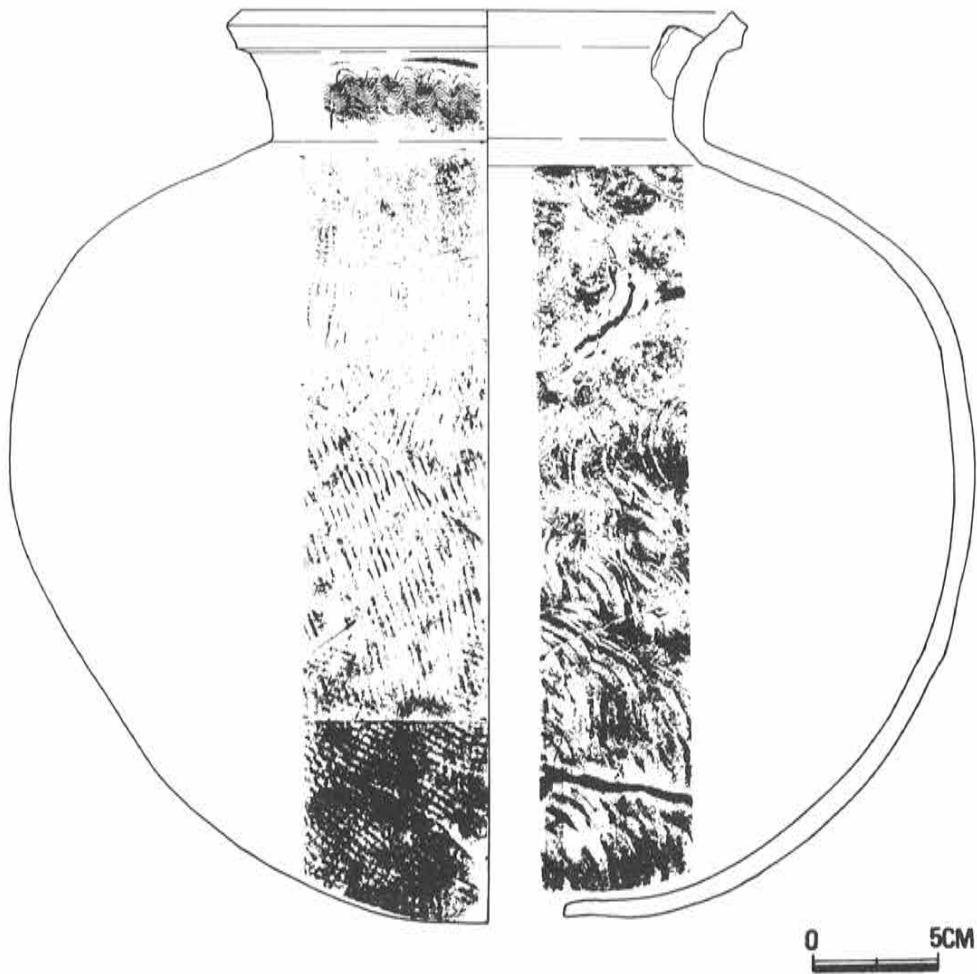
であったと考えられる。

古墳主体部は墳丘のほぼ中央にN7°Eの方位に掘込まれた小竪穴石室である。石室掘方は元来二段掘りの掘方であったものが、かなりの削平を受けて、わずかに尾根側のみに上段の掘方が残存している状況である。下段の掘方は長方形のプランを呈し、内法で全長2.8m、最大幅1.0mを測る。

石室は両小口部分のいずれもがぬき取られて、ぬきとり痕跡のみである。わずかに残存している両



第78図 B調査区 5号墳 (s=1/100) 主体部 (s=1/40)



第79図 B調査区 6号墳遺物 (s= $\frac{1}{3}$)

側壁は、掘方内に箱式石棺状に扁平な石を上面のレベルをそろえて立てて配列している。石室二段目は一段目の配列とは異なり、小口積を行っている。石室内法は推定全長2.5m、最大幅65cm、残存高30cmを測る。

出土遺物は皆無である。

6号墳

B調査区中ほどの東斜面に検出した遺構である。調査前の地形観察等では墳丘は確認できず、表土排除後の検出作業により遺構を確認した。墳丘は開墾等により大幅に削平を受けており墳丘封土、主体部等は確認できず、わずかに周溝が残存しているのみであった。周溝は尾根側に三日月状に残存しており、最大幅1.6m、深さ30cmを測りすり鉢状の断面を呈している。墳丘規模は残存周溝より推察

して径7m程の円墳であったと考えられる。

出土遺物は北側の周溝内より須恵器甕一個体が周溝底面に接し出土している。

出土遺物

須恵器

器高35cm, 口径20.5cm, 体部最大径38cmを測る復元完形の甕である。頭部はやや外傾し, やや肥厚する端部に陵線を持ち, 頸部外面に波状文を施す。体部は球形を呈し, ほぼ中央が最大径となり, 外面に格子目, 内面に波状の叩き文を施す。底部には径6cm程の孔を穿っている。色調は灰色を呈し, 胎土, 焼成とも良好である。

(3) その他の遺構

No. 250 土塚墓

4号墳の南3mの地点に検出した土塚墓である。検出状況からは周溝, 封土等は認められず, 単独で検出した。土塚はE5°Nの方位で地山を掘込んでいる。規模は長方形のプランを呈し内法で全長22.5m, 最大幅60cm, 検出面よりの深さ40cmを測る素掘りの土塚である。

出土遺物は土塚上面より須恵器甕片が出土したのみで土塚内よりの遺物は皆無である。

B調査区箱式石棺群

B調査区最南端に小形の箱式石棺状の石組を3か所検出した。いずれも残存状況が悪く, その全貌を把握するにはいたらなかった。

No. 204は2・3号墳間に検出した内法残存長65cm, 小口幅35cmを測るものである。石棺は扁平な片岩系の石材を立てて使用し, 床面にも敷いている。方位はN65°Eである。

No. 202は2号墳の東に検出したNo. 204と同様に, 片方の小口部分のみのものである。内法残存長30cm, 小口幅20cmを測る。石棺は土圧により側壁が内に傾き, 石室幅がかなり狭くなっている。方位はほぼ東西である。

No. 203は2号墳の東にNo. 202と1mの間隔をおき検出した。残存長90cm, 内法幅30cmを測る。石材は, 前二者と異なり割石を使用している。方位はほぼ南北である。

これら3棺とも石棺内からの遺物は皆無である。

第3節 C調査区

1 C調査区の概要

C調査区はA、B調査区から続く丘陵の標高168.5mを測る頂部から北に延びる緩傾斜の尾根上に位置する。調査面積は1400㎡程である。確認した遺構は土壙墓，ならびに土壙墓に付随するものと古墳1基である。

2 土壙墓群の調査

(1) 土壙墓の概要

遺構はC調査区において東西50m，南北30mの北斜面に総数68基の土壙墓と5基の配石墓により構成されている。

ほとんどの土壙墓は長方形の平面形態を呈し，内部施設として，木棺を持つもの，小口面におさえ石を持つもの，枕石を持つものなどが認められる。

(2) 土壙墓群の構成

当初は現地形をそのまま利用して尾根に直交，平行する土壙墓を築造していたと思われたが，地形測量を行った時点においてC調査区の丘陵全域を長辺と短辺の比が約1対2の割合で地山を整形していることが判明し，その範囲内に土壙墓が大方検出された。調査区の丘陵変換点付近と頂部付近に列石と思われる石列が部分的に存在する。これらのことから，長方形に地山を整形した丘陵全域を墓地として意識していたものと考えられる。

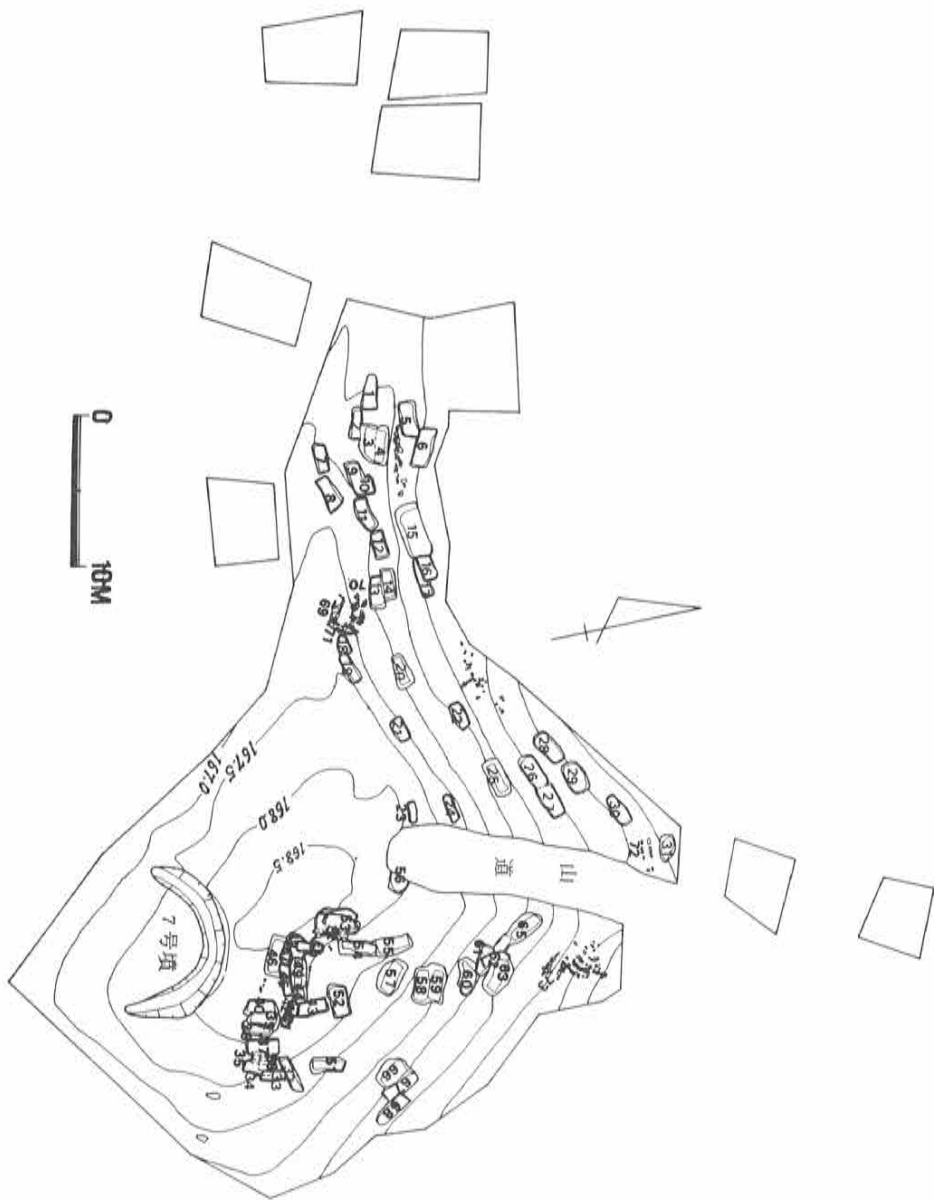
C調査区は調査する時点において調査員自身が土壙墓群としての把握が認識不足であったためと，地山と遺構との土色の変化がこの時点ではとらえにくかったため，掘り過ぎ，掘り足りない点が認められたが，この調査区の各土壙墓の上面には供献用土器が存在しており；この所より掘り進める調査方法により，各遺構の掘り下げが可能となった。しかし土壙墓上面に遺物の認められなかったものについては，土色等の変化がとらえにくく遺構の検出が困難をきわめた。このためこの地区の土壙墓群もかなりの企画性を持ったものと考えられるが，十分に把握できなかつた。

またA調査区の土壙墓群と違い現時点でのグルーピングが困難であったため，これらの遺構の説明を行うために検出した位置別に仮に西からほぼ順番に5グループに分けて説明を行いたい。また個々の土壙墓に関しては，供献用土器が出土したものに限って説明を加えた。

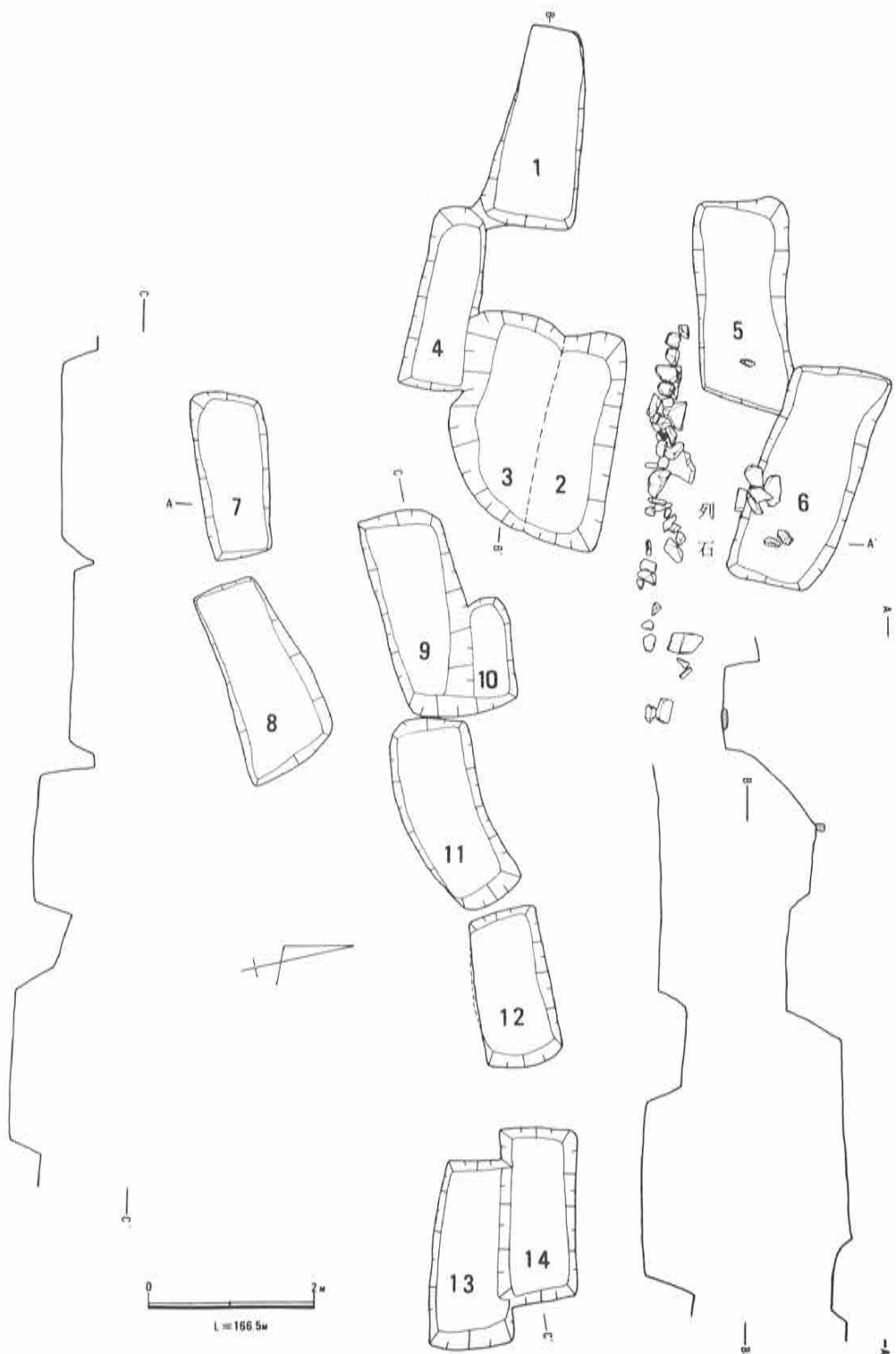
3 C調査区の遺構・遺物

(1) 第1グループ

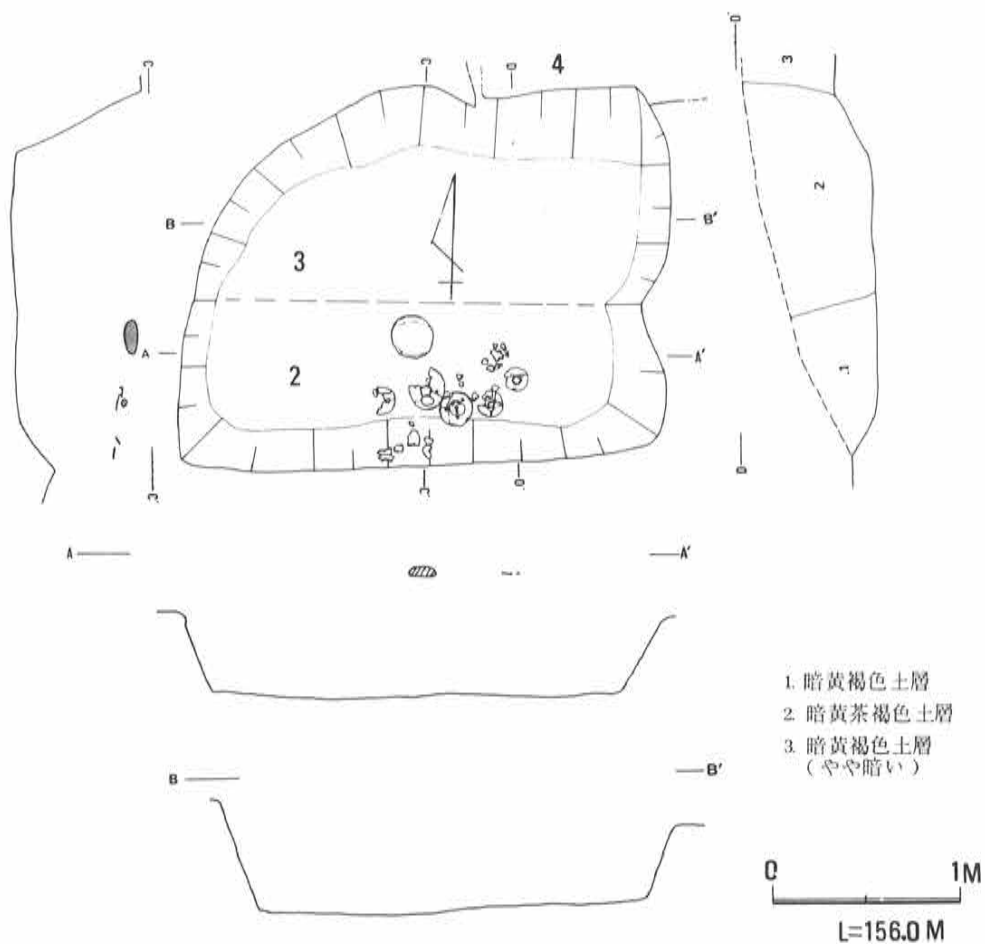
C調査区の西端にあたり尾根筋に平行する土壙墓より構成される。これらは平面形態ではほとんど長方形をなすが，No11は中央部分で曲折し弓状をなす。床面施設としてNo.5・6の土壙墓が枕石を持ち，土層断面の状態から木棺を使用していなかつたものと思われる。切り合っている土壙墓の築造順は次のとおりである。



第80図 C調査区 遺構配置図 (s = $\frac{1}{500}$)



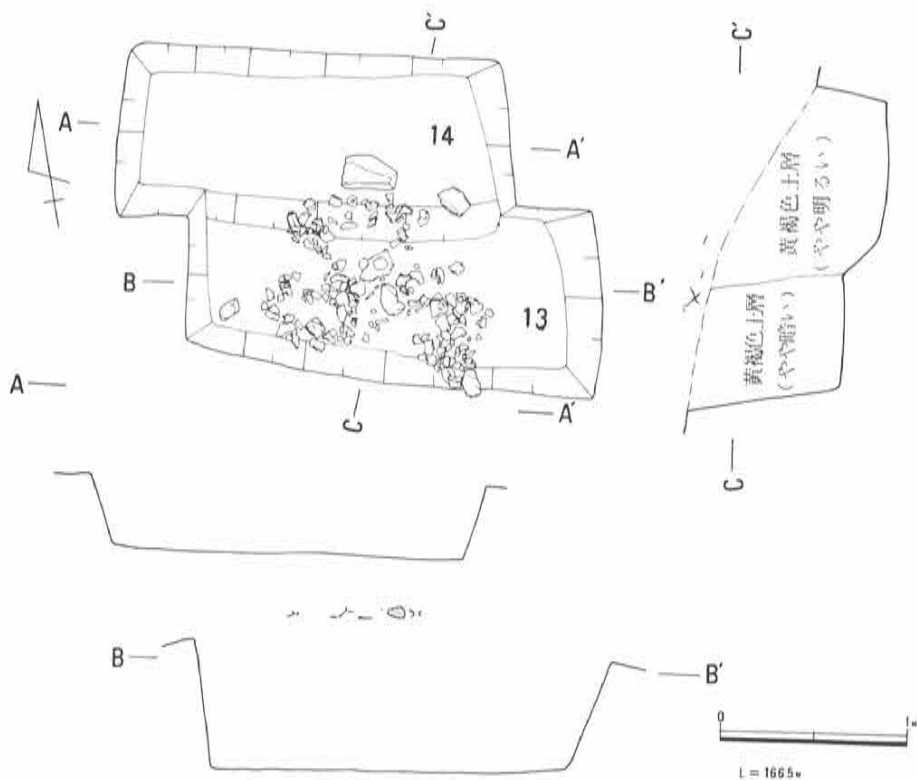
第81図 C調査区 第1グループ遺構配置図 (S- $\frac{1}{80}$)



第82図 C調査区 No. 2・3土壙墓遺物出土状態 (s=1/40)

- 1 No. 2・4 が築かれた後にNo. 3
- 2 No. 9 の後にNo. 10
- 3 No. 13の後にNo. 14

ということを土層断面より確認した。No. 4 とNo. 5・6の間には約2.8m間に列石が認められた。またこれらの下面に存在するNo. 15・16・17の土壙墓ははっきりとした土の変化がつかみえなかったもので土壙墓としては不明瞭である。また遺物は、No. 2・13・15・16・17土壙墓より出土した。



第83図 C調査区 No.13・14土墳墓遺物出土状態 (s=1/40)

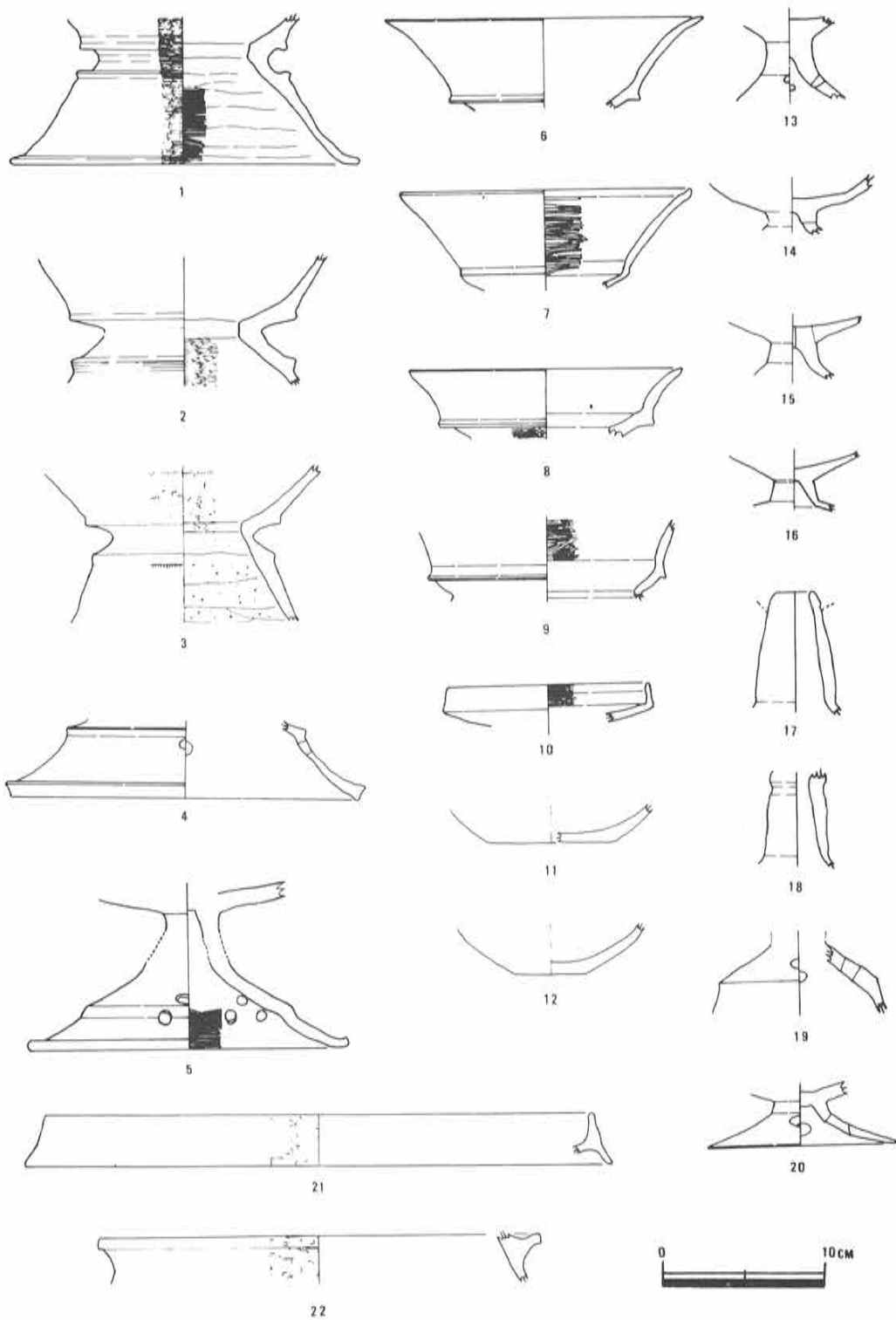
No.3・4土墳墓

平面形態では2基共にほぼ長方形をなし、土層断面の状態からNo.3が新しい。No.3は上面で240cm、幅112cm、床面では長さ206cm、幅72cmを測る。No.4は上面で258cm、幅86cm以上、床面では長さ215cm、幅65cm以上を測る。また土層に変化が表われてないため両基共木棺を使用していない。

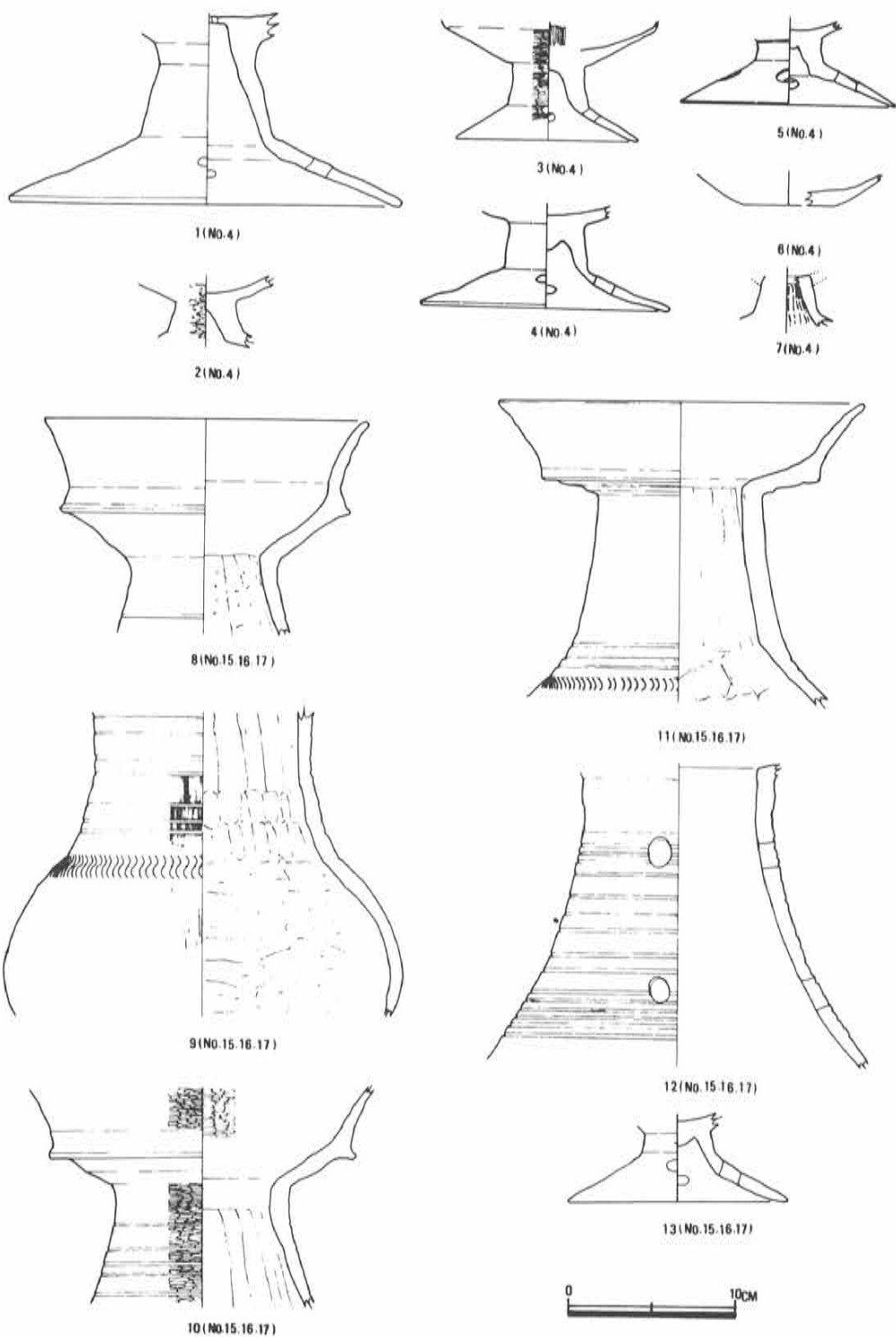
遺物は上面より供献用土器が斜面に平行に約5mにわたって多量に出土しており、出土状態から判断してNo.4に供献されたものと思われ、河原石を伴う。

No.13, 14土墳墓

平面形態では両基とも長方形をなし、土層断面の状態よりNo.14土墳墓が新しい。No.13土墳墓は、上面では長さ約219cm、幅約98cm、床面では長さ約188cm、幅約91cm、深さ約78cmを測る。No.14土墳墓は、上面では長さ約207cm、幅約108cm、床面では、長さ約181cm、幅約66cm、深さ約90cmを測る。両基は土層に変化が表われていないため、木棺を使用していないものと思われる。遺物は、出土状態からみてNo.13土墳墓に供献されたと思われ、河原石を伴っている。



第84図 C調査区 No13土塚墓出土土器



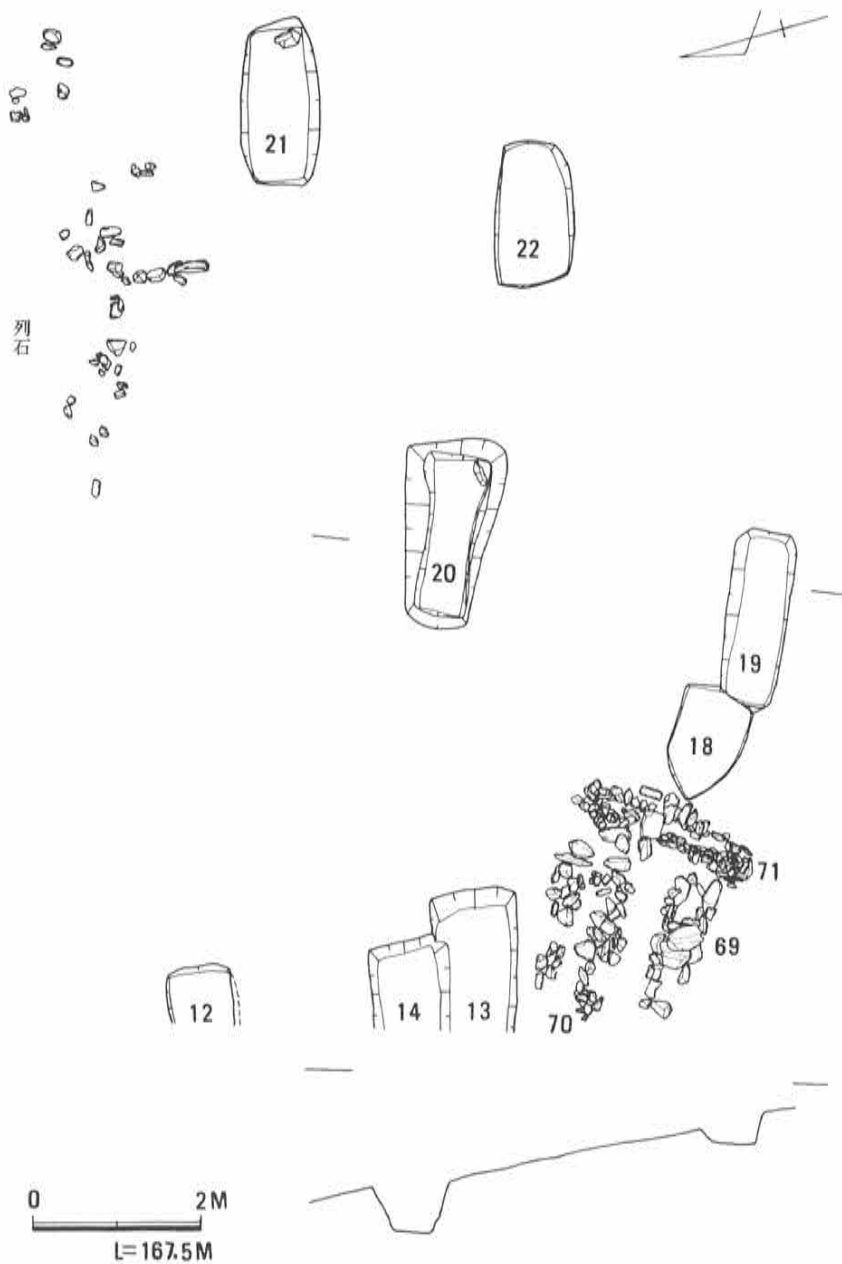
第85図 C調査区 No.4・15・16・17土壙墓出土土器

表20 C調査区No.13土壙墓出土土器一覽表

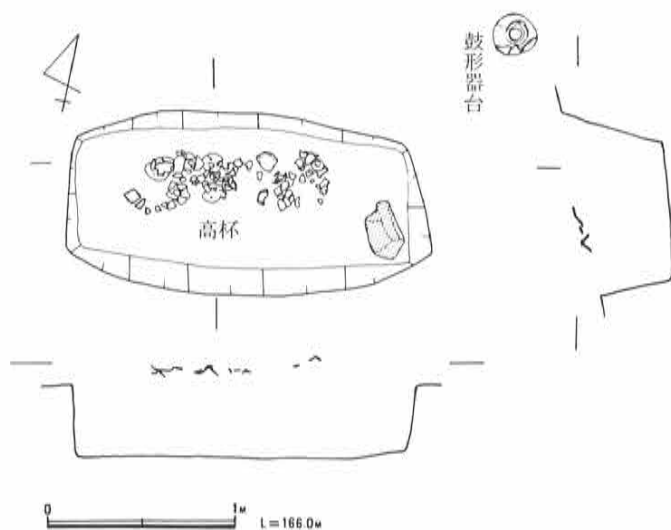
番号	種類	法 量 cm			整 形								色 調	そ の 他				備 考		
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部			脚部		貫眼	月形孔		六角孔	丸底
					内	外	内	外	内	外	内	外		内	外					
1	鼓形器台	—	21.0(脚径)	8.7+	?	△△△							△△△	△	○					
2	鼓形器台	—	—	7.7+	?	?								—	?					
3	鼓形器台	—	—	9.3+	△△△	△△△						△△△	△△△	○	○		右	—		
4	高 杯	—	21.1	4.6+								?	?	—	?					
5	高 杯	—	19.0(脚径)	10.0+	?	△△△						△△△	△△△	—						
6	高 杯	19.3	—	5.5+	?	?								—	?					
7	高 杯	17.5	—	6.1+	△△△	?								—	○					
8	壺	16.5	—	4.2+	△△△	△△△								—	○					
9	壺	—	—	5.1+	△△△	△△△								—	○					
10	高 杯	12.1	—	1.9+	△△△	△△△								—	○					
11	甕	—	—	2 +						?	?			—	×					
12	甕	—	—	2.2+						?	?			—	×					
13	高 杯	—	—	5.0+								?	△△△	—	○					
14	高 杯	—	—	3.3+	?	?						?	?	—	?					
15	高 杯	—	—	4.0+								?	?	—	?					
16	高 杯	—	—	3.8+	△△△	△△△						△△△	△△△	—	×					
17	高 杯	—	—	7.2+								△△△	△△△	—	○					
18	高 杯	—	—	5.6+								△△△	△△△	—	○					
19	高 杯	—	—	4.3+								?	△△△	—	○					
20	高 杯	—	11.6(脚径)	3.9+								?	?	—	?					
21	高 杯	33.3	—	3.1+	△△△	△△△								—	○					
22	高 杯	—	—	2.8+	?	△△△								—	○					

表21 C調査区No.4・15・16・17土壙墓出土土器一覽表

番号	種類	法 量 cm			整 形								色 調	そ の 他				備 考		
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部			脚部		貫眼	月形孔		六角孔	丸底
					内	外	内	外	内	外	内	外		内	外					
1	高 杯	—	23.0(脚径)	11.1+									?	?	淡黄褐色	—	?			
2	高 杯	—	—	4.2+											黄褐色	—	?			
3	高 杯	—	10.8(脚径)	6.9+	△△△	△△△							?	△△△	淡褐色	—	○			
4	高 杯	—	14.7(脚径)	6.1+									?	?	暗黄褐色	—	?			
5	高 杯	—	12.9(脚径)	5.1									?	?	暗黄褐色	—	?			
6	甕	—	—	2.0+						?	?				黄褐色	○	?			
7	高 杯	—	—	2.9+								△△△	?		暗黄褐色	—	?			
8	壺	19.0	—	12 +	?	?				△△△	△△△	?			赤褐色	—	○	右	—	
9	壺	—	23.5	17.7+			△△△	△△△			△△△	△△△			赤褐色	—	○	左	—	
10	壺	—	—	12.9+	△△△	△△△					?	△△△			赤褐色	—	○			
11	壺	21.5	—	17.5+	?	?	△△△	?			△△△	?			赤褐色	—	○	—	?	
12	器 台	—	—	17.8+								?	?		赤褐色	—	○			
13	高 杯	—	—	5 +								?	?		暗黄褐色	—	?			



第86図 C調査区 第2グループ遺構配置図 (s=1/90)



第87図 C調査区 第87図 C調査区 No.22土壙墓遺物出土状態 (s=1/40)

(2) 第2グループ

C調査区の北西部にあたり、西を第1グループ、東を第3グループに狭まれて、北斜面上に存在し、尾根に平行する土壙墓と配石墓によって構成される。土壙墓は、平面形態では長方形に近い形を示す。床面施設として、No.20・22土壙墓に枕石を持ち、土層断面の状態からNo.20土壙墓に木棺が使用されていたと思われる。他のものは使用されていなかった。遺物は、No.20・22土壙墓上面より出土した。

No.22土壙墓

平面形態ではほぼ長方形をなし、上面では長さ約188cm、幅約97cm、床面では長さ約174cm、幅約74cm、深さ約55cmを測る。床面には枕石と思われる河原石が東端に1個存在する。土層断面の状態から木棺を使用していなかったものと思われる。

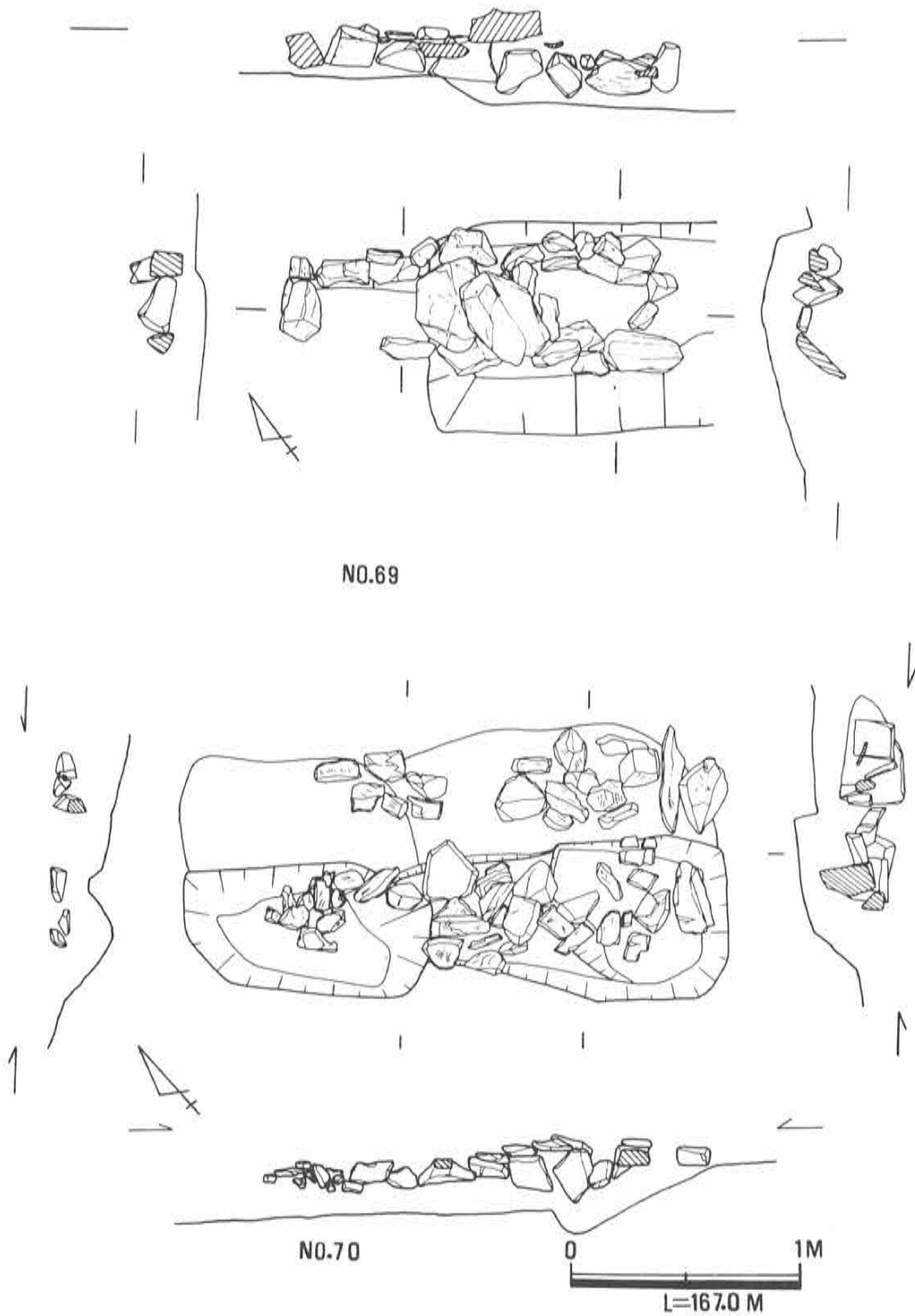
遺物は、土壙墓とほぼ平行に高杯が10数個体、また土壙墓より北東約80cmの所に鼓形器台が出土した。

No.69配石墓

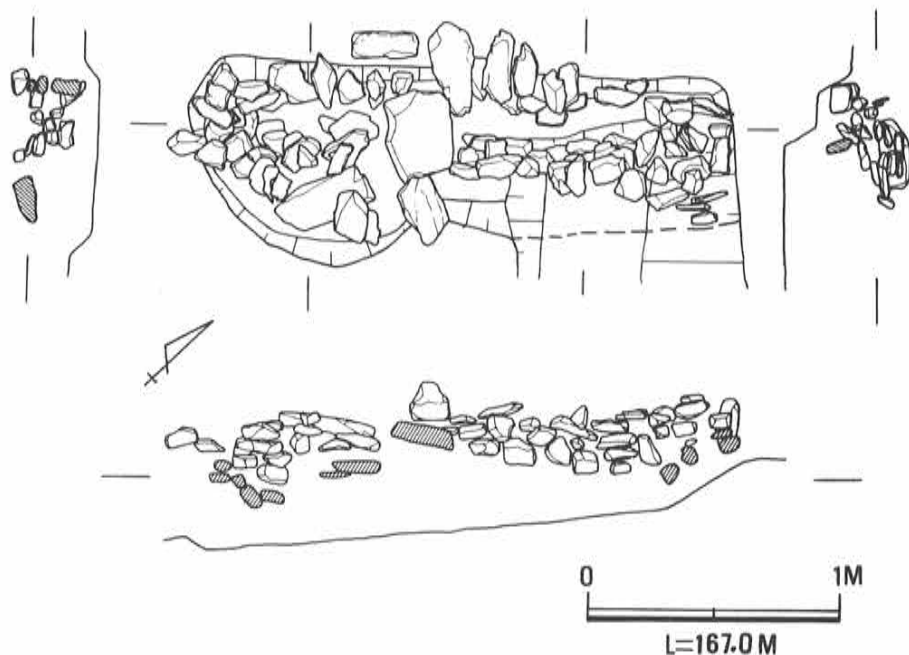
掘方は、長さ約228cmを測るがNo.71配石墓により約3分の1が切られており、石室は残存長さ約174cm、幅約20cm、高さ約20cmを測る。ほぼ中央部に天井石が2板残存している。

No.70配石墓

石室は長さ約196cm、幅20-30cm、高さ約20cmを測る。掘方は長さ約240cm、幅約90cmを測り、南側を側壁を配置するため少し掘込んでいる。



第88図 C調査区 No.69・70配石墓 ($s = \frac{1}{30}$)



第89図 C調査区 No.71配石墓 ($s = \frac{1}{30}$)

No.71 配石墓

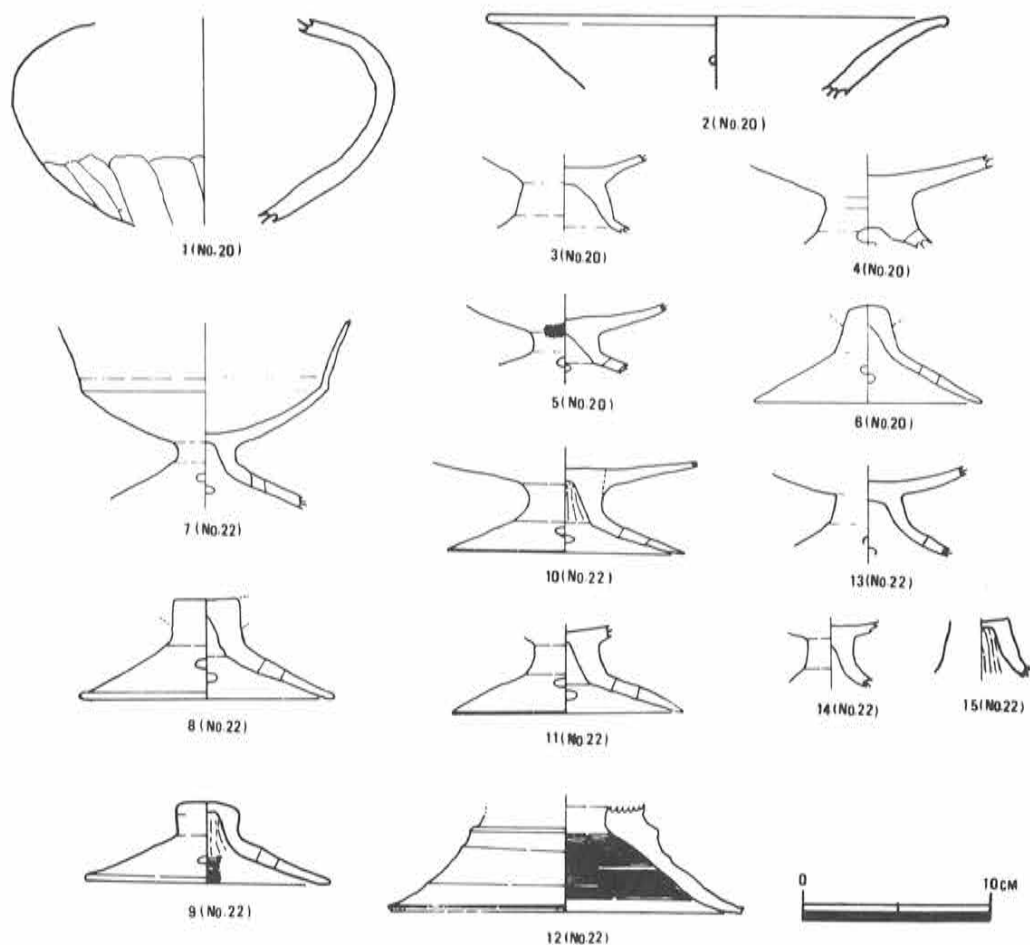
石室は長さ約156cm, 幅約12cm, 高さ約20cmを測る。天井石はほぼ中央に一個残存し, 側壁は河原石を雑然と積み上げて作られている。掘方は長さ210cm, 幅70cmを測る。

(3) 第3グループ

C調査区の北東部にあたる北斜面上に存在し, ほとんどが尾根に平行する土塚墓によって構成される。これらは平面形態では, 長方形または隅丸長方形を示す。床面施設としてNo.26・27・28・29土塚墓の4基に枕石を持つ。土層断面観察の結果, No.25土塚墓に木棺が使用され, 他のものは使用されていないかと思われる。遺物はNo.24・25・26・27・28・29・30土塚墓上面より出土した。

No.24 土塚墓

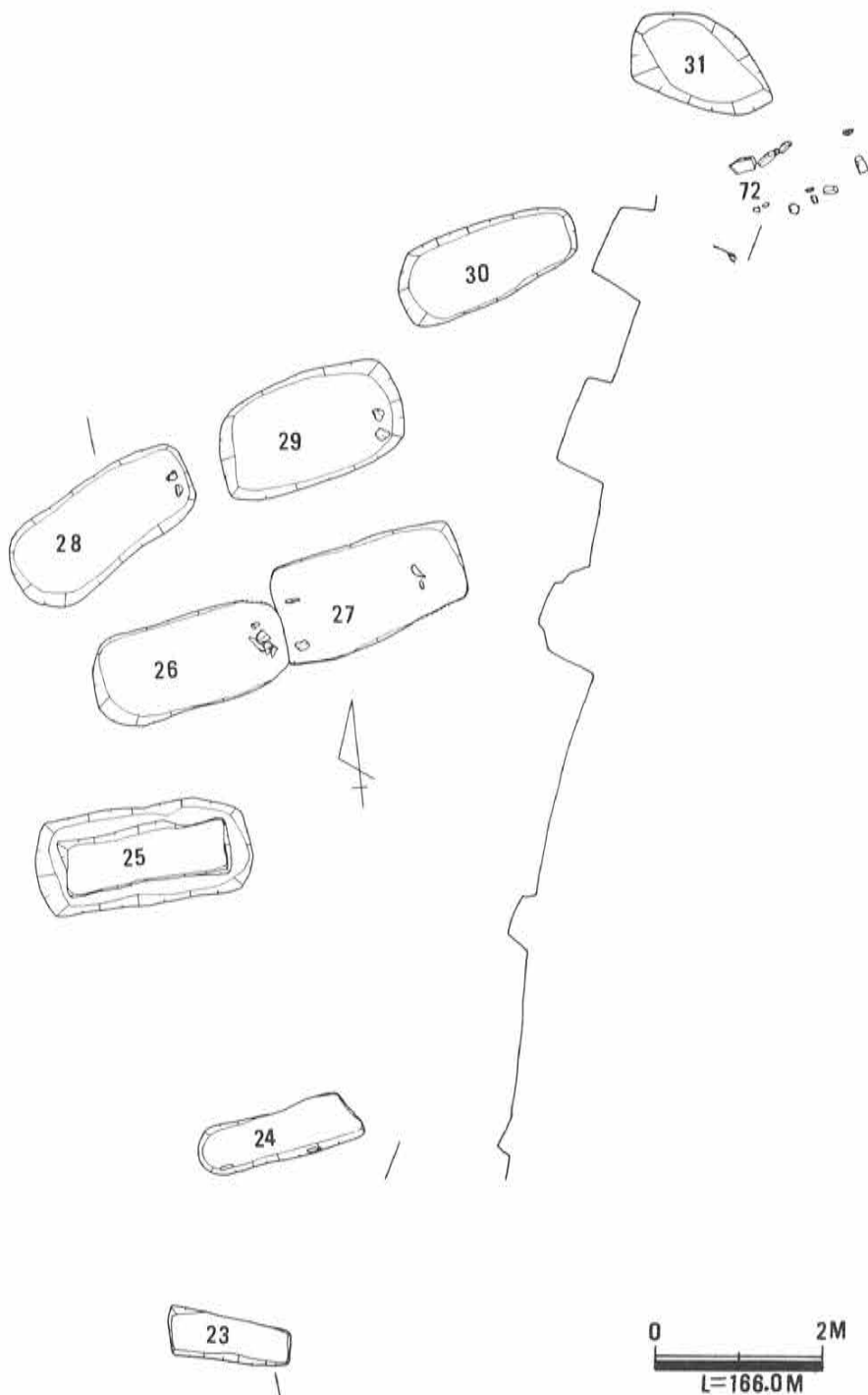
平面形態では東側が半円形をえがき, ほぼ長方形に近い形を示す。上面では長さ約192cm, 幅約63cm, 床面では長さ約184cm, 幅約53cm, 深さ20cmを測る。土層断面観察の結果, 木棺を使用していないかと思われる。遺物は, 土塚墓のほぼ中央付近よりかたまって出土した。



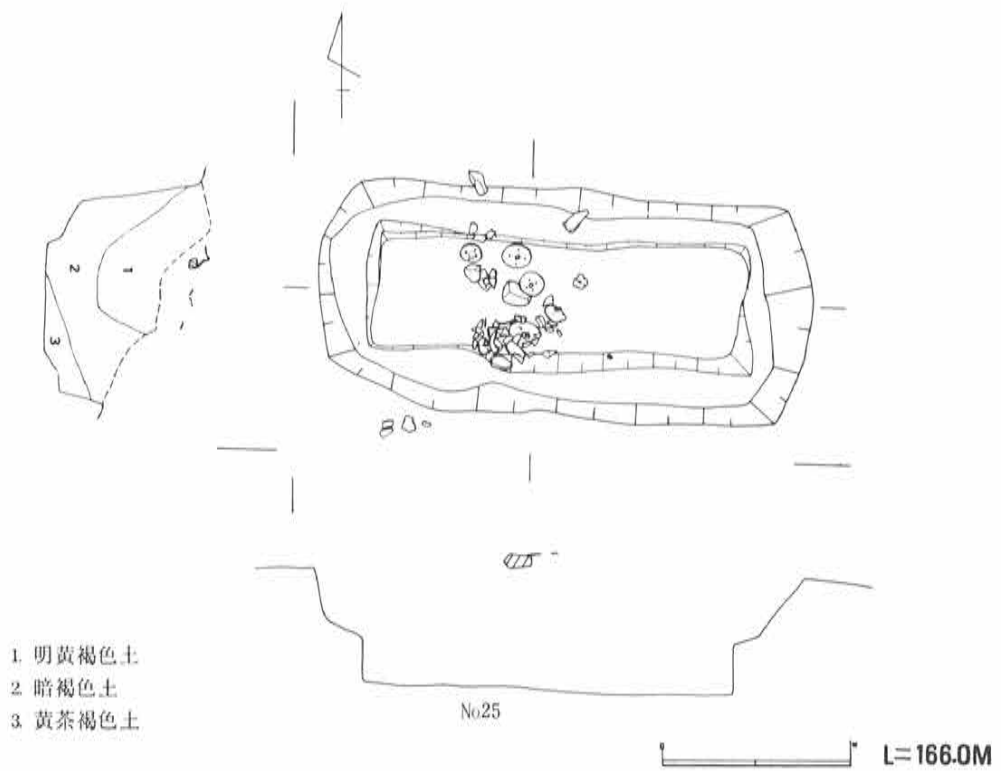
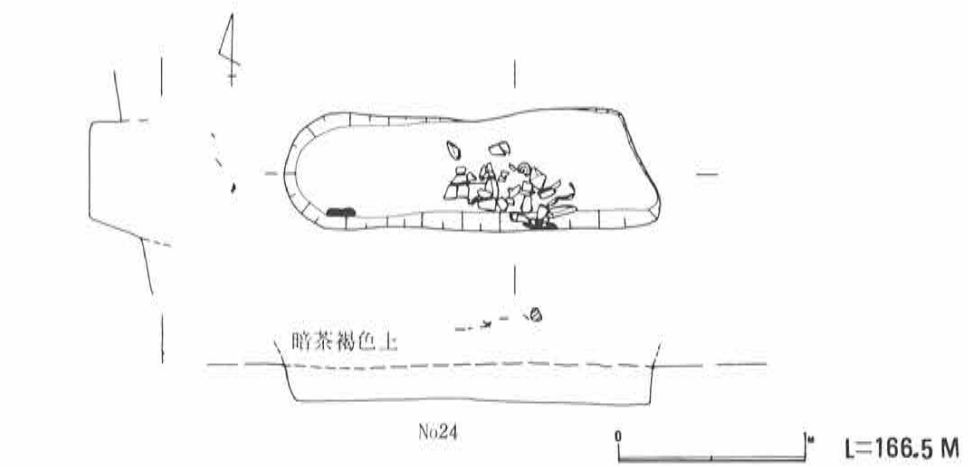
第90図 C調査区 No.20・22土壌墓出土土器

表22 C調査区 No.20・22土壌墓出土土器一覧表

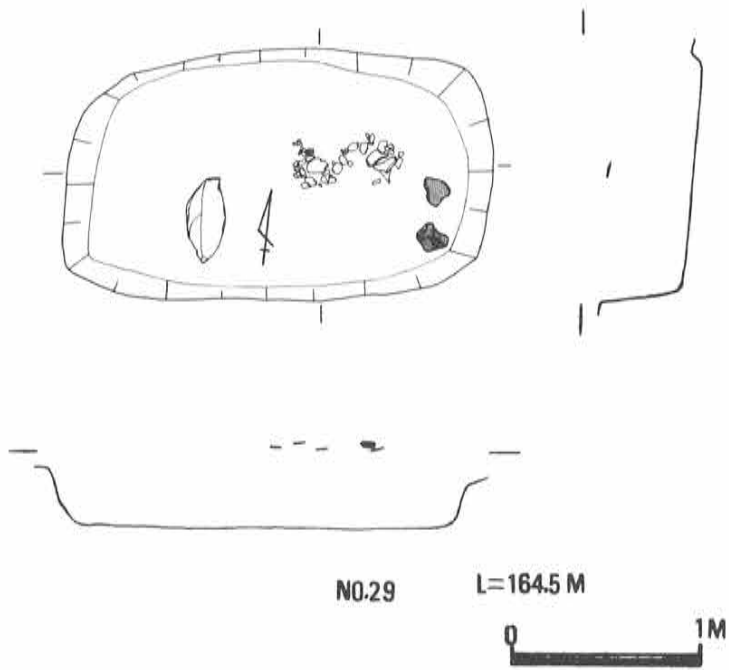
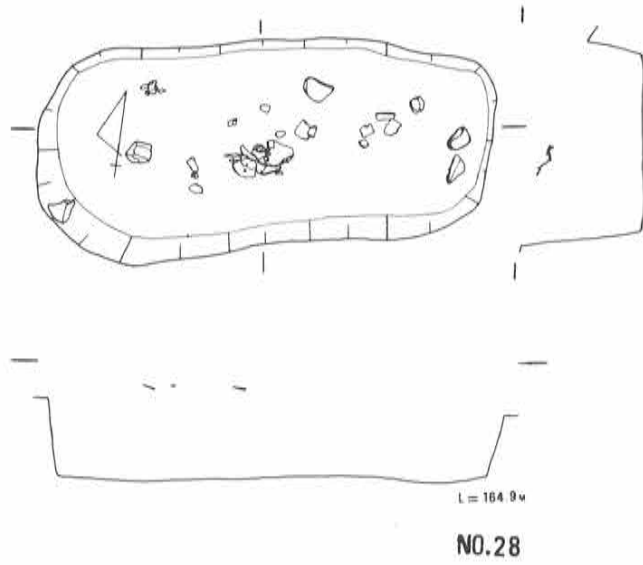
番号	種類	法 量 cm			整 形								色 調	そ の 他				備 考		
		口径	最大径(中位)	器 高	口 縁	胴 部	底 部	頭 部	脚 部	肩 部	口 縁	肩 部		底 部	脚 部	肩 部	口 縁		肩 部	底 部
1	壺	—	20.1	10.8+											茶褐色	○				
2	鼓形器台	—	24.2	3.8+											赤茶褐色	○	○			
3	高 杯	—		4.1+											黄褐色	?				
4	高 杯	—		4.9+											暗黄褐色	?				
5	高 杯	—		3.7+											赤褐色	?				
6	高 杯	—	12.1	5.1+											黄褐色	?				
7	高 杯	—		9.7+	?	?									黄褐色	?				
8	高 杯	—	13.2	5.3+											暗赤褐色	?				
9	高 杯	—	13.0	4.3+											赤褐色	?				
10	高 杯	—	12.6	4.8+											黄褐色	?				
11	高 杯	—	12.2	4.7+											暗黄褐色	?				
12	鼓形器台	—	18.5	5.5+											暗黄褐色	○	?			
13	高 杯	—		4.7+											暗黄褐色	?				
14	高 杯	—		3.5+											赤茶褐色	?				
15	高 杯	—		3.7+											黄褐色	?				



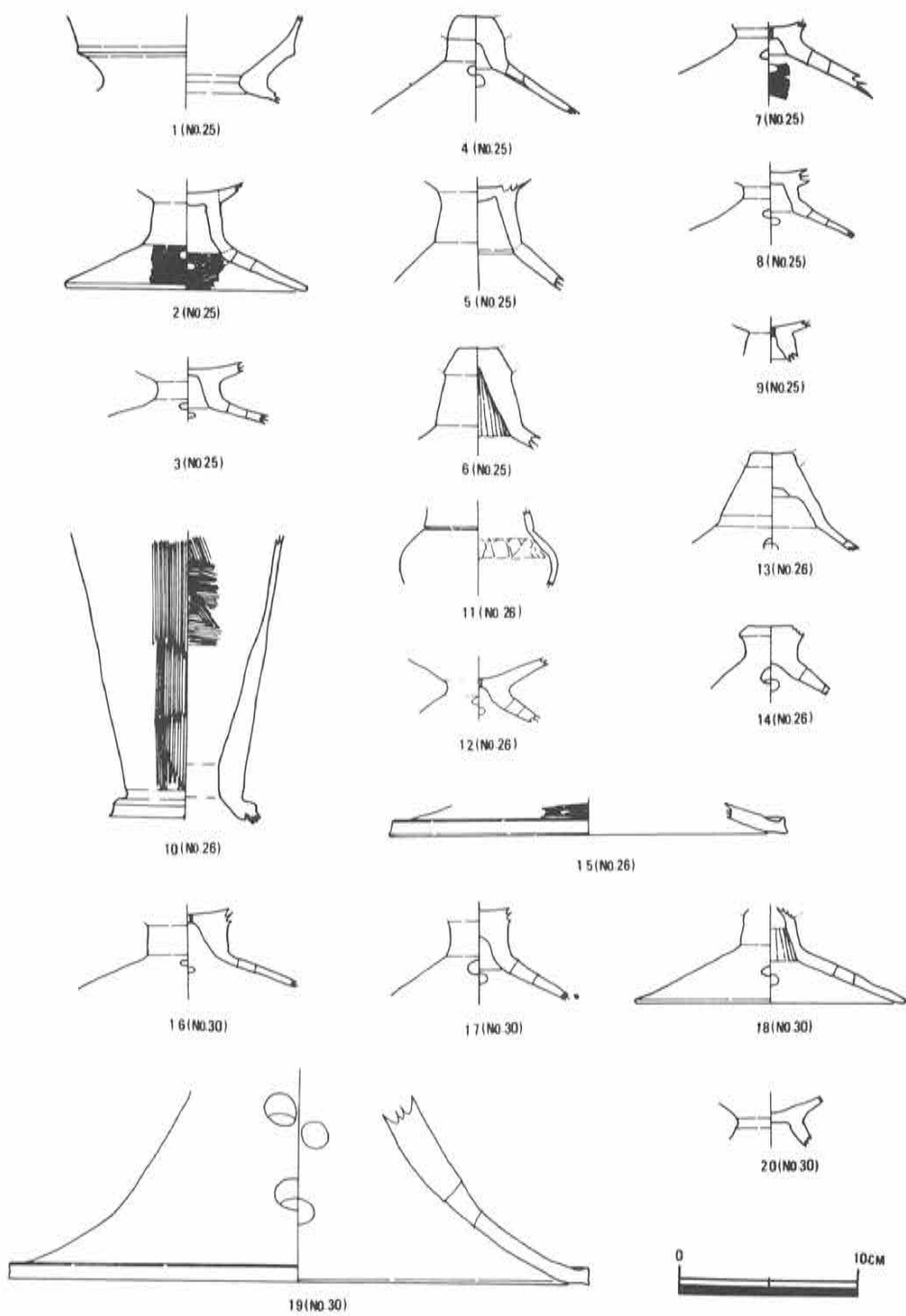
第91図 C調査区 第3グループ遺構配置図 (s= $\frac{1}{90}$)



第92図 C調査区 No.24・25土壙墓遺物出土状態 (s=1/40)



第93図 C調査区 No28・29土壙墓遺物出土状態 (s = $\frac{1}{40}$)



第94図 C調査区 No.25・26・30土壙墓出土土器

No.25 土壙墓

平面形態では長方形をなし、上面では長さ約 261cm、幅約 118cm、床面では長さ約 192cm、幅約 55cm、深さ約 86cm を測る。この土壙墓は長さ約 192cm、幅約 55cm の長方形の棺を配置するため、最初長さ約 216cm、幅約 100cm、深さ 30cm まで掘込み、その上から木棺と同じ長さの土壙を掘込んでいる。遺物は土壙墓のほぼ中央部分上面より出土した。

No.28 土壙墓

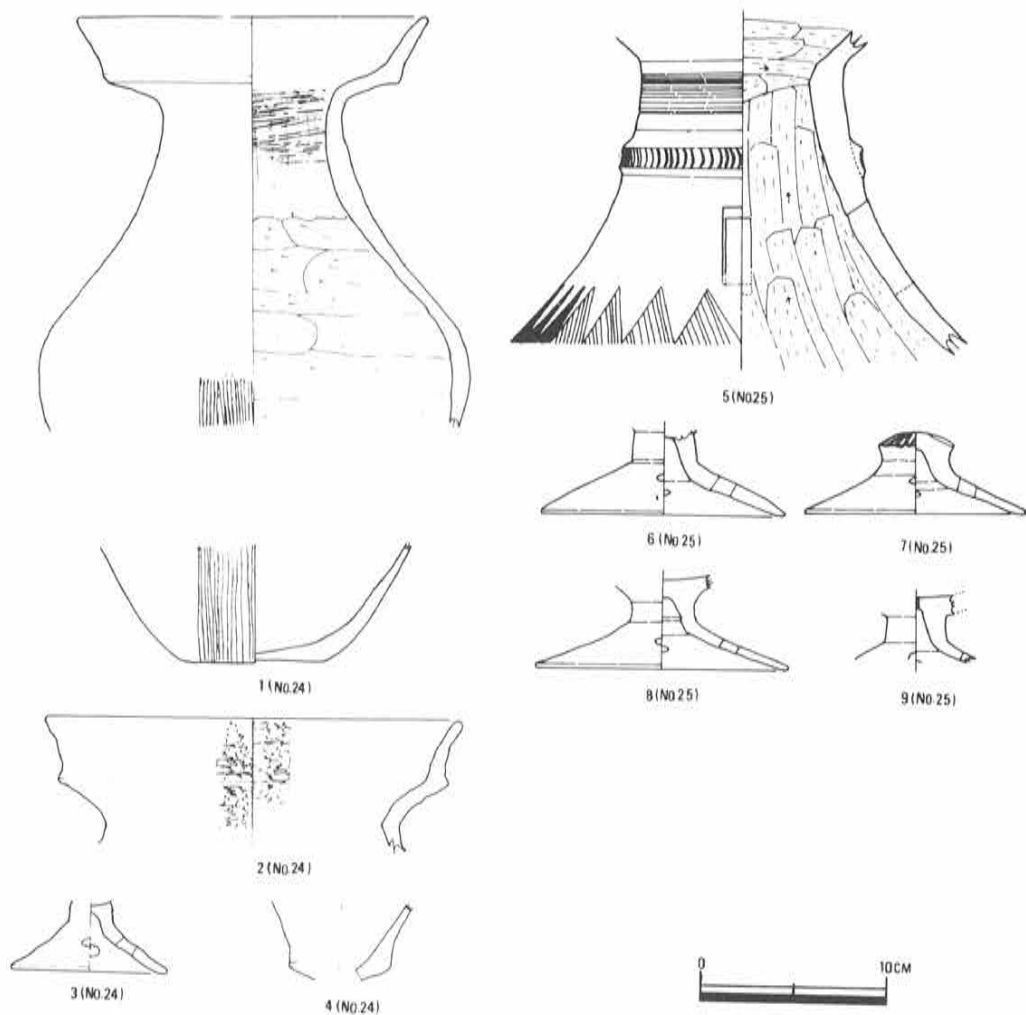
平面形態ではほぼ隅丸長方形をなし、上面では長さ約 241cm、幅約 108cm、床面では長さ約 230cm、幅約 93cm、深さ約 62cm を測る。床面施設として枕石 1 対が存在し、土層断面の観察では木棺を使用していない。遺物は土壙墓上面より点在して出土した。

No.29 土壙墓

平面形態では隅丸長方形をなし、上面では長さ約 288cm、幅約 134cm、床面では長さ約 198cm、幅約 118cm を測る。床面施設として枕石 1 対が存在する。土層断面の観察では木棺を使用していない。遺物は、ほぼ中央部の東側にまとまって出土した。

表23 C 調査区No.25・26・30土壙墓出土土器一覽表

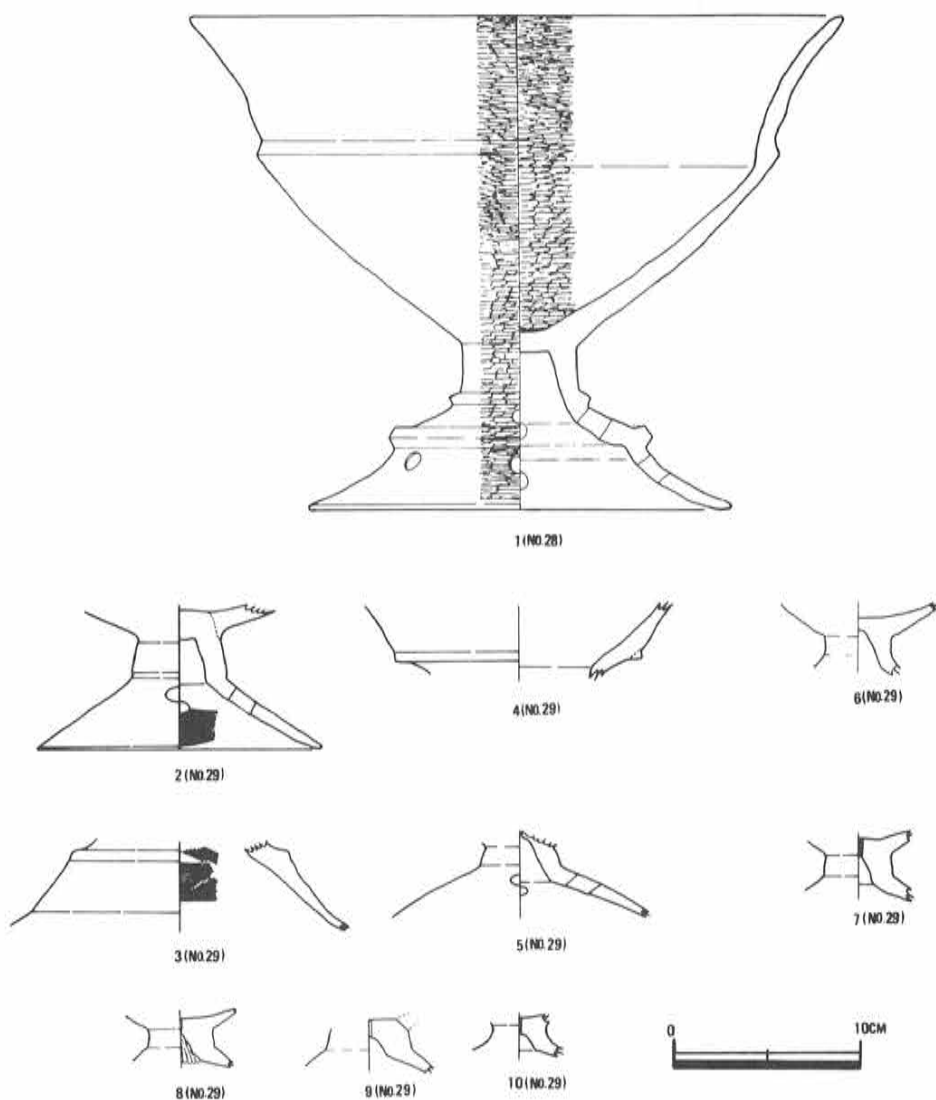
番号	種類	法 尺 cm			整 形										色 調	そ の 他					備 考					
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部		脚部			口	目	乳	○	九						
					内	外	内	外	内	外	内	外	内	外												
1	壺			5.2+	?	?																				
2	高 杯		12.2(脚径)	5.8+										は	は	は										
3	高 杯			3.9+																						
4	高 杯			5.6+																						
5	高 杯			6.0+																						
6	高 杯			5.6+										は	は											
7	高 杯			4.3+										は	は											
8	高 杯			3.4+																						
9	高 杯			2.4+																						
10	直口壺			16.4+	は	は	は	は																		
11	直口壺		8.8	5.2+	?	?	?	?																		
12	高 杯			3.5+																						
13	高 杯			5.2+																						
14	高 杯			3.6+																						
15	器 台		25.9(脚径)	2 +										?	は	は										
16	高 杯			4.7+																						焼成前穿孔
17	高 杯			5.1+																						
18	高 杯		14.7(脚径)	5.2+										は	は											
19	器 台		31.7(脚径)	10.2+																						
20	高 杯			2.8+																						



第95図 C調査区 No. 24・25土壙墓出土土器

表24 C調査区 No.24・25土壙墓出土土器一覽表

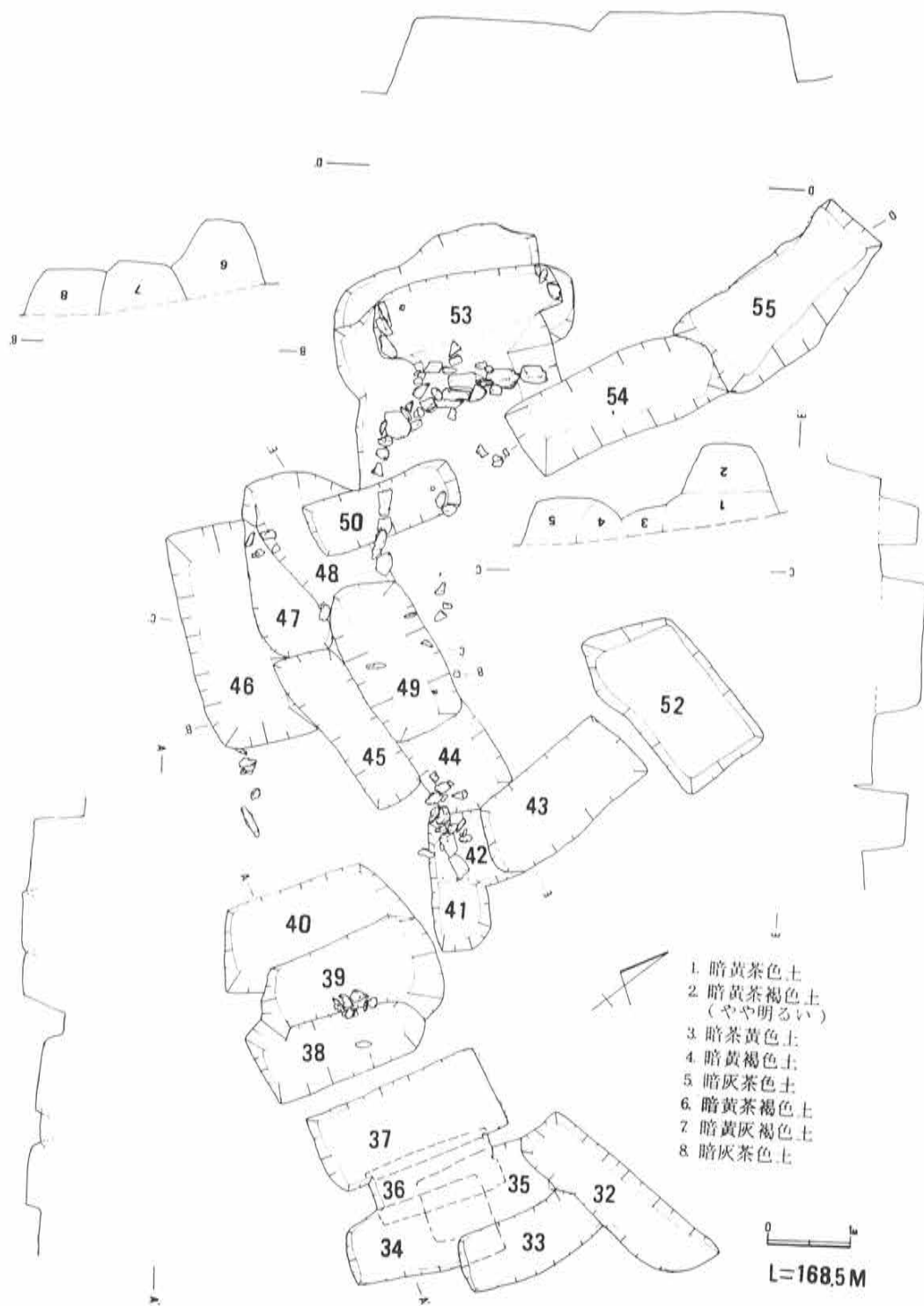
番号	種類	法 量 cm			整 形										色 調	そ の 他					備 考
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部		脚部			丸底	井	穿	前	孔	
					内	外	内	外	内	外	内	外	内	外							
1	壺	18.4	22.9	33.9+	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	○	○	?	右	×	
2	壺	21.9		6.9+	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	○	○				
3	高 杯	—	8.2(脚径)	3.6+										?	?						
4	高 杯	—		3.9+	?	?															
5	器 台	—		18.3+										全	全	?					
6	高 杯	—	13.0(脚径)	4.5+										?	?						
7	高 杯	—	13.3(脚径)	4.9+										?	?						
8	高 杯	—	11.8(脚径)	4.3+										?	?						
9	高 杯	—		3.5+										?	?		○			焼成前穿孔	



第96図 C調査区 No. 28・29土壙墓出土土器

表25 C調査区 No.28・29土壙墓出土土器一覧表

番号	種類	法 量 cm			整 形						色 調	そ の 他				備 考			
		口径	最大径(中位)	器 高	口 縁		胴 部		底 部			頸 部		脚 部			耳	耳	穿孔(六角形)
1	高 杯	34.5		25.6	○	△							?	○	○	?			
2	鼓形器台			4.8									△	○	○				
3	高 杯		15.1(脚径)	7.5+									△	○	○				
4	高 杯			4.0+	△	△													
5	高 杯			4.6+									?	?					
6	高 杯			3.7+									?	?					
7	高 杯			3.5+									?	?		○			焼成前穿孔
8	高 杯			3.1+									△	?		○			焼成前穿孔
9	高 杯			2.8+									?	?		○			焼成前穿孔
10	高 杯			2.5+									?	?		○			焼成前穿孔



第97図 C調査区 第4グループ遺構配置図 (S=1/80)

(4) 第4グループ

尾根の頂部付近から東の緩傾斜面に存在する。これらは平面形態では長方形をなすものから成立ち、床面施設としてNo.53土壙墓に小口石、No.51・53土壙墓には木棺の使用が認められる。

またこれらの土壙墓上面には列石が一部存在し、部分的に立っているものもある。この列石はNo.53土壙墓に狭まれてほぼ平行に約2m続き、No.50土壙墓付近でほぼ直角に曲り、さらに約1mの所に存在するNo.49・48土壙墓付近で消滅する。またその続きと思われるものが、No.42・44土壙墓上面に認められる。

No.53土壙墓

平面形態では、長方形に近い形を示し、上面では長さ294cm、幅168cmを、床面では長さ200cm、幅58cm、深さ90cmを測る。

掘方は、2段掘りをなし、一段目下面は長さ284cm、幅144cmを測り、この床面から長さ226cm、幅56cmの二段目の掘方が存在する。両小口に3石の小口石が存在し、土層断面から長さ180cm、幅58cmの木棺を使用していたものと思われる。

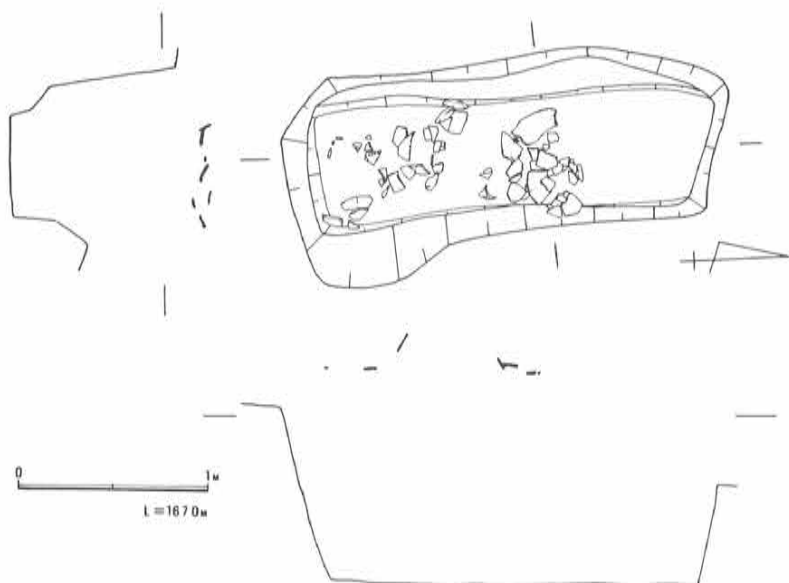
遺物は土壙墓上面の2か所に固まって出土した。

No.51土壙墓

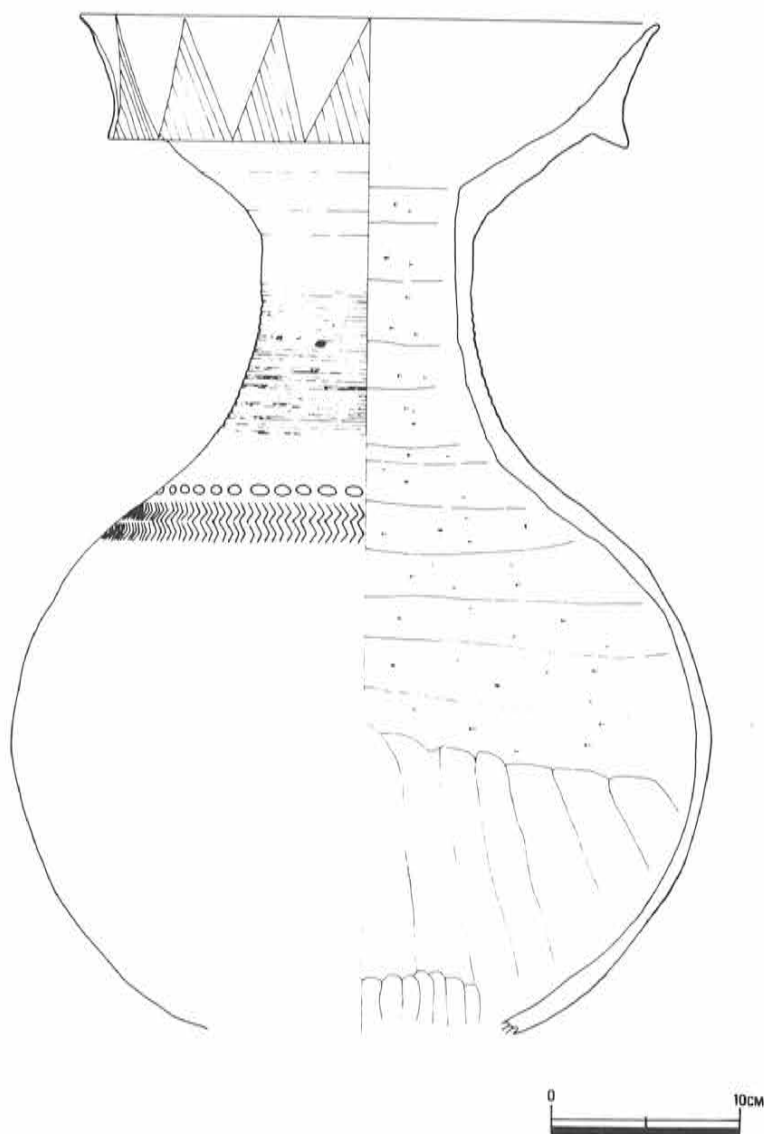
平面形態ではほぼ長方形をなし、上面では長さ230cm、幅91cm、床面では長さ203cm幅55cmを測る。土壙墓は木棺を入れるため二段掘りをなしている。

(5) 第5グループ

頂部から東へ下る斜面上に存在し、平面形態では長方形をなすものによって構成される。土壙の中



第98図 C調査区 No.51土壙墓遺物出土状態 ($s = \frac{1}{40}$)



第99図 C調査区 No.51土壙墓出土土器

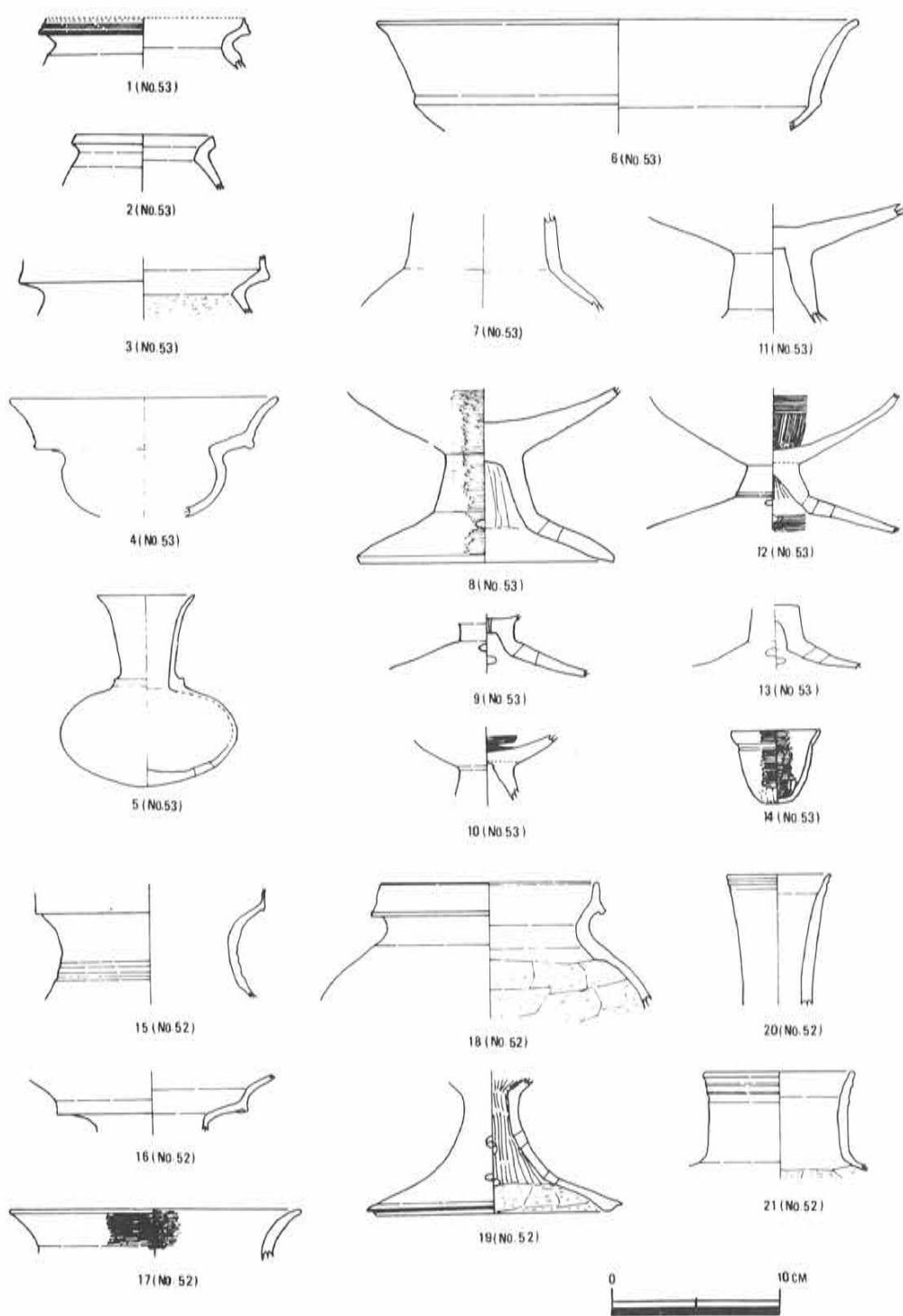
でNo.60は、土壙墓として成り立つかどうか不確定である。これらは土層観察からNo.65のみが木棺を使用していると思われる。

これらの土壙墓の切り合い関係は、

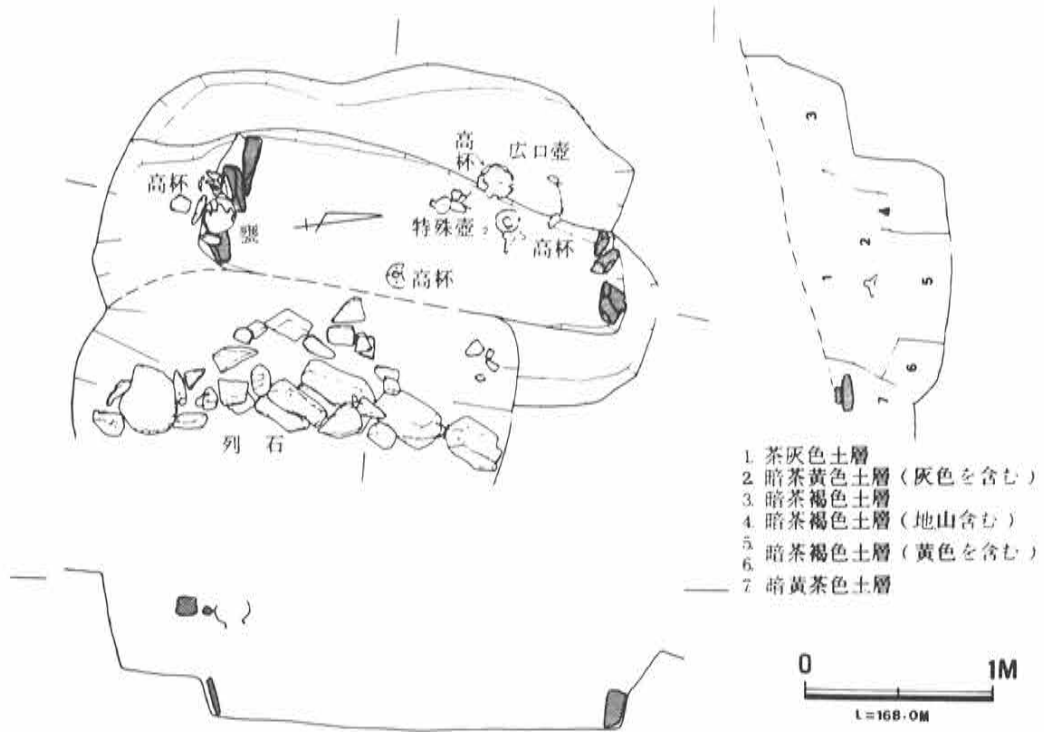
(古) No.64→No.65 No.61→No.62 No.63→No.62

No.58・59土壙墓

両土壙墓とも平面形態では長方形をなし、No.58は上面で、長さ238cm、幅94cm、下面では、長さ206cm、幅78cm、深さ65cmを測る。No.59は上面で長さ222cm、幅107cm、深さ560cmを測る。両土壙墓の



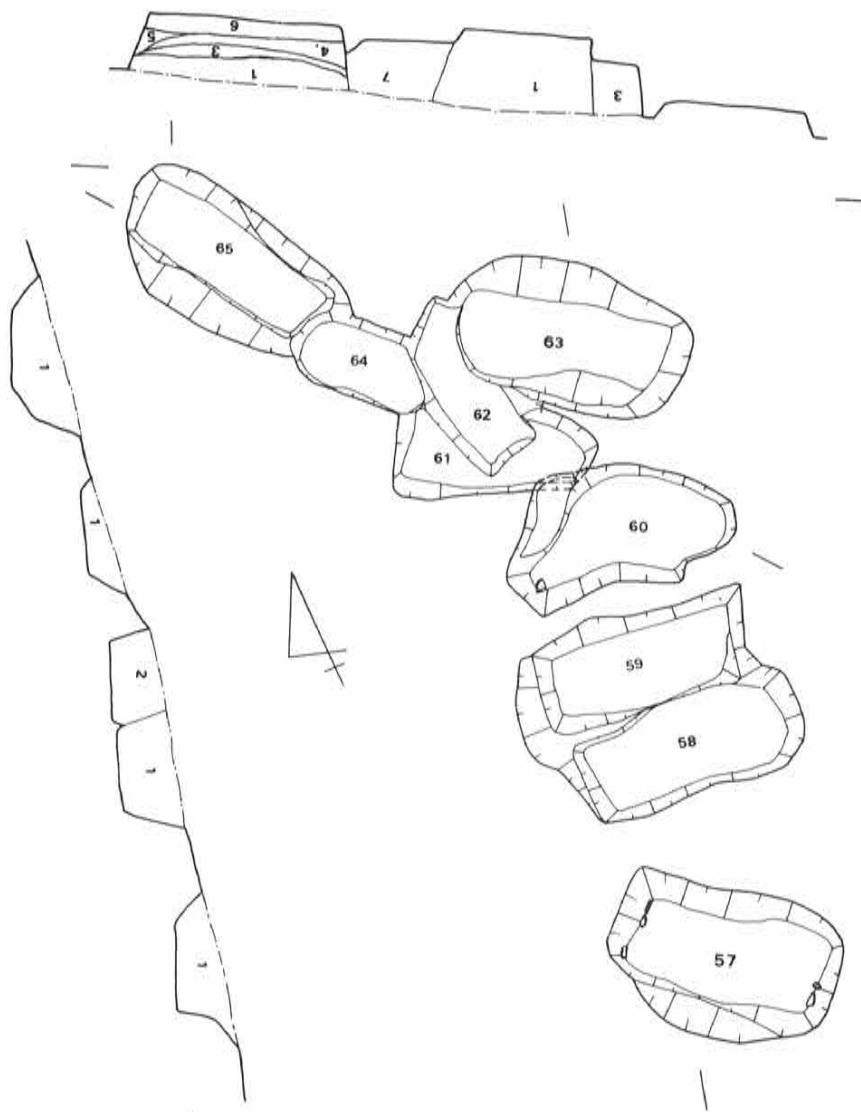
第100図 C調査区 No.52・53 土壙墓出土土器



第101図 C調査区 No.53土壌墓遺物出土状態 (s = 1/40)

表26 C調査区 No.52・53土壌墓出土土器一覽表

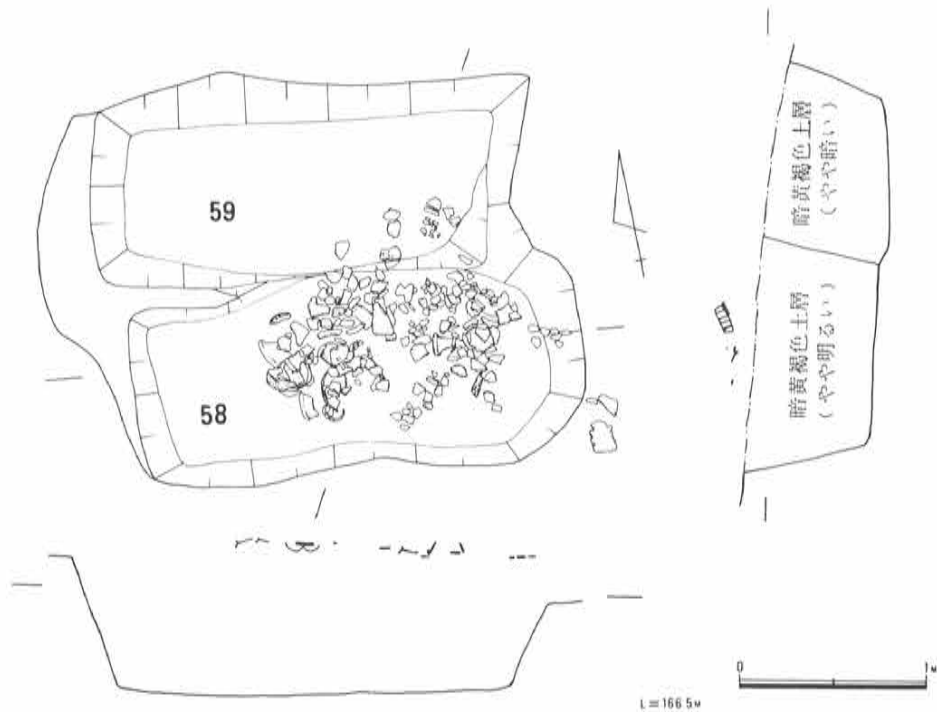
番号	種類	法量		整										色調	その他				備考		
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部		脚部		皿	丹	九	九			
					内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	用	埋	創	創	
1	甕			2.7 +	?	?															
2	甕	7.8		3.3 +	?	?															
3	甕			3.6 +	?	?															
4	広口壺	15.8	9.7	6.9 +	?	?															
5	特殊壺	6.8	10.5	11.0	?	?															
6	高杯	28.3		6.6 +	?	?															
7	台付直口壺			5.5 +	?	?															
8	高杯		14.9(脚径)	10.5 +	?	?															
9	高杯			3.4 +																	
10	高杯			4.0 +	?	?															
11	高杯			6.8 +	?	?															
12	高杯			8.2 +	?	?															
13	高杯			3.8 +																	
14	鉢	5.1		4.2 +	?	?															
15	壺			7.0 +	?	?															
16	壺			3.7 +	?	?															
17	壺			28.0 +	?	?															
18	甕	12.7		7.4 +	?	?															
19	高杯		13.8(脚径)	7.7 +																	
20	特殊壺	6.1		17.5 +	?	?															
21	台付直口壺	8.7		6.8 +	?	?															



- 1. 暗黄褐色土(層)
- 2. 暗黄褐色土層(やや明るい)
- 3. 黄褐色土層
- 4. 黄灰色土層
- 5. 灰黄色土層
- 6. 茶黄色土層
- 7. 暗黄茶色土層



第102図 C調査区 第5グループ遺構配置図 (s=1/80)



第103図 C調査区 No.58・59土壙墓遺物出土状態 (s=1/40)

切り合い関係は、土層観察の結果、No.58が新しい。供献用土器は、出土状態からNo.58のものと思われる。

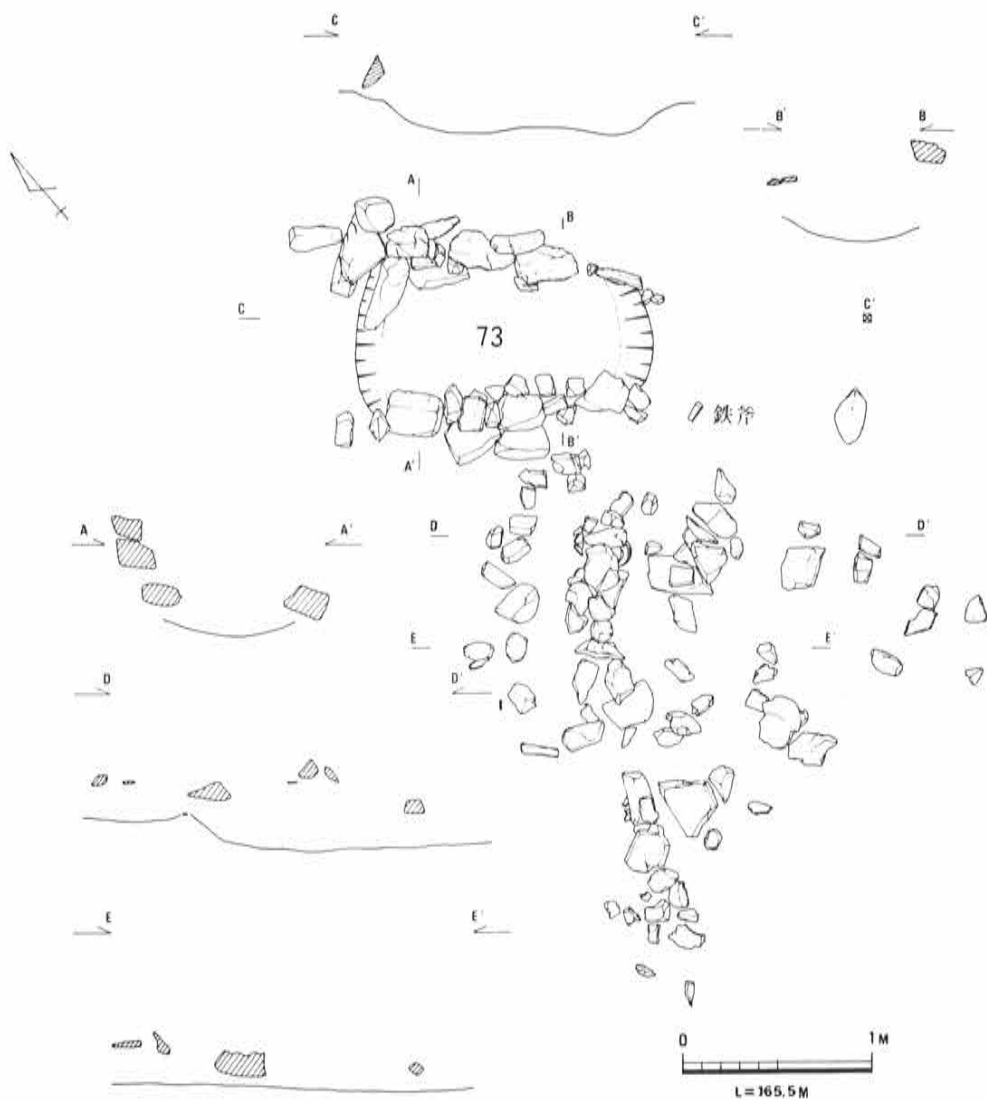
No.65, 64土壙墓

両土壙墓ともほぼ長方形をなし切り合い関係からNo.65が新しい。No.65は上面で、長さ242cm、幅136cm、下面では、長さ212cm、幅72cm、深さ65cmを測り、土層から木棺を使用していたものと思われる。No.64は、上面で、長さ148cm、幅81cm、下面では長さ139cm、幅66cm、深さ23cmを測り土層から木棺を使用していない。遺物は65上面より河原石を伴って出土した。

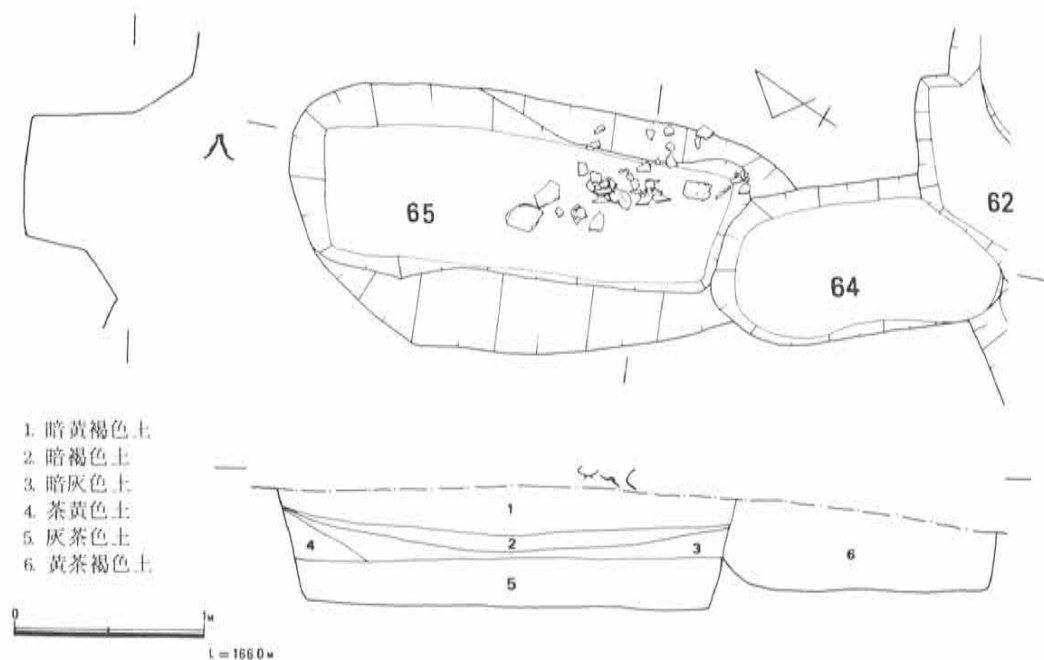
No.73配石墓周辺

C調査区第5グループ下に存在し、当初はC調査区に伴う列石と思われたが、石の配列状態からNo.73配石墓が確認された。このため残りの列石も配石墓が破壊、あるいははずれたものと推定される。これらの配列は、上方にNo.73配石墓が尾根筋に平行に築かれ、その下方に尾根に平行な列石が並ぶ。また列石実測後、石を除去して掘方の確認につとめたが、土色の変化がつかめなかった。

遺物はNo.73配石墓北より板状鉄斧が出土した。



第104図 C調査区 No.73配石墓周辺遺構配置図 (s=1/40)



第105図 C調査区 No.65土塚墓遺物出土状態 (s=1/40)

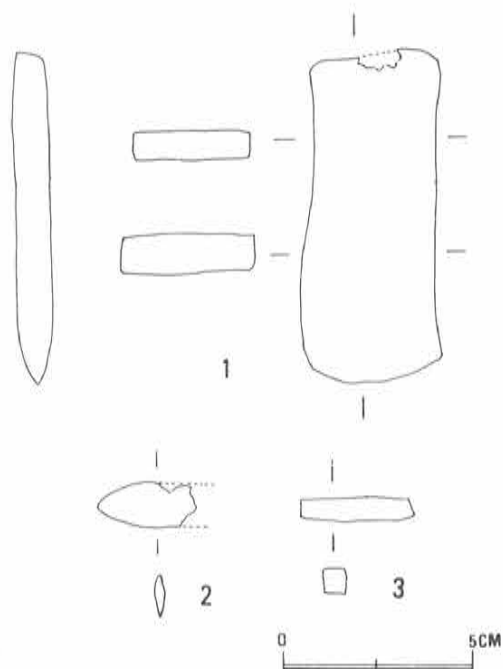
No.73配石墓

河原石を東西両辺に長さ約160cmにわたり平行に雑然と築いているが、両短辺には石の配置はみられない。配石内は20cm程度掘込み、幅約50cm、長さ約120cmの埋葬施設を作っている。

土塚墓群出土鉄器

1はNo.73配石墓西より出土した板状鉄斧である。長さ8.7cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmを測り、先端に両面から研磨された刃を着けている。

2はNo.53土塚墓埋土中より出土した細根式有茎鍬の先端と思われ幅1.2cmを測る。頭部の一部と身部が欠損しているため詳細は不明である。



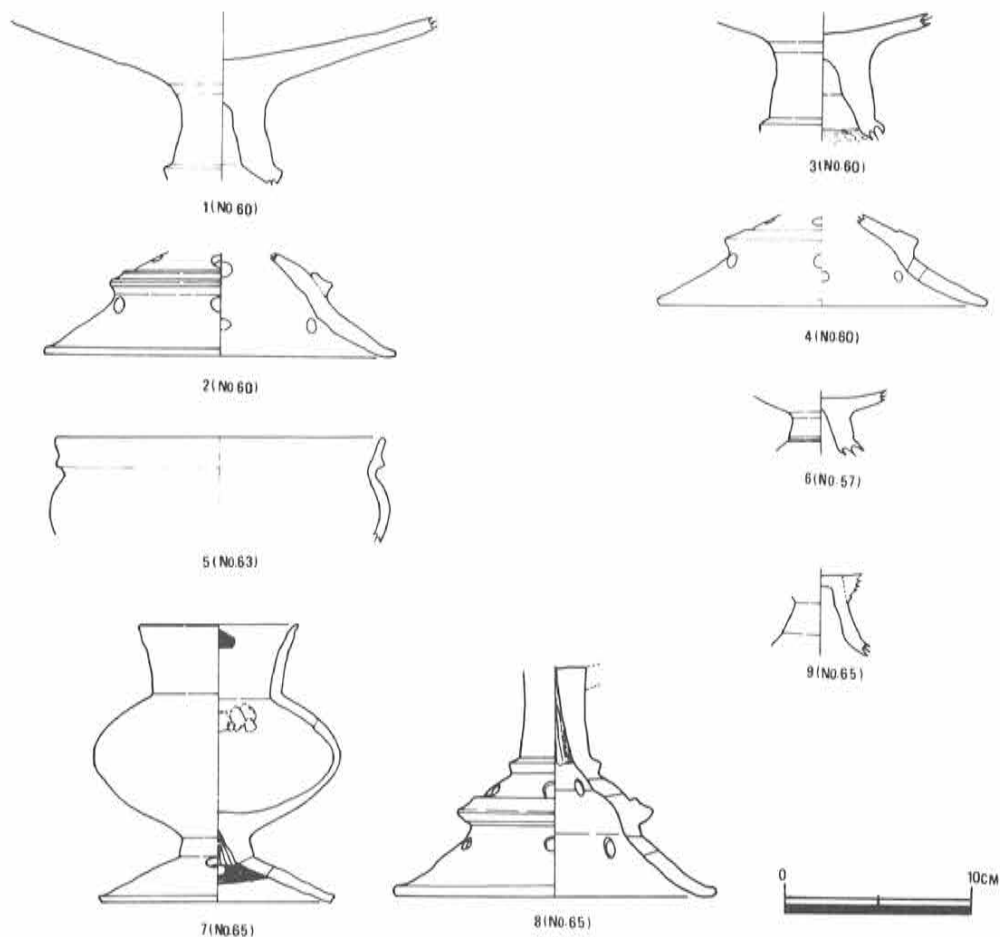
第106図 C調査区 土塚墓群出土鉄器 (S=1/2)

3はNo43土壙墓埋土中より出土した有茎の鉄鎌の身部と思われる。しかし大部分が欠損しているので断定はできない。

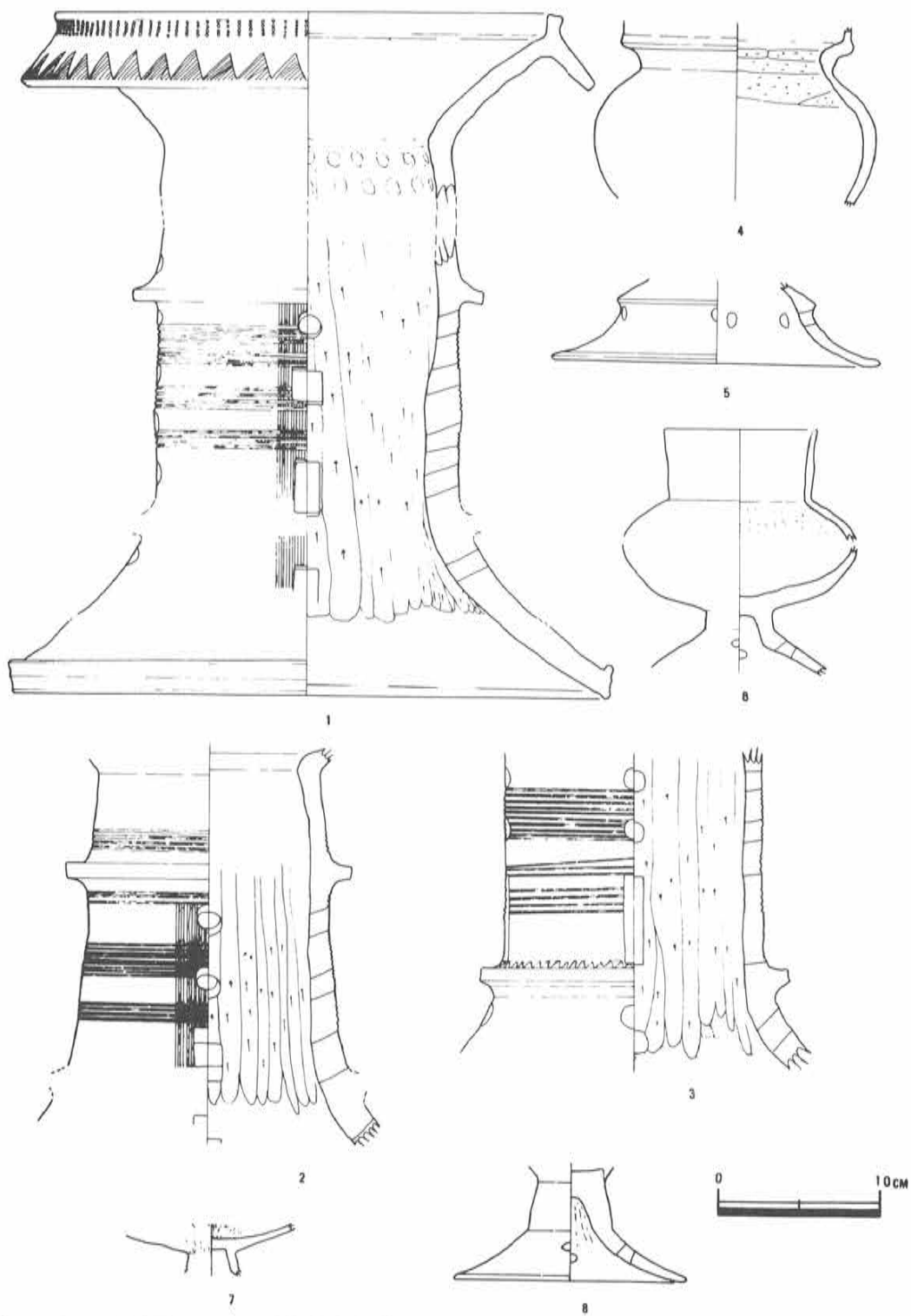
(2) その他の遺構遺物

7号墳

C調査区の南端に位置する。墳丘・主体部ともに封土の流失のため残存せず、わずかに尾根側に半月状を呈し、最大幅約1.5m、最大深さ50cmを測る周溝を確認したのみである。周溝から径8m程の円墳と推定される。



第107図 C調査区 No57・60・63・65 土壙墓出土土器



第108图 C調査区 No59土壙墓出土土器

表27 C調査区No57・60・63・65土壌墓出土土器一覽表

番号	種類	法 量 cm			整 形										色 調	そ の 他					備 考
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部		脚部			耳	丹塗	穴	へら	丸	
					内	外	内	外	内	外	内	外	内	外							
1	高 杯	—	—	8.8 +	?	?	—	—	—	—	—	—	?	?	淡黄褐色	—	○	—	—		
2	高 杯	—	12.4(脚径)	4.8 +	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	淡黄褐色	—	○	—			
3	高 杯	—	—	6.6 +	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	淡黄褐色	—	○	—			
4	高 杯	—	18.7(脚径)	5.4 +	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	淡黄褐色	—	○	—			
5	甕	17.4	18.1	5.6 +	?	?	?	?	—	—	—	—	—	—	暗黄褐色	—	?	—			
6	高 杯	—	—	3.4 +	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	暗黄褐色	—	?	—			
7	台付直口壺	8.4	13.2 12.2(脚径)	14.6 +	口縁調整	?	α	?	?	—	—	—	口縁調整	?	暗赤褐色	○	?	?			
8	高 杯	—	16.9(脚径)	12.1 +	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	暗褐色	○	○	○			
9	高 杯	—	—	4.2 +	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	暗黄褐色	—	?	—			

表28 C調査区No59土壌墓出土土器一覽表

番号	種類	法 量 cm			整 形										色 調	そ の 他					備 考
		口径	最大径(中位)	器高	口縁		胴部		底部		頸部		脚部			耳	丹塗	穴	へら	丸	
					内	外	内	外	内	外	内	外	内	外							
1	器 台	30.3	18.0(脚径) 16.2(脚径)	41.2	?	?	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	黄褐色	○	○	—	—	胴部突帯2本あり	
2	器 台	—	14.6(脚径)	24.2 +	—	—	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	黄褐色	○	○	—	—	胴部突帯2本あり	
3	器 台	—	15.6(脚径)	19.2	—	—	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	黄褐色	—	○	—	—	胴部突帯あり	
4	甕	—	17.2	18.2 +	α	α	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	暗黄褐色	○	×	—	左	—	
5	高 杯	—	19.6(脚径)	4.9 +	—	—	—	—	—	—	—	—	?	?	淡黄褐色	—	?	—	—	—	
6	台付直口壺	9.2	14.3 +	14.6 +	α	?	α	?	?	—	—	—	?	?	暗赤褐色	—	?	—	—	—	
7	高 杯	—	—	3.2 +	α	α	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	暗赤褐色	—	○	—	—	—	
8	高 杯	—	14.2(脚径)	7.2 +	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	暗黄褐色	—	?	—	—	—	

表29 C調査区土壌墓計測値表

(単位cm)

番号	尾根と稜線	平面形	現在掘方上面		床 面		深 さ	床面施設	備 考
			幅	長さ	幅	長さ			
1	平 行	長 方 形	94	237 +	83	224	36		
2	平 行	長 方 形	71	219	54	190	45		
3	平 行	長 方 形	112	243	72	204	66		
4	平 行	長 方 形	86 +	258	65 +	215	46		
5	平 行	長 方 形	108	234	78	220	44		
6	平 行	長 方 形	120	270	98	253	40	枕石1対	
7	平 行	長 方 形	88	193	75	180	20	枕石1対	
8	平 行	長 方 形	95	232	77	215	37		
9	平 行	長 方 形	111	252	76	207	54		
10	平 行	長 方 形	100	237	81	200	31		
11	平 行	長 方 形	86	189	78	161	62		
12	平 行	長 方 形	55	134	47	112	24		
13	平 行	長 方 形	98	219	91	188	78		
14	平 行	長 方 形	108	207	66	181	80		
15	平 行	長 方 形	150	357	133	290	87		土壌墓か不明瞭
16	平 行	長 方 形	94	167 +	82	140 +	23		土壌墓か不明瞭
17	平 行	長 方 形	73	273 +	73	265 +	54		土壌墓か不明瞭

(単位:cm)

番号	尾根と稜線	平面形	現在掘方上面		床面プラン		深さ	床面施設	備考
			幅	長さ	幅	長さ			
18	平行	長方形	85	138	87	126	18		
19	平行	長方形	72	204	55	193	16		
20	平行	長方形	96	227	47	182	58	枕石1対	
21	平行	長方形	95	169	63	163	20		
22	平行	長方形	97	188	74	176	55	枕石1対	
23	平行	長方形	53	150	37	161	22		
24	平行	長方形	63	192	53	184	20		
25	平行	長方形	118	261	55	192	86		
26	平行	長方形	110	244	115	231	53	枕石1対	
27	平行	長方形	122	234	111	232	57	枕石1対	
28	平行	長方形	108	241	93	230	62	枕石1対	
29	平行	長方形	134	288	118	198	43	枕石1対	
30	平行	長方形	98	228	84	203	197		
31	平行	不定形	100	168	75	148	28		土塚墓か不明瞭
32	直交	不定形	71	253	48	234	64		
33	平行	不定形	75	165 +	65	156 +	15		
34	平行	不定形	86	125 +	76	116 +	10		
35	平行	不定形	83	53 +	69	52 +	25		
36	平行	不定形	41 +	153	41 +	140	19		
37	平行	不定形	104	220	100	208	44		
38	平行	不定形	107	204	47	167	47		
39	平行	不定形	87 +	213	79	168	50		
40	平行	不定形	66	89	47	69	26		
41	平行	不定形	96	69 +	70	63 +	18		
42	平行	不定形	66	88	69	48	25		
43	直交	不定形	100	202	81	185	43		
44	平行	不定形	96	112 +	56	106 +	21		
45	平行	不定形	63	212	46	193	52		
46	平行	不定形	133 +	157 +	116 +	139 +	41		
47	平行	不定形	87 +	274	70	214	54		
48	平行	不定形	73	170	70	156	69		
49	平行	不定形	113	198	52	178	82		
50	直交	不定形	65	181	45	159	62		
51	直交	長方形	91	230	55	203	90		木棺使用
52	直交	長方形	118	210	95	198	40		
53	直交	長方形	168	294	58	200	90		
54	直交	長方形	100	250	62	205	63		
55	直交	長方形	119	255	79	214	81		
56	平行	長方形	138	150 +	118	143 +	43		土塚墓か不明瞭
57	平行	長方形	125	245	84	198	61		
58	平行	長方形	127	238	104	205	71		
59	平行	長方形	108	226	80	192	63		
60	平行	不定形	126	222	168	92	40		
61	平行	長方形	60	205	67	180	41		
62	斜交	長方形	73	172	58	154	41		
63	平行	長方形	150	260	70	217	70		
64	平行	長方形	80	154	64	146	79		
65	平行	長方形	133	229	63	209	86		木棺使用
66	平行	長方形	143	223	100	180 +	34		
67	平行	長方形	94 +	233 +	81 +	225 +	39		
68	平行	長方形	100 +	250 +	80	245 +	50		

第4節 D調査区

1. D調査区の概要

D調査区は、開発区域の南東部にあたり、C調査区より南へ延びる東西20m、南北40mの東西を侵食谷によって刻まれた狭い尾根上に存在する。第1次トレンチ調査終了時には遺構は確認されず、調査対象から除外されていた。その後本調査に入った時点で、遺構の状態を再確認するためトレンチの精査を行ったところ、黒色土を有する溝状の落込みが2-3か所に認められたため、全面調査を実施し古墳3基を確認した。

2. D調査区の遺構遺物

(1) 古墳

8号墳

C調査区から派生する尾根の頂部を占地して築かれている。墳丘は、封土流失のため、ほとんど確認できなかったが、周溝は、山側に馬蹄形状に残り、最大幅2m、最大深さ55cmを測る。主体部は、封土流出のため残っていない。規模は、周溝から径8mの円墳と推定される。

9号墳

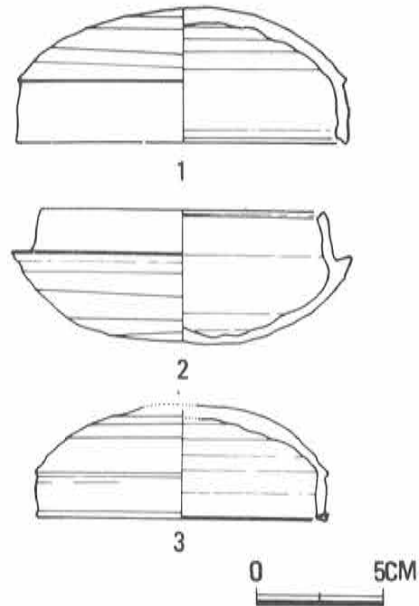
8号墳と10号墳にはさまれた位置に存在する。周溝は、山側に三日月形に残り、最大幅1.3m、最大深さ30cmを測る。墳丘、主体部共に流失のため残存していない。また、位置関係から3基の中で一番新しいと思われる。規模は、周溝から約8m前後の円墳と推定される。遺物は、須恵器3個体が10号墳よりの地山上面よりかたまって出土した。

10号墳

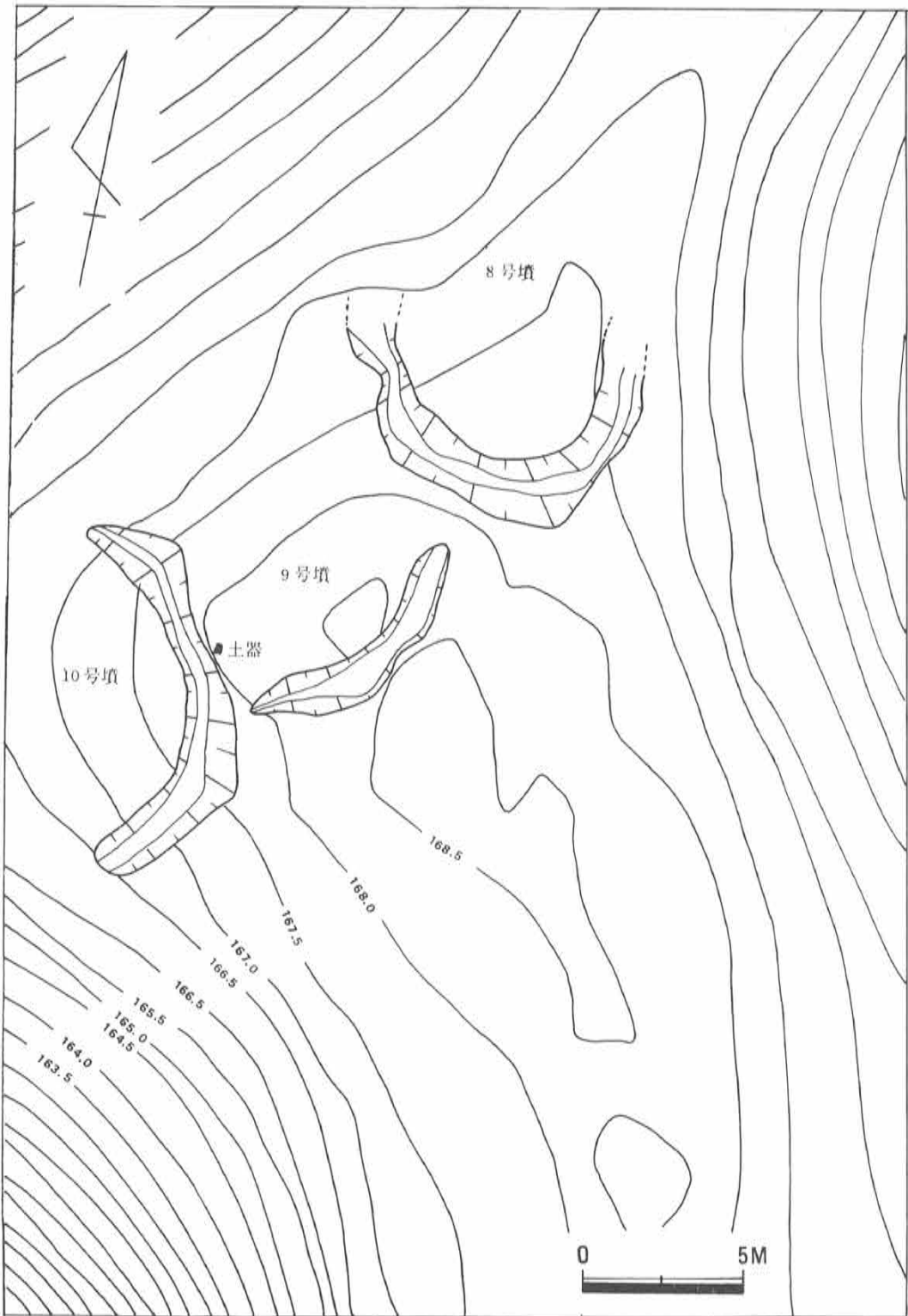
西の谷へ下る尾根のまわりを占地して築かれている。山側に、最大幅1.5m、最大深さ50cmの周溝が半月形に巡り、周溝から径10mの円墳と推定される。墳丘、主体部共に封土の流出のため残存していない。

9号墳出土遺物

遺物は、杯身2個、杯蓋1個である。1は杯蓋であり、口径13.0cm、高さ5.35cm、ヘラ削りは天井部より体部に向う約 $\frac{2}{3}$ まで施され、方向は左である。色調は青灰色をなす。2は1とセットをなす杯身である。色調は、青灰色を呈し、最大径13.7cm、口径11.6cm、高さ5.4cmをなし、ヘラ削りは、底部から体部の約 $\frac{4}{5}$ まで行われ、方向は左である。3は杯蓋であり、色調は青灰色を呈し、口径11.7cm、高さ4.6cmをなし、ヘラ削りは天井部から体部の約 $\frac{2}{3}$ まで行われ、方向は左である。



第109図 D調査区 9号墳出土遺物



第110図 D調査区 遺構配置図 (s=1/200)

第4章 結 語

1 調査結果

本遺跡は標高414mを測る木山より東に派生した幅300～400m、長さ1.5km、水田との比高30～40mを測る複雑に開析された低丘陵のほぼ中間部分にあたり、今回の調査契機ともなった且原遺跡と谷一つ隔てて西に隣接する。調査は1976年4月から開始し、当初3か月の予定が遺構の予想外の量からたびたびの期間延長を行い、同年11月までの約7か月間をついやし、約5000m²の調査を行い終了した。この間、弥生時代中期後半の竪穴住居址、同後期末～古墳時代初頭の墳墓群、古墳時代後期の古墳、奈良時代（平安時代）の火葬墓等の遺構の発見を行い、本遺跡が長期にわたる複合遺跡であることが判明した。また約5000m²の発掘面積から開発区域内のほぼ全域の遺構の把握が可能となった。これらのことから同一丘陵上に隣接し、同様に全域の調査を行った且原遺跡と遺構の対比を行いながら、本遺跡の時期の推移を4期に区分し検討を加えてみたい。

I 期（弥生時代中期後半）

A調査区2軒、B調査区3軒の計5軒の竪穴住居址を確認している。いずれも共伴遺物が少なく時期の確定はしがないが、ほぼ同時期の遺構と推察される。C・D調査区にはこの種の遺構、遺物は検出していない。

且原遺跡では調査区東半部の丘陵上に2軒の竪穴住居址・土壇・柱穴列を検出している。このうち一軒の住居址からは、石器製作の作業場の様相を呈した遺構を検出している。

この第1期は明確に本遺跡内に遺構の存在が確認できる時期にあたり、両遺跡を含めた丘陵上に小規模な単位集団の集落が存在していたことが想定される。

II 期（弥生時代後期末～古墳時代初頭）

本遺跡中最も多く遺構が発見された時期にあたり、A・C両調査区全域に認められた。しかし、B・D調査区には皆無であった。遺構は土壇墓を中心とする埋葬遺構が占め、A調査区で土壇墓198基、箱式石棺3基、配石墓1基、C調査区で土壇墓68基、配石墓5基の計275基にのぼる。

両調査区の土壇墓は約35mの間隔を置き、A調査区が尾根上の全面を使用し、区画を有する3基の墳墓を含み、整然と配置されて、特殊器台・特殊壺の出土をみたのに対し、C調査区では尾根北斜面を利用し明確な区画墓等は認められず、土壇墓の配置、出土遺物等で若干異なっており、2単位集団の集団墓と推察される。

且原遺跡では2方向の尾根上に4軒の竪穴住居址、7基の貯蔵用ピットを検出し、集落址の様相を呈し埋葬遺構の検出は行われていない。

このように谷一つ隔てた両遺跡で一方では土壇墓が築造され、他方では土壇墓の築造時期中に集落が形成されており、きわだった対象を示すのがこの時期である。

III 期（古墳時代後期）

A・B調査区7基、C・D調査区4基の大きく2ブロックに計11基の古墳、土壇墓を検出した。立

地は尾根傾斜面を利用したものが多くすでに主体部、封土等は消失し、わずかに周溝のみ残存している古墳がほとんどであった。残存周溝等から推察して墳丘規模は径4.5-10mを測る小規模古墳であり、墳丘も伐採時にはいずれも確認できなかった状況等から元来低かったものと推察される。主体部は土壇（本棺直葬）を中心とし、他に小竪穴式石室が一基認められた。副葬品は須恵器、刀子、鉄鏃、玉類等である。

且原遺跡では計4基の古墳を確認している。いずれも本遺跡と同様に残存状況が悪く、封土、主体部等はすでに消失しているものが多い。墳丘規模は径6-7mを測る小規模な古墳で、本遺跡と同様いずれも伐採時に確認できなかった。

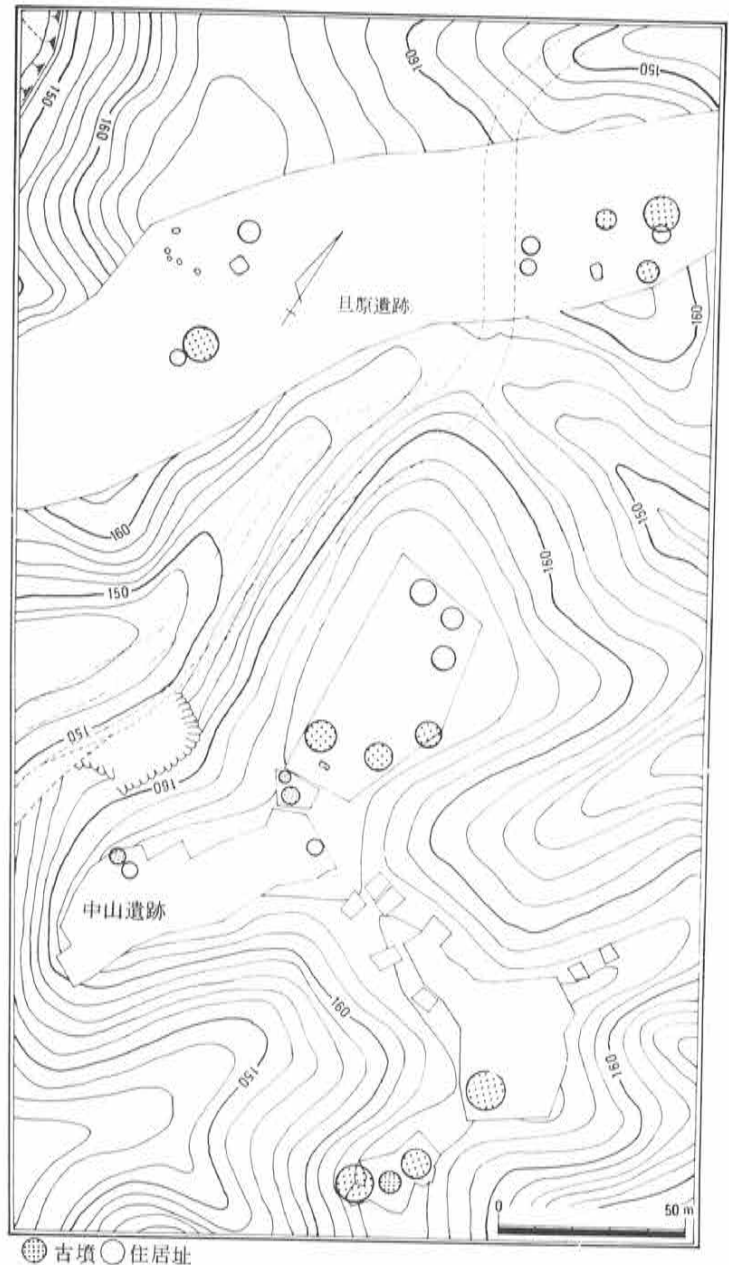
築造時期は出土須恵器等から本遺跡が6世紀初頭-後半、且原遺跡が6世紀後半を中心とするもので、いずれも横穴式石室墳は認められない。

Ⅳ期（奈良末-平安時代）

この時期はA調査区の2か所に須恵器の出土をみたのみで明瞭な遺構の検出は行えなかった。しかしほぼ完形に近い遺物の出土をみており、火葬墓等の埋葬遺構の存在が考えられる。他の調査区にはこの種の出土遺物は皆無であった。

且原遺跡では本遺跡と同様丘陵上には遺構は確認されず、1区東谷（本遺跡との間の谷）に火葬遺構と骨蔵器3点が出土し墓地を形成している。

（奥・山磨）



第111図 中山・且原遺跡住居址・古墳位置図 (s=1/2000)

2 土壙墓群について

A調査区の土壙墓群の築造過程

A調査区の土壙墓群は、何らかの規制によって土壙墓群が営まれたと思われることは前述したことから推定される。これらの土壙墓のまとまりは、当初別々の集団によって営まれたものと思われたが、下記のことによりこれらに築造序列が存在していたのではないと思われる。これらを列挙すると、

1. 中心主体と思われる大形土壙墓は、第3、4グループでは尾根筋に直交するが、第2グループ、第1・2区画では尾根筋に平行である。
2. 平面形で糸巻き形を呈する土壙墓は、第3、4グループにはほとんど存在しない。
3. 枕石を持つ土壙墓は、第1、3、4区画第1、5グループに存在し、また2対以上あるものが第1、4区画、第5グループに存在する。
4. 土壙墓群に供献された土器からは、第1・2区画に新しい傾向の土器を多く含み、第3・4区画には第1・2区画出土の土器より新しい傾向をみせる。B空間からは古い土器から新しい土器まで含む。

これら土壙墓の築造過程は、前述したことなどをあわせながら推定すると、

1. 床面施設に枕石を持たないものから持つ一群へ
2. 中心主体と思われる大形土壙墓が尾根筋に直交するもの平行するものへ
3. 平面形態が長方形から糸巻き形の土壙墓へ
4. 床面施設の枕石が1対から複数へ

これらの傾向から推定すると、1. 第4グループ、2. 第3グループ、3. 第2グループ、4. 第1グループ、5. 第3・4区画、6. 第1・2区画、第5グループの順に築造されたのではないと思われる。しかしA調査区の土壙墓群出土の供献土器が多量であって抽出していないものが多いこと、第2・3・4・5グループに供献したと思われるものがごく少数であることなどから断定はさしひかえたい。

土壙墓の配置について

中山遺跡において土壙墓として把握できるものは総数271を数える。これらの土壙墓群の埋葬人員は、枕石の数などから300人内外と推定される。これらはA・C両調査区に存在し、他の調査区にはその時代の遺構が全く存在しなかった。このことから両調査区は事前に墓域として設定され、土壙墓が全く存在しない全長約21mの丘陵鞍部を空白地帯とすることによって両遺構を隔てている。両調査区に営まれたものは、存在形態に著しい違いをみせる。これらを列挙すると下記に示すものとなる。

- | | |
|----------------------|------|
| 1. 大きな方形の区画に存在する | C調査区 |
| 2. 溝及び土壙墓によって区画する | A調査区 |
| 3. 糸巻き形の土壙墓が存在する | A調査区 |
| 4. 全体を意識した供献用土器が存在する | A調査区 |
| 5. 特殊器台が存在する | A調査区 |

6. 土壙墓が存在しない空白地帯が存在する A調査区

7. 中心主体と思われる大形土壙墓が存在する A調査区

8. 個々の土壙墓に供献された土器が多数を占める C調査区

これらのことよりA・C両調査区の土壙墓群は、土壙墓のあり方、供献用土器のあり方に変化をみせている。しかし土壙墓群に供献された土器から推定される時期は余りへだたりはないと考えられる。このことから両調査区は、異なる集団によって別々に土壙墓が築かれていったのではないかと推察され、別々の集団は供献用土器に特殊器台・壺などを持つ集団（A調査区）と、それにかわるものとして器台に突帯をつけ、それに似たものを持つ集団（C調査区）との違いとして一応とらえておきたい。また特殊器台が吉備国という範囲内で大部分が出土する（註1）ことから、A調査区の土壙墓群は吉備的色彩が強い集団、C調査区は吉備という勢力範囲内にくり込まれていても、特殊器台という特殊な供献用土器を持ちえなかった集団と仮定した。このことが、A・C両調査区の土壙墓群での供献用土器のあり方に変化をみせているのではなかろうか。

A調査区では供献用土器がB空間周辺に存在し、その土器群に時期差が存在する。A空間では、第3・4区画を尾根筋より東におしやるほどの意味を持たせている。A・B両空間には、その時代の遺構が全く存在しないということから、何らかの意味で共同体という意識を強めるための行事（祭祀）が行われることをにおわせており、そのために特殊器台・壺が必要ではなかったのではなかろうか。さらに中心主体と思われる土壙墓が存在するということから、統率する首長らしきものが存在したことをうかがわせることができ、また土壙墓間の切り合いが少ないという点などから、この集団の統率力は、現在では推し測ることができないほど強かったものと考えられる。

またC調査区では、供献用土器から考えると土壙墓全体を意識したものはなく、個々の土壙墓上面に供献されたものが大半である。土壙墓は木棺を持つもの、持たないもの、小口面に木棺おさえ石を持つものなど若干の差がみられるが、中心主体と考えられる大形土壙墓が存在しないことから、A調査区と違い個々の被葬者の意識が強い集団、あるいは比較的階級差が明確でない集団ではないかと考えられ、これらは大きな方形の区画内にひとつのまとまりをなしている。しかしA・C両調査区の土壙墓群は、中山遺跡の範囲でまとまり、大きな集団を形成し、共同墓地としての意識が全体に存在していたものと思われる。

次にこれらの土壙墓群の被葬者は、一体どこに住居をかまえていたのであろうか。A・C両調査区に葬られた人は300人内外と推定され、供献用土器の時期的範囲も一定期間内に収まることから、被葬者を眼下に見下す2つの谷のみを考えると、耕地面積からみてこの期間内で大量の人数が埋葬されたことは、とうてい不可能ではないと思われる。また現時点では、落合町内にこの時期の土壙墓群が発掘調査・分布調査において発見されていないことから、かなり広範囲から本遺跡に人々が埋葬されたのではないかと考えられる。

（奥・山磨）

3 土壙墓群からの出土土器について

土壙墓群から出土した土器の外には、ほとんどベンガラと思われる赤色顔料が施されており、器種としては、高杯・壺・器台が多数を占め、その中でも高杯が多い。

A 調査区の土器

この調査区から出土した土器は、大別すると土壙墓群全体、及び個々の区画、もしくは各グループに属するものとの2種に分けることができる。このためこれらの土器からは、土壙墓群全体、及び個々の区画、もしくは各グループの時期差を推定することができると思われるが、個々の土壙墓についてはこれを認めることはできない。

古い傾向を示すと思われる土器はB空間より出土している。これらは、B空間周辺土器No.1・2・4・31・32・45と思われるが、破片からの実測なので全体を把握することはできない。しかし全体のプロポーションからみると、上東遺跡(註2)の鬼川市Ⅲ式、雄町遺跡(註3)の10類まではいかないと考えられる。

新しい傾向を示すと思われる土器は、第1・2・4区画、B空間周辺より出土している。第1・2区画はほとんど全部、第4区画は土器No.4・9、B空間では土器No.39・44と思われる。これらの土器は、高杯では短脚から長脚・中空に変化する傾向が認められる。壺、甕では器壁が均一化し、底部までハケによる整形を行い、丸底になる。また甕の口縁に櫛書き沈線がみられることなどから、上東遺跡では下田所、雄町遺跡では12・13類近く、その中でもB空間周辺土器No.39はもっとも新しい傾向を示すものではなかろうか。

A調査区で大勢を占めると考えられるのは、上記にあげた以外のものである。高杯は短脚、壺、甕では胴部の最大径が中位より上部にあること、また器壁が厚いということなどから上東遺跡では才の町Ⅰ・Ⅱ・雄町遺跡では11類に近いと思われる。

C 調査区の土器

この調査区から出土した土器は、個々の土壙墓上面より出土したものが大半であり、土壙墓群全体、もしくは個々のグループに属すると思われる供献用土器は認められなかった。

A調査区であげたような古い傾向を示すような土器は認められず、しいてあげるとすれば頂部付近に存在するNo.52・53土壙墓ではないかと思われる。新しい傾向を示す土器は土壙墓No.4・15・16・17に存在する土器と思われ、高杯では器壁が均一化し、長脚・中空に変化する傾向が認められ、壺では口縁が大勢を占める土器よりも外反し、器壁が均一化している。これらのことなどから上東遺跡では下田所、雄町遺跡では11類に近いと思われる。

一応これらA・C両調査区の土器をまとめてみたわけであるが、全体としては県南の資料と比較できるものは少ないため不確定要素は強い。しかしこれらの土器から土壙墓全体の流れや土壙墓群を把握するために土器の比較検討を行った。

(奥)

4 特殊器台について

特殊器台は、半特殊のものを含め8本分出土した。これらのものを調整・文様の違いにおいて一応

4タイプに分けて個々の諸特徴について述たい。Iは特殊器台1、IIは特殊器台2・3・5、IIIは特殊器台4、IVは特殊器台6・7・8である。

Iタイプ

口縁の立上り部は外面に平行沈線文を巡らし、内面には横方向のヘラ磨きを行い、口縁屈折部はやや丸味を帯びる。受部の外面は横方面のヘラ磨き、内面は櫛状工具による調整を行っている。胴部の間帯は、胴部を作った後、粘土を貼り重ね、上下端にはつまみ上げた突帯がつく。間帯は、口縁部と同様な平行沈線文を施す。内面は、右方向のヘラ削りを行っている。脚裾部外面は、縦方向のハケ目調整、内面はヘラ削り、直立部は、内外面共に横ナデが施されている。

IIタイプ

口縁の立上り部は、外面に櫛状工具による平行沈線文、内面に外面と同じ櫛状工具によるはけ目調整。受部下には、外面に横方面のヘラ磨きを行っている。胴部の間帯は、筒を作った後粘土を貼り重ね、上下端には、つまみ上げられた突帯がつく。間帯には、口縁外面と同様な平行沈線文を施し、その下には口縁立上り部外面及び間帯と同種の櫛状工具による縦方面のはけ目調整を行う。脚裾部外面は縦方向のはけ目調整、内面はヘラ削り。直立部は、内外面共に横ナデが施される。

IIIタイプ

口縁立上り部は、外面に板状工具による平行沈線文。内面には、外面と同じ板状工具による調整。受部下は調整不明である。胴部間帯は、突帯のみを上下に貼りつけ、その内に口縁と同種の平行沈線文を施している。内面は、横方向のヘラ削りを行っている。

IVタイプ

口縁外面には平行沈線文を施し、内面は、横方向のヘラ磨きを行っている。受部下外面には、縦方向のヘラ磨きを行い、内面は不明である。脚裾部は、外面に縦方向のはけ目調整。内面は、右方面のヘラ削り。直立部は、内外面共に横ナデを行っている。

これら、文様以外の特殊器台の調整その他の諸特徴をあげてきたわけであるが、これらから、現段階における特殊器台の変化をとらえてみたい。

I、IIタイプの違い

口縁外面、間帯に施した平行沈線文は、雄町遺跡・上東遺跡・川入遺跡において形式設定のひとつの要素に数えあげられた。甕の口縁に施された粗雑な平行沈線文から櫛書き施文に変化するという雄町11類から12類、才の町Iから才の町IIにおける手法の変化と同一と考えられるものが特殊器台にも表われている。また口縁立上り部内面は、Iはヘラ磨きであるのに対して、IIは櫛による調整である。そのことから、IよりIIが新しい傾向を示すものとしてとらえることができよう。

II、IIIタイプの違い

口縁立上り部の比が、IIは短いのに対し、IIIは長くなる傾向を示す。口縁外面、間帯に施した平行沈線文は、櫛書きから板状工具による施文に変化し、口縁内面も同様に变化する。そして、間帯と突帯は、IIではどちらも貼りつけを行っているのに対し、IIIでは突帯のみの貼りつけを行う。これらよりIIIがIIより新しい傾向を示すものと思われる。IVは、半特殊器台といわれるものであるが、口縁立上

り部外面には平行沈線文、受部下には縦方向のヘラ磨きを行っており、ヘラ磨きの方向だけで推定するとIより古い手法の特徴を持つが、半特殊器台だけにみられるものか現時点では不明である。

これらから中山遺跡の特殊器台は、IVタイプを除き一応I・II・IIIという流れでとらえることの出来る手法の変化を示している。このことから、現在までに報告されたものと少数ながら実見したものとを比較し、検討を行ってみたい。

黒宮遺跡のもの(註4)

No98の立坂b(註5)の文様にIと同種の文様が施されているため、当初は同時期と考えていたが、口縁受部下の調整が、黒宮遺跡のものは縦のヘラ磨きであるのに対し、Iは横のヘラ磨きを行っている。間帯・突帯は、黒宮遺跡のものは全部はめ込んでいるように見えるのに対し、Iは、間帯・突帯を胴部に貼りつけている。口縁、脚の屈折部は、黒宮遺跡のものは角ばり、突出しているが、Iは丸味を帯びる。口縁立上り部外面、間帯に施された平行沈線文は、黒宮遺跡のものは比較的均整であるが、Iは粗雑な感じを受けた。内面は黒宮遺跡のものが縦のヘラ削りが認められるのに対し、Iは横のヘラ削りだけである。また、これらと共に供献された土器は、黒宮遺跡のものが、B空間の古い傾向を示す土器より古い傾向を示すと思われることから、黒宮遺跡のものよりは新しい手法の特徴をそなえたものと考えられる。

次に、II、IIIとあたご山遺跡(註6)出土のものとの比較である。後者は、狐塚省蔵氏が形式設定され、第二段階第二形式のメルクマールとされている。(註7)

IIタイプとの比較 口縁立上り部外面は、IIが楕書きの平行沈線文に対し、あたご山遺跡のものは、板状工具による疑凹線文。内面は、IIが外面と同種の工具による調整に対し、あたご山遺跡のものは、横ナデ。胴部の間帯、突帯は、IIが全部貼りつけているのに対し、あたご山遺跡のものは、突帯だけの貼りつけなどのことから、あたご山遺跡のものが、IIよりは後出的な要素が強いものとしてとらえることができよう。

IIIタイプとの比較 口縁外面は、どちらも板状工具による疑凹線文を施し、内面は、IIIが板状工具による調整であるのに対し、あたご山遺跡のものは、横ナデを施している。口縁受部と立上り部の比は、IIIが大きい。あたご山遺跡のものは、内傾化している。間帯、突帯とも同様な調整を施している。あたご山遺跡のものと同様の文様、調整を施したものに、実見したところでは西山遺跡(註8)出土のものがある。これはもう一種のものと合わせて、棺として転用されていた。文様構成の面だけをとらえてみると、宮山遺跡(註9)のものの方がIIIよりも似ている。また、口縁が短くなり、内傾化してくる。西山遺跡より出土し、セットになっていた別の特殊器台の文様が、IIIと同種と考えられる西江遺跡(註10)出土の特殊器台の文様と類似している点、また、宮山遺跡のものと同様に、棺として転用されている点などを考え合わせると、IIIと同時期、あるいは後出的要素が強いのではないと思われる。しかし、これらの特殊器台が、どのような形式の供献用土器とセット関係にあるのか、また、現在の特殊器台の分類が、他の土器との比較において正当性を持つものであるのかは、十分に解決のつかない問題である。ただ調整方法の変化においてのみ、このような変遷が辿れるのではないと思われる。

(奥)

5 遺物からみた古墳の築造順

中山遺跡において何らかの遺物が出土したのは、1・3・4・6・9号墳の6基である。その中で器種が一定している須恵器、特に杯が出土した古墳5基の築造順を明らかにしたい。

一番古いと思われるのが9号墳で、杯のタイプとして蓋の口縁の大小により2種が存在する。

杯蓋では、外面天井部と体部との間には明瞭な稜線を持ち、天井部と体部が明瞭に区別される。杯身では、立上りがほぼ垂直に長く延びる。また杯蓋・身とも口縁内面が角ばり、天井部から体部、または底部から体部にかけてのヘラ削りが大半である。

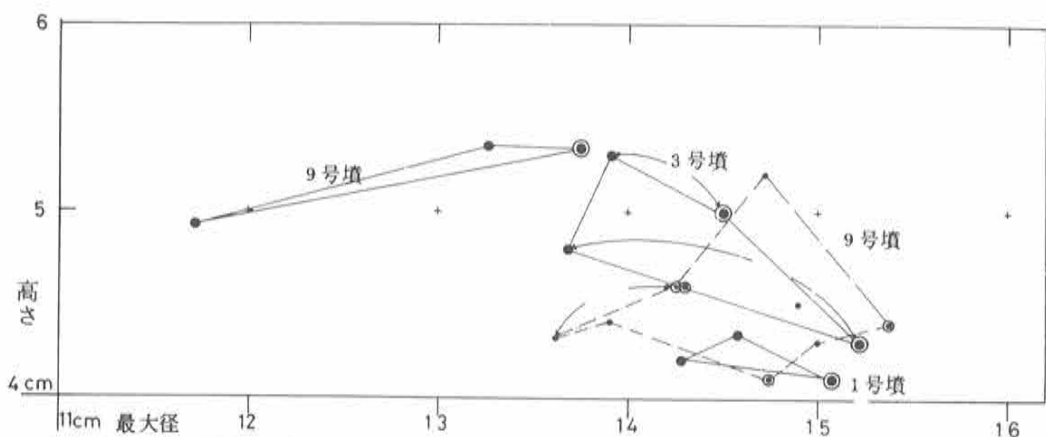
次にくるのが3号墳である。杯蓋では、天井部外面と体部との間に存在する稜線は、明瞭さを欠いてくる。口縁内面は角ばっているが明瞭さを欠く。杯身は底部が丸味を帯びているものと平らのものの2種が存在する。立上りは内傾して長く延びる。ヘラ削りの占める割合は少なくなる。

3番目は4号墳である。杯のタイプとして杯蓋・身の口縁の大小により2種が存在する。蓋においては、外面体部と天井部の間の稜線が存在するものとしもないものがある。口縁内面は丸味を帯びるのが大半であるが、角ばるものも存在する。杯身は、立上りが3号墳よりも内傾化し、長さも短くなる。ヘラ削りの占める割合はさらに少なくなる。

最後は1号墳である。杯蓋では天井部と体部との間に存在する稜線がなくなり、口縁内面は丸味を帯びる。杯身は立上りが4号墳よりもさらに内傾化し、長さもさらに短くなる。杯・杯身ともヘラ削りの占める割合はさらに少なくなる。

また6号墳周溝から出土した甕は、内面の同心円文のタタキ目をナデにより消していることから、一応9号墳以降3号墳にかけての間に、6号墳は築造されたものと考えられよう。

(奥)



第112図 中山遺跡須恵器杯計測値

表30 須恵器(杯)計測値表

(単位cm)

出土地	番 号	器 形	最 大 径	口 径	器 高	へら削り	ろくろ	備 考
1号墳	1	杯蓋	14.3	14.2	4.2	左	右	
〃	2	杯身	15.1	13.0	4.1	左	右	
〃	3	杯身	15.6	12.7	4.4	左	右	
3号墳	1	杯蓋	13.7	13.9	4.8	左	右	
〃	2	杯身	15.2	13.1	4.3	左	右	
〃	3	杯蓋	13.9	13.9	5.3	右	左	
〃	4	杯身	14.5	11.9	5.0	右	左	
4号墳	1	杯蓋	15.0	14.9	4.3	左	右	
〃	2	杯身	15.4	13.0	4.4	左	右	
〃	3	杯蓋	13.9	13.7	4.5	左	右	内面丹
〃	4	杯身	14.7	12.5	4.1	右	左	内面丹
〃	5	杯蓋	14.7	14.7	5.2	左	右	
〃	6	杯身	14.3	12.2	4.6	左	右	
〃	7	杯蓋	13.9	13.8	4.4	左	右	
〃	8	杯身	15.5	13.1	6.2	左	右	
〃	9	杯蓋	13.6	13.5	4.3	左	右	
〃	10	杯身	14.3	12.6	4.6	左	右	
9号墳	1	杯蓋	11.7	11.7	4.6	右	左	
〃	2	杯蓋	13.3	13.1	5.4	左	右	
〃	3	杯身	13.7	11.6	5.4	左	右	

註1 孤塚省蔵「吉備型器台論(上)(下)」『異貌4・5』1976

下沢公明・友成誠司「横見墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15』岡山県教育委員会 1977

註2 伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』

岡山県教育委員会 1973

柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「上東・川入」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会 1977

註3 正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1』岡山県教育委員会 1972

註4 間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古塚」『倉敷考古館研究集報第13号』1977

註5 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究13巻3号』1967

註6 孤塚省蔵「岡山県吉井町あたご山遺跡出土の“器台・壺”」『考古学雑誌63巻3号』1977

註7 註1に同じ

註8 西山遺跡は吉備郡真備町にあり、1977年民間の宅地造成に伴い県教委ならびに町教委により調査されたものである。

註9 高橋護「宮山墳墓群出土の土器」『土師式土器集成2』1972

高橋護「三輪山墳墓群の調査から」『岡山県総合文化センター館報No.39』1963

註10 田仲満雄・正岡睦夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会 1977

圖 版



(1) 中山遺跡遠景（北西木山寺より）



(2) 中山遺跡全景（南丘陵より）

図版 2



(1) A調査区 全景調査前（西より） —



(2) A調査区 全景調査後（西より）



(1) A調査区 第1区画 (北より)



(2) A調査区 第1区画 (西より)

図版 4



(1) A調査区 第1区画No.1・2・3土壙墓(南より)



(2) A調査区 第1区画L字溝北側遺物出土状況(北より)

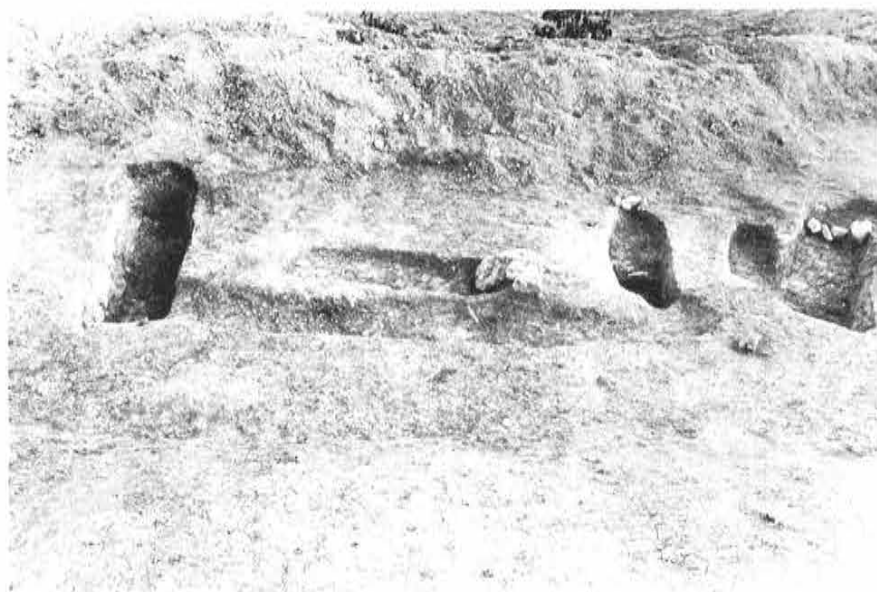


(1) A調査区 第1区画L字溝西側(南より)



(2) A調査区 第1区画西周溝(西より)

図版 6



(1) A調査区 第1区画東斜面下土壙墓 (西より)



(2) A調査区 第1区画南周溝 (東より)



(1) A調査区 第2区画 (南より)



(2) A調査区 第2区画南周溝 (西より)

図版 8



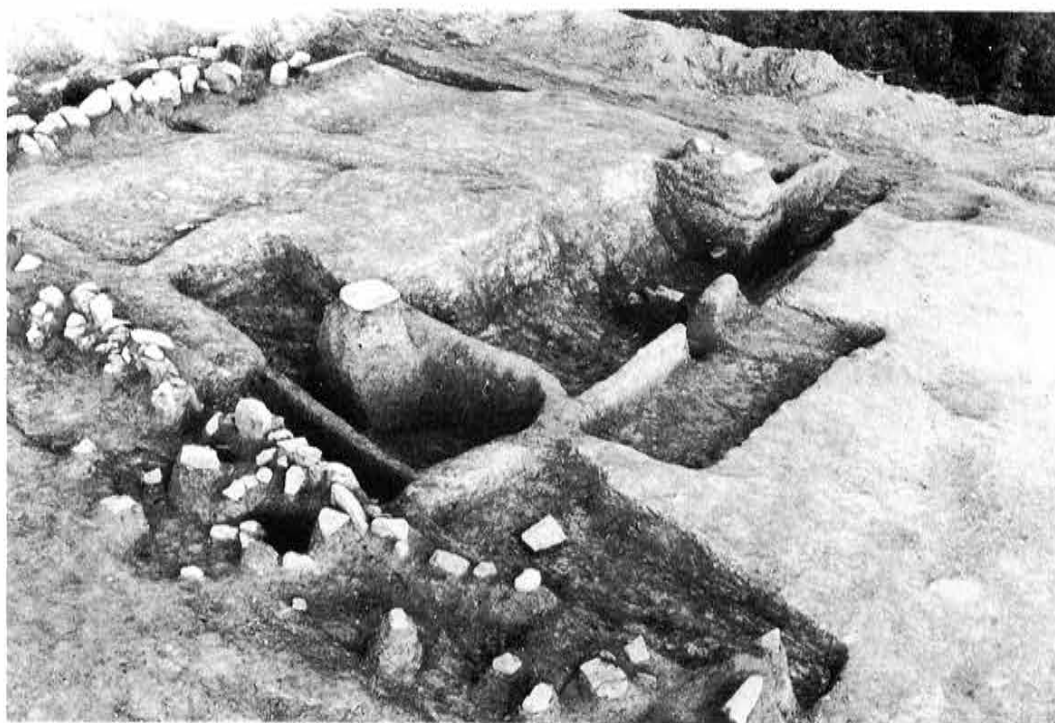
(1) A調査区 第3・4区画 (北より)



(2) A調査区 第3・4区画 (西より)



(1) A調査区 第3区画北周溝 (西より)



(2) A調査区 第3区画中央溝 (西より)

図版10



(1) A調査区 第3・4区画(南より)



(2) A調査区 第4区画(西より)

(1) A調査区 第4区画No.48土壟墓(北より)



(2) A調査区 第4区画No.44土壟墓(南より)



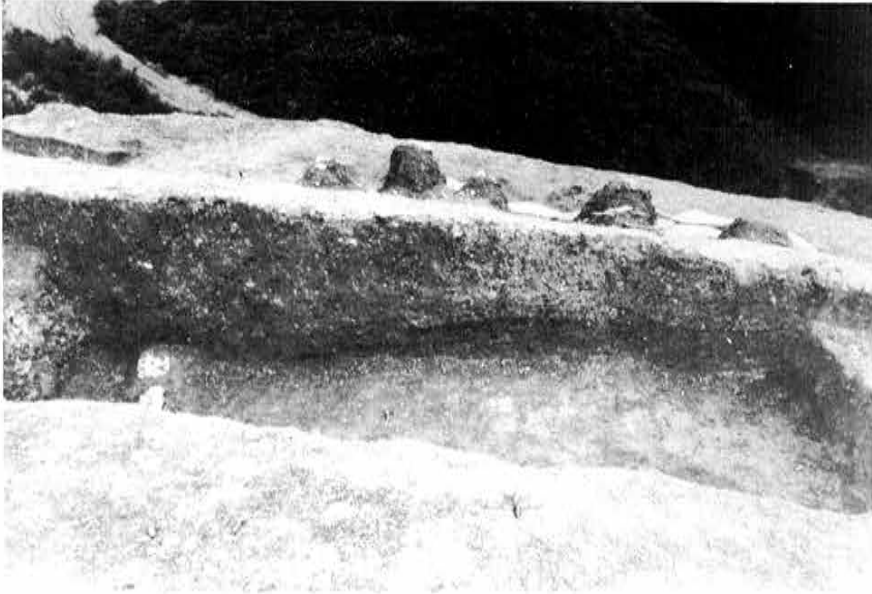
図版12



(1) A調査区 第4区画No50土壙墓上面供献用土器(南より)



(2) A調査区 第4区画No50土壙墓(南より)



(1) A調査区 第4区画No52土壙墓土層断面(西より)



(2) A調査区 第4区画No.52土壙墓(北より)

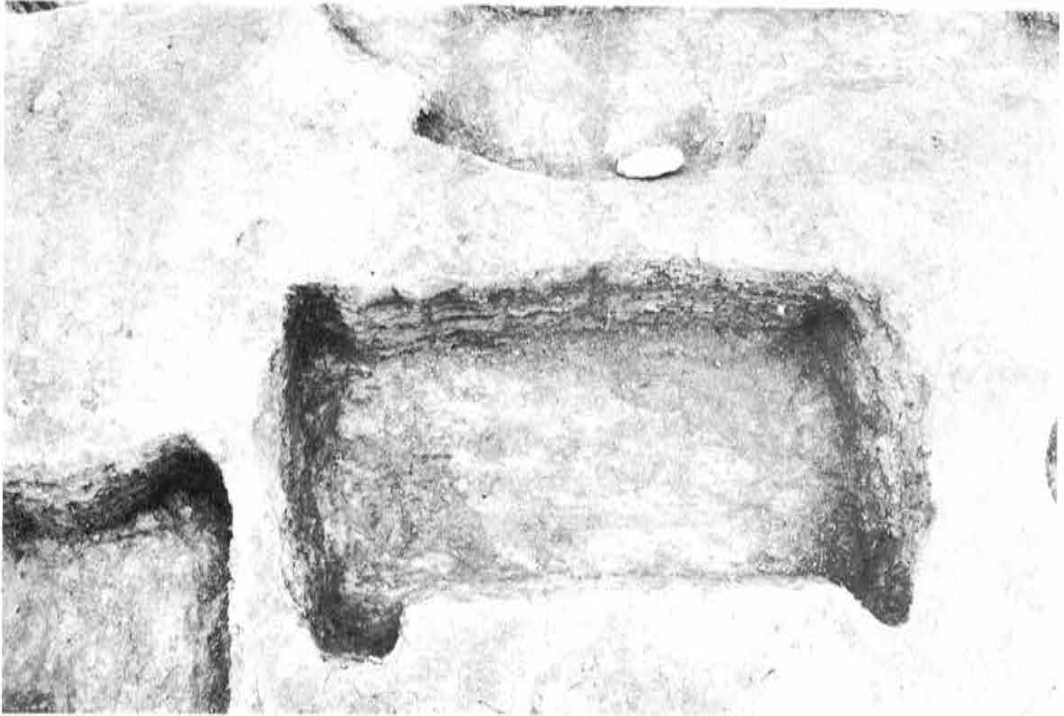
図版14



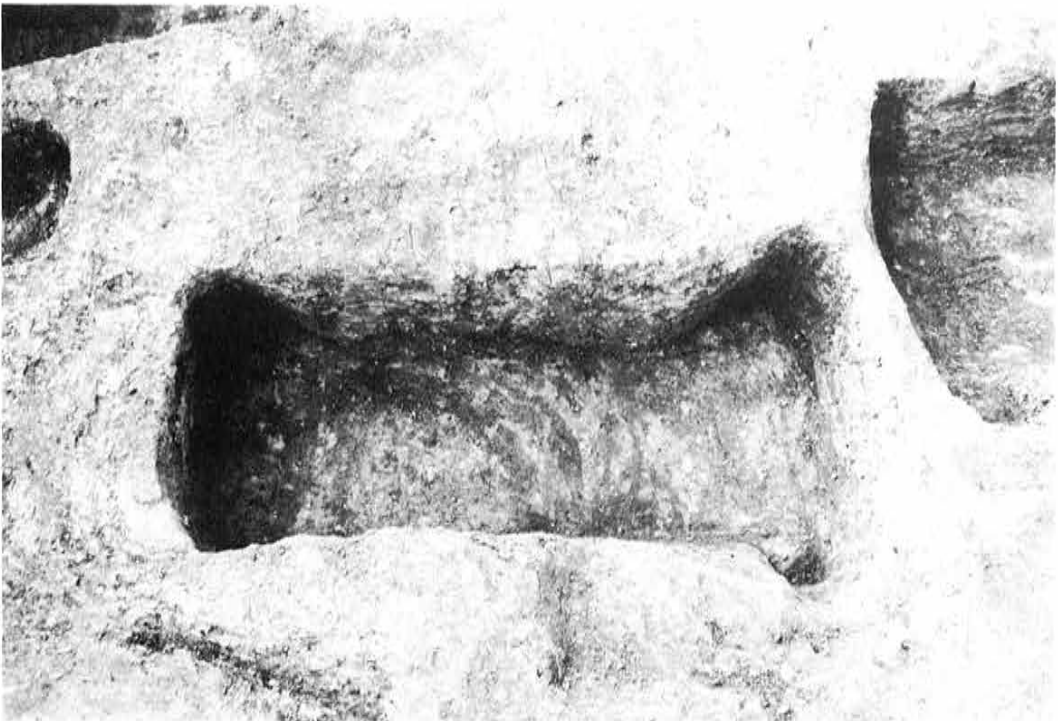
(1)A調査区 溝による区画を持たない土壙墓群（北より）



(2)A調査区 溝による区画を持たない土壙墓群（北より）



(1) A調査区 第1グループNo.65土壙墓(東より)

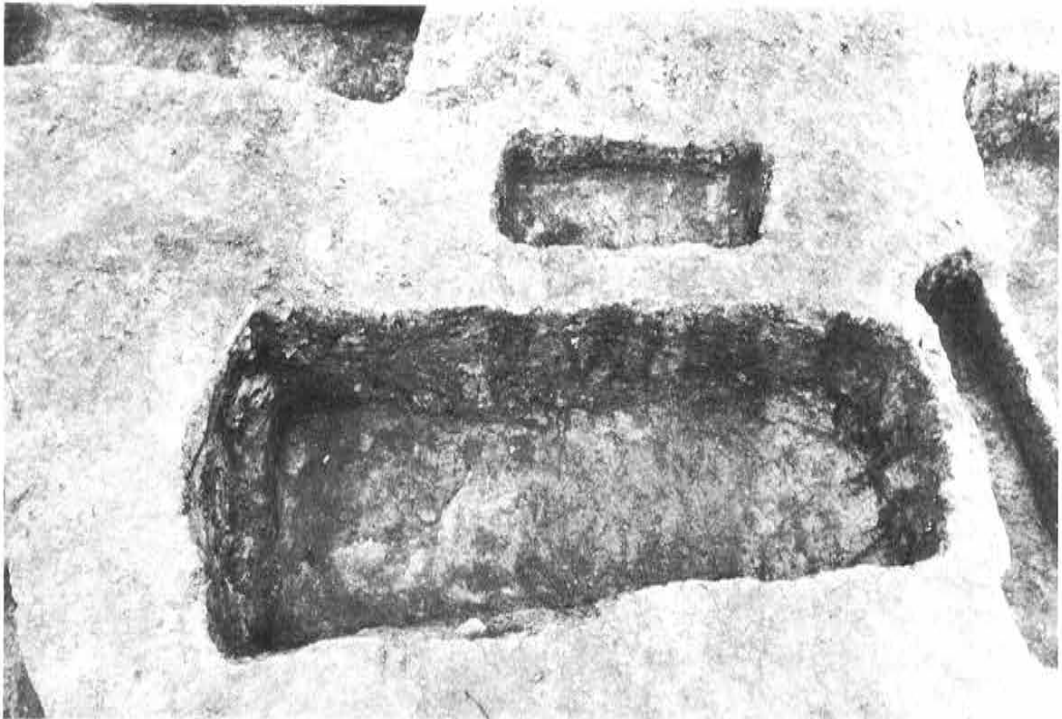


(2) A調査区 第1グループNo.67土壙墓(東より)

図版16



(1) A調査区 第1グループNo66・68土壙墓(東より)



(2) A調査区 第1グループNo92・100土壙墓(西より)

(1) A調査区 第1グループ No.116 石蓋土壙墓 (東より)



(2) A調査区 第1グループ No.116 石蓋土壙墓蓋石除去後 (西より)



図版18



(1) A調査区 第2グループNo137・138土壙墓(北より)



(2) A調査区 第5グループNo185・186・187・188土壙墓(南東より)

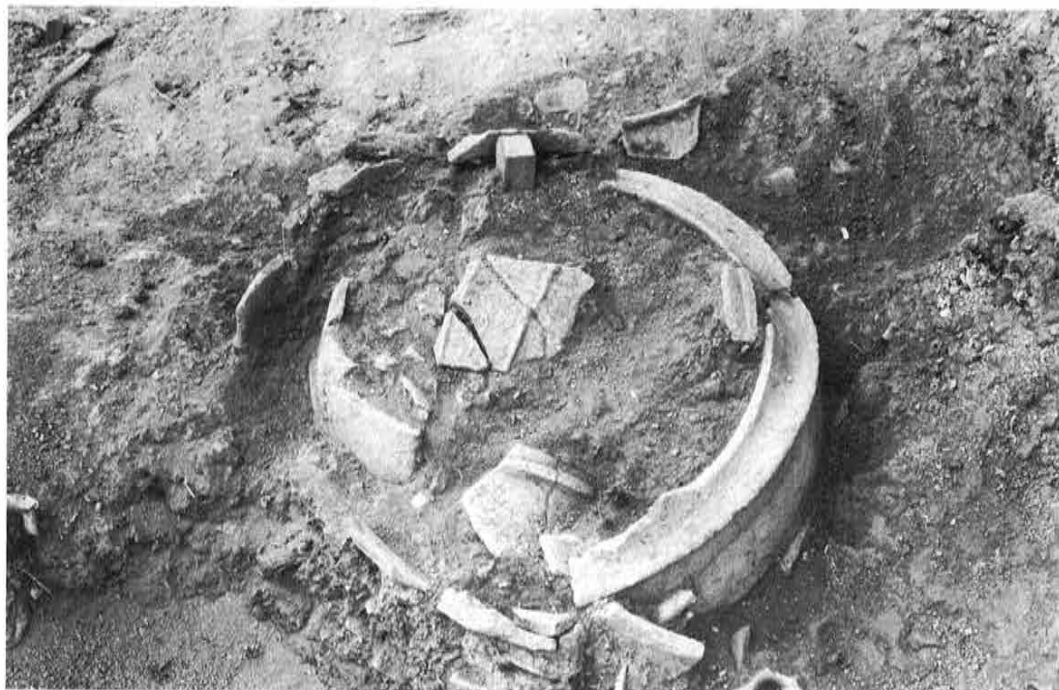


(1) A調査区 第4地点特殊器台出土状況(北より)

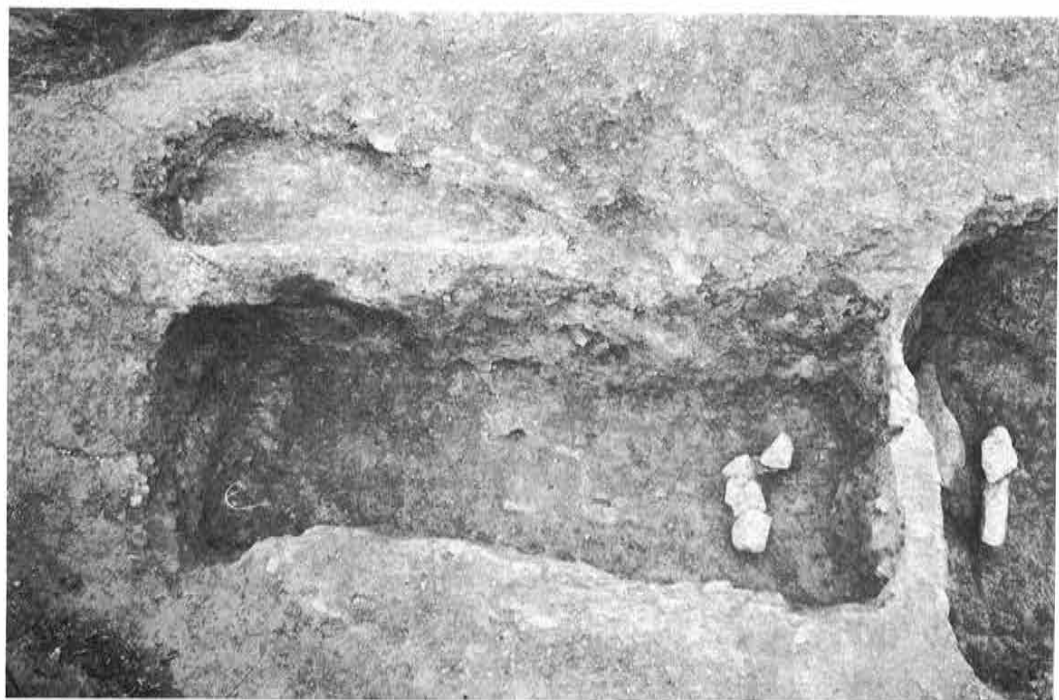


(2) A調査区 第3グループNo146・147・148・149土壙墓(北より)

図版20



(1) A調査区 第2地点特殊器台出土状況(東より)



(2) A調査区 第5グループNo.184土壙墓(東より)



(1) A調査区 B空間周辺東斜面遺物出土状況(北より)



(2) A調査区 第5グループNo185土壙墓(北より)



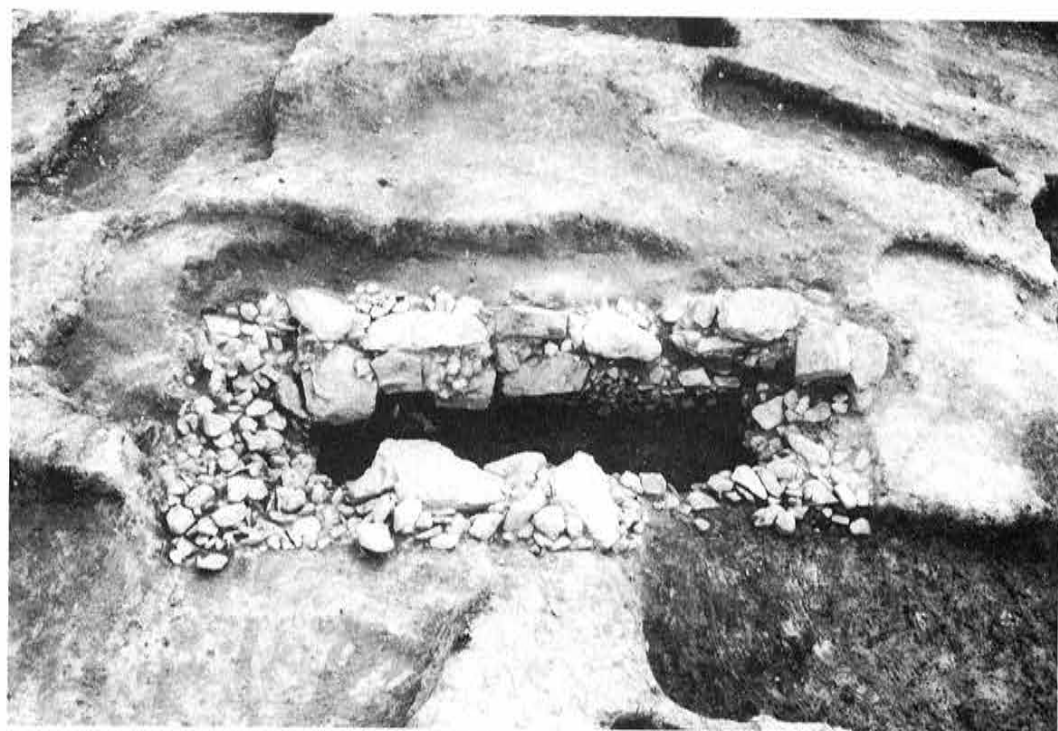
(1) A調査区 第4グループ(北より)



(2) A調査区 第4グループNo155土壙墓付近(西より)



(1) A調査区 礫塚墓 (No171) 検出状況 (北より)



(2) A調査区 礫塚墓 (No171) 蓋石除去後 (北より)

図版24



(1) A調査区 礫柳墓 (No171) 蓋石除去後 (西より)



(2) A調査区 礫柳墓 (No171) 掘り方 (西より)

(1) A調査区
第1地点特殊器台出土状況
(北より)



(2) A調査区
第1地点特殊器台出土状況
(北より)



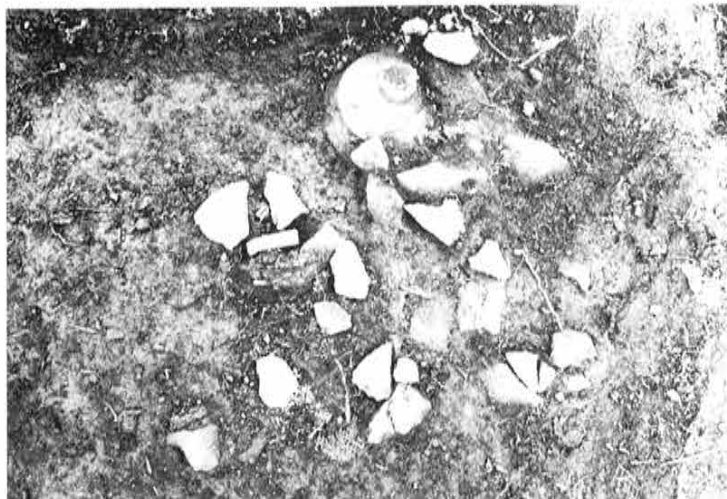
(3) A調査区
第1地点特殊器台出土状況
(北より)



(1) A調査区 第1グループ遺物出土状況
(北より)



(2) A調査区 B空間周辺遺物出土状況
(東より)

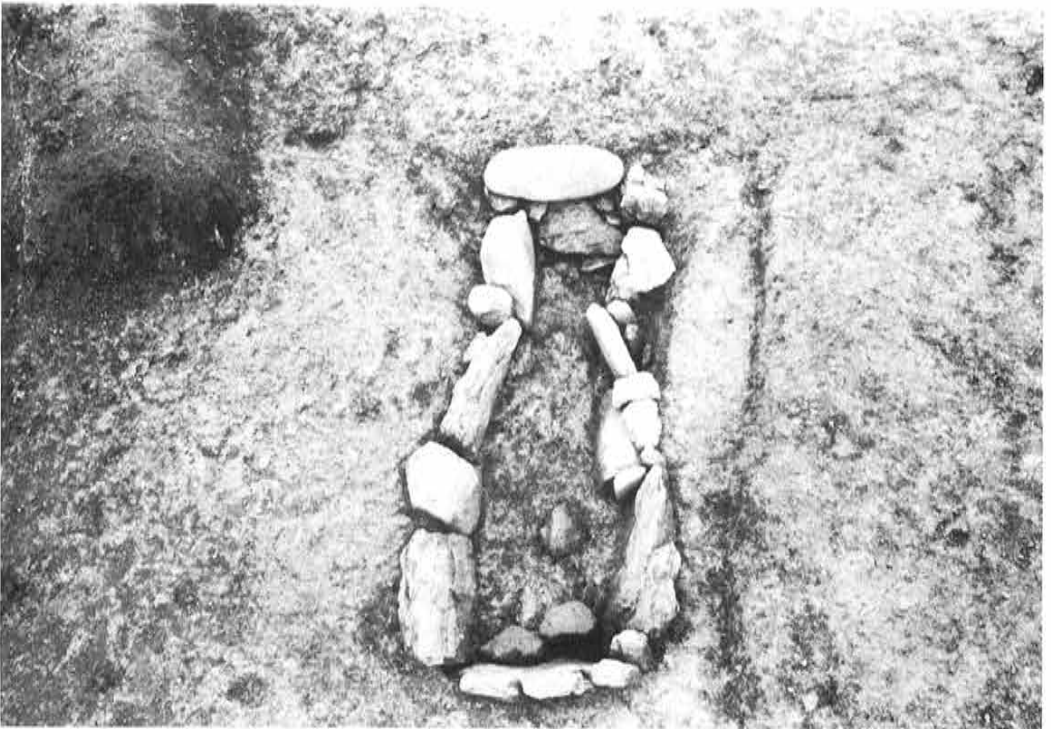


(3) A調査区 B空間周辺遺物出土状況
(東より)





(1) A調査区 No201箱式石棺 (南より)



(2) A調査区 No201箱式石棺 (南より)



(1) A調査区 1号墳(北より)



(2) A調査区 1号墳主体部(北より)



(3) A調査区 1号墳玉類出土状況(東より)

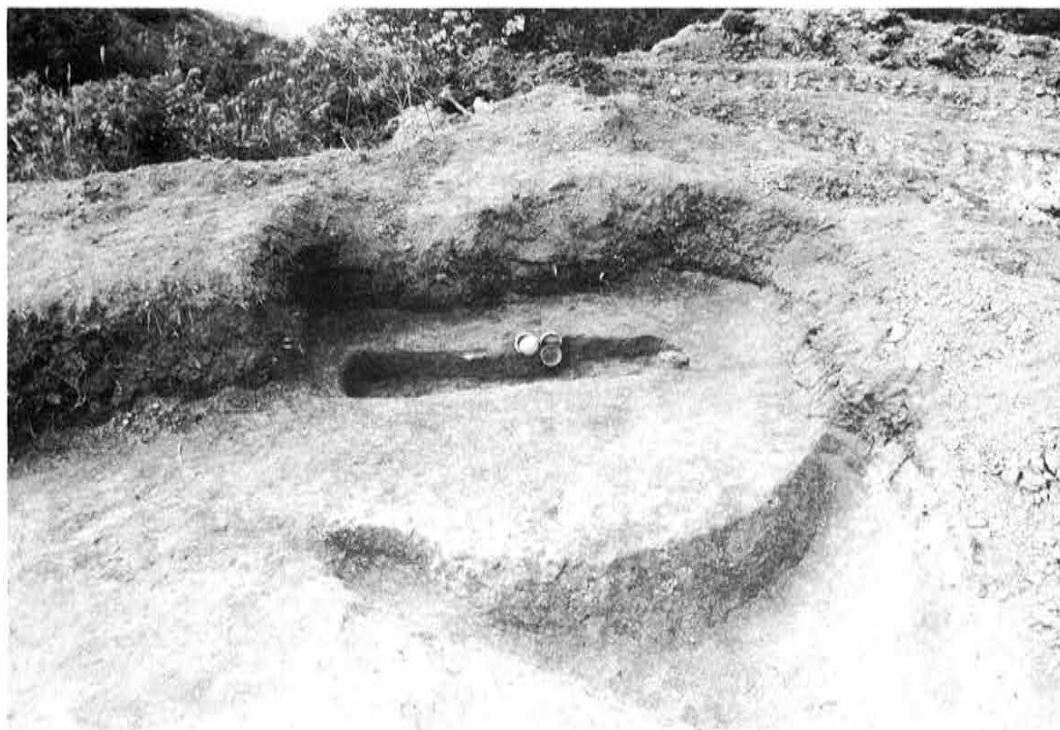


(1)B調査区 遠景 (西丘陵より)



(2)B調査区 全景 (南より)

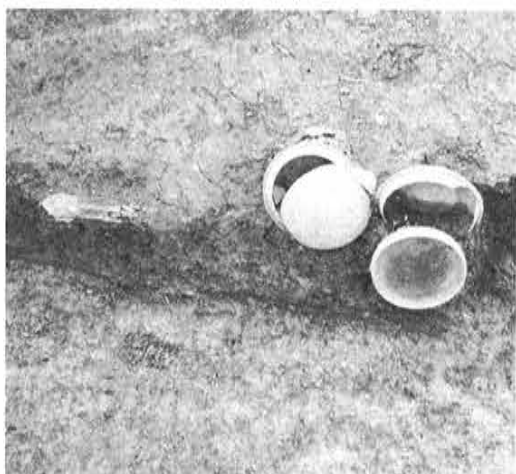
図版30



(1) B調査区 3号墳 (東より)



(2) B調査区 3号墳主体部 (北より)



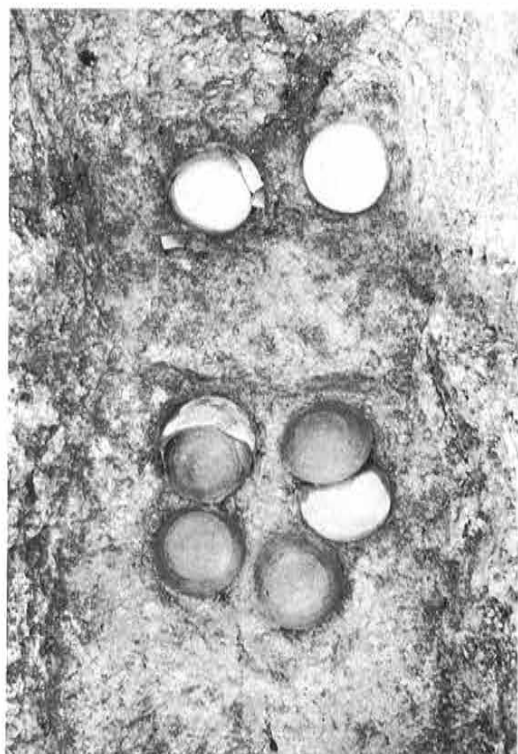
(3) B調査区 3号墳遺物出土状況 (東より)



(1)B 調査区 4号墳 (南より)



(2)B 調査区 4号墳主体部 (南西より)



(3)B 調査区 4号墳遺物出土状況 (南西より)

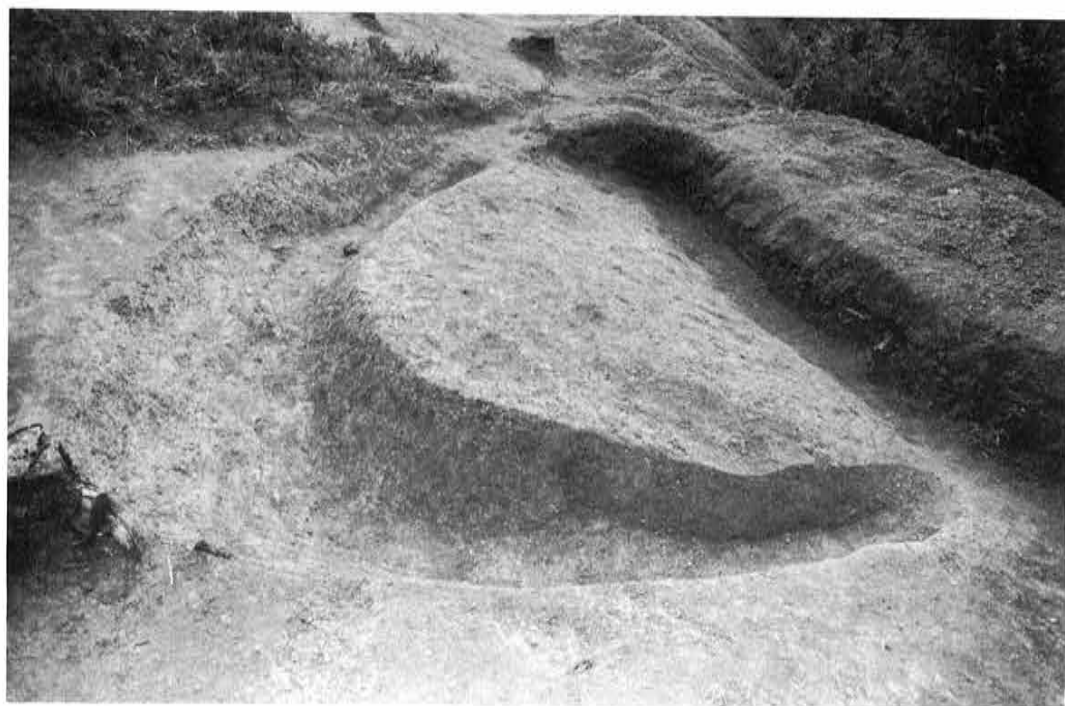
図版32



(1)B調査区 5号墳(西より)



(2)B調査区 5号墳主体部(南より)

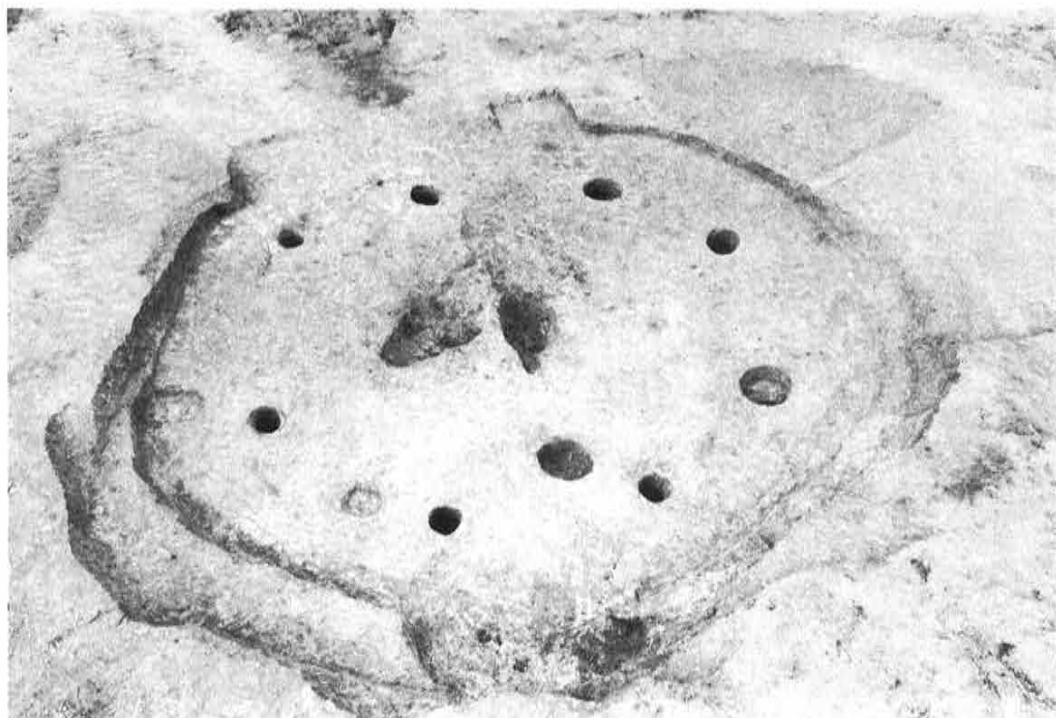


(1)B調査区 2号墳(北より)

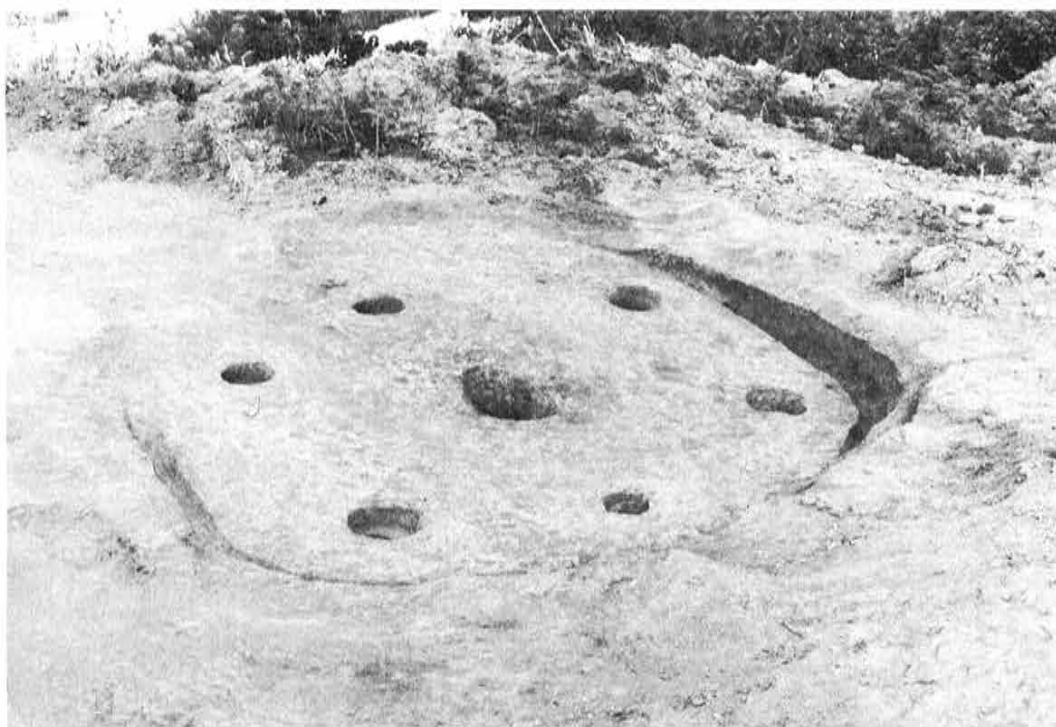


(2)B調査区 6号墳(南より)

図版34



(1)B調査区 3号住居址 (南より)



(2)B調査区 4号住居址 (南より)



(1)C調査区 全景 (西より)



(2)C調査区 作業風景 (西より)

図版36



(1) C調査区 No69・70・71配石墓 (西より)



(2) C調査区 第1グループ周辺土壙墓群 (東より)



(1)C調査区 第4グループ周辺土壙墓群西側(西より)



(2)C調査区 第4グループ周辺土壙墓群東側(西より)

図版38



(1)C調査区 第2・3グループ(北東より)



(2)C調査区 No26・27・28・29土壙墓(西より)



(1)C調査区 第5グループ周辺土壙墓群(南より)

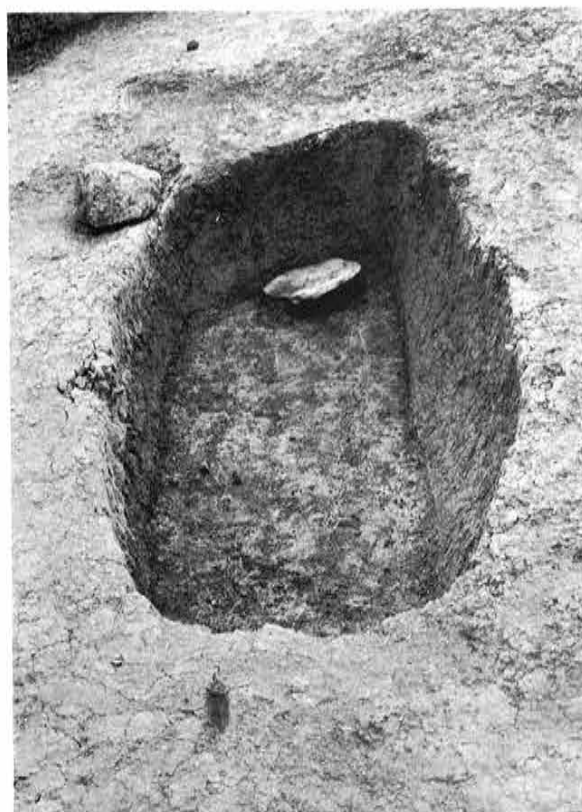


(2)C調査区 第5グループ周辺土壙墓群(北より)

図版40



(1) C調査区 No22土壙墓遺物出土状況（北より）



(2) C調査区 No22土壙墓（西より）



(1) C調査区 No24土壙墓遺物出土状況 (北より)



(2) C調査区 No24土壙墓 (東より)

図版42

(1) C調査区
No 25土壇墓遺物出土状況
(西より)

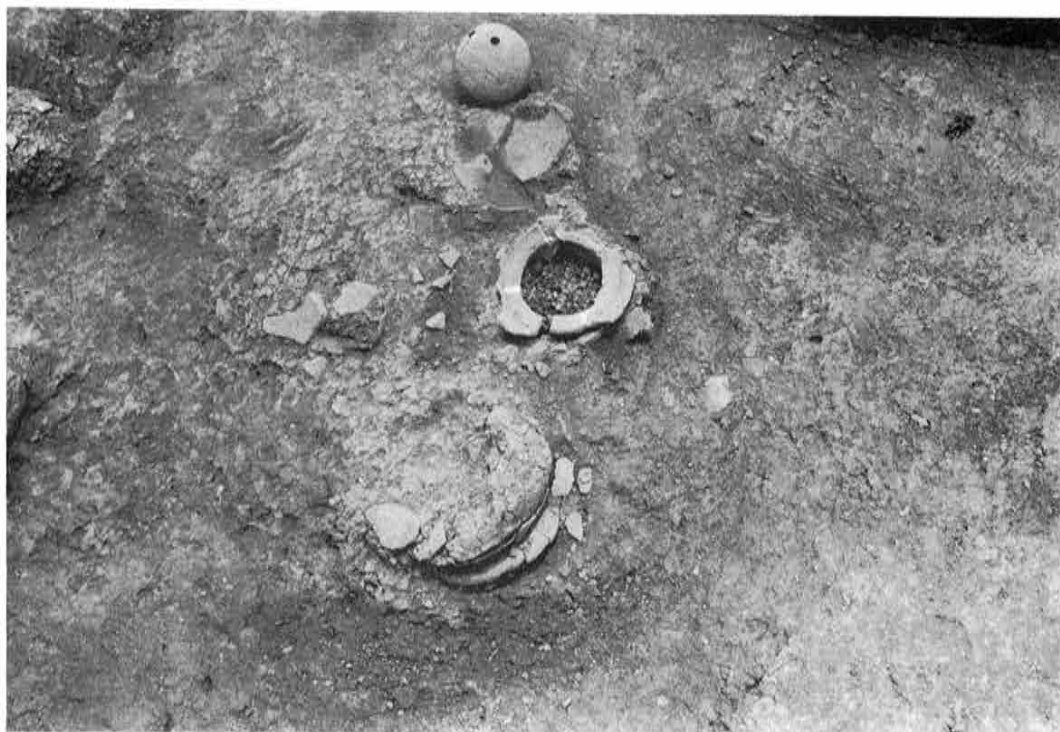


(2) C調査区
No 25土壇墓土層断面
(東より)



(3) C調査区
No 25土壇墓
(西より)





(1) C調査区 No53土壙墓遺物出土状況 (北より)

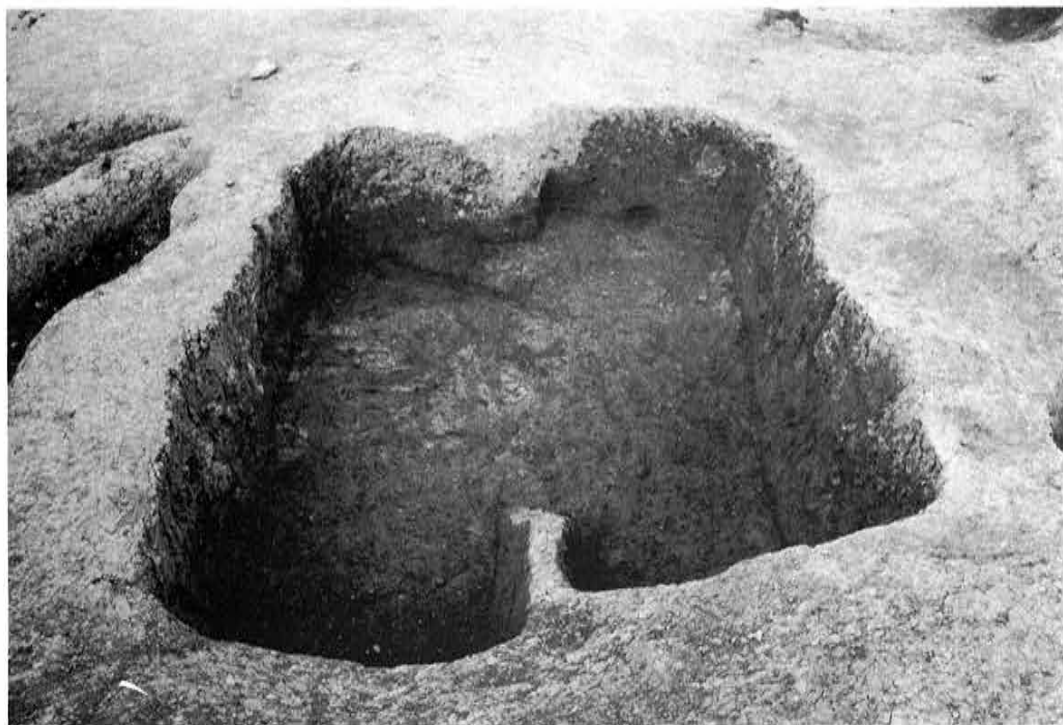


(2) C調査区 No53土壙墓 (南より)

図版44



(1)C調査区 No58・59土壙墓遺物出土状況（北より）



(2)C調査区 No58・59土壙墓（西より）



(1) C調査区
No. 65 土壙墓遺物出土状況 (北より)



(2) C調査区 第5 グループ周辺土壙墓 (北東より)

図版46



(1) C調査区 No51土壙墓遺物出土状況（北から）



(2) C調査区 No51土壙墓遺物出土状況（南から）

(1) C調査区
No 13・14土壙墓遺物出土状況
(南より)



(2) C調査区
No 20土壙墓遺物出土状況
(南より)



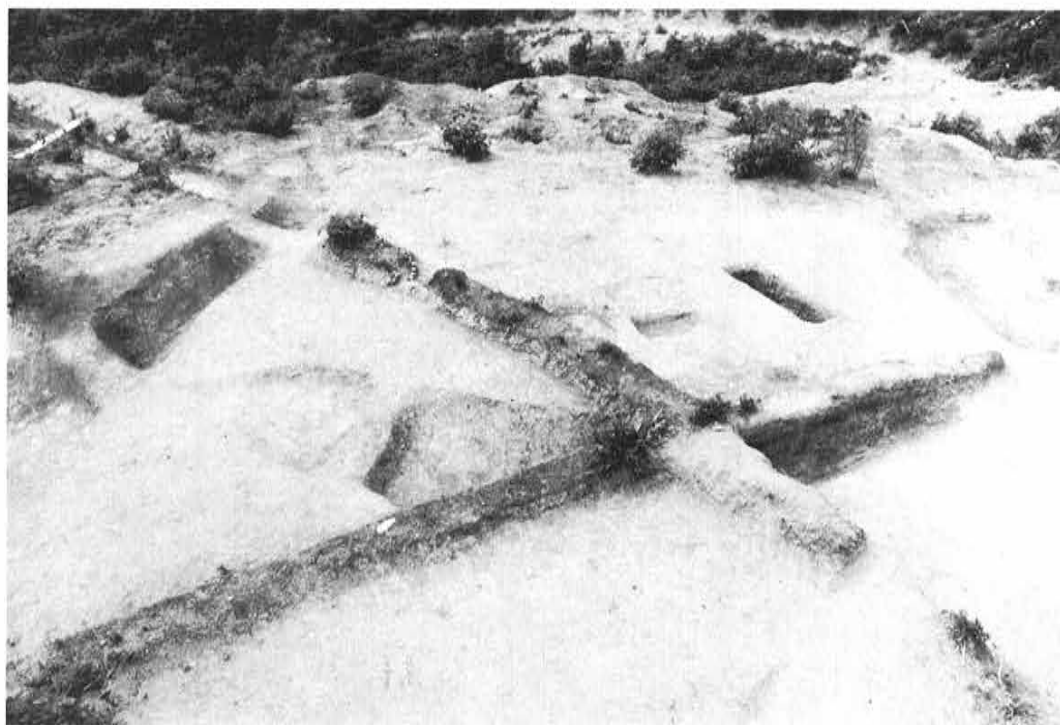
(3) C調査区
No 3・4土壙墓遺物出土状況
(南より)



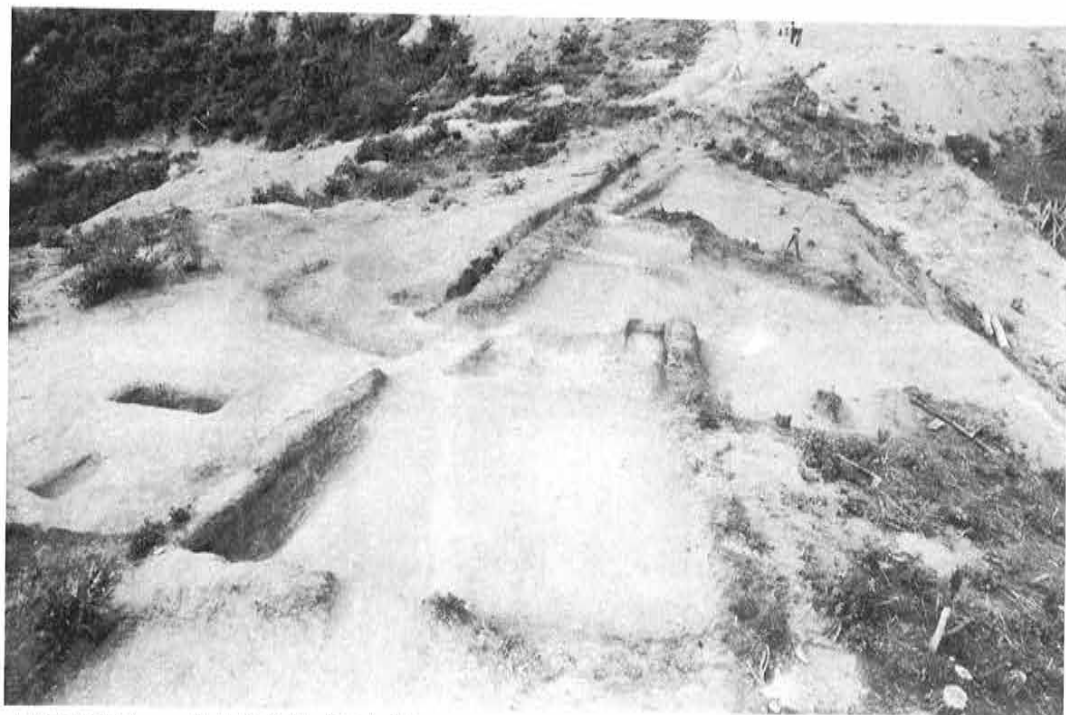
図版48



(1)D調査区 全景 (北より)



(2)D調査区 9号墳全景 (南より)

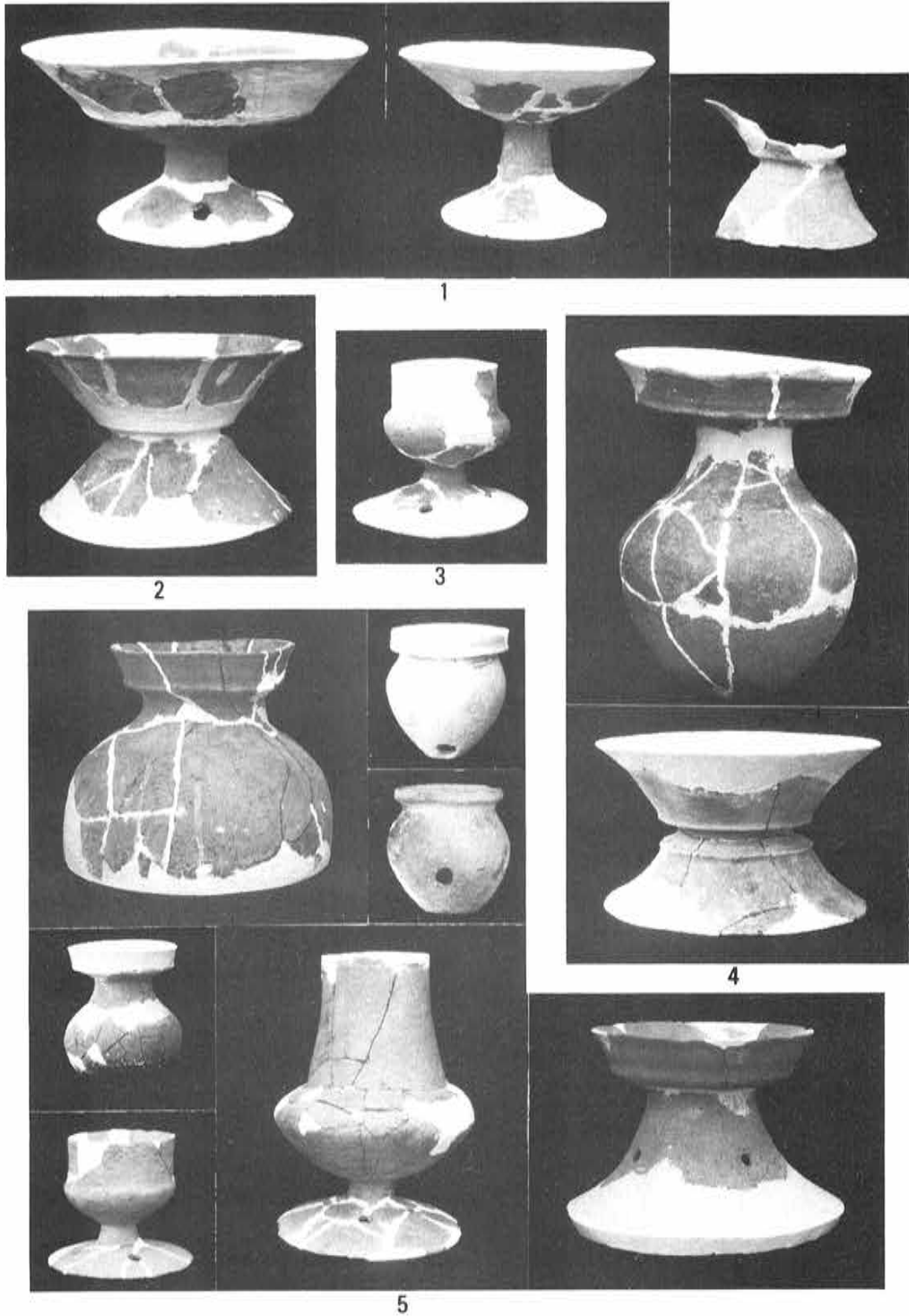


(1)D調査区 8号墳全景(南より)

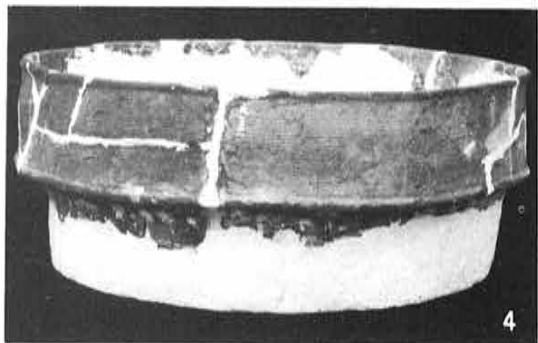
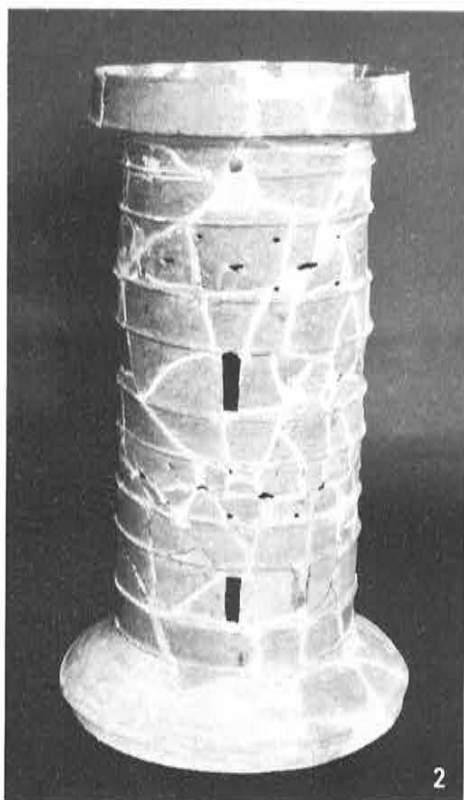


(2)D調査区 8号墳南側周溝土層断面(西より)

図版50

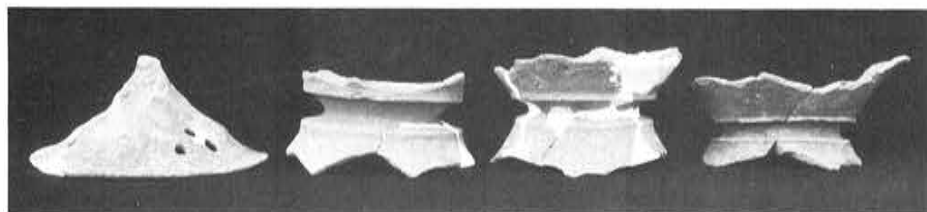


A調査区 出土遺物(1) 1-第1区画, 2-第2区画, 3-第3区画
4-第4区画, 5-B空間



A調査区 出土遺物(2) 1-特殊壺2, 2-特殊器台1, 3-特殊器台2
4-特殊器台4, 5-特殊器台6

図版52



1



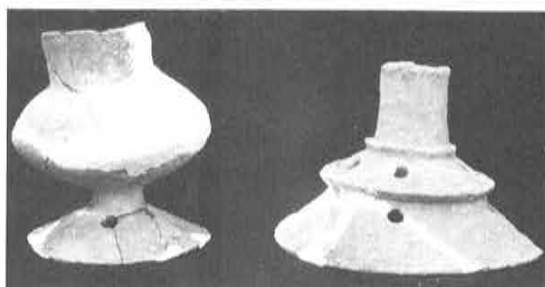
2



3



4



5



6



7

C調査区 出土遺物 1-No13, 2-No53, 3-No24, 4-No28
5-No65, 6-No59, 7-No73各土城墓



1



2



3



4



5



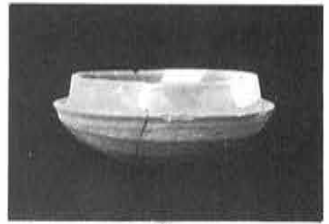
6



7



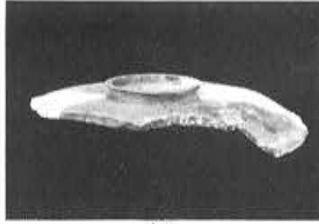
8



9



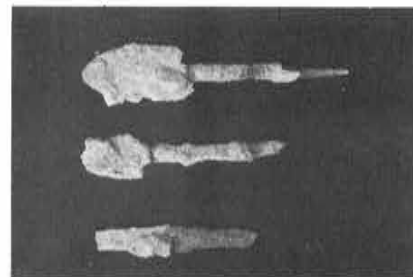
10



11



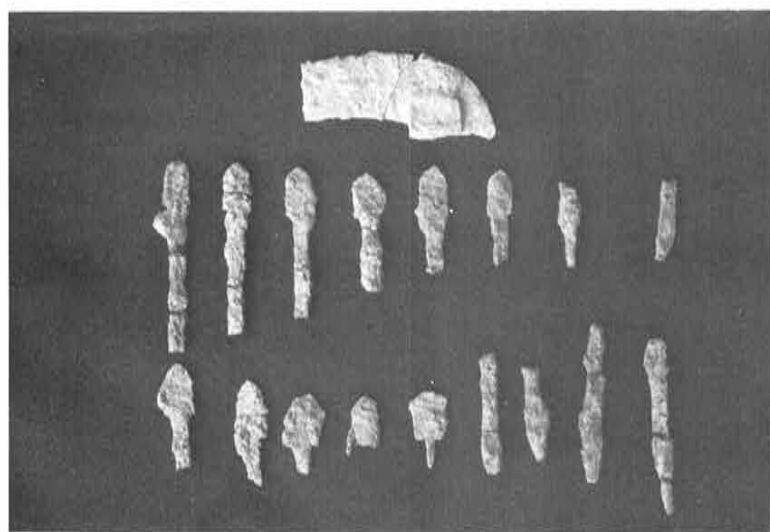
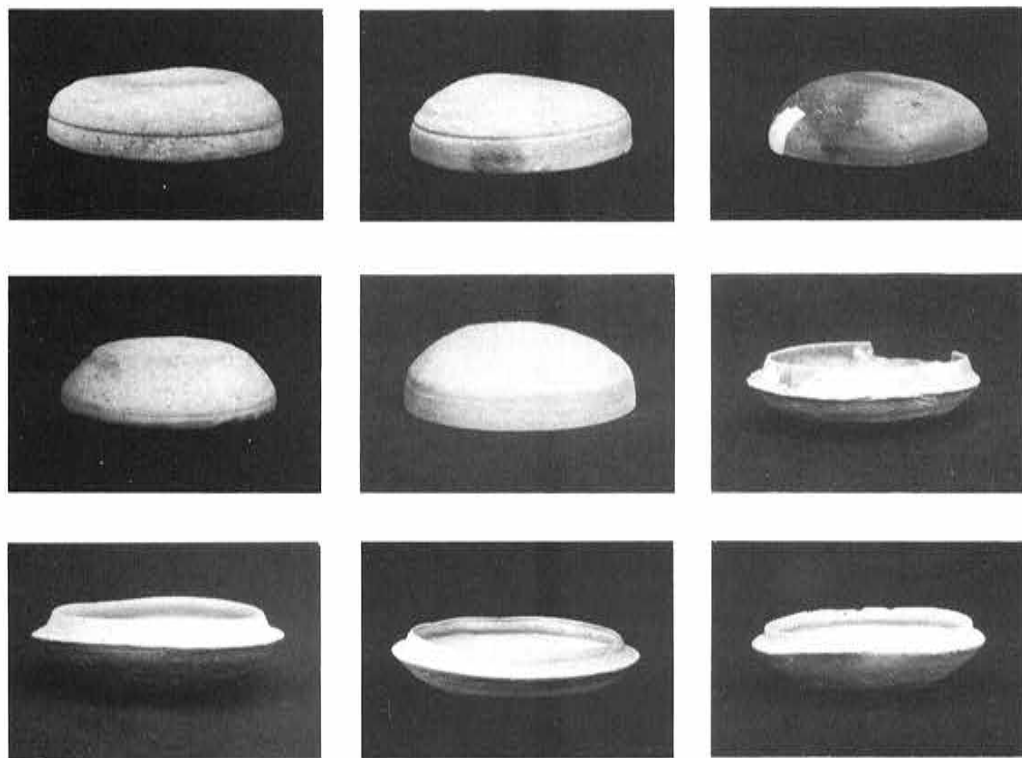
12



13

A・B・D調査区 出土遺物 1-3-1号墳, 4-6・13-3号墳, 7-9-9号墳
10-6号墳, 11・12-A調査区

図版54



B調査区 No.4 号墳出土遺物

中山遺跡

昭和53年 3月発行

編集 落合木材流通センター文化財調査委員会

発行 落合町教育委員会

岡山県真庭郡落合町垂水 618

印刷 田中研精堂

岡山市南方1丁目7-15

